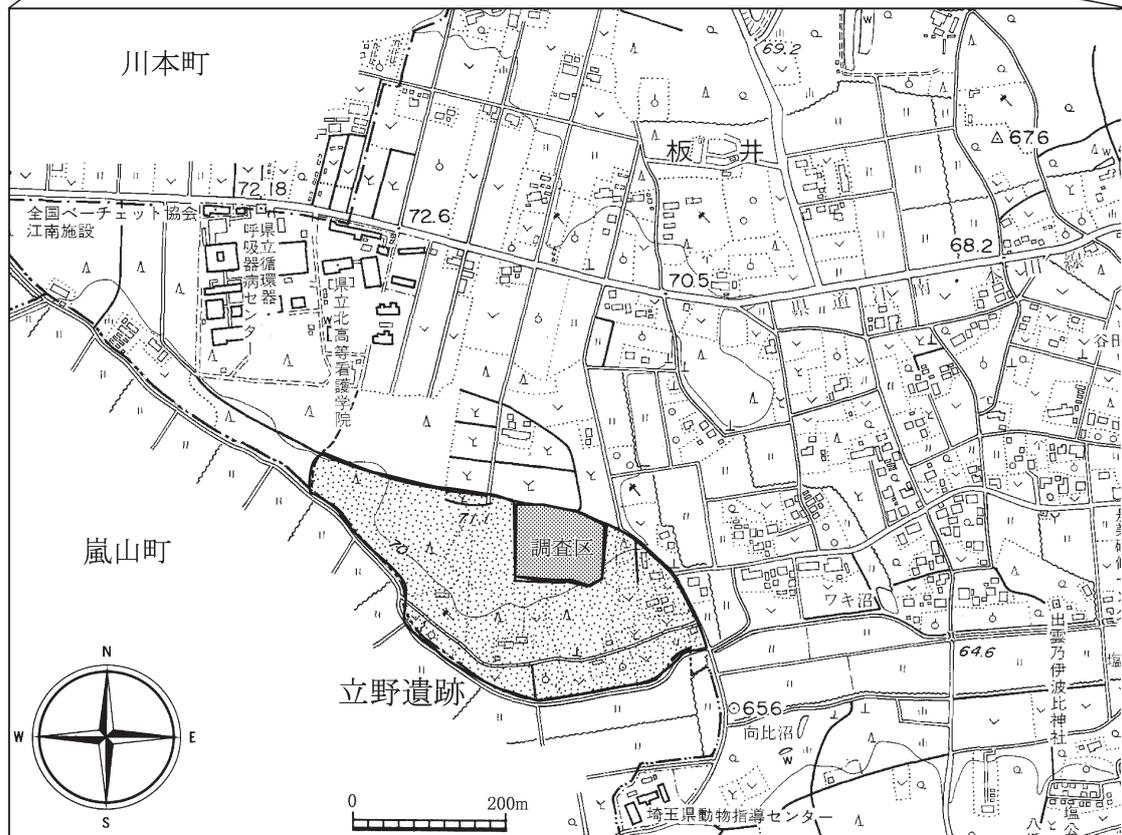
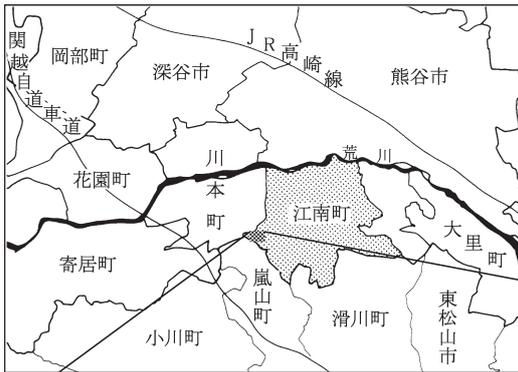


立野古墳群発掘調査報告書



2005 埼玉県大里郡江南町教育委員会
埼玉県大里郡江南町遺跡調査会



立野古墳群航空写真（2003年1月10日撮影）



立野第12号墳出土杏葉

序

江南町には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あり、なかでも古代の住居跡や古墳が多く発掘されております。現在、東京国立博物館所蔵の「踊る埴輪」を始め、数々の出土品等も全町にわたって発見され、生活環境に適した地として、古代から栄えていたものと思われる町であります。

本書は、江南町が第59回国民体育大会馬場馬術競技場の開催地として決定し、競技場建設に伴い、平成14年10月から平成15年1月に実施された江南町板井地内の「立野古墳群（県遺跡No65-54）」の発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の調査により、古墳時代後期から終末期にかけての古墳10基と、小石室1基、縄文時代の集石1基が確認されております。

また、古墳群は、その規模から、直径20mを越える大型円墳、10m～15mの中型円墳、直径10m以下の小型円墳の三つに分類され、石室に使用された石材も凝灰岩、河原石等異なることも確認され、貴重な資料を得ることができました。

先人の生活様式における「願い」「祈り」などにふれることができことは、大変意義深く、今後町の遺跡に関する研究が更に進むものと考えております。

本書を、文化財の記録の保存のみならず、郷土の遺跡研究、遺跡保護等の学術研究の資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査報告書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただいた埼玉県教育局文化財保護課ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げ、序文といたします。

平成17年3月吉日

江南町教育委員会

教育長 馬 場 攻

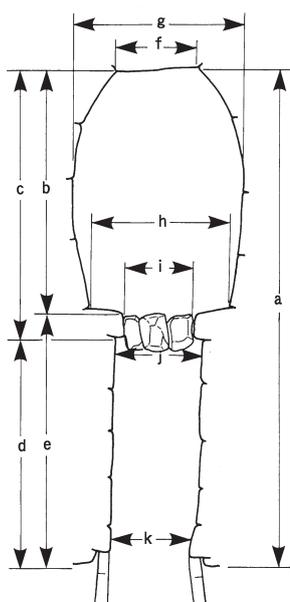
例 言

- 1 本書は、平成14年度に実施した、埼玉県大里郡江南町大字板井字桜山377-1番地ほかに所在する立野遺跡（県遺跡No.65-054）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成14年度彩の国緊急雇用対策市町村事業として、江南町遺跡調査会が江南町より受託しておこなった。
- 3 発掘調査および整理作業の期間は次のとおりである。
発掘調査期間 平成14年10月1日～平成15年1月10日
整理期間 平成16年4月1日～平成17年3月20日
- 4 本書の作成は、森田が編集を担当し、(II-2・V-4)を新井が、その他を森田が分担して執筆を行った。
- 5 調査・遺物写真撮影は、森田が行った。
- 6 調査区の地形・遺構測量は、(株)東京航業研究所に委託した。
- 7 金銅製杏葉・鉄製品の保存処理は(株)京都科学に委託した。
- 8 金銅製杏葉の蛍光X線分析は、(財)元興寺文化財研究所に委託した。
- 9 石室内の舗石の石質鑑定にあたっては、海野芳聖氏に助言を頂いた。
- 10 出土遺物・資料は、江南町教育委員会で保管している。
- 11 調査から報告書作成に至る過程で、以下の方々並びに各機関のご教示・ご協力・文献の提供を頂いた。
厚くお礼申し上げます。

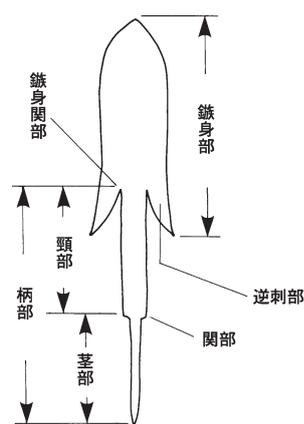
赤熊浩一 新井 端 海野芳聖 大谷 徹 大屋道則 岡安光彦 金井塚良一 瀧瀬芳之 富沢一明
富田和夫 堀口萬吉 宮代栄一 村松 篤 柳田敏司 米田幸雄 若松良一
大里郡文化財担当者会 (株)京都科学 (株)東京航業研究所 (株)シン技術コンサル
埼玉県教育局文化財保護課 (財)埼玉県埋蔵文化財センター (財)元興寺文化財研究所
日立エンジニアリング(株) 成田市教育委員会 大和町教育委員会 (順不同・敬称略)

凡 例

1. 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として以下の通りである。
 - ・遺構 古墳 1/150、石室 1/40、墳丘土層断面図 1/40、集石 1/20
 - ・遺物 縄文土器（実測図 1/3、拓影図 1/2）、須恵器・土師器 1/3、石器（剥片・打製石斧・礫器 1/2、石鏃 1/1）、鉄製品（鉄鏃・刀子・大刀 1/2）、管玉 1/2、杏葉 1/1
 上記以外のものについては、それぞれの挿図中に凡例を付した。
2. 古墳石室の各部位の計測箇所は原則として下図の通りである。
 A—石室全長、b—玄門部を除く玄室長、c—玄門部を含む玄室長、d—玄門部を含む羨道長
 e—玄門部を除く羨道長、f—奥壁幅、g—玄室最大幅、h—玄室と玄門部の連結部分幅
 i—玄門部幅、j—羨道と玄門部の連結部分幅、k—羨道入口幅
3. 鉄鏃の各部位の名称・計測箇所は原則として下図の通りである。
4. 鉄鏃の分類は簡易的に次のように分類した。
 鏃身部—(平面形態) 柳葉・五角形・鑿箭・片刃箭・圭頭・方頭
 (断面形態) 両刃—両丸・平、片刃—平刃・端刃
 (関 形 態) 関無・両関・片関・腸袂
 頸 部—短頸・長頸（頸部あるいは筥被部が鏃身の2倍以上の長さをもつもの）
5. 挿図中の方位は、地図上の北を指す。
6. 遺構図等に示した水系レベルは、海拔高度 (m) を示す。
7. 土器断面黒塗りの遺物実測図は須恵器を示す。



石室計測箇所



鉄鏃各部位の名称

発掘調査・整理作業の組織

1. 発掘調査の組織（平成14年度）

主 体 者 江南町遺跡調査会

事 務 局 江南町遺跡調査会 会 長 岡部弘行

” 事 務 局 長 大久保光司

” 調 査 員 新井 端

” ” 森田安彦

発掘調査担当者 森田安彦 新井 端

発掘調査参加者 阿部早百合 大塚宏子 岡田君代 岡田クニ 佐々木謙吾 佐藤幸男

杉田君香 関口 進 田中節子 田中奈苗 永井智教 中村岳彦

野沢キク 平野富一 藤 敏則 水野千代子 水野正和 宮平理恵

村井美津子 守屋憲治 桃園正志 柳澤良子

2. 報告書刊行事業の組織（平成16年度）

主 体 者 江南町遺跡調査会

事 務 局 江南町遺跡調査会 会 長 岡部弘行（～9月30日）

” ” 馬場 攻（10月1日～）

” 事 務 局 長 岡田恒雄

” 主 任 調 査 員 新井 端

” 調 査 員 森田安彦

整理作業担当者 森田安彦

整理作業参加者 大島安子 小澤三春 志村モト子

目 次

- 巻頭カラー ○序 ○例言 ○凡例 ○発掘調査・整理作業の組織 ○目次
- 図版・表・写真図版目次

第I章 発掘調査の経過

- 第1節 発掘調査に至る経緯……………1
- 第2節 発掘調査の経過……………2

第II章 遺跡の立地と環境

- 第1節 立野古墳群周辺の地理的環境……………3
- 第2節 立野古墳群の歴史的位置付け……………5

第III章 発見された遺構と遺物

- 第1節 遺跡の概要……………15
- 第2節 古墳時代の遺構と出土遺物……………19
- 第3節 縄文時代の遺構と出土遺物……………85

第IV章 分 析

- 第1節 第3号墳舗石の礫構成……………90
- 第2節 第12号墳出土金銅製杏葉の蛍光X線分析……………94

第V章 調査の成果と課題

- 第1節 立野古墳群の構成……………98
- 第2節 立野古墳群出土鉄鏃について ……100
- 第3節 毛彫施文の金銅製棘付花卉形杏葉の編年的位置付けについて ……110
- 第4節 石室下に掘込地業をもつ古墳について ……120

- 引用・参考文献 ……128
- 写真図版
- 報告書抄録

図版・表・写真図版目次

[図版]	
第1図	埼玉県の地形……………4
第2図	A D700年以前の荒川河道と水系河川図 (上)・男衾郡郷の想定図(下)……………9
第3図	遺構分布図……………16
第4図	第1号墳石室平面・立面図……………20
第5図	第1号墳平面図……………21
第6図	第1号墳石室立面図……………23
第7図	第1号墳石室土層断面図……………24
第8図	第1号墳石室基底石・掘方平面図……………25
第9図	第1号墳石室石材加工痕拓影図……………26
第10図	第1号墳出土遺物……………27
第11図	第1号墳遺物分布図……………27
第12図	第3号墳平面図……………28
第13図	第3号墳石室平面図……………29
第14図	第3号墳石室平面・外側立面図……………30
第15図	第3号墳石室平面・内側立面図……………31
第16図	第3号墳石室・周溝土層断面図……………32
第17図	第3号墳周溝土層断面図……………33
第18図	第3号墳石室断面図……………34
第19図	第3号墳石室石材加工痕拓影図(1)……………35
第20図	第3号墳石室石材加工痕拓影図(2)……………36
第21図	第3号墳遺物分布図・出土遺物……………38
第22図	第11号墳平面図……………39
第23図	第11号墳石室平面・内側立面図……………40
第24図	第11号墳石室基底石平面・断面図……………41
第25図	第11号墳出土遺物……………42
第26図	第12号墳平面・土層断面図……………43
第27図	第12号墳石室平面図……………46
第28図	第12号墳石室土層断面図……………47
第29図	第12号墳遺物分布図……………48
第30図	杏葉出土層位図……………49
第31図	第12号墳出土遺物(1)……………50
第32図	第12号墳出土遺物(2)……………51
第33図	第12号墳出土遺物(3)……………52
第34図	第12号墳出土遺物(4)……………53
第35図	第12号墳出土遺物(5)……………55
第36図	第13号墳平面図……………56
第37図	第13号墳石室平面・断面図……………57
第38図	第13号墳石室断面図……………58
第39図	第13号墳石室基底石平面図……………59
第40図	第13号墳出土遺物・遺物分布図……………60
第41図	第14号墳平面図……………61
第42図	第14号墳石室平面図……………63
第43図	第14号墳石室断面図……………64
第44図	第14号墳遺物分布図……………65
第45図	第14号墳出土遺物……………66
第46図	第15号墳平面図……………67
第47図	第15号墳石室平面図……………69
第48図	第15号墳石室断面図……………70
第49図	第15号墳石室土層平面図……………71
第50図	第16号墳平面図……………72
第51図	第16号墳石室平面・外側立面図……………73
第52図	第16号墳石室土層断面・断面図……………74
第53図	第16号墳石室基底石平面図……………75
第54図	第17号墳平面図……………76
第55図	第17号墳石室平面・内側立面図……………77
第56図	第17号墳石室土層断面・断面図……………79
第57図	第17号墳石室石材加工痕拓影図……………80
第58図	第17号墳遺物分布図……………81
第59図	第17号墳出土遺物……………81
第60図	第18号墳……………82
第61図	第1号小石室平面・断面図……………84
第62図	第1号集石平面・断面図……………86
第63図	調査区内出土縄文土器……………86
第64図	調査区内出土縄文時代石器(1)……………87
第65図	調査区内出土縄文時代石器(2)……………88
第66図	第3号墳石室内舗石重量計測図……………91
第67図	第3号墳石室内舗石長軸計測図……………91
第68図	石室内舗石石質構成図……………91

第69図 礫採取位置図（『荒川 自然』1987：武井より）……………93	第77図 版築遺跡（古墳・寺跡）諸例……………122
第70図 杏葉（34—66）の金色部の XRF スペクトル……………95	[表]
第71図 杏葉（34—65）の金色部の XRF スペクトル……………96	第1表 立野古墳群古墳一覧表……………17
第72図 杏葉の金色部の XRF スペクトル……………97	第2表 石器計測表……………89
第73図 鉄鏃変遷図……………105	第3表 第3号墳石室内舗石石質別計測表……………91
第74図 毛彫杏葉集成(1)……………112	第4表 鉄鏃計測表……………101
第75図 毛彫杏葉集成(2)……………114	第5表 関東地方における方頭・圭頭鉄鏃出土遺跡一覧……………103
第76図 毛彫杏葉変遷図……………118	第6表 埼玉県内集落跡出土鉄鏃一覧……………106
	第7表 毛彫杏葉出土遺跡一覧……………115

[写真図版]

巻頭カラー 1：立野古墳群航空写真
 巻頭カラー 2：立野第12号墳出土杏葉

図版 1 調査区航空写真
図版 2 第1号墳
図版 3 第3号墳遺物出土状況
図版 4 第3号墳石室
図版 5 第11号墳調査風景
図版 6 第12・13号墳
図版 7 第12号墳遺物出土状況
図版 8 第12、14号墳遺物出土状況
図版 9 第3・15号墳・第1号小石室
図版10 第16号墳
図版11 第17号墳遺物出土状況
図版12 調査区全景・作業風景
図版13 第11・12・14・16号墳出土遺物（須恵器蓋、長頸瓶、横瓶、土師器甕）
図版14 第3・12・14・17号墳出土遺物（砥石、紡錘車、土師器坏、甕、須恵器）
図版15 第12・13号墳出土遺物（鉸具、足金具、円筒柄頭、管玉）
図版16 第12～14・17号墳出土遺物（鉄鏃、刀子、大刀）
図版17 第1・12・14号墳出土遺物（大刀、刀子、責金具）
図版18 第1・12号墳出土遺物（鉄鏃）
図版19 包含層出土遺物（縄文土器・石器）

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査に至る経緯

- 国体誘致** 平成11年、江南町が第59回国民体育大会馬場馬術競技場の開催地として決定し、開催場所に大字板井地内に位置する、埼玉県蚕業試験場江南桑園跡地が決定した。事業予定地は、桜山遺跡（県遺跡No53）と立野遺跡（県遺跡No54）にまたがっていることから、埼玉県文化財保護課・埼玉県国体準備室・江南町教育委員会で協議の結果、埋蔵文化財の所在範囲について、その保存計画立案のための試掘調査を実施することとなった。
- 試掘調査** 平成12年6月29日～30日にかけて、3者立会いのもと、試掘調査を実施。対象面積約47,742㎡に対し、テストピット56箇所を油圧ショベルによって掘り下げ、遺構の有無を確認した。調査対象地は、桑畑として既に利用されていたため、平らに造成されていたが、凝灰岩片や、小円礫が散布するなど、古墳群が存在することが予想された。
- 調査の結果、5箇所の古墳跡と1軒の住居跡を確認。古墳は、墳丘は既に削平されているものの、石室最下段の石組が残されていることが確認され、凝灰岩片が集中的に散布する3地点にブルーシートを掛け、盛土して埋め戻した。
- その後、再度協議がもたれ、馬術競技場の具体的な建設計画が示された。それによると、馬場馬術競技場自体は盛土による造成が行われ、観覧席等の施設は全て仮設の施設となるため、排水関連施設を除いては、工事が遺構確認面までに達しないことが示された。したがって、調整池を除いては盛土保存となるため発掘調査の必要は認められなくなった。
- 公園造成** しかしその後、この事業予定地に、国体終了後町が主体となって運動公園を整備する計画が持ち上がり、町有地化がおこなわれた。造成計画断面図を確認すると、古墳の盛土保存が難しいと判断され、馬場馬術競技場の建設前に調査を終了してほしい旨の町当局の依頼があり、発掘調査を実施することとなった。
- 費用負担** 調査費用については、折しも、平成14年度埼玉県緊急雇用創出基金市町村補助事業の追加募集があったことから、急遽同補助事業を申請し採択となった。
- 契 約** 平成14年9月25日付けで江南町長と江南町遺跡調査会との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成14年10月1日から平成15年1月10日まで発掘調査を実施した。
- 調査通知** 調査にかかる事務は、文化財保護法第57条第1項の規定により、平成14年9月9日付け第94号で発掘調査の届出を埼玉県教育委員会へ進達し、平成14年10月1日付け教文第2-61号で埼玉県教育委員会より埋蔵文化財の発掘調査についての通知を受理している。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成14年10月1日より開始し、平成15年1月10日までおこなった。

以下、発掘調査日誌抄を掲載する。

発掘調査日誌抄	平成14年9月26日	0.7級油圧ショベルとブルドーザーを投入し表土剥ぎを開始。
	10月1日	作業員15名投入。現場設営開始するも、今年最後の台風21号上陸接近のため午前中で作業を中止する。
	10月2日	第1号墳より調査開始。石室の凝灰岩截石を確認。
	10月9日	調査区基準杭設定。20mピッチ方眼、ベンチマーク3箇所設置。
	10月18日	第11号墳調査開始。河原石積の胴張形石室を確認。
	10月31日	第12号墳羨道部より金銅製杏葉1点出土。
	11月7日	第12号墳羨道部より2点目の金銅製杏葉出土。遺存状態が悪いため、取り上げに埼玉県埋蔵文化財調査事業団の応援を依頼。
	11月13日	第13・14号墳調査開始。
	12月10日	降雪のため現場作業中止。
	12月11日	調査区内を部分的に雪かきし、作業再開。
	12月17日	第3号墳の凝灰岩截石の石室立面図を、レーザー計測実施。
	12月21日	第17号墳周溝より、土製紡錘車出土。
	12月29日	第3号墳の測量終了をもって本年の調査終了。
	15年1月5日	調査再開。
	1月7日	第16号墳調査終了。
	1月10日	第17号墳調査終了。調査区全体空測し、調査終了する。現地撤収。
事務書類		埋蔵物発見届・保管証は、平成15年1月28日付け江遺第101号で熊谷警察署・埼玉県教育委員会に提出し、平成15年2月28日付け教文第5-221号で、埋蔵物の文化財認定を埼玉県教育委員会より受けている。
整理作業		整理・報告書刊行事業は、平成16年4月1日より、江南町遺跡調査会事務所にて実施した。 作業は、遺物の水洗・注記を経て、接合・復元を行い、報告を要するものについて拓本をとり、実測図を作成した。遺構図は、原図の整理・確認、第2原図の作成、トレースなどを進めた。その後、遺構図・遺物図版の版組、写真撮影、原稿執筆を行い、割付を作成。平成16年12月に入札を行い、校正を経て、平成17年3月22日報告書を刊行し、作業を終了した。 尚、出土品のうち、金銅製杏葉は平成14年度に保存処理委託を実施し、平成16年度には鉄鏃等の鉄製品の保存処理委託を実施している。

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 立野古墳群周辺の地理的環境

江南町の地形

江南町は、埼玉県北西部の荒川中流域右岸に位置している(第1図)。江南町の地形は、南側を東流する和田川以南の丘陵部(比企丘陵)、中央部を荒川右岸の中位段丘である江南台地、北部を部分的に下位段丘の残る荒川の沖積地の3つの地形に区分することができる。

比企丘陵

比企丘陵は外秩父山地から東方に半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。丘陵内では、高根山(標高105m)、二宮山(標高132m)、大立山(標高113m)など標高100m前後の山が、丘陵の西半分の地域に散在して突出した地形をつくるが、全体的には100m以下の丘陵地形をつくっている。

丘陵内部には、市ノ川・滑川およびその支流による開析が進み、広い谷底と小谷が発達している。この開析谷は、北西～南東あるいは南北の方向をもつものが多く、これらの谷頭は丘陵の北側に極端に偏り、分水嶺は丘陵の北縁近くに偏在する。このため、丘陵北縁を東流する和田川の支谷は、未発達となっている。

江南町域においては、高根山から派生する丘陵と、滑川町和泉地区から派生する二つの尾根筋があり、嵐山町とは西側の谷を流れる滑川で区別されている。

本丘陵は、地質学的には新生代第三紀層に相当し、礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩等の互層によって構成されている。層序は、下位より、前期中新世に属する七郷層(凝灰岩質で緑色変質が特徴。層厚830m以上)、中期中新世に属する小園層(粗粒砂岩を主体とし、礫岩・泥岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)、荒川層(砂岩・泥岩の互層で、下部に礫岩を伴う。層厚350m)、土塩層(砂質泥岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚350m)、後期中新世に属する楊井層(礫岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)となり、これらの中新統を不整合に覆って更新世に属する物見山礫層が分布している(比企団体研究グループ：1991)。

なお、滑川町福田周辺から産出される通称「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩、江南町小江川周辺から産出される通称「小江川石」と呼ばれる白色細粒凝灰岩は、古くは周辺に分布する多くの古墳の石室構築材として利用されている。

江南台地

江南台地は、寄居町金尾付近より江南町を経て、大里町に至る東西17km、南北3kmにわたる幅狭な洪積台地である。江南台地は、台地の基盤となる荒川中位段丘の発達した第三紀層上に秩父古生層を起源とする砂礫層(層厚8～20m)の上に、川本粘土層とされる灰白色の粘土層(層厚2～5m)、下部を新期ローム層(層厚1～2m)に、また、上部を南関東の立川ローム層に対比されている大里ローム層と称されているローム層(層厚1～2m)が堆積し、表層に腐植土がのっている。

第1節 立野古墳群周辺の地理的環境

台地の海拔高度は、上流の寄居町木持付近で140m、川本町上本田付近で80m、台地末端にあたる熊谷市原新田付近で45mとなり、下流方向に次第に低くなっている。台地の北・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差10～15m程の崖線で画され、崖線下には和田吉野川が流れている。

台地上には平地林が発達し、狭小な開析谷や埋没谷が複雑に入り組み、その最奥部および開口部には溜池が築かれており、独特な自然景観を醸し出している。

荒川沖積地

沖積地は荒川の氾濫原で、台地下部を東流する和田吉野川以北に広がり、部分的に下位段丘は、川本町畠山から江南町三本まで見られ、これより下流では沖積地へ埋没していると考えられている。

沖積地との比高差は1m前後で、段丘礫層で構成されており、ローム層に被覆されていない。沖積地は、現在土地改良が行われ、穀倉地帯となっており、その中に自然堤防状の微高地が点在し、集落が存在している。標高46～34m、荒川との比高差9～12mを測る。

遺跡の立地

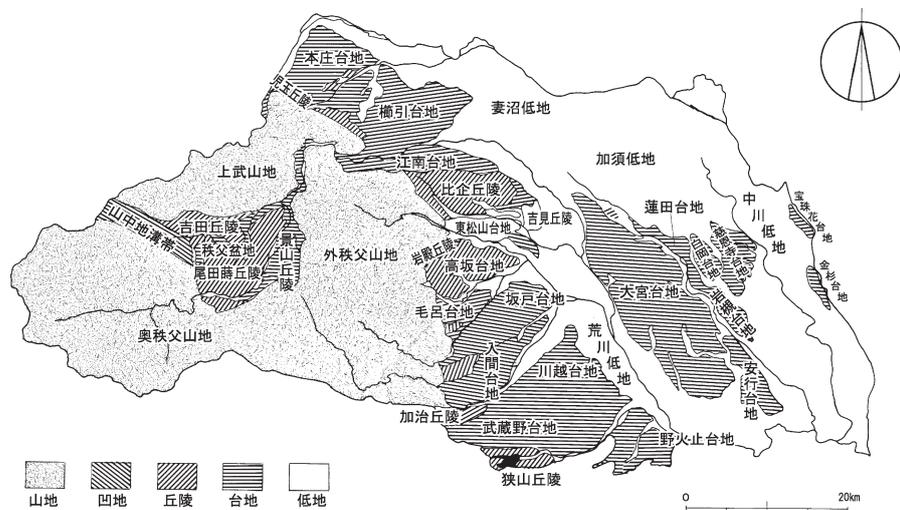
遺跡は、江南台地崖線部から約1.6km入った、和田川左岸の標高70m前後の平坦地に位置する。

和田川左岸に分布する古墳群の中でも最上流に位置し、川を挟んだ対岸には、嵐山町古里古墳群北田支群が位置し、さらに南側には江南町塩古墳群が立地する比企丘陵北縁が望める。

本遺跡の北側には、古墳時代～平安時代の集落跡である桜山遺跡（大谷他：1995）が地形的に連続し、和田川にそって東側には、同期の集落遺跡である氷川遺跡・岩比田遺跡（金井塚他：1983）が位置している。

今回の調査地区の周辺には、墳丘を持つ古墳が数基確認されているが、調査地点は、県立蚕業試験場江南桑園として使用されており、土地は開墾により削平されていたが、古墳石室石材と考えられる凝灰岩片が散布しており、古墳群の存在が充分予想されていた。

(森田安彦)



第1図 埼玉県の地形

第2節 立野古墳群の歴史的 position 付け

1. 男衾郡域の渡来人

立野古墳群の造営された七世紀は日本列島全域に及ぶ変革の時期であった。大陸では六世紀末に成立した統一王朝の隋から巨大帝国唐の建国・安定期に向かう時期にかかわり、日本列島の主体的政権もその影響下に否応なくさらされていった。日本列島での主体的政権を担っていたのは畿内に拠点を持ち、豪族を束ねていた大王家であった。この時期、推古天皇と大兄（皇太子）であった摂政の厩戸皇子（聖徳太子）による執政から、乙巳の変を経て政権基盤を豪族連合から大王家へ集中化することに成功した。そして、壬申の乱（672年）を経て大海皇子が天武天皇として即位すると律令制を強く志向し、天皇親政による中央集権国家を成立させた。この変革の波は施設や制度の整備だけでなく人の動きとしても列島規模で波及しており、東国の片隅と思われた当地までも確実にとどいていたのであった。

渡 来 人

この時期、中国や朝鮮半島からは、政治動乱を避けまた招請されるなどして、日本に渡来した多くの人々があつた。これらの人々は渡来人と呼ばれ、文物を携えた技術者や知識人も多かった。渡来人たちは日本各地に足跡を残しているが、東国の地に住まいの場所をあてがわれることが多かった^(註1)。

吉士と吉志

古代の江南町域では『類聚三代格』承和八年（841）太政官符に「武蔵国 男衾郡榎津郷戸主 壬生吉志福正」の名が、『続日本後紀』承和十二年（845）にも「武蔵国 前男衾郡大領外従八位上 壬生吉志福正」とみえる。この記録から奈良時代以前に男衾郡域に「吉志」を名乗る渡来系氏族の居住が推測される。六世紀中ごろに成立した朝鮮半島の国家「新羅」では十七等官制の十一位に当たる位階を「吉士」といった。この「吉士」を持つ人々の渡来に「吉志」は由来するとされ、日本では大阪湾沿岸を本拠（摂津国難波）とした「難波吉士」が本流とされる。吉士氏には、六世紀末に遣新羅使となった吉士磐金や推古天皇十六年（608）の遣隋使小野妹子に伴い隋へ赴いた吉士雄成、白雉四年（653）第二回遣唐使の使節となった大使吉士長丹と副使吉士駒などのように、中国や朝鮮半島との外交に従事した人材を出しており、彼等は大陸の言語・文化に精通した渡来系氏族であった。

吉士一族は近畿地方を中心とし各地に居住したが、八世紀代までに武蔵国内の各地に認められるようになる。江南町域を含む男衾郡には「壬生吉志」・「飛鳥部吉志」が、橘郡（川崎市周辺）には「飛鳥部吉志」が、多摩郡（八王子市域を含む玉川上流域）にも吉志の記録が認められる。男衾郡の壬生吉志は、承和八年には男衾郡大領をつとめる壬生吉志福正がおり、当地に土着した渡来系氏族が百数十年の期間を経て勢力を蓄え、郡の長官に成長を遂げたものと説明されている^(註2)。

壬 生

姓に付された「壬生」は、『日本書紀』推古天皇十五年（607）2月に設置された部民「壬生部」（「乳部」とも表記されている）に由来する。壬生部は、推古天皇の摂政であった厩戸皇子（聖徳太子）のために置かれたもので、太子一族（上宮王家）の経済的基盤

を支えた人々であった。『日本書紀』皇極天皇元年（642）には「上宮乳部之民」がみえ、翌2年（643）には厩戸皇子の嫡子、山背大兄王が蘇我入鹿に攻められたとき、大舍人物部直兄麻呂の言葉に「いったん東国に下り乳部を基盤として戦うべし」との進言がみえている。この記事から壬生部は単に経済的な基盤をなしていただけでなく軍事的な基盤としても培われていたことが考えられる^(註3)。壬生を氏とした豪族には各地の有力者がおり、国造級では茨城国造壬生連氏、那珂国造壬生直氏がおり、郡領級では武蔵国男衾郡大領壬生吉志氏をはじめ上野国甘楽郡大領壬生公氏・常陸国行方郡・相模国大住郡・同高座郡の大領が壬生直氏であり、一大軍事力をなしていたとみることができる。

壬生吉志

このように東国に設置された壬生部をみると「壬生吉志」は、吉士集団の一部が推古朝に「壬生部吉志」として編成され、江南町域を含む武蔵国男衾郡に入植し配下の壬生部とともに当地方の開発に努めたのであろう。この点は在地に伝統的基盤を持つ他の壬生氏とは異なり、在地勢力との融和を図りながら技術面・文化面での先進性を発揮し開発を進めたと推測される金井塚良一氏(1975)。推古朝期に壬生吉志の入植を想定し、これを考古学的に示すものとして比企丘陵北縁に産出する凝灰岩を使用した胴張型横穴式石室の導入をその例証に挙げ、この型式の横穴式石室古墳の広範な展開は比企丘陵一帯への壬生吉志氏入植とその開墾過程を物語ると説明した。この考えは高柳茂氏や森田悌氏の批判によりその基盤を失いかけているが、推古朝期における壬生吉志氏の武蔵国への入植は妥当とされている。

現在、この壬生吉志氏の入植にかかわる考古学的資料は明らかになっていないが、新たな古墳群の築造および寺院の造営や池沼・水路の整備などの先進的文物の取得や農業土木新技術の導入、加えて手工業的産業の開始などが想定され、いずれこれらの中に証拠が読み取れるものと思われる。

2. 男衾郡と比企郡の領域

江南町の西部に所在する立野古墳群は地形区分で説明したように、和田川上流付近の字金山（立野）の山林中に分布し、字清水・向田・岩比田の谷津を挟んで江南町塩古墳群・嵐山町古里古墳群と向い合っている。塩・古里地域はそれぞれ和田川と滑川の分水界となる丘陵であり、それぞれの谷津田は弥生時代中～後期以降徐々に可耕地化されたと推定されている。

出雲伊波比神社

立野古墳群から0.5kmほど和田川の下流には延喜式内社との伝承をもつ出雲乃伊波比神社が所在している。江戸時代は武甕槌命を祭神としていることから鹿島神社と呼ばれていた。明治期の神道復興の高まりにより社名を改めた。このような近代期での社名改変の例は多く、検討を要する場合がある。出雲乃伊波比神社と伝える神社には寄居町赤浜にも所在しているが、古代遺跡の分布・自然景観などから江南町城が相応しいだろう。

森田悌氏によると出雲系神社の中核をなす神社は入間郡の出雲伊波比神社であるという。出雲伊波比神社は入間郡の古代有力豪族であった物部直氏の祭るところで、武蔵国造家と同じ出雲系の天穗日命を祖先とする伝承を共有しており、聖徳太子の大舎人で後に武蔵国造に任じられた物部直兄麻呂も物部直一族とされる（『聖徳太子伝暦』舒明天皇

5年)。物部直兄麻呂の葬られた古墳は夾紵棺や銅碗など仏教的遺物の出土している直径80mに及ぶ円墳の八幡山古墳（行田市）と推定されている。

物部直氏

物部直氏と壬生吉志氏は上宮王家を通じて深い関わりが想定され、壬生吉志氏は物部直氏の援けにより男衾郡での勢力を扶植していったと考えられるという。また、物部直氏は入間郡域を本拠として、入間川水系上流に発達した小支谷の谷津田まで早くから開墾をすすめていたと推測され、江南町周辺では和田川流域の谷津田の他、滑川流域の谷津田がこれに相当し、前者には野原古墳群と本田・東台遺跡が後者には塩・古里古墳群と塩西遺跡・塩前遺跡のように主要な古墳群とその集落の展開がみられる。これらの集落は古代を通じての拠点的な集落との位置付けが発掘調査から推定される。壬生吉志氏の入植に際しては、谷津田の生産性を上げるための用水・排水・貯水機能などのいっそうの整備や、江南台地や比企丘陵のような高燥な山野の耕地化や養蚕・絹織物生産・製紙などの手工業的産業の定着と進展に渡来系氏族の技術や知識が必要とされたのであろう。また、七世紀前半とされる寺谷廃寺（廃寺とされているが建物跡は確認されていない）出土の飛鳥寺系瓦をみると先の伝承にある物部直氏や壬生吉志氏との関わりをここでも考えることができる^(註4)。

男衾郡の四境

七世紀後半代には、男衾評（郡）の建評（郡）がなされていたはずであり、「倭名類聚抄」にみえる男衾郡下には郡家郷をはじめとして八郷の名が挙げられている。郡領域の批定には江戸時代以来地誌的な研究が積み重ねられているが決め手がなく、定まった認識は求め難い状況である。考古学的な調査によっても評（郡）衙と考えられる遺跡や遺物は本地方では見つかっていない。現在のところ江南町所在の寺内廃寺跡が、男衾郡大領であった壬生吉志福正の氏寺である可能性が高く、江南町西部地域が壬生吉志福正の居住地である榎津郷の中であるとする蓋然性が認められる唯一の証拠といえる。すると榎津郷の範囲をどう考えるかであるが、先に『倭名類聚抄』を詳細に検討した森田悌氏によると、男衾諸郷の北境は荒川とし、左岸側には榛沢郡―幡羅郡―大里郡が位置する（但し、大里沖積地での古代荒川の流路は定まっておらず、境界であるとしても広大な空間地として広がる緩やかな境界帯であったと考える）^(註5)。

東境は荒川新扇状地の扇端（熊谷市佐谷田から大里町小泉・屈戸を結ぶ付近）と江南台地の東端付近との中間地帯として想定した荒川新扇状地上（熊谷市久下から大里町小泉を結ぶ付近）とされ、明確な線ではなく広範に広がる未開墾地帯と想定している^(註6)。

西境は寄居町折原・西の入地区から小川町の丘陵地帯が東秩父山地に接するあたりとされる（私見では寄居町風布―東秩父村―都幾川村―玉川村に至る外地秩父山地の東山麓一帯とする）。

南境は、和田川と滑川の丘陵の分水嶺（滑川町和泉―高根山北麓―東松山市大谷丘陵北麓か）を想定している。これは比企郡の式内社である伊古乃速御玉比売神社を滑川町伊古と想定することに根拠を求めているようだ^(註7)。

男衾郡八郷

『倭名類聚抄』に挙げられている各郷の比定地をここに示すと「榎津郷」は熊谷市場井―江南町―川本町右岸地域。「鴉倉郷」は川本町島山地域とする。「郡家郷」を寄居町塚田・今市付近とする。「多留郷」は武蔵国分寺出土献納瓦から「留多郷」の誤記とし寄

居町富田周辺とする。「川原郷」は平城京跡出土木簡から「川面郷」の誤記とし寄居町鉢形から折原の荒川に面した地域とする。「幡多郷」は小川町勝呂を含む小川町北部地域とする。「大山郷」は小川町盆地中央から青山地域とする。「中村郷」は玉川村・都幾川村方面とする。この推論については、男衾郡の四示ともいえる郡域の北と東については首肯できるが、西と南については補注で挙げたようにまだ賛同できない。各郷の比定地についてもさらに検討を要する（第2図）。

比企郡の分割

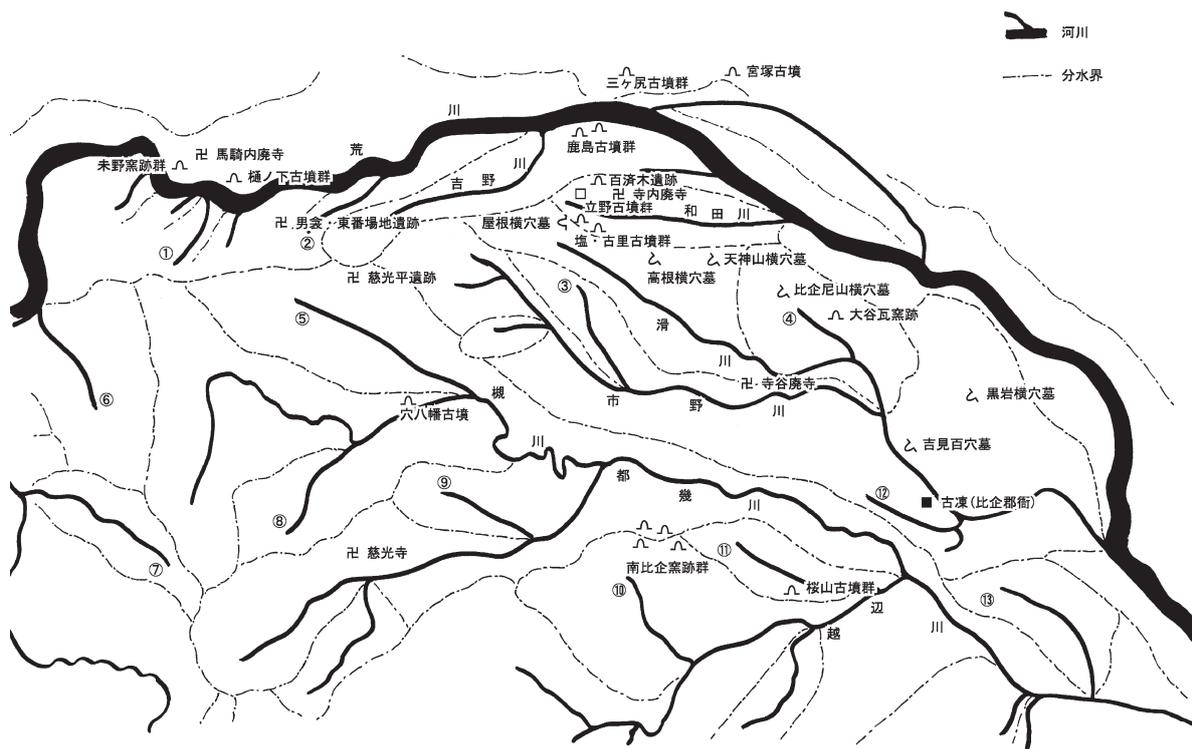
古代集落（村落）の分布は地形や水系区分による自然的なものと考えられ、郷編成・郡域の区分に際しては五十戸を一郷とする領域的な制度区分であると考えているので、人民支配の単位としての郷と郷、郡と郡との境界はときに緩やかで、広範な空閑地をも有していた可能性があり、実態として郡・郷が連続していたのではないだろう。そしてこのような空閑地が未開墾地としても存在していたのではないかと思われる。但し、男衾郡は郡家郷を設置しているので評（郡）衙施設とともに編成された集落が新たに設置された可能性もあると考えている。現行の比企郡内に当時の比企四郷（郡家 涓後 都家 鹹瀬）を想定することは五十戸で区分された一郷が男衾郡のそれとは比較にならないほど広範になってしまう。同じく荒川右岸に男衾八郷を押し込んでしまうにはあまりに狭隘になってしまう。七世紀代、この地域の集落遺跡の分布から都合12郷を区分することは前記のようにたいへん難しい。入間川水系から都幾川・市野川・和田川などを溯った比企丘陵から江南台地及び荒川中流域までの領域に含まれる入間・比企・男衾地域は、物部直氏や壬生吉志氏らの開発の歴史を共有する領域が既に存在していたと考えられ、建郡までには不可分の支配関係が生産基盤・物資流通・信仰・既存の住民支配に生み出されていたと想定することが可能であり、国郡制の施行に伴い中央政権の意図によって、物部直氏の支配権を分割する形をとり七世紀後半以降に入間、比企、男衾などの建郡がなされたのであろう。この場合中央とのつながりの深かった壬生吉志氏が開発途上の地域をまとめ男衾郡として建郡し、郡の運営を任せられ、後に男衾郡領氏族として成長していくものと考えられる。

男衾・比企の郡域錯綜は中世期までには顕在化するが、この原因は建郡時の政治的地域分割にあったと考えた方が理解しやすいのではなかろうか。その後の壬生吉志氏が平将門の乱のころにはどうなっていたか知りようがないが、壬生吉志氏の地盤に男衾氏、秩父氏（畠山氏）が台頭してくることは注意される。あるいは壬生吉志氏の一部は青梅地方に盤居した三田氏（壬生吉志氏の出自される）のように土豪化したのだろう（壬生吉志福正以降、古代末期に男衾郡域に台頭してくる有力豪族は秩父氏であり、秩父重綱の子重弘が川本町畠山に居を据え畠山氏を称した。元久2年（1205）東鑑には畠山重忠の館を「男衾郡菅谷館（嵐山町菅谷）」としている）。

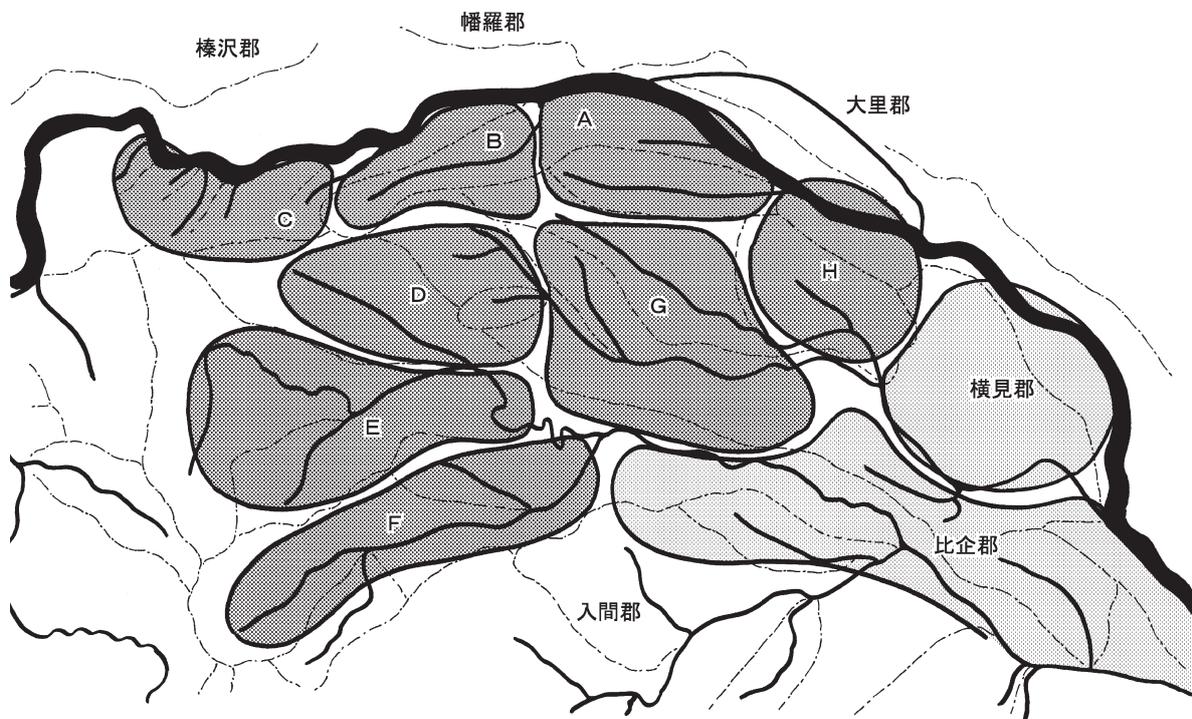
3. 終末期の古墳群

男衾郡の遺跡

前記で想定された男衾郡域において、七世紀段階での遺跡のまとまりを古墳などの代表的な遺跡から考えると、江南町立野古墳群、川本町鹿島古墳群^(註8)、東松山市西原古墳群^(註9)、嵐山町山王・向原古墳群^(註10)などの終末期群集墳および、小川町穴八幡古墳、東



- ①坂東川 ②新吉野川 ③粕川 ④角川 ⑤兜川 ⑥三沢川 ⑦定峰川
⑧館川 ⑨雀川 ⑩鳩川 ⑪九十九川 ⑫新江川 ⑬安堂川



第2図 AD700年以前の荒川河道と水系河川図(上)、男衾郡郷の想定図(下)

松山市比丘尼山横穴墓群、滑川町天神山横穴墓群、江南町高根横穴墓群、嵐山町尾根横穴墓群などの方墳と横穴墓群が新たに出現している。これら終末期の古墳はいずれも既存の古墳群中ではなく新たに古墳築造の場所を占地して造営されている。立野古墳群の南側、滑川沖積地を臨む尾根上には塩古墳群と古里古墳群が古墳時代前期より展開し、その支丘陵の尾根上を中心に群域の中で終末期まで古墳造営を続けている先住の集団がある。これらと立野古墳群は小谷津を介しているが支群とはいいがたく。塩・古里の集団に寄り添うが取り込まれてはいない別個の集団とみなされる。塩古墳群・古里古墳群は物部直氏の系譜を持つ在地の集団、立野古墳群は壬生吉志の入植者集団を想定することが可能であろう^(註11)。

群集墳

立野古墳群の評価とその歴史的背景を先に述べてきた。詳細は本文と重複するが、立野古墳の築造技術や出土遺物及び周辺遺跡との関係に注意すべき点が多く、石室下に掘込地業をもつこと、金銅製毛彫杏葉などを伴っていること、多角形墳を築いていることなどが指摘できる。渡来系氏族との関連では周辺の遺跡に同時期に築かれた鹿島古墳群が壬生吉志氏の墳墓群と想定されてきた経緯がある。鹿島古墳群は荒川の河岸段丘に分布し、川原石積みの胴張型横穴式石室を主体部としている代表的な終末期群集墳ではある。古墳群内には埴輪を持つ古墳も存在していることが知られ、六世紀後半代より築造がなされる在地性の高い集団の墓域としての性格もみえる。また、近年の調査では円墳から方墳への改修された古墳の存在も明らかとなっている。鹿島古墳群は過去の発掘調査で鉄刀・鉄鎌などの武器の副葬が顕著である。多量の武器の副葬は物部直兄麻呂が聖徳太子の大舎人（親衛隊長に相当する）として使えた武人の面を物語る背景と捉えることが可能である。古墳群の周囲には六～九世紀代にかけての川端遺跡・新田遺跡の集落が広がっており、この集落と裏鹿島古墳群は物部直氏に連なる荒川右岸域の開発者の残した遺跡であろう。但し、その一部に渡来系氏族壬生吉志氏の一員が含まれていたとしても否定はできないだろうが、壬生吉志氏本流の墳墓群ではありえないだろう。

立野古墳群と鹿島古墳群の中間地には川本町百済木遺跡が所在する。七世紀後半代の豪族居宅跡と推定される遺跡で、地名や遺跡の性格から入植者の拠点とも推定される。百済木遺跡が廃絶された後、八世紀前半ころ荷鞍ヶ谷戸遺跡では瓦を使用した建物の存在が想定されるが未確認である。八世紀中ごろには東隣に寺院施設を整えた寺内廃寺が造営されていく。同時期に立野17号古墳では須恵器の供献に見るように祭祀が続けられ、岩比田遺跡・桜山遺跡の集落跡でも瓦や円面硯の出土が確認される。

七～八世紀代に特徴的な遺跡が江南町板井・川本町本田の本地域に濃密に分布するが、このことは渡来系氏族壬生吉志氏の足跡を明示していると理解したい。

穴八幡古墳の所在する小川盆地には、同墳築造以前は古墳が築造されなかった地域であり、突如としてこの方墳が七世紀中ごろに現れている。また、この古墳以後の古墳も築造されていない。穴八幡古墳は複室構造の横穴式石室をもち、墳丘は二重の周溝が取巻く、石室下には寺院建築などにみえる掘込地業の工法を施す入念なつくりとされる。被葬者には在地性の乏しい有力者像が想定されているが、石室下に地業を持つ古墳の類例をみると郡領氏族に近い人々の関与が窺える。川越市鶴ヶ丘1号古墳・鶴ヶ丘稲荷神

社古墳、立野古墳群などは同様の背景を想定したい^(註12)。被葬者は、東松山市唐子西原1号古墳(方墳)のように銅碗や方頭大刀など仏教的な遺物や最新の武器などを所持し、副葬されていたと思われる。

横穴墓群

横穴墓群は比企丘陵を形成する凝灰岩層の露出する丘陵地に造られ、横見郡域とされる吉見町の吉見百穴横穴墓群、同町の黒岩横穴墓群があり、男衾・比企郡域では東松山市比丘尼山横穴墓群、滑川町天神山横穴墓群、江南町高根山横穴墓群、嵐山町尾根横穴墓群が知られている^(註13)。造墓の場所を地域的に限定される横穴墓群の被葬者を渡来系の人たちと想定されたこともあった。しかし、出土品の多くは早い時期に失われているため情報が少なく、検討を深めることができない。

多角形墳

前方後円墳の終焉以降大王の古墳形態は方墳を採用していることが知られ、推古天皇をはじめ蘇我氏等の有力豪族も方墳を築いていた。中央を離れ各地の国造級の豪族も前方後円墳の築造を停止し方墳を築いたものが多かった。七世紀後半代には道教の影響を受けたとされる上円下方墳や八角形墳が天皇の陵墓として採用されるようになると、これを模した古墳も各地で造られる。薄葬令によっても実際は古墳の築造は続けられたのであり、築造に当たっても単に外見の真似だけでなく、墳丘まで版築工法で築かれるなど、先進的工法により造られたものであった。八角形古墳として群馬県吉岡町の三津屋古墳が代表例として知られているが、埼玉県では熊谷市籠原裏1、2号古墳が八角形墳と報告されているが、このような形態の古墳には立野1号古墳、寄居町樋ノ下遺跡12号古墳もあり八角形墳と想定される^(註14)。立野1号古墳では墳丘の盛土は確認できなかったものの樋ノ下古墳群と同じく群集墳中に八角形古墳を築いていること、中央との繋がりを持つ渡来系の人々の存在を想定させる^(註15)。

立野古墳群

前記のように立野古墳群は、男衾郡の建郡以前に築造が始まり、未確認だが八世紀前半代で古墳の築造を終えているものと推定される。板井地域に残る寺内廃寺との関連や延喜式内社と推定する出雲乃伊波比神社の所在を背景に考えると、渡来系氏族のなかでも壬生吉志氏との関連が強く想定され、壬生吉志氏本流の墳墓域とされるだろう。

立野古墳群は千数百年の間には何度か盗掘を受け遺物が流出したことも否定できないが、古墳墳丘が削平され石室が取り除かれるに至るのは、昭和30年代で埼玉県蚕業試験場の試験畑が造成された時であった。このとき造成をまぬかれた山林内には直径30m級の古墳が遺存している。削平された立野古墳群の発掘ではかろうじて石室礎床面が残っていたが、古墳築造以前も以後もただの一軒の住居跡も発見されなかった。このことから、壬生吉志氏は六世紀以前は全く開墾がされていなかった場所を墳墓の地に選択し、八世紀前半まで古墳や火葬墓を営んだ。氏寺である花寺(寺内廃寺)の建立後も、その奥津城は開墾されることなく現代まで護られていた。それまでの耕地を潰して古墳群を築いたとは考えにくいので、まさに未開の場所に古墳を立地させ、その周辺の桜山・岩比田・氷川などに集落を展開していたのである^(註16)。

なお、寺内廃寺が廃絶した平安時代後期には桜山の地に長命寺が開かれたとされ、中世には修験寺院として男衾・比企郡域の同宗寺院を統括した有力寺院となっていた。桜山には長命寺の開山堂があったとされ、樹木伐採の禁止の標野となり、傍示を建てた立

野として意識され地名となり、古墳とともに受け継がれてきたのである。

(新井 端)

補 註

- 1) 七～八世紀代の渡来人の記録には以下のものがある。①『日本書紀』天智天皇5年(666)百濟男女二千人を東国へ置く。②『日本書紀』天武天皇13年(684)百濟の僧尼 俗の男女二三人を東国へ安置。③『日本書紀』持統天皇元年(687)新羅の僧尼及び百姓の男女二人を東国へ居す。④『日本書紀』持統天皇4年(690)新羅の韓奈末許満ら十二人を武蔵国へ居す。⑤『続日本紀』靈龜2年(716)高麗人千七百九十九人をもって武蔵国高麗郡を置く。⑥『続日本紀』天平5年(733)武蔵国埼玉郡新羅人徳師ら男女五十三人を金姓とする。⑦『続日本紀』天平19年(747)肖奈福信・肖奈大山・肖奈広信に肖奈王を賜う。⑧『続日本紀』天平宝字2年(758)新羅の僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人を武蔵国の閑地に移し新羅郡を置く。⑨『続日本紀』天平宝字4年(760)新羅の百三十一人を武蔵国に置く。⑩『続日本紀』天平宝字5年(761)高麗朝臣大山を武蔵介とする。同年高麗朝臣大山を遣高麗使とする。⑪『続日本紀』延暦8年(789)高倉朝臣福信死去 来歴 高麗朝臣 本姓は肖奈。
- 2) 武蔵国には百濟・新羅などの渡来人が居住したとの記録が前述のようにあり、新羅郡の建郡までおこなわれた。江南町域でも本古墳群の近接地に「百濟木」(川本町本田)「荷鞍ヶ谷戸」(新座ヶ谷戸か) (川本町本田) の地名が残り、古代地名とされるがいつまで遡るのか、由来の当否も判断できない。
- 3) 『聖徳太子伝暦』舒明天皇5年(633)物部連兄麻呂武蔵国造を賜う。この記録に見える「連」は中央の大豪族の姓であり、他の記録に見られる武蔵国造の姓が直であることから正しくは「物部直兄麻呂」であるとされる。
- 4) 滑川町羽尾所在の寺谷遺跡は、飛鳥寺系の素弁八葉蓮華文の瓦当面をもつ軒瓦が採取されているが、この瓦は七世紀前半に位置付けられており、当地方で最初に使われた瓦といえ、おそらく仏堂を飾るために付近で製作されたと推定される。現地では仏教施設の痕跡は未確認であるが、谷津田の入組む奥まった丘陵台地上に位置し開墾地を望み、また仰ぎ見る場所にあり、村堂のような精神的拠点であったと思われる。付近に平谷窯跡、羽尾窯跡があり瓦・須恵器が焼かれた。七世紀後半には飛鳥寺系の素弁文瓦を焼いた東松山市大谷瓦窯跡が、推定東山道武蔵道支路沿いに位置している。付近の寺院・官衙などに供給されたものとされる。
- 5) 但し、大里沖積地での古代荒川の流路は定まっておらず、境界であるとしても広大な空間地として広がる緩やかな境界帯であったろう。この境界帯はどの郡にも属さない山野であったと考える。ここには終末期古墳と想定している熊谷市玉井所在の宮塚古墳が築造されており、宮塚古墳をふくむ大瀬古墳群が荒川の乱流に形成された自然堤防上に位置している。この集団は男衾・大里・幡羅・榛沢のいずれかの郡に帰属し、当地を開墾した集団の新たな墳墓域となって多数の古墳が築かれた。上円下方墳とされる宮塚は主体部が不明だが、周辺の古墳からは蕨手刀が出土しており八世紀初頭の年代を推定している。
- 6) 私見では江南町榎春から熊谷市万吉一村岡一大里町恩田を結ぶ地域に当たることになり、ここを南北に縦断する東山道武蔵支路が境界であると意識されていたと推定する。また、この付近に駅家の設置を想定できることから別に駅家の管理維持施設や牧と耕地などがあつたと考えている。大里町円山遺跡では9世紀後半の竪穴式住居跡から牛馬焼印と推定される「有」の焼印が出土している。「大里郡坪付」にも牧津里など里名が見え「牧」との関連が推定される。
- 7) 分水界を郷域の境界とすることには同調できるが、男衾・比企郡界の場合は検討を要するのではないだろうか。男衾・比企郡域を想定する場合、式内社とされる伊古乃速御玉比売神社の所在や倭名類聚抄の郷名の評価に左右されるのであろうが、式内社の所在については来歴が問題になり検討を要する。また、比企郡下の「涓後郷」は「ぬのしり郷」と訓じられており、「いこ」への転化は判断できないが、たとえ「いこ」としても比企郡家想定地(東松山市古凍・柏崎)に近い川島町伊古地域を想定するほうが妥当と思われる。最近の低地域の調査では古代集落の発見が増加しており川島町域でも例外でない。川島町には自然堤防上に立地する古墳群の所在が確認されており、正直遺跡は古墳時代後期の玉造遺跡で管玉の未製品や砥石などが出土している。玉造遺跡と社名祭神に関連はないのだろうか。

私見では水田耕作の集約された沖積地帯を中心に比企郡4郷は設置されたのであり、郡域は東松山台地の東半部から川島町に係る地域であろう。一方男衾郡は東松山台地西半から外秩父山地の麓裾に及ぶ台地と丘陵地に8郷が設置されたのであり、主に谷津田と畑作を中心としていた。北辺は荒川を限り、南辺は都幾川左岸台地までと想定している。男衾郡と

同様に比企郡についても物部直氏か、あるいは吉志氏が郡領氏族に当てられたのであろう。

- 8) 鹿島古墳群は荒川の右岸段丘上に、およそ百基ほどの円墳群で構成された終末期の代表的な古墳群である。2005年までの発掘調査により緑泥石片岩と川原石を用いた胴張型横穴石室の主体部と、埴輪をもつ古墳の存在や円墳を方形墳に改変した古墳の存在も知られるようになってきた。鹿島古墳群中には凝灰岩切石を使用した石室は見つかっていないが、立野古墳群中には凝灰岩・川原石積の両型式の石室が見られる。
- 9) 西原古墳群は都幾川に移行する菅谷台地の東端に位置、七基の円墳が発掘調査されている。七世紀代に築造された小規模な古墳群で、胴張型の横穴式石室を主体部に持ち、西原1号古墳（方墳と考えられる）からは銅碗・方頭大刀などが出土している。出土遺物から畿内政権を構成する有力豪族との結びつきを想定させる。
- 10) 山王・向原古墳群は菅谷台地上に展開する小規模な円墳群で、古墳群中の稲荷塚古墳は複式構造の胴張型横穴式石室をもつ、現在でも経20mの墳丘を残す。本古墳群から西原古墳群までは川原石と緑泥石片岩を用いて構築される。
- 11) 塩古墳群・古里古墳群は、江南町塩・嵐山町古里－吉田・滑川町和泉に広がる滑川沖積地の谷津田がもっとも広範囲に展開する場所で、古墳時代前期より開発が進んでいた地域であり、丘陵頂部に所在する前方後方墳の塩1・2号古墳を嚆矢として、塩・古里の丘陵裾部に古墳群が展開していく。塩西原18号古墳では凝灰岩の切石で構築した胴張型横穴式石室が確認され、鉄刀・馬具・玉類が周溝から埴輪が出土している。現行政界を越えた嵐山町古里の丘陵にも同時期の古墳が造営され（古里古墳群駒込1号古墳など）、七世紀代の横穴式石室を持つ円墳が次々に造られている（塩西原6号古墳、同塚塚27号古墳、古里古墳群北田2・3号古墳など）。これらの古墳石室には凝灰岩の切石を用いているものが多いが塩西原12号墳のように河原石を用いる古墳もあり、立野古墳群と用材の差は認められない。
- 12) 穴八幡古墳の被葬者像は在地性の乏しい有力者像が想定されているが、武蔵国造物部直見麻呂の墳墓と推定される行田市八幡山古墳は墳丘経八十メートル以上を測る複式構造の横穴式石室に夾紵棺が収められていた。石室下は堀込地業をしているという。物部氏の本拠地に近い川越市鶴ヶ丘1号古墳、鶴ヶ丘稲荷神社古墳も石室下に堀込地業をしている。立野古墳群でも石室下の堀込地業が認められることから、穴八幡古墳も物部直氏の一員で当地の開発者であろうか、あるいは男衾評（郡）・比企評（郡）の長官に連なることも想定される。
- 13) 安閑朝（534年とされる）に起きた武蔵国造家の内紛の後、「横淳」・「橘花」・「多水」・「倉巢」の四か所に屯倉を設置した。渡来系氏族飛鳥部吉志氏が横淳屯倉の管掌者として入植したと想定されている。この飛鳥部吉志は奈良時代には男衾郡鴛倉郷に居住していたことが平城京木簡より知ることができる。横穴墓群のなかで高根と尾根の周辺には凝灰岩の石切場跡が残されている。他の横穴墓群の造られた地域にも石切場跡が確認される可能性があり、これらの石切場から横穴式石室の石材として使用された凝灰岩が切り出されたものと考えられ、その石材の切出しと加工に当たったのは渡来系氏族飛鳥部吉志であったと思われる。
- 14) 終末期古墳をいうとき、限定した意味で前方後円墳の被葬者の系譜を引継ぐ人々が地域権力者の象徴として築いた古墳のみをいう場合もあるが、ここでは前方後円墳が造られなくなって以降、およそ七世紀前半から八世紀代に、新たに出現する古墳を終末期古墳と呼んでいる。近畿地方では大王家や有力豪族が大型の円墳や方墳、六角形・八角形などの多角形墳を築いている。畿内で造られた正式な六・八角形墳は上円下方墳と同様に、方形段の上に六・八角形丘を築く方式で、これは風水思想の影響が造墓理念の根底にあるとされる。
- 15) 立野1号古墳は周溝内径の形から八角形古墳と推測するものだが埴輪の石積みが残るわけではないので疑問の余地が残ることはいうまでもないが、石室下の版築構造や出土遺物の検討から積極的に評価しようとするものである。また、前方後円墳の階層化に見るように、前方後円墳の埴輪は大王から小豪族の首長までとりいれ、外部構造的な差は規模と段築等である。七世紀後半の時期には中央では八角形古墳が大王（天皇）の墳墓形式であり、これを各地の豪族層が前方後円墳と同様に取り入れたと想定される。七世紀前半は方墳がそうであり、やはり各地の首長が方墳を築いている。最初に築いた円墳を方墳に改変したとされる鹿島73号墳の背景には当時の埴輪意識を反映していると理解できるだろう。
立野1号古墳のように八角形古墳の可能性のある古墳は不整形な円墳と報告されたり、周溝掘削の単位であるとされたりしているが、前記のような理由から八角形である可能性を想定することで地域史をより具体的に考えることができる。熊谷市籠原裏1号古墳をはじめ、寄居町樋ノ下古墳群中の12号古墳が八角形古墳と推定される。樋ノ下古墳群は終末期の古墳群で古墳と古墳の空閑地に新たに造墓を繰り返すなど立地と占地を限定していた。円墳以外の多角形墳を含む古墳墳丘はほとんど削平されていたが胴張型の横穴式石室が確認されている。
- 16) 立野古墳群中には一遺体を納めるには難しい小石室が検出されている。小石室については類似例との検討を要するが、本

第2節 立野古墳群の歴史的位置付け

古墳群の場合取骨自体、又は蔵骨器を納めた石槨であった可能性が強いと考えられる。町域では八世紀中ごろより火葬墓群が寺内廃寺東方の萩山遺跡で確認されており、同寺の建立以降在地への仏教信仰が一層波及したと理解される。

渡来系氏族の間には火葬の風が早くから行われたと考えられており、壬生吉志福正禰の武蔵国分寺七重塔再建に表われる信仰の様は、武蔵への入植以後寺内廃寺を創建した父祖一族の信仰に根ざすものと思われ、後期群集墳から火葬墓の造営、仏堂から寺院への発展移行は意外に早く、順次行われていったと考えて良いだろう。

(第2図の説明)

荒川右岸より比企丘陵域の水系と分水界を示し、古墳・遺跡・窯跡・寺院などの古代遺跡を載せてみたのが第2図である。男衾郡の東西南北については、本文中で触れたとおりであるが、各郷の比定については諸説あり定まらないのが現状であることを述べた。ここでは郷名の比定を急ぐのではなく、郷の領域を前述の水系と分水界、古代遺跡の分布などから考えてみようとしたものである。比企丘陵域の場合、分水界はほとんどが丘陵尾根にあたり、分水界で取巻かれた地域は森林の発達した丘陵斜面と谷底に小河川と狭長な谷津田を発達させた谷合いになる、谷合いは隔絶された空間ではなくときには低平な尾根で連続し、通行は容易である。図中に各地の代表的な古代遺跡をおきその地域区分を考えてみたものである。以下A～Hに区分した男衾郡の八郷に相当する領域を見てみよう。

- A 荒川右岸 和田川、和田・吉野川 江南台地域、谷津田 塩・古里古墳群、立野古墳群、鹿島古墳群、寺内廃寺 熊谷市 吉岡、江南町東部
- B 荒川右岸 新吉野川 江南台地域、谷津田 塩・古里古墳群、尾根横穴墓 川本町本田・畠山、寄居町赤浜・今市 嵐山町古里
- C 荒川右岸 坂東川 江南台地、外秩父山地、谷津田 東番場地遺跡 寄居町男衾・折原
- D 兜川 市野川上流 外秩父山地 丘陵地 台地斜面 谷津田 慈光平廃寺 小川町竹沢 八和田
- E 槻川 外秩父山地 丘陵地 小川盆地 谷津田 穴八幡古墳 東秩父村 小川町
- F 都幾川 雀川 外秩父山地 丘陵地 谷津田 慈光寺 都幾川村、玉川村
- G 都幾川、市野川、粕川、滑川 丘陵地 丘陵斜面 谷津田 高根・天神山横穴墓 寺谷廃寺 平谷窯跡 西原古墳群 若宮八幡古墳 嵐山町、滑川町、東松山市唐古
- H 角川、滑川 丘陵地、台地 比丘尼山横穴墓 大谷瓦窯跡 東松山市大谷、大里町青山

B郷からC郷の名称比定はほとんどできないが、A郷については寺内廃寺の所在から壬生吉志福正の住む榎津郷となるだろう。各郷の比定については新たな資料の発見に待つところが大きい。G郷は都幾川に面した台地域を別に区分することもできると思われる。比企郡は都幾川、市野川下流域の沖積地帯（都介郷・渭後郷）と高坂台地の一部（鹹瀬郷）、東松山台地の東端部（郡家郷）を想定する。横見郡は吉見町一帯とする。

比企郡の式内社が現在の伊古乃速御玉比売神社（滑川町伊古）であるのか疑問だが、古代式内社の想定地については問題が多いのでここでは触れない。ただ一つの理解としては、伊古神社が神体山とする現在の二宮山が男衾・比企建郡以前から神奈備として信仰されていたとも考えられるので、神域が男衾郡に残され、新宮は新たに比企郡内に移されたとも想定される。この場合、二宮の意味は図りかねるが、移された新宮は新たな郡の中心の社になったと思われ、それは現在の東松山市箭弓神社となるのかもしれない。

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

検出遺構

今回の調査面積は、約6,400㎡で、調査区内からは古墳時代終末期の古墳10基と、小石室1基、縄文時代の集石1基が確認されている。

古墳の規模

古墳群は、その規模から三つに分類され、石室に使用された石材が異なることが確認される。

- ①直径20mを超える大型円墳〔第1・12・14号墳〕。石室に凝灰岩の截石を使用する。第1・12号墳の周溝は全周しない。玄室面積は、3㎡を超える。
- ②直径10m～15mの中型円墳。石室に凝灰岩の截石を使用する古墳〔第3・17号墳〕と、石室に河原石を使用する古墳〔第11・13・15号墳〕が存在する。第13号墳の周溝は全周しない。玄室面積は、概ね2㎡～3㎡未満。
- ③直径10m以下の小型円墳〔第16号古墳・第1号小石室〕。石室に截石でない凝灰岩片を使用する。第16号墳の周溝は全周せず、第1号小石室の周溝は確認されていない。玄室面積は、1㎡未満。

第12・14号墳は、石室舗石面下に、各20cm・80cm程の掘込み地業といえる掘込みが確認されている。また、第3号墳は、半地下式の石室構造をしており、石室上面が旧表土下となり、石室の盛土の必要性がほとんど認められない例も確認されている。

石室の規模は、周溝によって区画される面積に比例している。最も規模の小さい、第16号墳・第1号小石室は、玄室長が各1.3m、0.7mであり、成人を埋葬したには明らかに規模が小さい。幼児を埋葬した可能性もあるが、角のある凝灰岩片をそのまま舗石として使用しており、遺体をそのまま横たえたとするには疑問がある。埋葬形態が異なる可能性も考えられる。

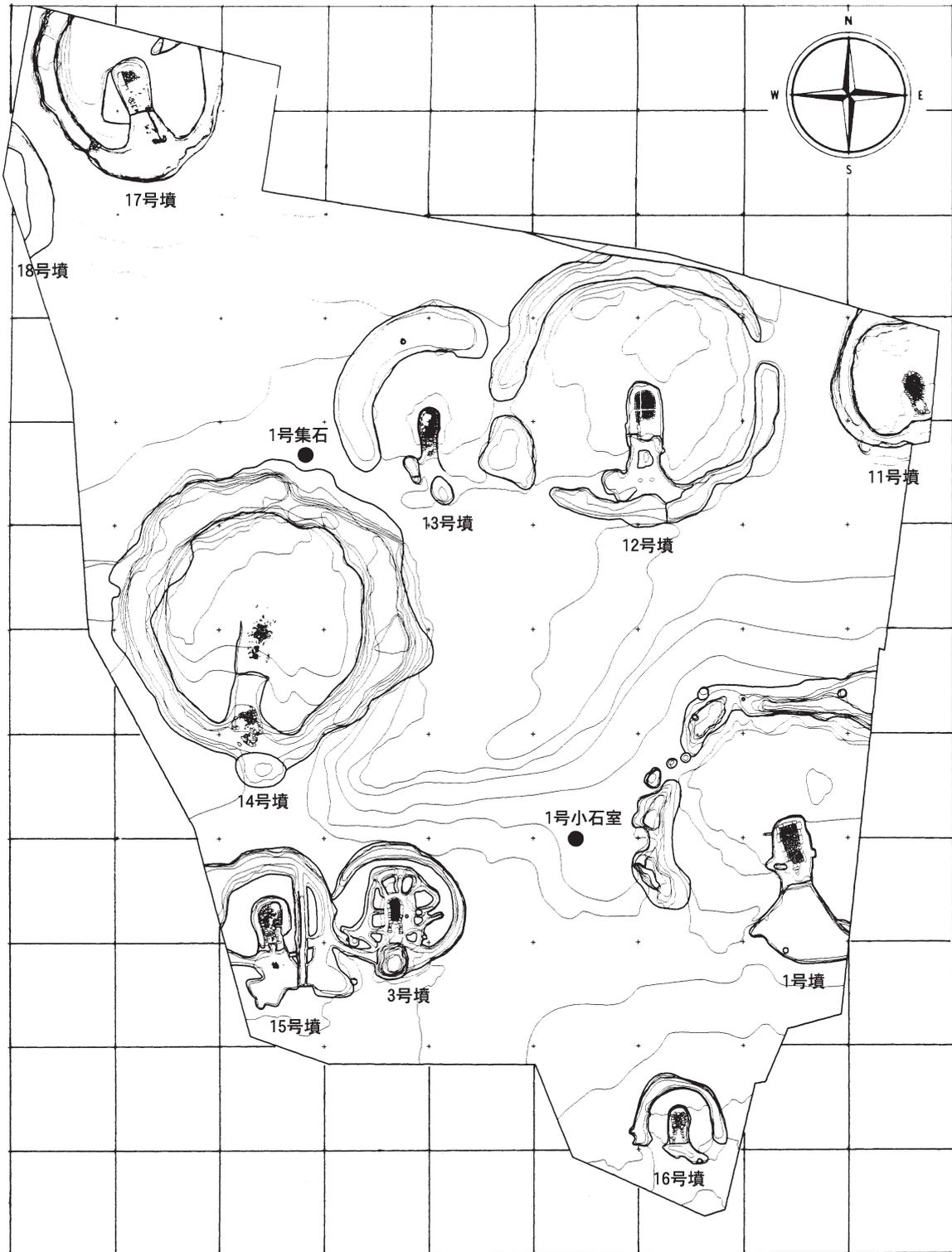
古墳の分布

第12号墳と第13号墳は、石室間の距離が約20mと近接して構築されている。第13号墳の周溝は、第12号墳の周溝に重複する手前で途切れていることから、後者の古墳の構築が新しいものと判断される。石室はほぼ東西方向に並び、主軸方向もほぼ一致する。

第3号墳と第15号墳は、石室間の距離が約12mと近接して構築されており、周溝が一部切り合う。周溝の土層断面の観察では、第15号墳の周溝が第3号墳の周溝を切っている事が観察された。石室は、ほぼ東西方向に並び、主軸方向は、第3号墳がほぼ真北方向に対し、第15号墳が北西―南東方向に約3°ずれて構築されている。

第17号墳と第18号墳も、周溝間で約3m近接して構築されている。第18号古墳の石室は、調査区外のため未確認であるが、凝灰岩の散布が認められないことから、河原石を使用した石室の可能性が高い。

また、第11号墳の東側には、凝灰岩の截石の石室を持つ古墳がかつて存在しており、本遺跡の特徴として、凝灰岩截石の石室を持つ古墳と、河原石の石室を持つ古墳が並ぶ



第3図 遺構分布図 (1/600)

第1表 立野古墳群 古墳一覧表

古墳番号	墳丘形態	周溝(m)		主 体				部			出土遺物	備 考
		内径	外径	構築法	形 態	石 材	主 軸	規 模(m)		面積(m ²)		
1号墳	円墳	22.8	30.9	地山掘込	短冊形横穴式石室	凝灰岩載石	N-W13°	a : (4.55)	g : 1.67	玄室	鉄鏃 7 直刀片 1 刀子 1 鉄製鏃 1	
								b : (1.92)	h : 1.37	3.45		
								c : (2.20)	i : —	羨道部		
								d : (2.23)	j : 1.06			
								e : (2.36)	k : —			
								f : 1.57				3.02
3号墳	円墳	10.8	12.6	地山掘込	胴張り形横穴式石室	凝灰岩載石	0°	a : 3.32	g : 1.32	玄室	土師器甕 1 磁石 1	
								b : 2.09	h : 1.10	1.82		
								c : 2.36	i : 0.64	羨道部		
								d : 0.96	j : 0.84			
								e : 1.23	k : 0.86			
								f : 0.48				0.73
11号墳	円墳	11.1	15.6	地山掘込	胴張り形横穴式石室	河原石	N-W6.5°	a : 4.05	g : 1.27	玄室	須恵器長頸瓶	
								b : 2.26	h : 0.75	2.38		
								c : 2.47	i : 0.56	羨道部		
								d : 1.58	j : 0.64			
								e : 1.79	k : 0.61			
								f : 0.55				0.95
12号墳	円墳	21.5	26.5	地山掘込	胴張り形横穴式石室	凝灰岩載石		a :	g :	玄室	須恵器長頸瓶 2 金銅製杵葉 49 鉄鏃 2 鉸具 1 円筒柄頭 1 足金物 1 錐他 1	
								b :	h :	4.35		
								c :	i :	羨道部		
								d :	j :			
								e :	k :			
								f :				1.64
13号墳	円墳	12.9	19.5	地山掘込	胴張り形横穴式石室	河原石	N-E 2°	a : (4.07)	g : 1.25	玄室	鉄鏃 8 刀子 1 管玉 1 石室と羨道部6°ずれ	
								b : 2.61	h : 0.87	2.93		
								c : 2.74	i : 0.62	羨道部		
								d : (1.33)	j : 0.75			
								e : (1.46)	k : (0.65)			
								f : 0.46				0.95
14号墳	円墳	22.2	29.7	地山掘込	胴張り形横穴式石室	凝灰岩載石		a :	g :	玄室	石製紡錘車 1 鉄鏃 1 刀子 1 須恵器甕 1	
								b :	h :			
								c :	i :	羨道部		
								d :	j :			
								e :	k :			
								f :				
15号墳	円墳	8.7	13.2	地山掘込	胴張り形横穴式石室	河原石	N-W 3°	a : 3.52	g : 1.50	玄室	無	
								b : 2.14	h : 0.73	2.78		
								c : 2.32	i : 0.54	羨道部		
								d : 1.20	j : 0.70			
								e : 1.38	k : 0.67			
								f : 0.86				0.91
16号墳	円墳	6.9	8.7	地山掘込	胴張り形横穴式石室	凝灰岩片		a : 2.71	g : 0.62	玄室	無	
								b : 1.30	h : 0.46	0.80		
								c : 1.44	i : 0.31	羨道部		
								d : 1.27	j : 0.34			
								e : 1.41	k : 0.84			
								f : 0.54				0.71
17号墳	円墳	16.8	23.4	地山掘込	胴張り形横穴式石室	凝灰岩載石	N-W21°	a : 2.14	g : 0.77	玄室	須恵器蓋 1 土製紡錘車 2 鉄鏃 1	
								b : 1.19	h : 0.62	3.46		
								c : 1.39	i : 0.40	羨道部		
								d : 0.75	j : 0.50			
								e : 0.95	k : 0.43			
								f : 0.71				1.53
18号墳	円墳	14.4	18.0	地山掘込	不明	不明		a : —	g : —	羨道部	土師器 1	
								b : —	h : —	玄室		
								c : —	i : —			
								d : —	j : —			
								e : —	k : —			
								f : —				
1号小石室	不明	—	—	地山整地	横穴式石室?	凝灰岩片		a :	g : 0.56	玄室	無	
								b : 0.7	h :	0.37		
								c :	i :	羨道部		
								d :	j :			
								e :	k :			
								f :				

第1節 遺跡の概要

傾向があることを指摘できる。

出土遺物

本古墳群は、後期～終末期に属するため、埴輪の出土は認められない。墳丘は既に削平され、耕作等による攪乱が石室内部にまで及んでおり、出土遺物は多いとは言えない。

第1・13号墳からは、石室内より鉄鏃が出土している。

第11号墳は、石室内より遺物の出土は確認されず、石室前面の周溝覆土上層より、須恵器の長頸瓶が出土している。

第12号墳の石室は、攪乱が激しいが、方頭・圭頭式を含む鉄鏃片が多量に出土しており、大刀・刀子片、足金物等が出土している。また、羨道部覆土中より須恵器の長頸瓶・横瓶・甕が、馬具関連では、羨道部覆土中より金銅製毛彫杏葉が2点、石室内及び周溝内より鉸具2点が出土しており注目される。

第3号墳からは、石室内からの出土遺物は無く、石室前面の周溝より、土師器甕、砥石が出土している。

第14号墳石室からは、大刀・刀子片、石製紡錘車、鉄鏃が出土している。

第17号墳周溝からは、土製紡錘車・須恵器蓋が出土している。

第16号墳・第1号小石室からは遺物の出土は認められなかった。

石室内にまで、攪乱が及んでいるとはいえ、石室内よりの遺物は明らかに少ない。明確な攪乱の痕跡の確認できなかった、第3・11・15・16号墳の石室内から遺物の出土は確認されなかった。古墳時代後期から終末期にかけて、葬送儀礼における副葬の重点が、石室内部から、前庭部・周溝部における墓前祭祀へと変化した結果を表している可能性もある。

また、他の時代については、遺構には伴わないものの、縄文土時代中期から後期にかけての土器片・石器の散布が認められている。

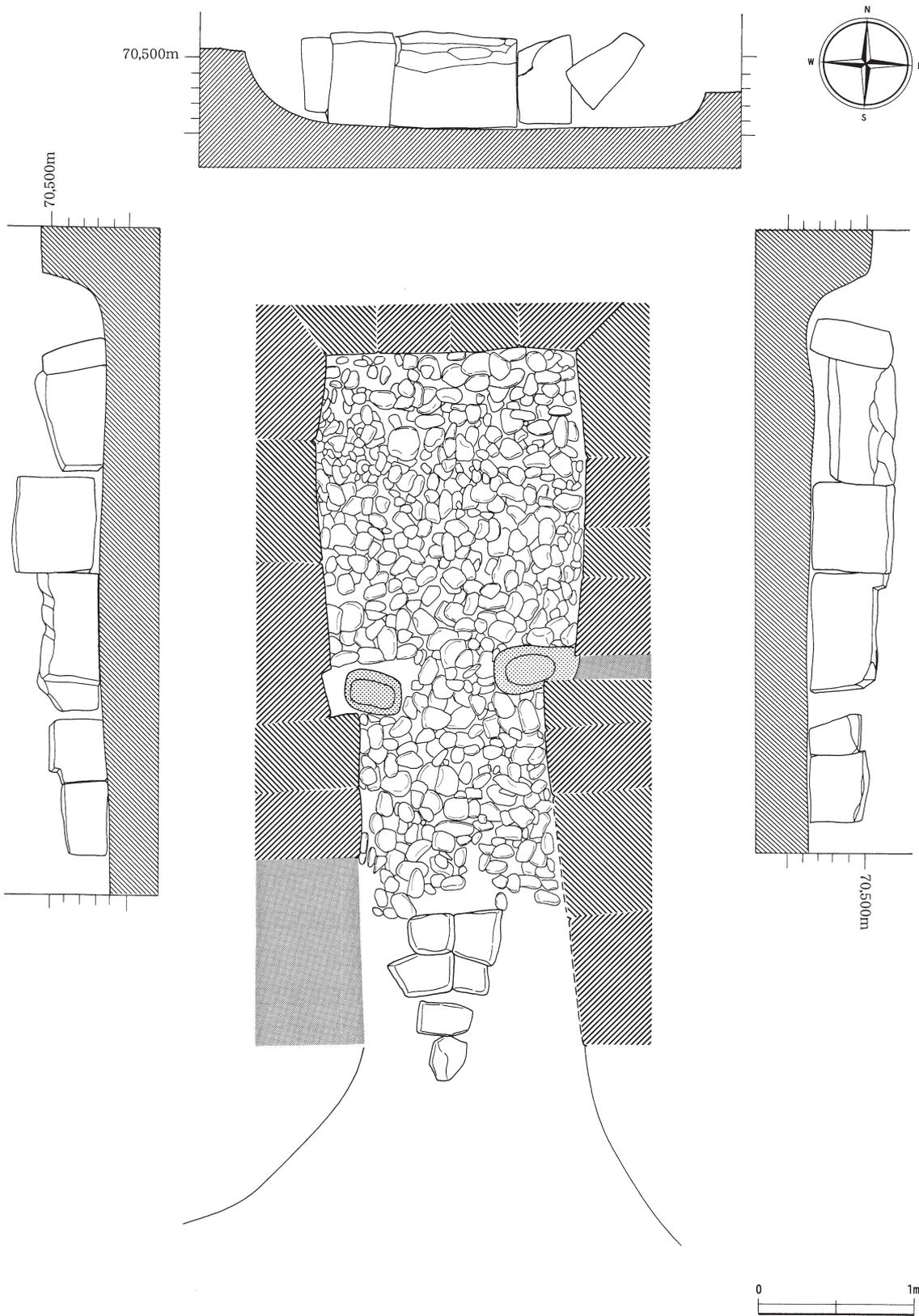
(森田安彦)

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

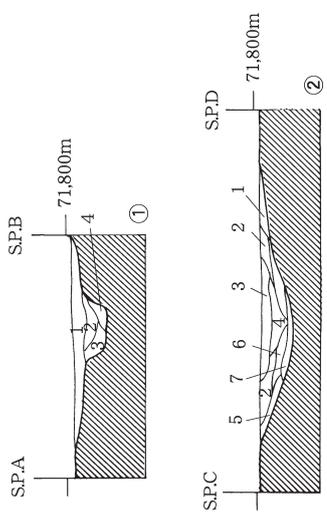
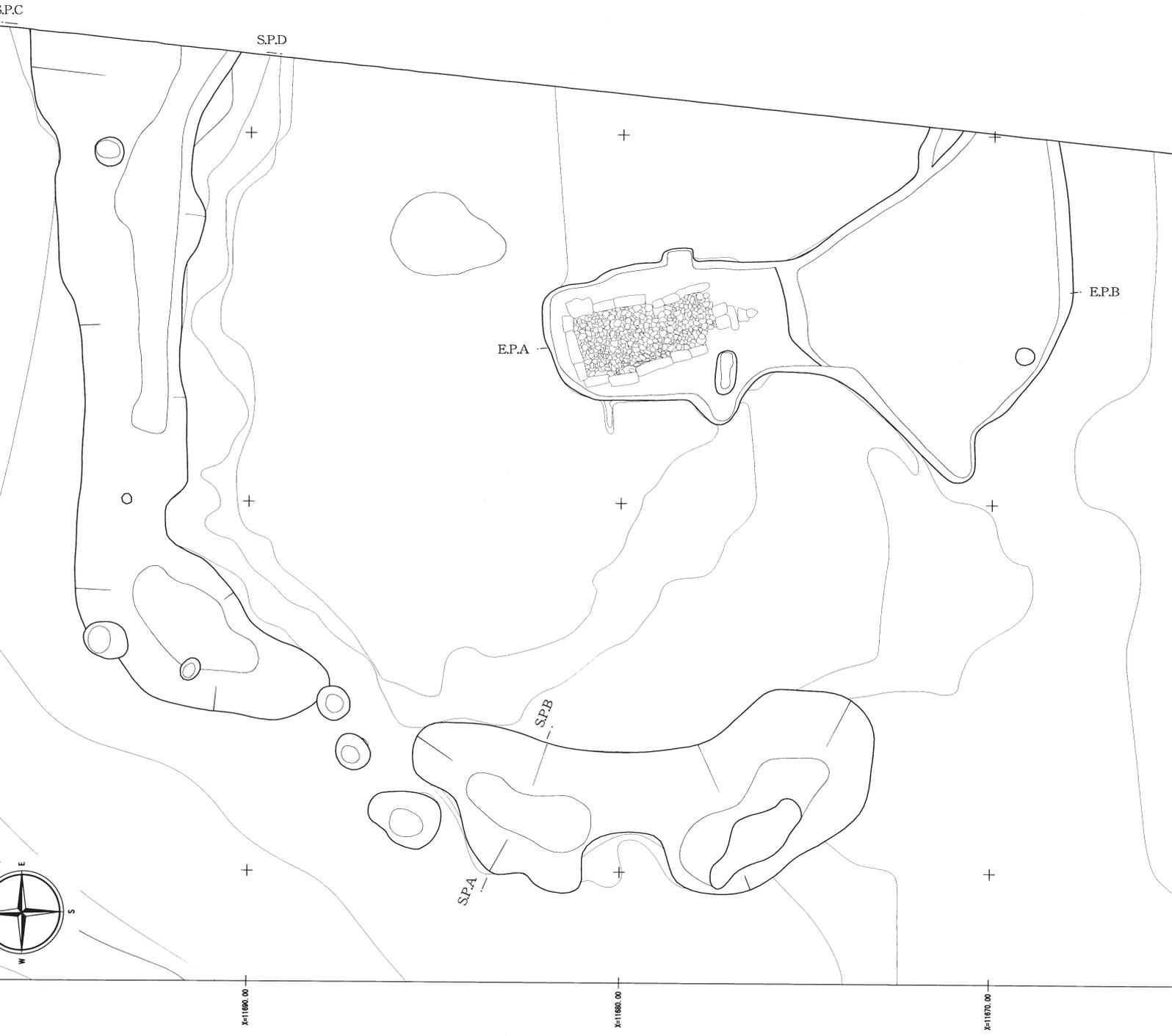
第1号墳 (第4図～11図・図版2・17・18)

位 置	調査区の東端に位置し、北側に第11・12号墳、南側に第16号墳が位置している。
規 模	本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。 周溝は西側と北側に確認され、北西部と南西部に掘残されて途切れる箇所が存在している。南側は、主体部へと続く前庭状の掘込みが存在し、東側は、調査区外となり形状は不明である。周溝の幅は、5.7m～2.1m、深さ0.75～0.2mを測り、形状は不定形である。古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で22.8m、周溝外側で30.9mを測る。
石 室	石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。石室は、玄室の平面形が羽子板状を呈し、羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、凝灰岩の加工石材のみを用いて構築されている。玄室と羨道部は、玄門部に設置された立柱石によって分かたれている。 壁体は、基底石の第1段のみ残存している。奥壁に3個、両側壁に3個ずつ、また、玄門石柱は抜き取られているが、その石材設置痕跡から両袖に1個ずつ存在していたことが想定され、羨道部は、両側壁に2個ずつ確認され、さらに東側に3個の石材痕跡が確認されることから、5個ずつの石材が設置されていたと推測される。 推定される石室の規模は、石室全長は4.55m、玄室長1.92m、羨道長2.23mで、面積は、玄室3.45㎡、羨道3.02㎡、合計6.47㎡を測る。 玄室奥壁両端の両側壁に接する石材には、側壁の石材に合わせた加工が観察され、側壁の石材設置後奥壁を設置した構築順序が推測される。 石室の床面は、壁体構築後、河原石を敷き詰めることで舗石面としている。玄室と羨道の境には明確な区分施設は設置されていない。また、羨道部の入口部付近には、梱石として凝灰岩の加工石材が5個検出されている。 石室は、旧地表面を掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方の平面形態は、不整長方形を呈し、長軸で5.6m、短軸で3.7mを測り、石室の中軸線とは約7°程ずれる。石室壁体と掘方の法面との間隔は、奥壁背後では狭く、側壁背後においては広く取られている。掘方の断面形態は逆台形を呈し、最も深い石室の東側で0.3m程を測る。 また、掘方の底面には、整地土と推測される凝灰岩粒の混じる黄褐色土が認められ、この上面に石室の基底石は設置されている。この石室基底石の設置箇所付近の土壌は硬化しており、設置箇所に対する締め固めが行われていた事が推測される。
石材加工痕	第9図1～3の石材左上部には、幅6cm程の刃先の直線的な「粗作り」段階のチョウナ状工具による痕跡が僅かに認められる。そして、この痕跡を消すように、「仕上げ」として全体的に幅7cm程の刃先の丸い浅い匙面が観察される。この「仕上げ」段階の加工痕跡は、各石材間で連続して観察されることから、石室が組み上がったからの作業であることが想定される。

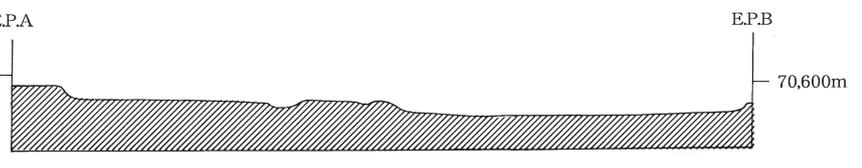
第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



第4図 第1号墳石室平面・立面図



- ①
1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
 3. 茶褐色土 しまりやや弱。粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 4. 明黒褐色土 しまり・粘性強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
- ②
1. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒やや多含。粒子やや細。
 2. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子粗。
 3. 黒褐色土 しまり・粘性強。粒子粗。
 4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
 5. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
 6. 明黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
 7. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒ブロック状に多含。粒子やや粗。



5m
0

遺物出土状態

石室内は、盗掘または耕作による攪乱が一部認められ、検出された遺物は鉄鍬7点、刀子1点と少ない。第11図1～8は、石室内舗石の間に落ち込むようにして確認された遺物で、比較的原位置を保っているものと思われる。6の鉄鍬の西側には、幅5cm、長さ30cmほどの範囲で鉄錆が舗石に付着しており、本来はこの位置に大刀が置かれていたことが推測される。10の大刀片は、奥壁北側50cm程の石室外から出土したもので、本来は石室内に置かれていた可能性が高い。

出土遺物

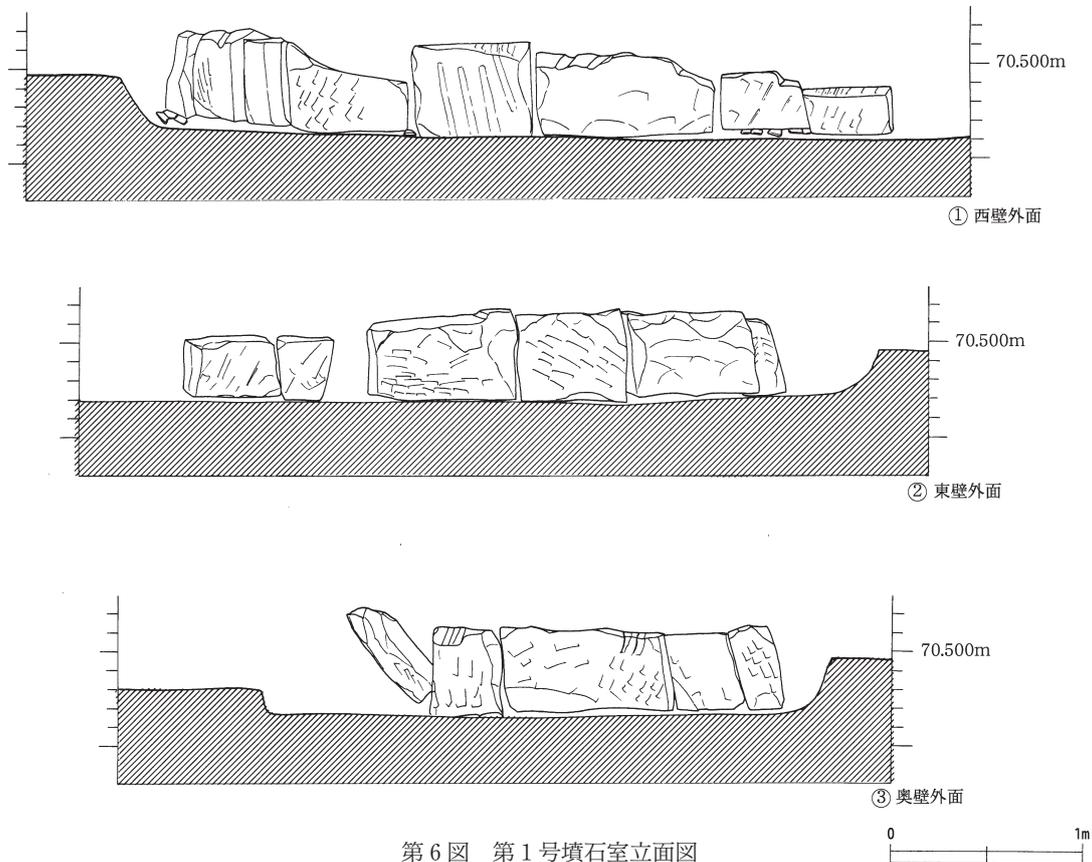
〔鉄鍬〕(第9図1～7・図版18) 鉄鍬は、破片も含めると12点出土しており、7点を図示している。

1は、片刃の鍬で先端部を欠損するが、端刃の所謂カマス切先状を呈するものと推測される。頸部への移行部は明瞭でなく、関を持たない。頸部以下を欠損しており、茎部への関の有無は不明である。

2～7は、鍬身部の平面形態が五角形を呈するものである。篋被部と茎部が棘によって分かたれる(3・6)と、棘が無いもの(2・4・5)とに分類される。6は完形品で、鍬身長3.5cm、幅2.7cm、篋被長3.0cm、茎部長4.3cmを測る。篋被部の断面形態は方形、茎部断面は楕円形を呈する。

〔刀子〕(第10図8・図版17) 鉄製刀子で、接合しない3点を同一個体として扱った。

刀身部の中ほどと付け根付近を欠損している。刀身部は切先に向かうに従ってその幅を減じ、切先部は、刃部側が丸みを帯びた所謂ふくら切先状を呈する。断面形状は楔形を呈し、刀身部分に錆が認められる。茎部は断面長方形を呈し、木質が明瞭に残存して



第6図 第1号墳石室立面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

いる。復元長16.8cmを測る。

[鉄製品] (第10図9) 9は、板状の鉄製品。刃部が無いことから、鎌ではないと判断される。残存長6.4cm、幅3.3cmを測る。

[大刀] (第10図10・図版17) 10は、石室外より出土している。切先部分のみの残存で、残存長13.2cm、幅2.9cmを測る。切先部は、刃部側が丸みを帯びた所謂ふくら切先状を呈する。

時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。埴輪が出土していない事、石室内より出土した鉄鏃の形態から判断して、概ね7世紀代に比定される。

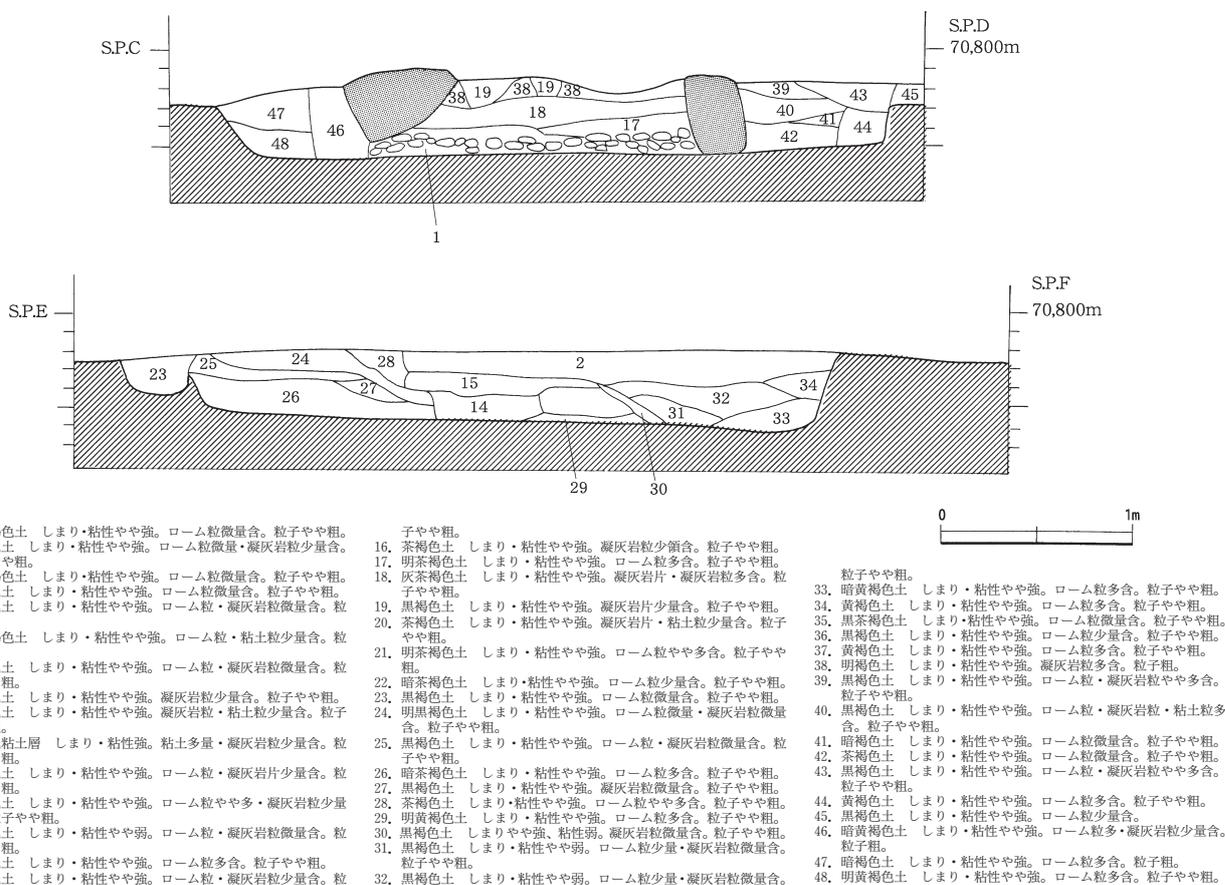
第3号墳 (第12図~21図・図版3・4・14)

位置 調査区南西に位置し、第15号墳の周溝の一部が切られている。北側には第14号墳が位置している。

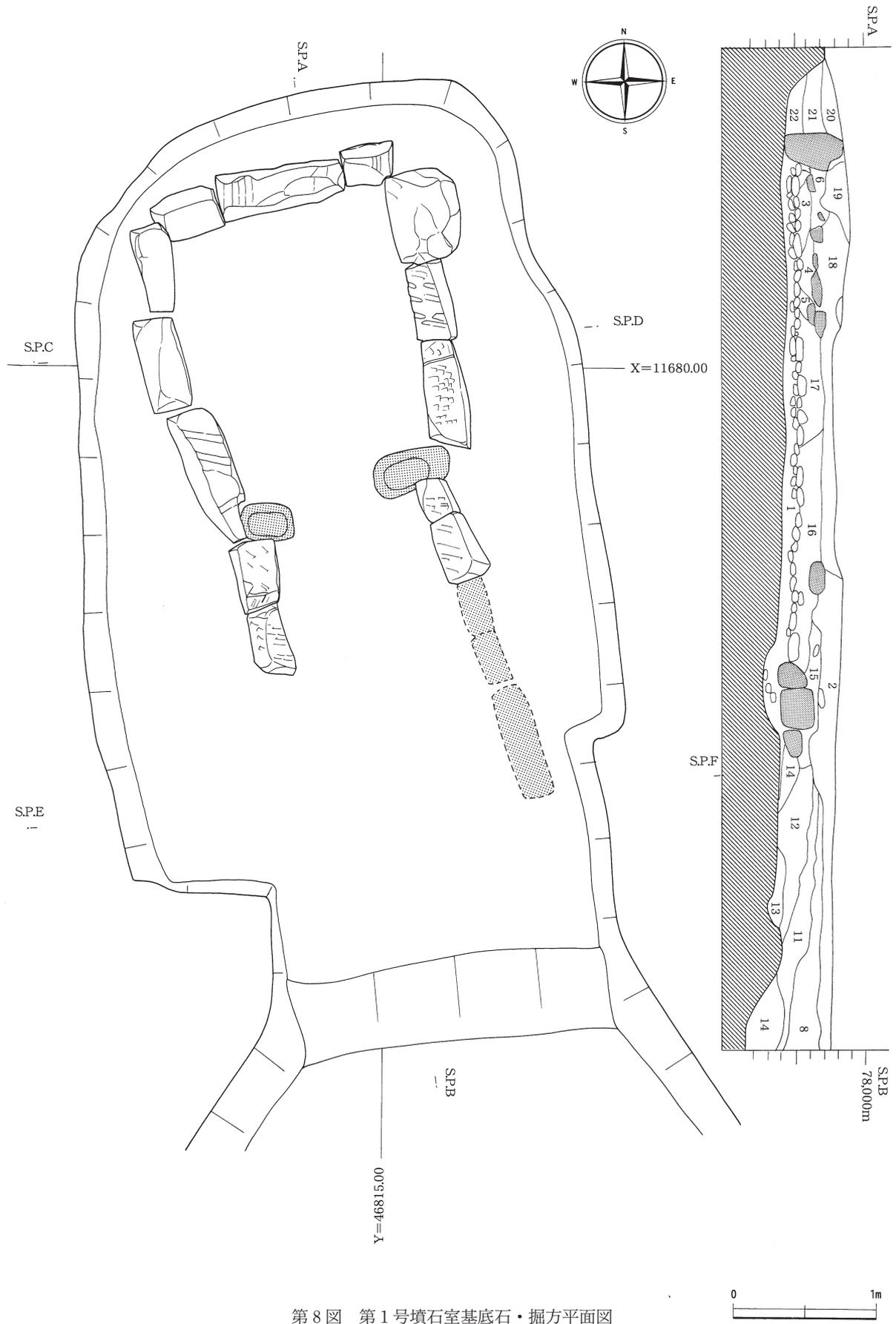
規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。

周溝は、他の古墳と異なり、断面箱薬研に近い形を呈する。北東側に数個の凝灰岩塊を詰めて周溝を塞いでいる個所が一箇所確認されており、西側で、一部掘残され途切れる箇所が存在している。また、第15号墳の周溝と一部重複しており、土層観察により、本古墳の周溝が切っていることを確認している。

規模は、玄室のほぼ中央に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で

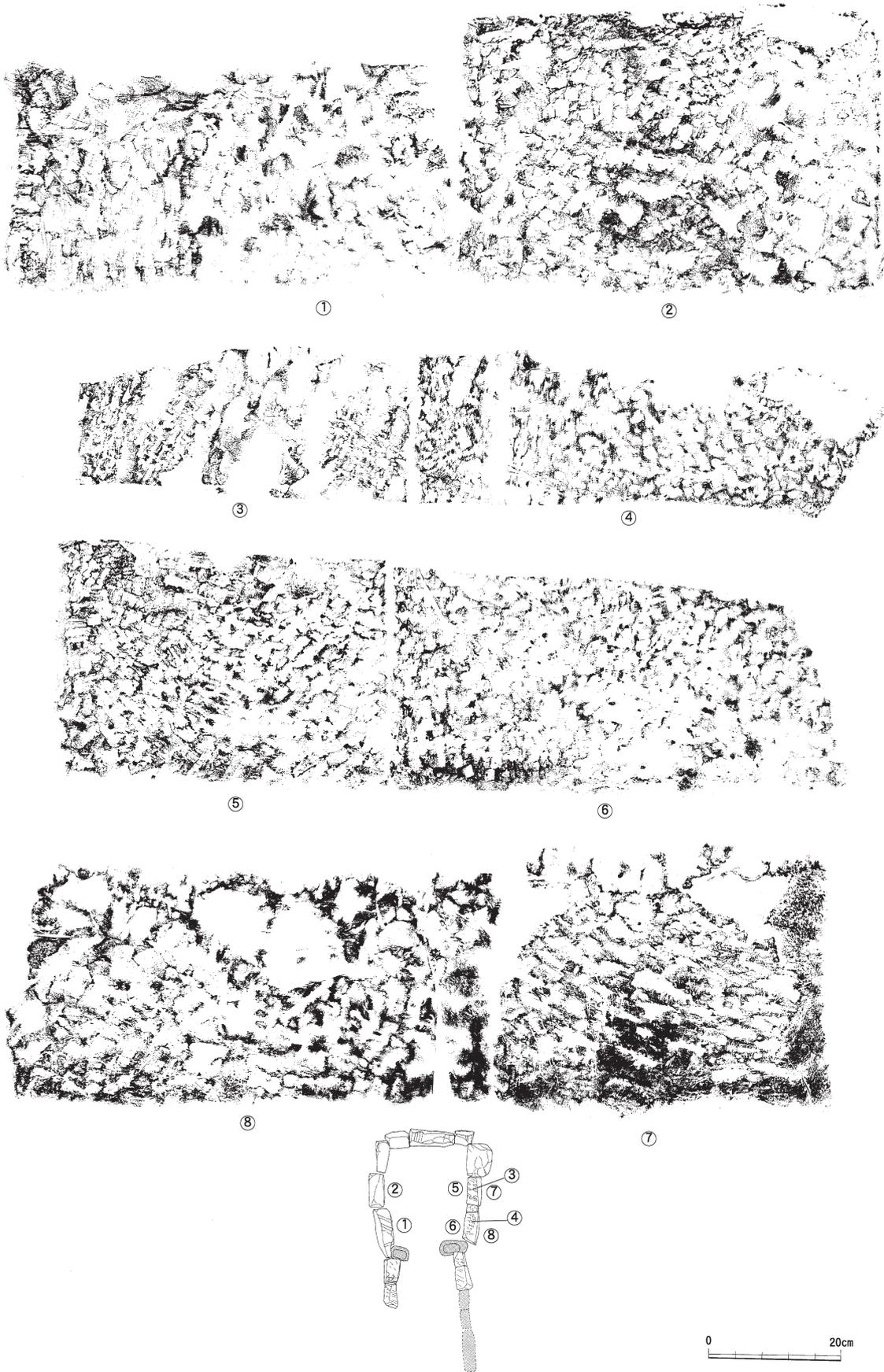


第7図 第1号墳石室土層断面図

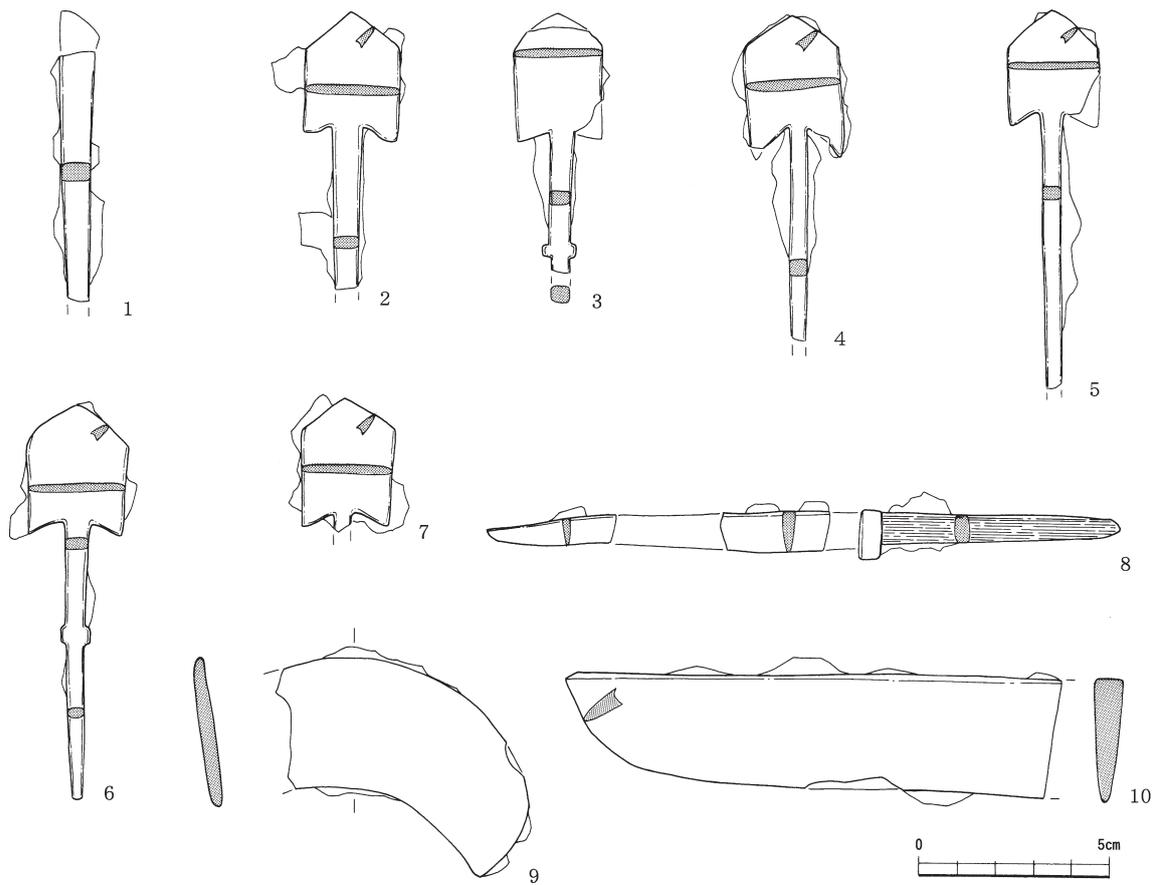


第8図 第1号墳石室基底石・掘方平面図

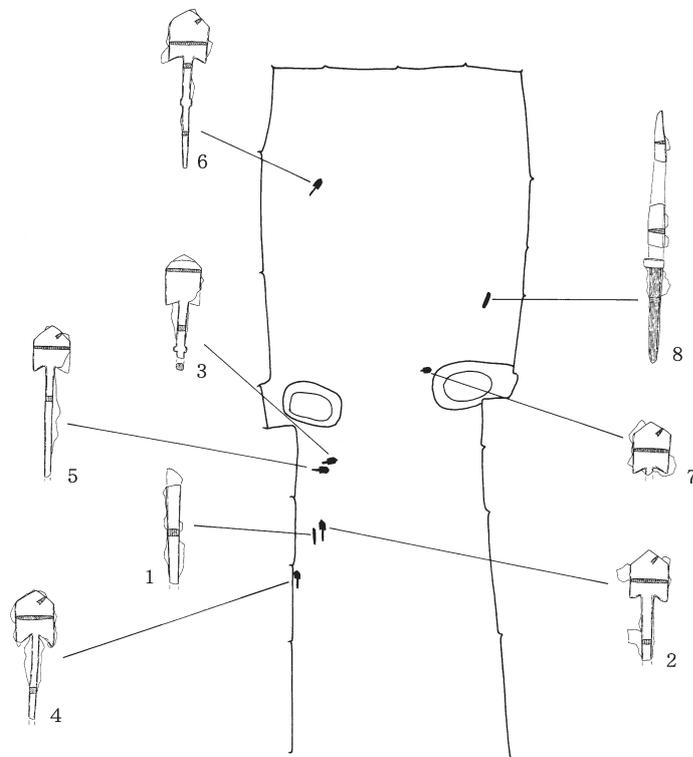
第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



第9図 第1号墳石室石材加工痕拓影図



第10図 第1号墳出土遺物



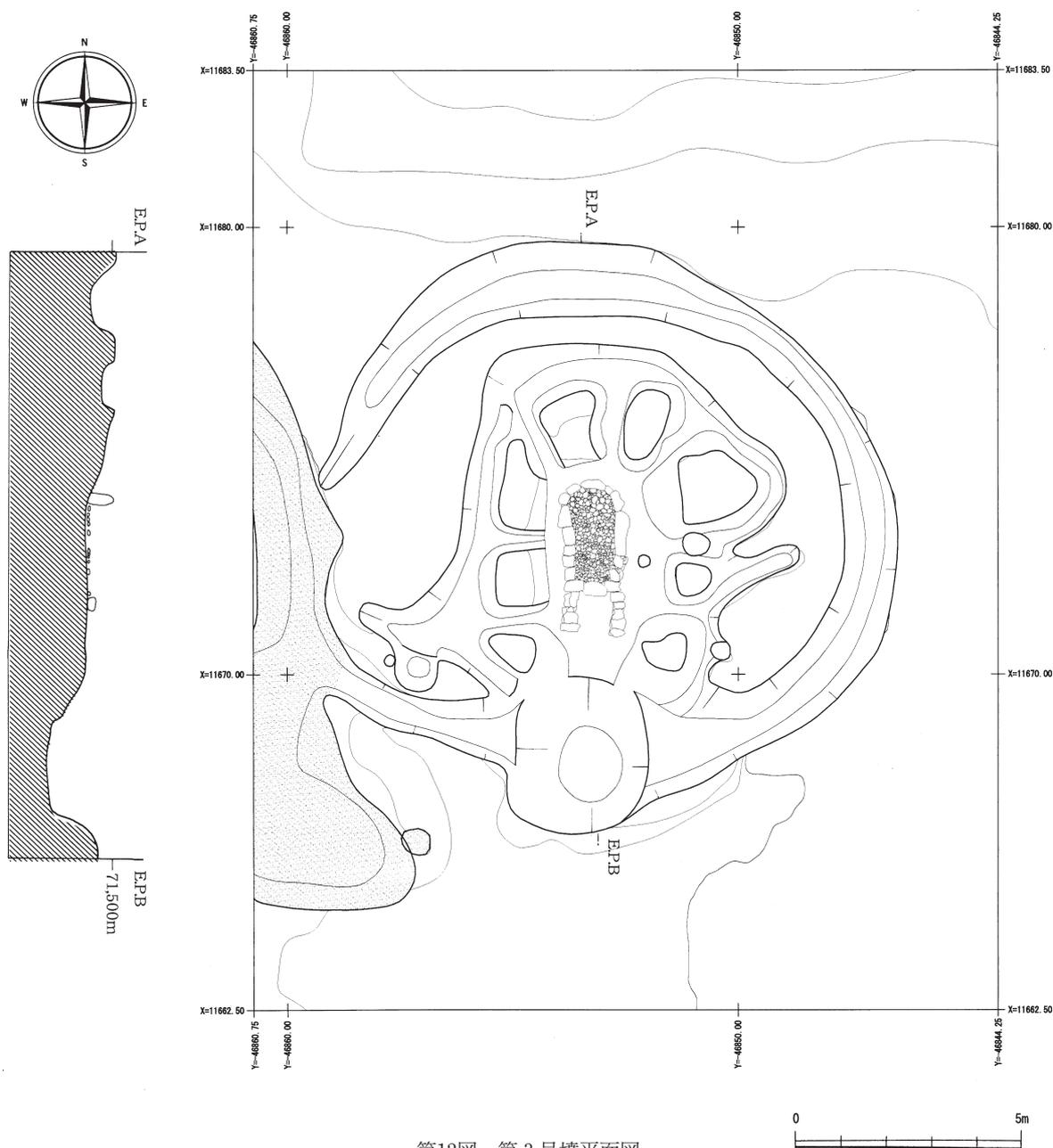
第11図 第1号墳遺物分布図

石 室

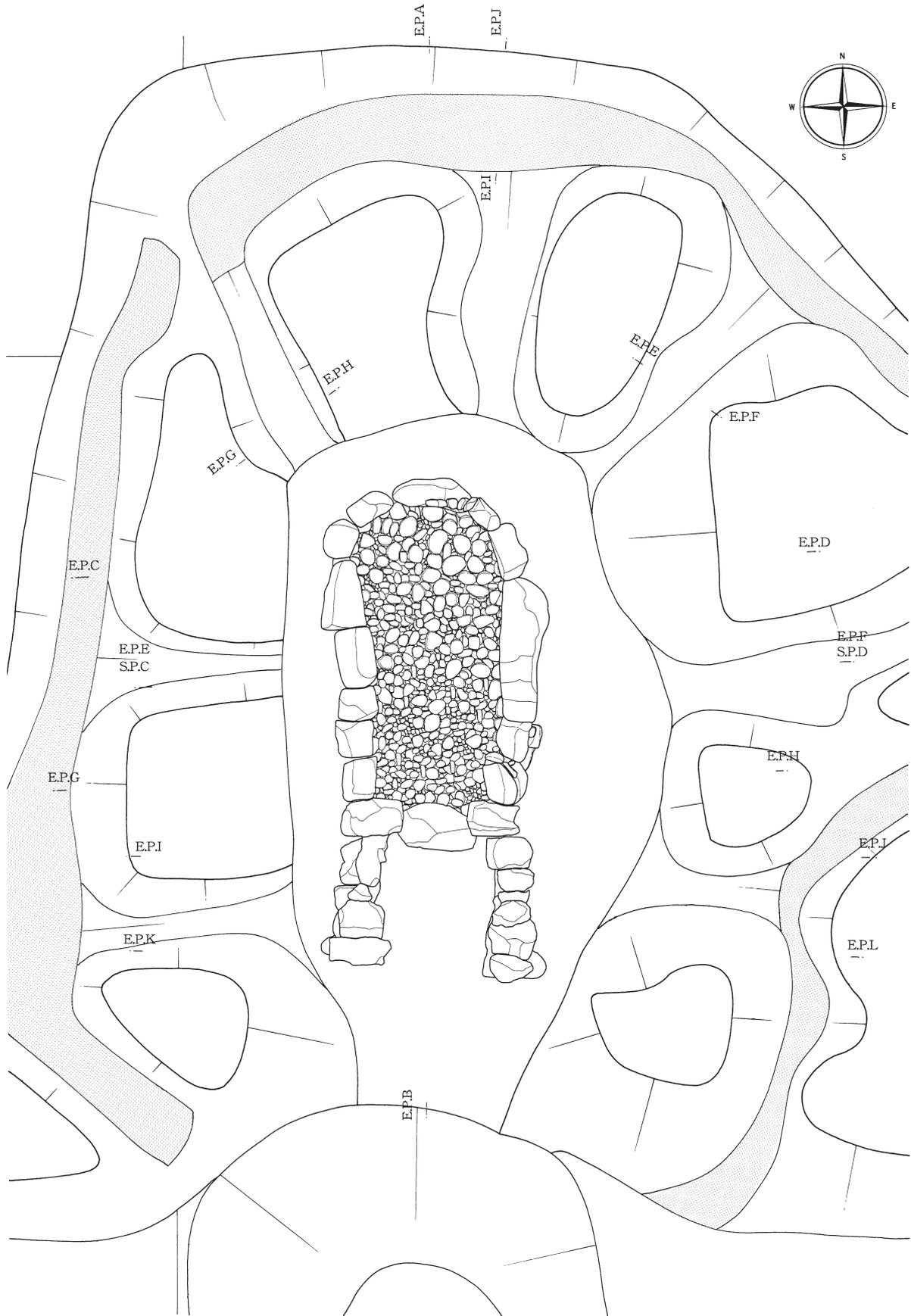
10.8m、周溝外側で12.6m、深さ0.6mを測る。

石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。石室は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、凝灰岩の加工石材のみを用いて構築されている。玄室と羨道部は、玄門部に設置された立柱石および立柱石間に設置された梱石によって分かたれている。

石室の壁体は、所謂「間知積み」の技法によって構築されており、各石材相互の接する面においては、明瞭な隙間はほとんど確認されない。また、石材が上下に重なる箇所には、胴飼石と言われる角度調整のための凝灰岩塊が確認され、結果的に石材の設置方法は「転び」を持たせることとなっている。石材は、最大で根石部分から3段の石組を検出し、舗石面からの高さ68cmを測る側壁を検出している。奥壁および東側壁

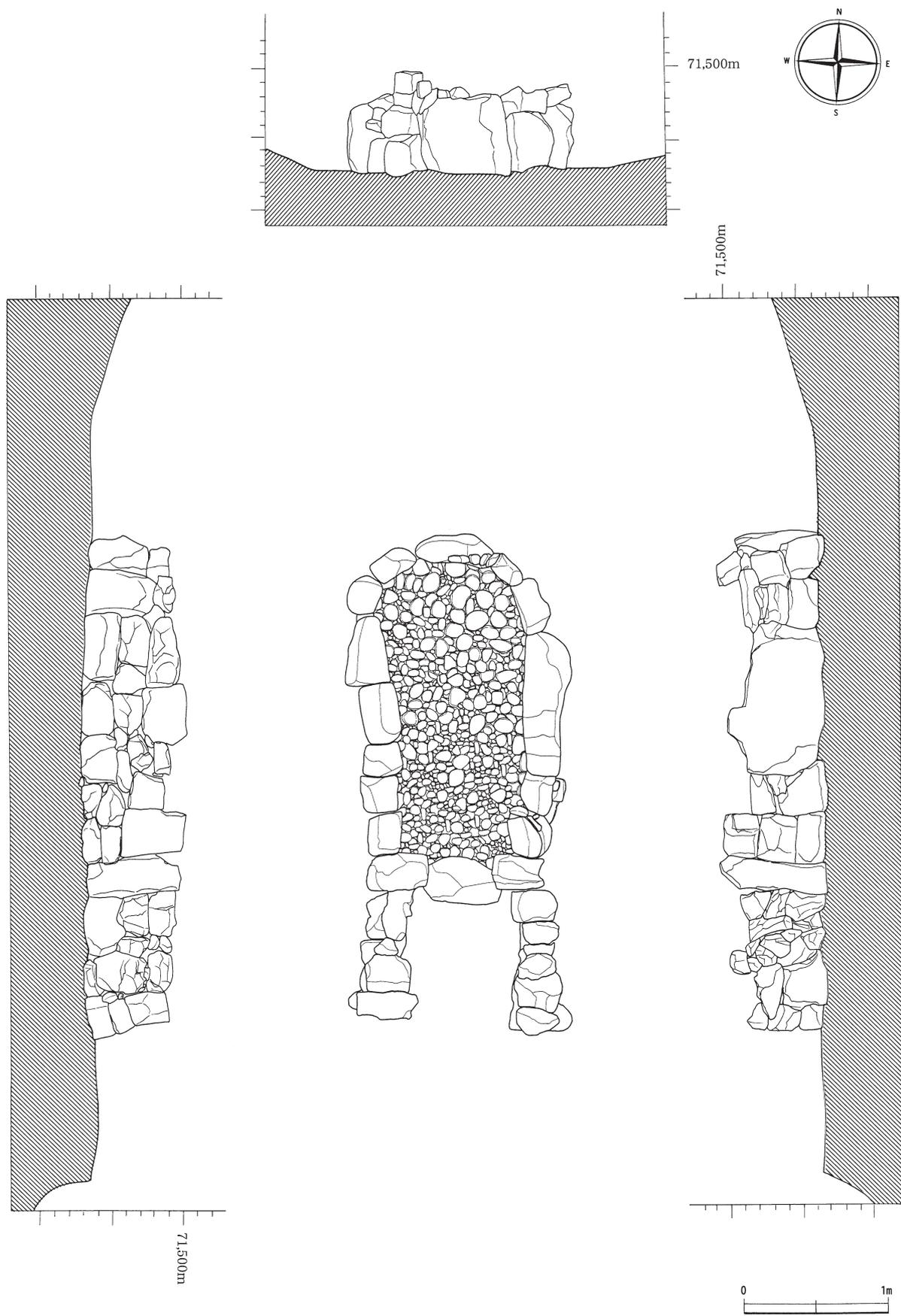


第12図 第3号墳平面図

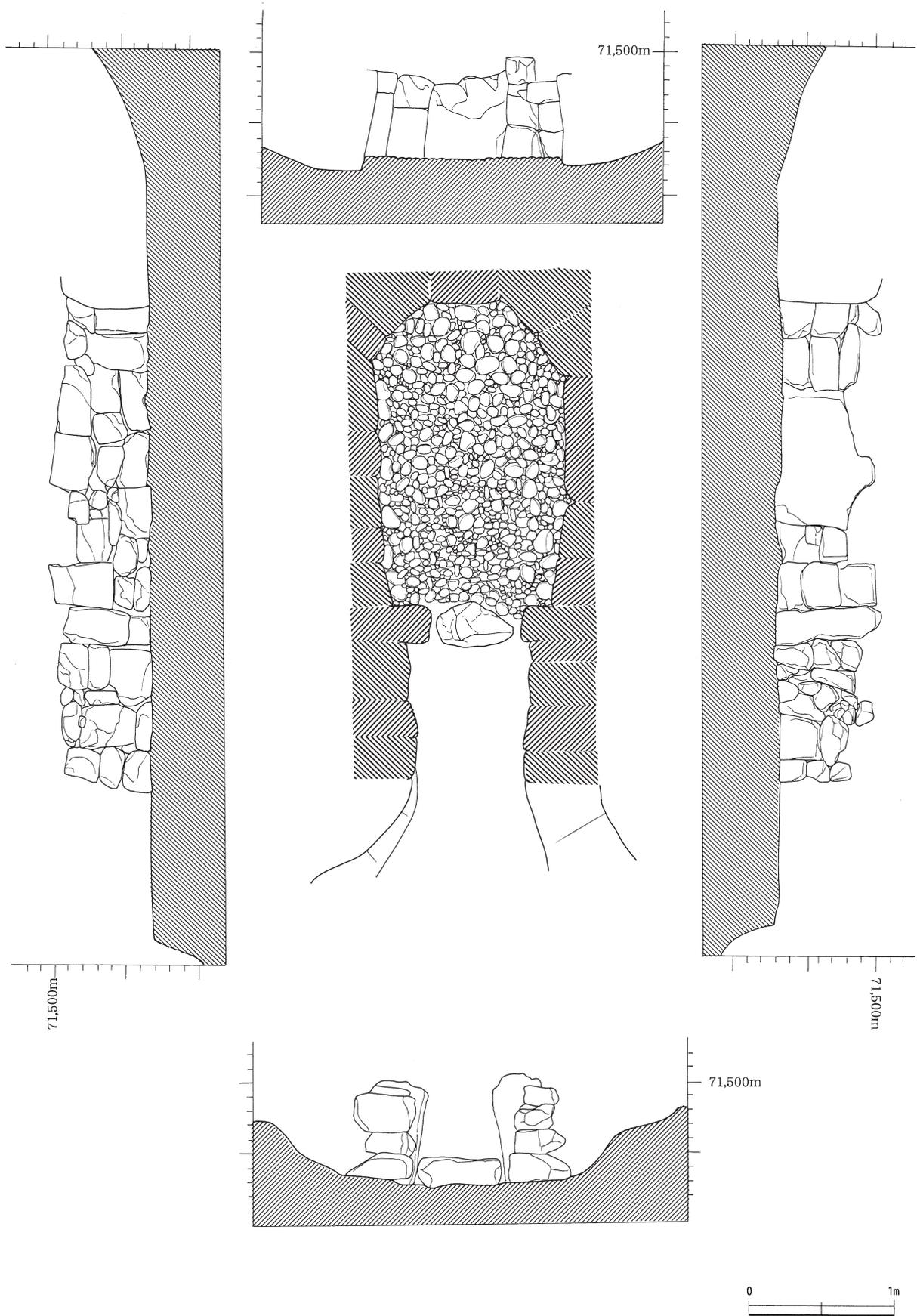


第13図 第3号墳石室平面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

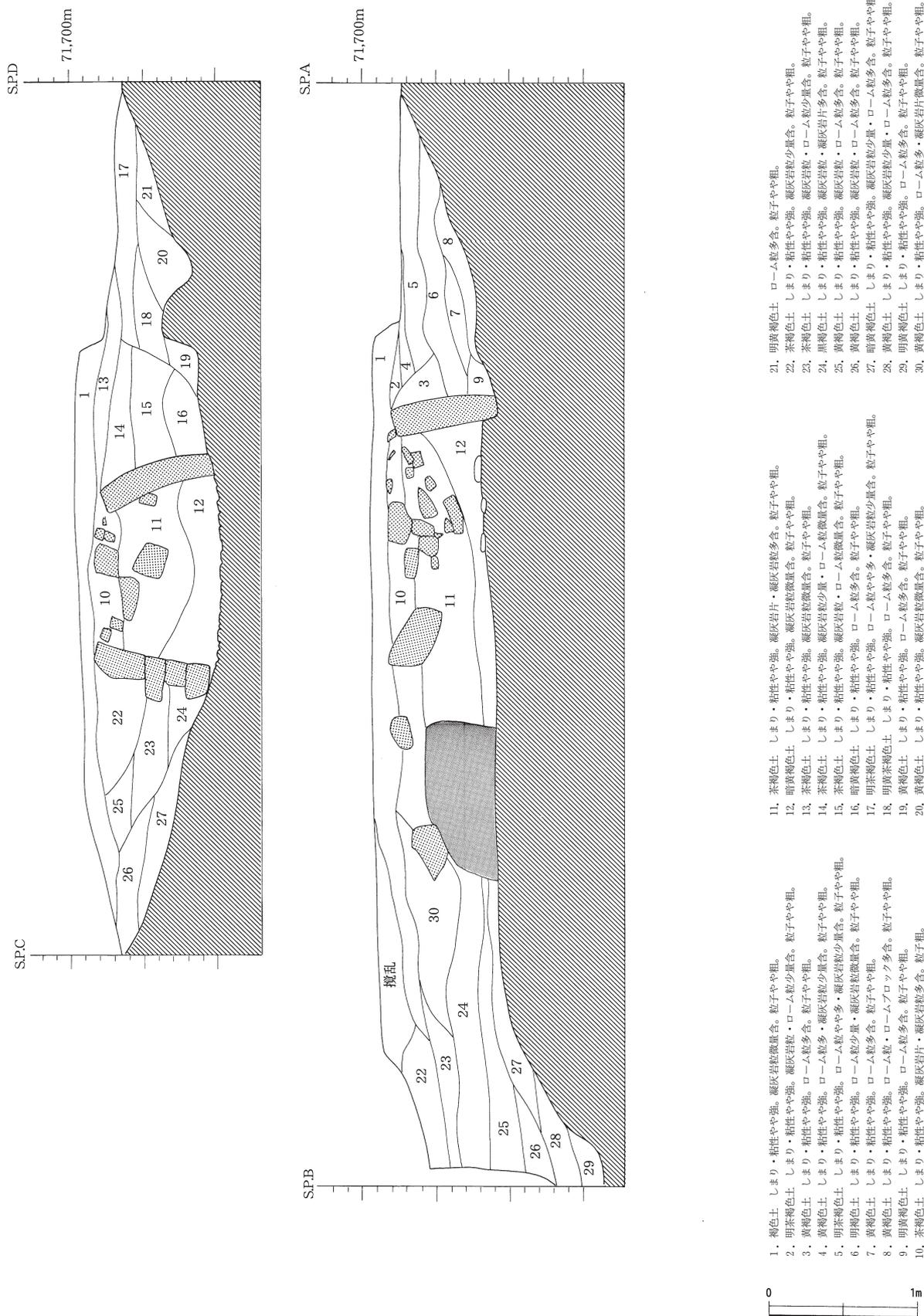


第14図 第3号墳石室平面・外側立面図



第15図 第3号墳石室平面・内側立面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



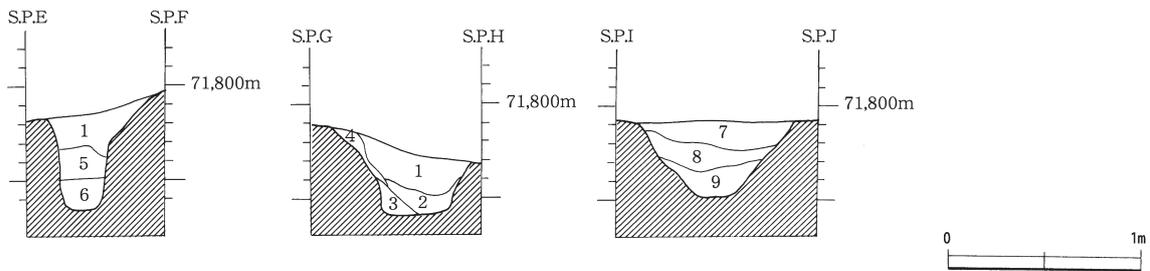
第16図 第3号墳石室・周溝土層断面図



第3号墳石室



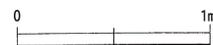
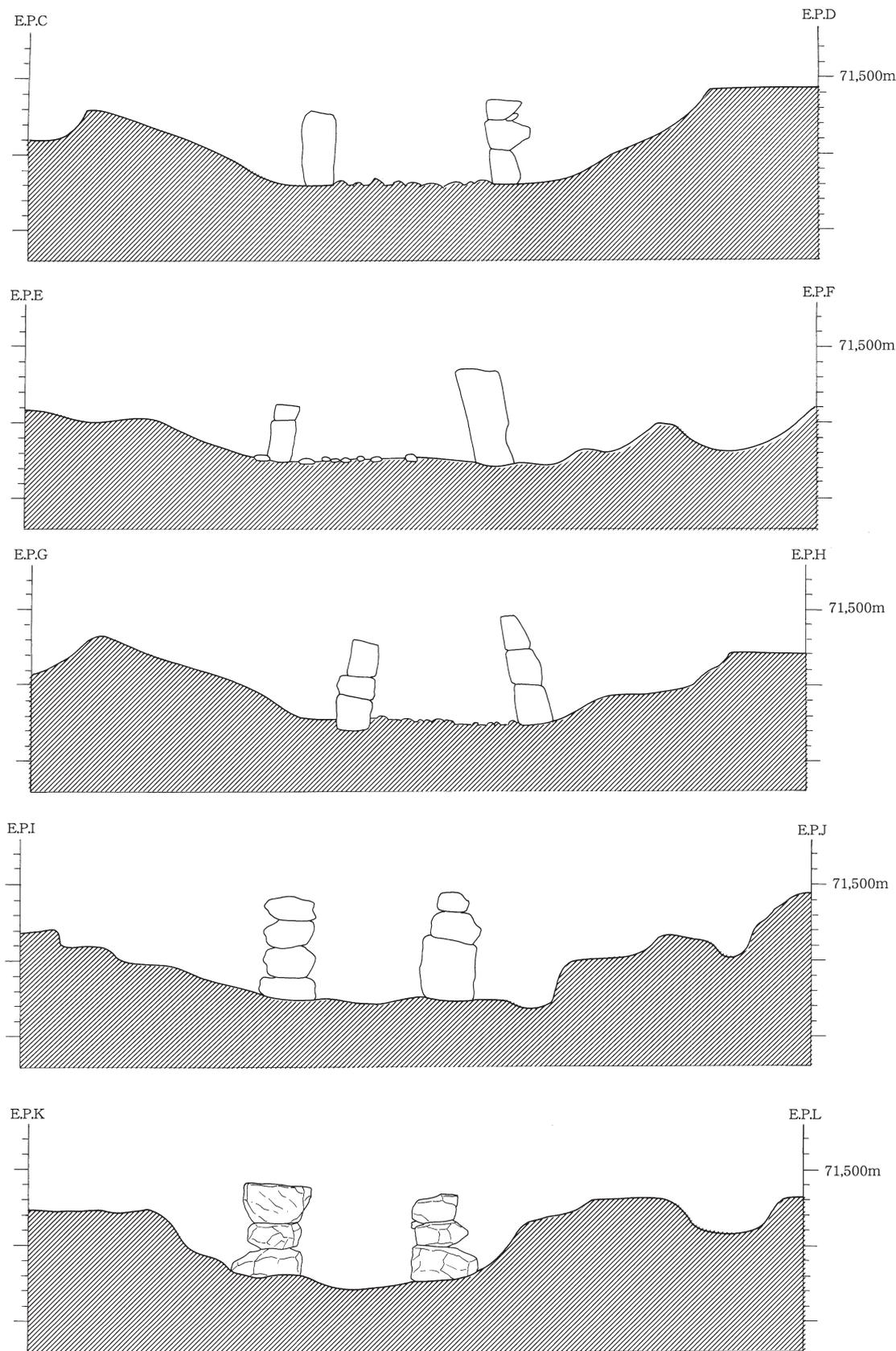
第3号墳前庭部掘込部遺物出土状況



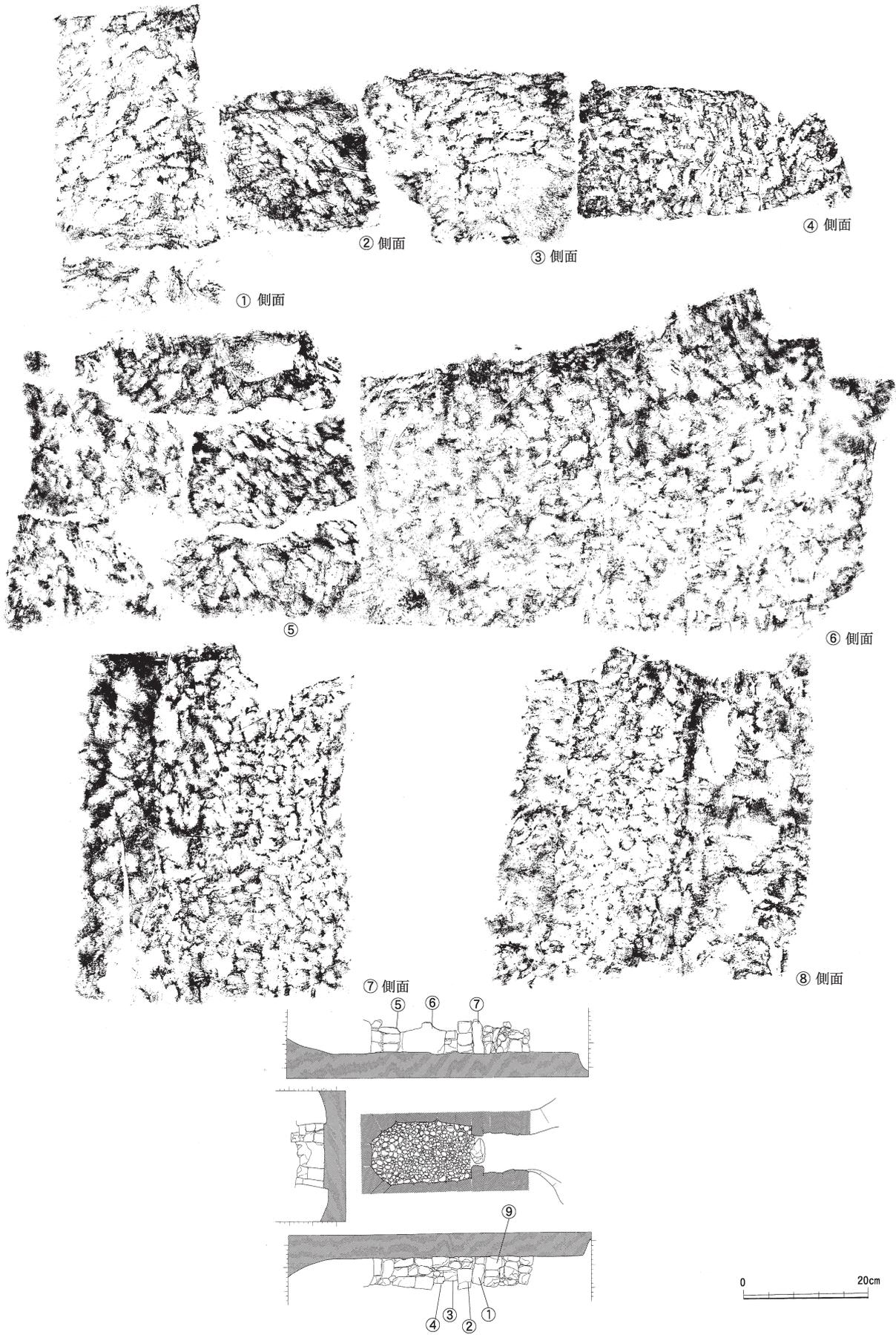
1. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量・凝灰岩粒微量含。粒子粗。
2. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
3. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
4. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。
5. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。
6. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子粗。
7. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量・凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。
8. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。
9. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

第17図 第3号墳周溝土層断面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



第18図 第3号墳石室断面図



第19図 第3号墳石室石材加工痕拓影図(1)

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

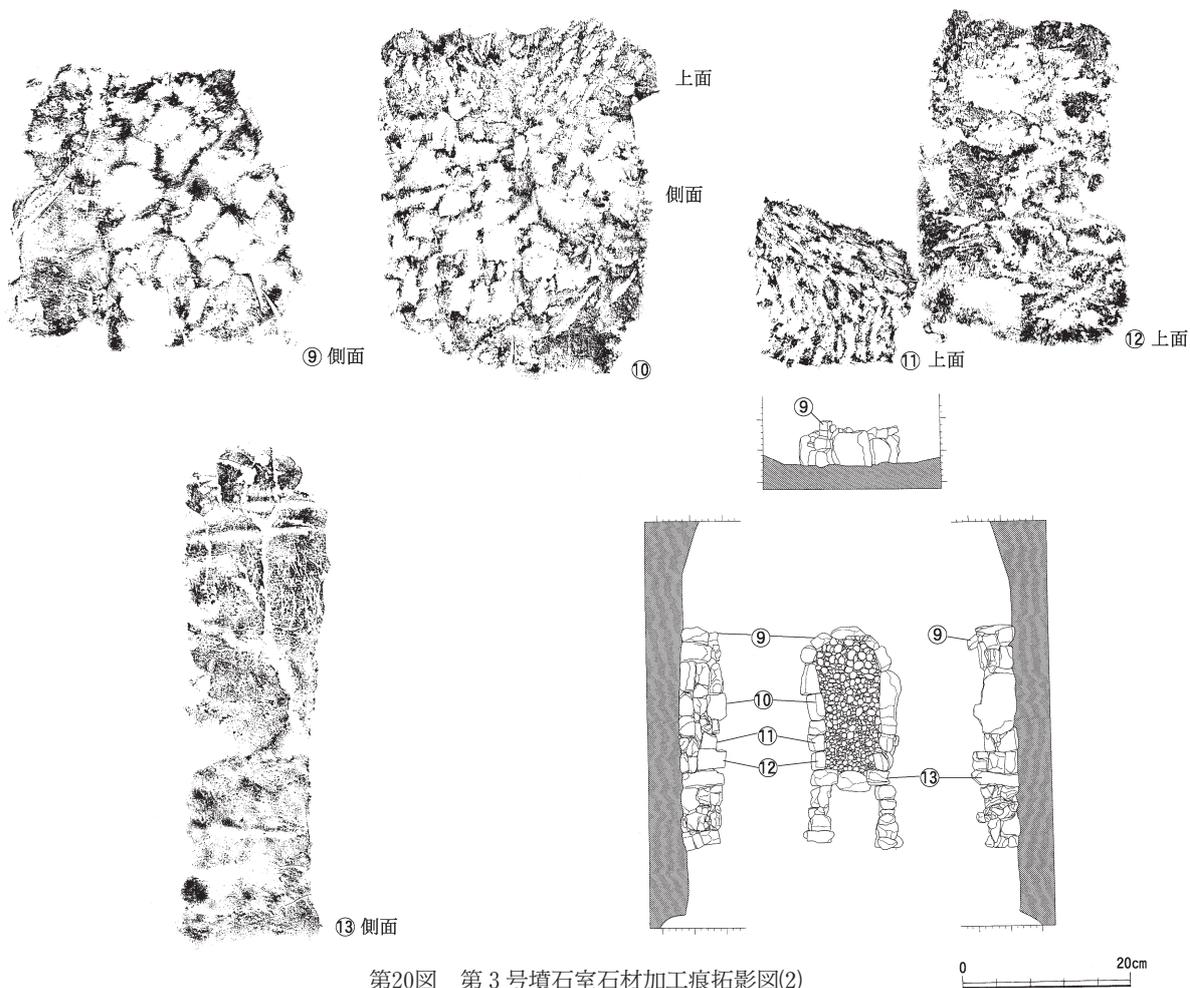
の一個は、大型の一枚岩となっており、その上面レベルと3段目の石組の上面レベルがほぼ揃うことから、この段上あるいはもう一段小型の石材を積み上げた後に、天井石の高架を行っていたと推測される。天井石は、調査時には完全に失われており、その構造・石材は不明である。

石室の規模は、石室全長は3.32m、玄室長2.09m、羨道長0.96mで、面積は、玄室1.82m²、羨道0.73m²、合計1.93m²を測る。

玄室の床面は、壁体構築後、河原石を敷き詰めることで舗石面としている。奥壁側にはやや大型の扁平な河原礫を、手前側には小型の扁平な河原礫を敷設している傾向がうかがえる。玄室と羨道の境には、梱石として大型の凝灰岩の加工石材が1個検出されている。羨道部に舗石は確認されない。

尚、本古墳石室内の舗石はすべて持ち帰り、個々の礫の長軸・中軸・扁平率・粒径・重量・石室を計測分類し、その結果を第IV章第1節において分析している。

石室は、旧地表面を70cm程掘込んだ掘方の中に構築されている。掘込みは、残存する第3段目の石材上面のレベルより深くなり、半地下式の石室構築形態を採用している。掘方の平面形態は複雑で、幅0.9m、深さ0.8m程の溝を周溝に繋がるように平面「U」字形に掘り、中央の石室設置箇所に向けて播鉢状に掘込み、さらに、周囲の溝から中央



第20図 第3号墳石室石材加工痕拓影図(2)

に向かって、幅0.8m、深さ0.5m程の溝7本を掘り下げている。これらの溝の覆土中には、石室構築時における石材の現地加工の結果生じたと推定される細かい凝灰岩粒が混じっており、何らかの意図をもって、石室構築時に掘られた溝であることが推測される。播鉢状の底面は、長さ4.8m、幅2.2m程の平らな面となっており、ここに石室を構築している。

石材加工痕

石室内面には、幅6cm程の刃先の直線的な「粗作り」段階のチョウナ状工具による痕跡が部分的に認められる。そして、この痕跡を消すように、「仕上げ」として全体的に幅7cm程の刃先の丸い浅い匙面が観察される。この「仕上げ」段階の加工痕跡は、いくつかの石材間で連続して観察されることから、石室が組み上がったからの作業であることが想定される。

第20図13は、東側玄門柱の外表面である。全体的に、幅7cm程の刃先の丸い浅い匙面が観察される。上部に線刻状の痕跡が認められるが、覆土中に狐の巣穴が確認されており、丁度この部分にぶつかっていることを確認しており、巣穴を掘り進めようとした狐の爪痕と判断される。

遺物出土状態

玄室内には明確な攪乱の痕跡は確認されなかったが、遺物の出土は認められなかった。石室前面のピット掘込みの淵に、転がり落ちたような状態で2つに割れた状態で、土師器甕が1個体検出されている。また、羨道部の入口部床面から、泥岩製の砥石が1個出土している。

出土遺物

[土器] (第21図1・図版14) 1は、土師器の甕。口縁はやや外反し、頸部は緩やかな「く」字状を呈する。胴部上半に最大径をもち膨らみ、底面も丸みを帯び、成形は全体に比較的丁寧に行われている。調整は、口縁から頸部にかけてはヨコナデ、胴部はヘラケズリ後一部ナデが行われている。推定口径15.4cm、器高29.9cm、底径8.5cmを測る。

[砥石] (第21図2・図版14) 2は、泥岩製の砥石である。両端を欠き、現存長6.2cm、最大幅2.0cm、厚み1.0cm、重量22.2gを測る。

時期

本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。石室前面の掘込みより出土した土師器甕より判断するならば、概ね7世紀半ばに比定される。

第11号墳 (第22図～25図・図版5・13)

位置

調査区北東隅に位置し、西側に第12号墳が位置している。

規模

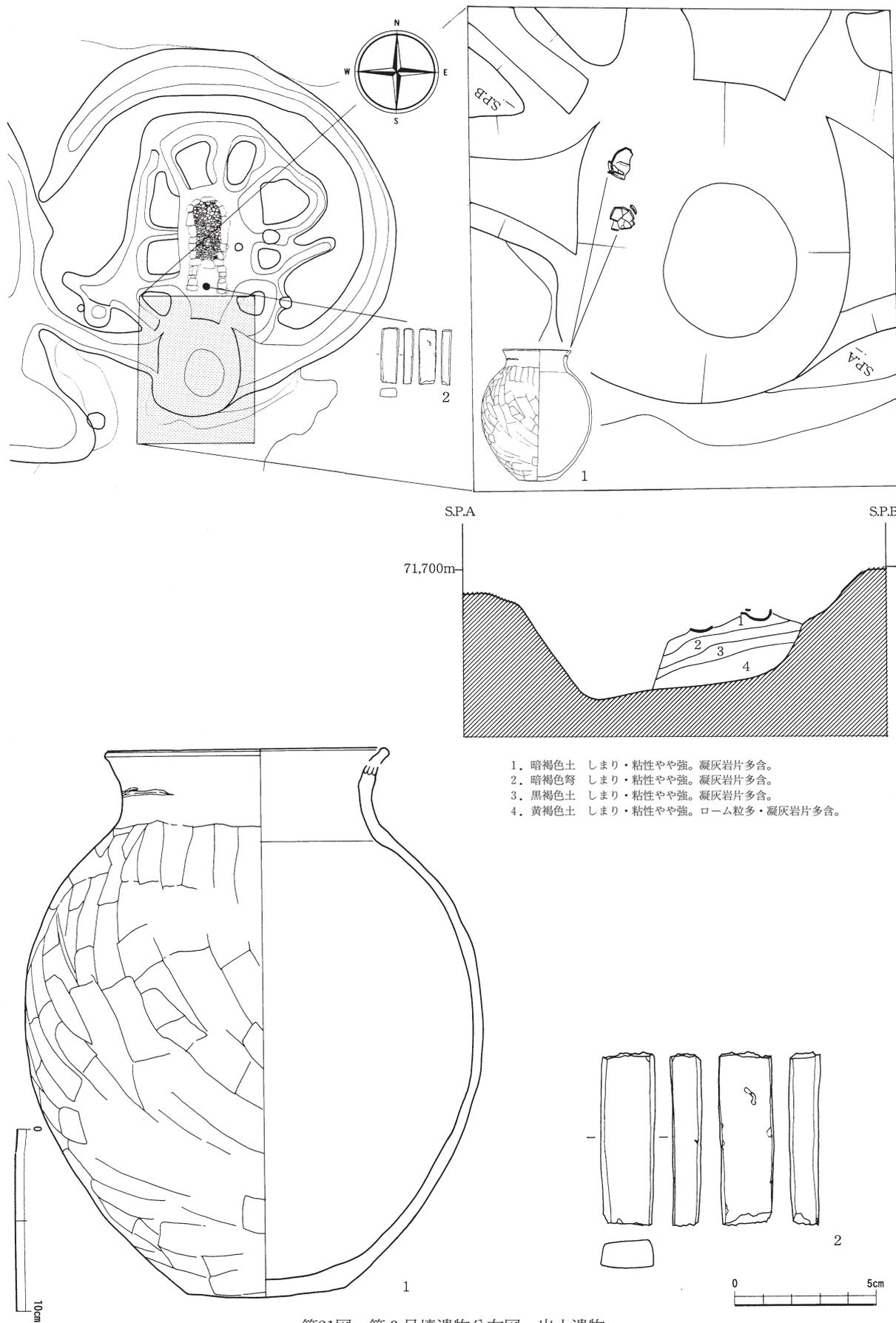
本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。

周溝は西半分が検出されており、東側は調査区外となり、全周するかは不明である。周溝の幅は、2.1m～1.3m、深さ1.0～0.8mを測り、石室南側の幅が広がっている。古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で11.1m、周溝外側で15.6mを測る。

石室

石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。玄室の平面形は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、石室内に扁平な小口面がくるように河原礫を配して構築されている。石材は、最大で根石部分から4段の石組を検出し、舗石面からの高さ32cmを測

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

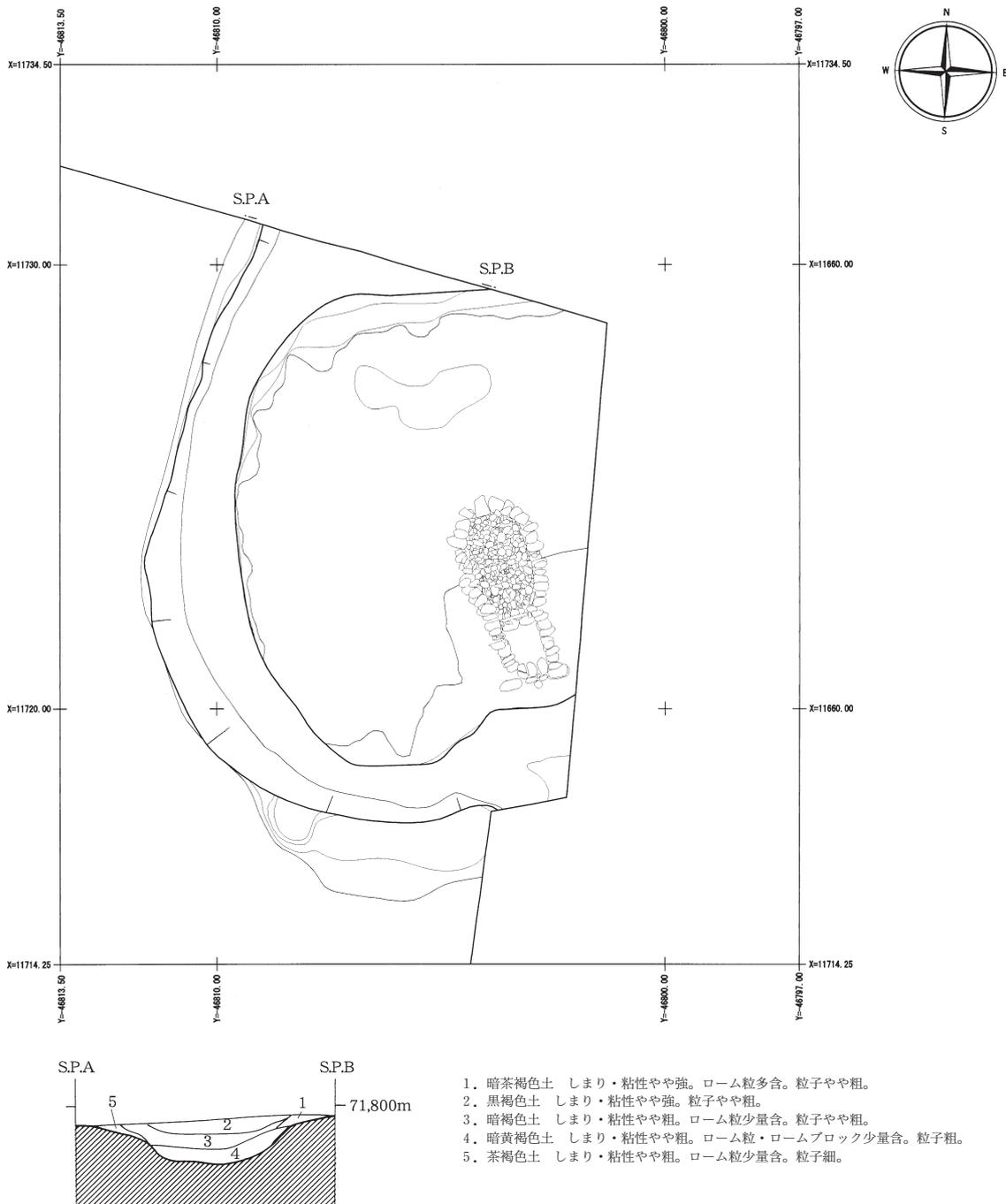


第21図 第3号墳遺物分布図・出土遺物

る側壁を検出している。

推定される石室の規模は、石室全長は4.05m、玄室長2.26m、羨道長1.58mで、面積は、玄室2.38㎡、羨道0.95㎡、合計3.33㎡を測る。

玄室の床面は、壁体構築の後河原石を敷き詰めることで舗石面としているが、羨道部には確認されない。玄室と羨道の境には、境界部に設置された緑泥片岩の板石を地山に掘込んで設置することによって分かたれている。また、羨道部の入口部付近には、梱石としてやや大型の河原礫が3個検出されている。



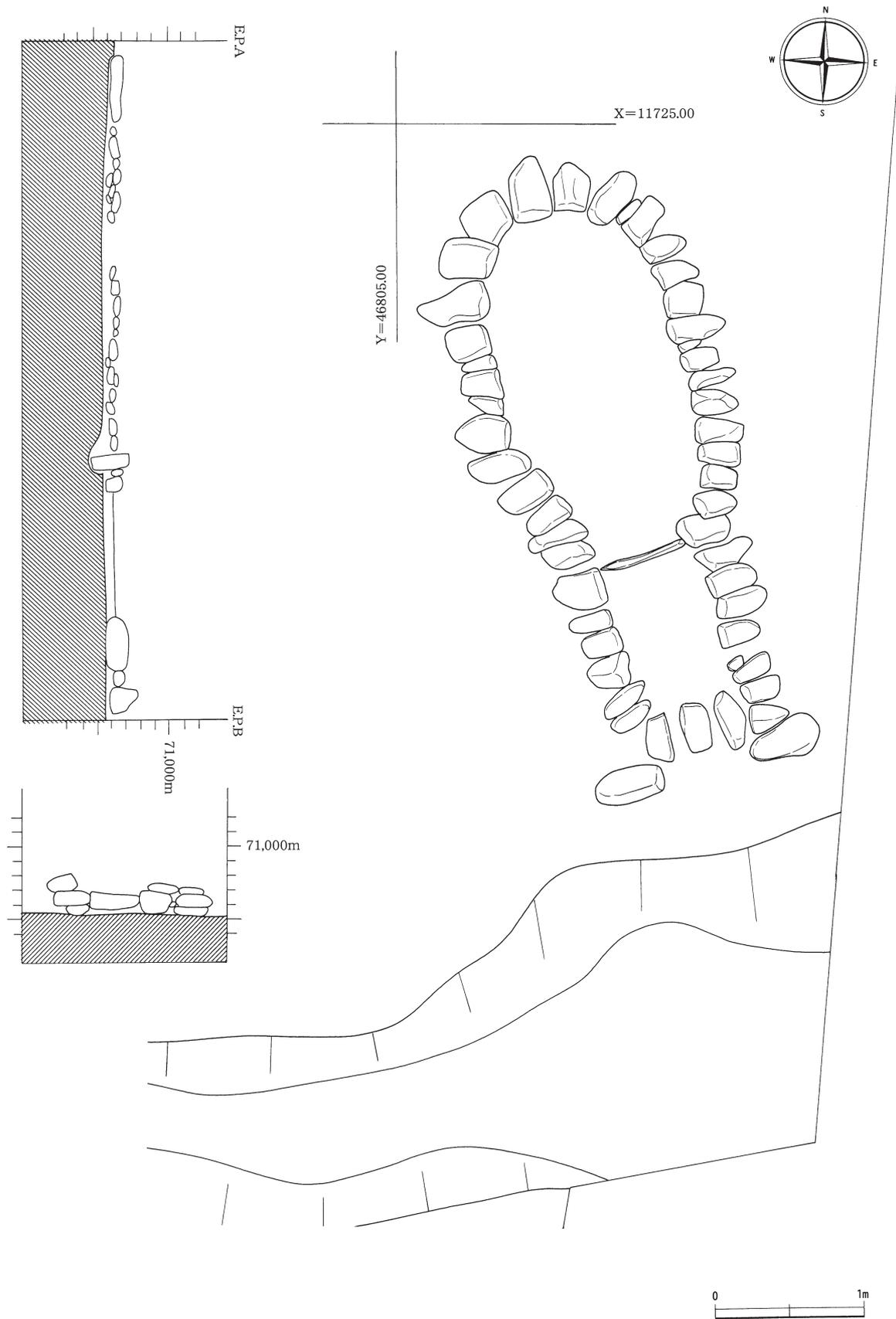
1. 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
3. 暗褐色土 しまり・粘性やや粗。ローム粒少量含。粒子やや粗。
4. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや粗。ローム粒・ロームブロック少量含。粒子粗。
5. 茶褐色土 しまり・粘性やや粗。ローム粒少量含。粒子細。

第22図 第11号墳平面図

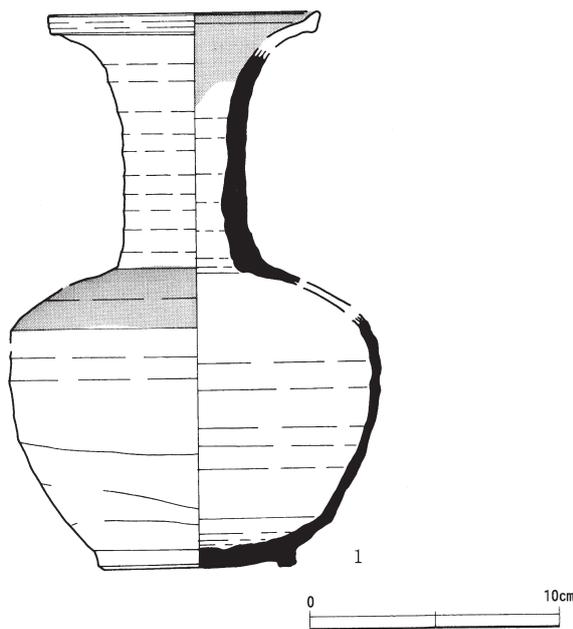
第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



第23図 第11号墳石室平面・内側立面図



第24図 第11号墳石室基底石平面・断面図



第25図 第11号墳出土遺物

石室は、旧地表面を僅かに掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方の平面形態は、非常に浅いため不明瞭で平面形を確認するに至らなかったが、奥壁部で5cm程の掘込みを確認している。

遺物出土状態 石室内は、明確な攪乱の痕跡は認められなかったものの、遺物の出土は確認されなかった。

唯一確認された遺物は、石室前面の周溝覆土中層の黒色土層より、長頸瓶1個体分が破片となって出土している。原位置は、墳丘裾部あるいは羨道入口部に散布あるいは設置されたものが、周溝に落ち込んだものと推測される。

出土遺物 [土器] (第25図1・図版13) 1は、須恵器の長頸瓶。口縁部が外反し、上端が立ち上がる。肩が張り、わずかに陵をもつ。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。調整は、ロクロ成形後、胴部下半に回転ヘラケズリが行われている。自然釉が部分的にかかる。推定口径10.7cm、器高22.3cm、底径7.8cmを測る。湖西産と推定される。

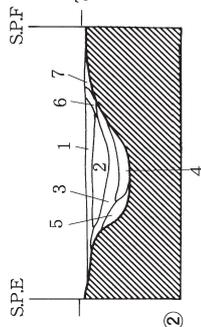
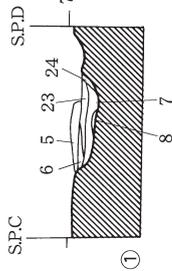
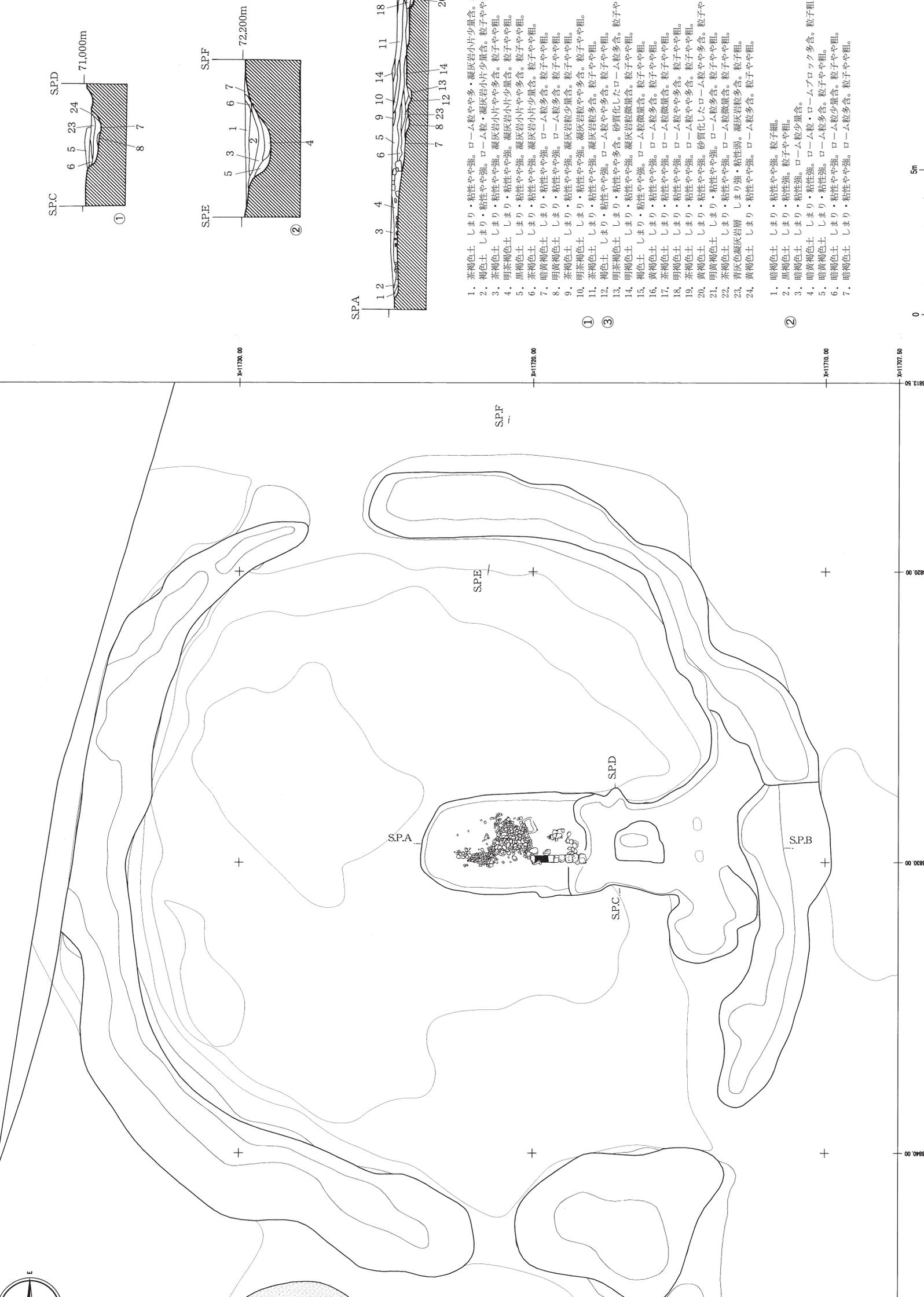
時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。周溝より出土した長頸瓶より判断するなら、7世紀後葉に比定される。

第12号墳 (第26図～35図・図版6～8・13～18)

位置 調査区北端に位置し、西側に第13号墳、東側に第11号墳が位置している。

規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。周溝は、東側で1箇所・西側で2箇所に、掘残されて途切れる箇所が存在している。形状は不整形な円形で、幅は、5.5m～1.5m、深さ0.4～0.9mを測る。古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で21.5m、周溝外側で26.5mを測る。

石室 石室は、羨道部の西側壁の凝灰岩が僅かに残るのみで、玄室の石材は全て確認されな



1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒やや多。凝灰岩小片少量含。
2. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒・凝灰岩小片少量含。粒子やや粗。
3. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩小片や多含。粒子やや粗。
4. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩小片少量含。粒子やや粗。
5. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩小片や多含。粒子やや粗。
6. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
7. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
8. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
9. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。
10. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩粒や多含。粒子やや粗。
11. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒や多含。粒子やや粗。
12. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒や多含。粒子やや粗。
13. 明茶褐色土 しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒多含。粒子やや粗。
14. 褐色土 しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。
15. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
16. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
17. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
18. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒や多含。粒子やや粗。
19. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒や多含。粒子やや粗。
20. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒や多含。粒子やや粗。
21. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。
22. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。
23. 青灰色凝灰岩層 しまり強・粘性弱。凝灰岩粒多含。粒子粗。
24. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

1. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。粒子粗。
2. 黒褐色土 しまり・粘性強。粒子やや粗。
3. 暗黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒少量含。
4. 暗黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒・ロームブロック多含。粒子粗
5. 暗黄褐色土 しまり・粘性強。ローム粒多含。粒子やや粗。
6. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。
7. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。

かった。しかし、掘方底面に残された凝灰岩截石の石材設置痕により、大まかな石室の形態を推定することが可能である。玄門石柱は抜き取られているが、その石材設置痕跡から両袖に1個ずつ存在していたことが想定される。

石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。石室は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、凝灰岩の加工石材のみを用いて構築されている。玄室と羨道部は、玄門部に設置された立柱石によって分かたれている。石材設置痕から推定される面積は、玄室4.35㎡、羨道1.64㎡、合計5.99㎡を測る。

玄室の床面は、壁体構築の後河原石を敷き詰めることで舗石面としているが、北東部と南西部には攪乱により、舗石は確認されない。また、羨道部は、玄室部に比べやや大形の礫が20個程確認されたが、本来は舗石が一面に敷かれていた状態のものかは不明である。

石室は、旧地表面を掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方の平面形態は、不整長方形を呈し、長軸で6.0m、短軸で3.4mを測る。石室壁体と掘方の法面との間隔は、60cm程を測る。掘方の断面形態は逆台形を呈し、最も深い石室の東側で42cm程を測る。掘方の下層には、整地土と推測される凝灰岩粒の混じる黄褐色土が認められ、20cm程の整地土の上面に石室の基底石は設置されている。この石室基底石の設置箇所付近の土壌は硬化しており、設置箇所に対する締め固めが行われていた事が推測される。

遺物出土状態

石室内は、かなりの攪乱を受けており、原位置を保っていると判断された遺物は、極めて少ない。玄室内では、鉄鏃が破片ではあるが100点以上出土しているが、原位置を確認できるものは、玄室西側壁に沿って確認された、方頭鏃3 (25・26・29)、片刃箭鏃1 (14)、端刃鏃1 (9)、また、大刀片 (61)・円筒柄頭 (52) も出土している。東壁付近からは刀子1 (59) が出土している。

前庭部から周溝部に移行する付近からは、金銅製杏葉2 (65・66)、須恵器の横瓶1 (67)、長頸瓶1 (69)、甕1 (70)、土師器甕1 (68) が出土している。第30図に杏葉の出土した土層断面図を示したが、羨道部から緩やかに傾斜する前庭部の底面から、20cm程浮いた面から出土している。出土層位は、凝灰岩片を多量に含む層上に位置している。凝灰岩を含む層は、良好なしまりが確認され、攪乱ではなく羨道部を封鎖後埋め戻した事に由来する土層と推測される。付近より出土している、横瓶・長頸瓶・甕も同様に、底面より浮いた状態で出土している。石室封鎖後、直ちに行われたものであるか、追葬時に行われたものか判断しかねるが、墓前祭祀にかかる遺物であると判断される。

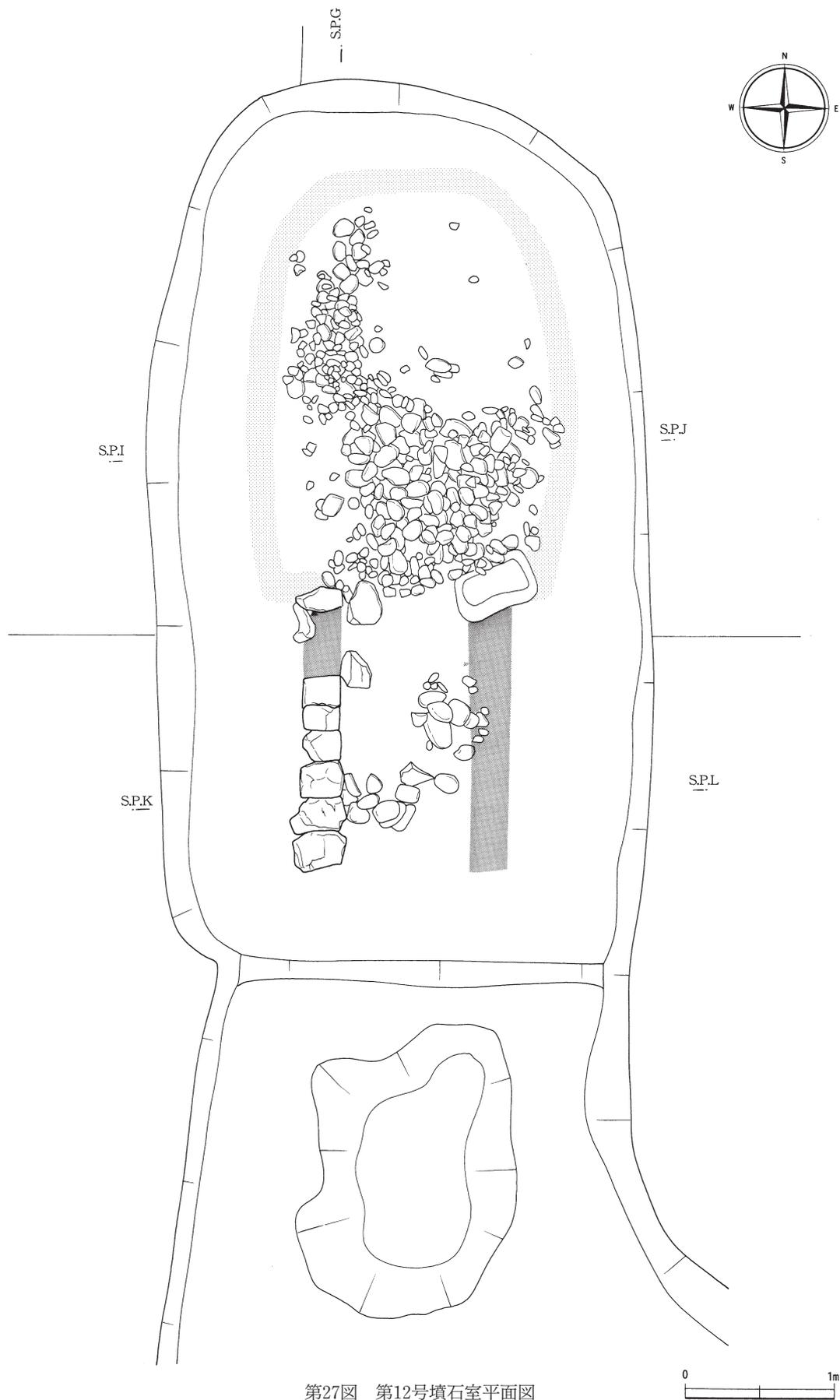
また、南側周溝部の土壌状の掘込みから、鉸具1 (50) と5mm程の小片ではあるが、毛彫りの施された金銅製杏葉が墳底付近より出土している。鉸具は、玄室内より同形のもものが1点 (52) 出土している。

出土遺物

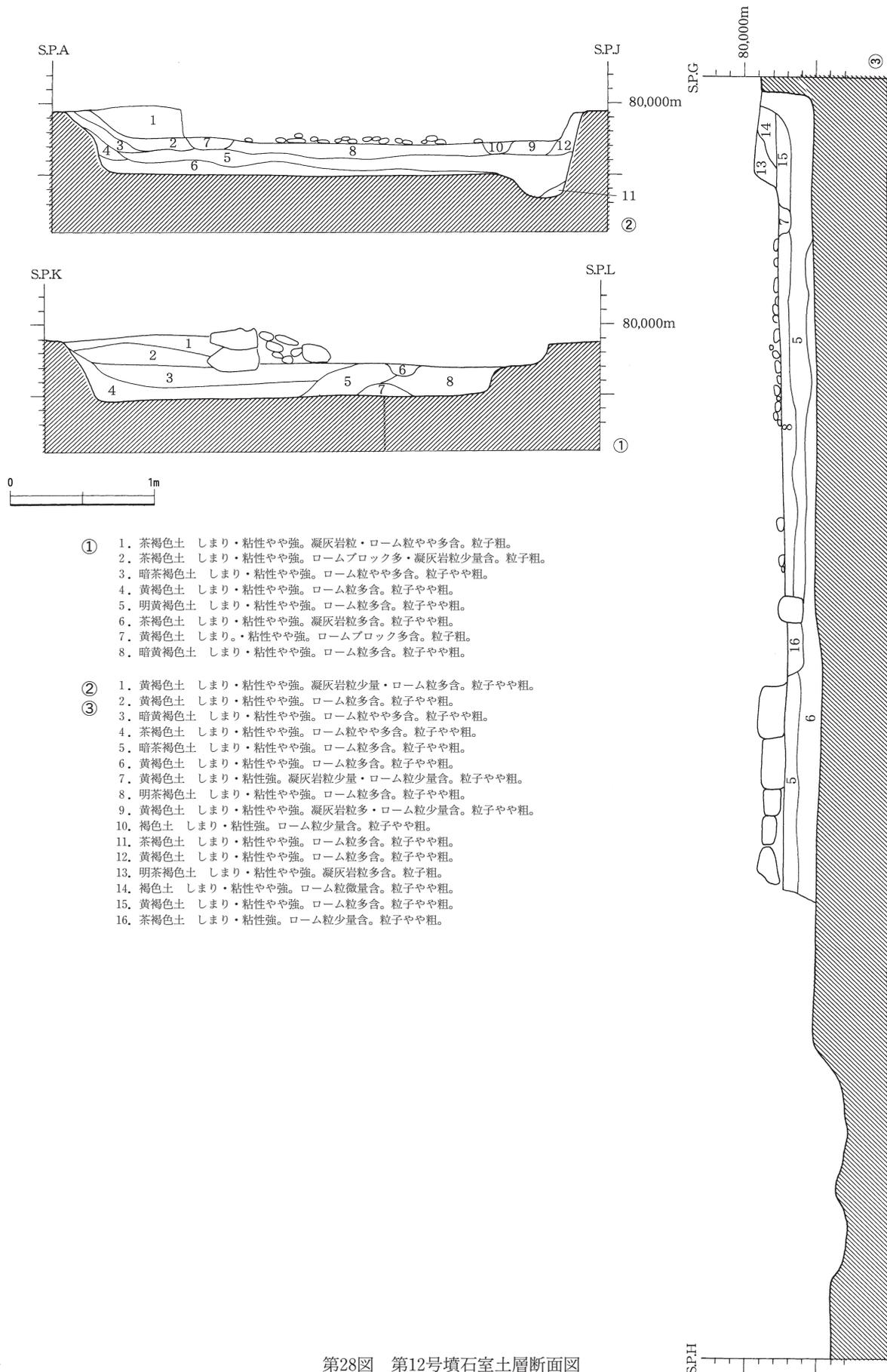
[鉄鏃] (第31・32図1～49・図版16・18) 鉄鏃は、破片も含めると100点以上出土しており、その中の49点を図示している。

1～12は、両刃の端刃鏃で、鏃身部の平面形態は鑿箭形を呈する。頸部への移行部には関をもたないため、その境は不明瞭である。10・11は、頸部は長く、篋被部と頸部は

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



第27図 第12号墳石室平面図

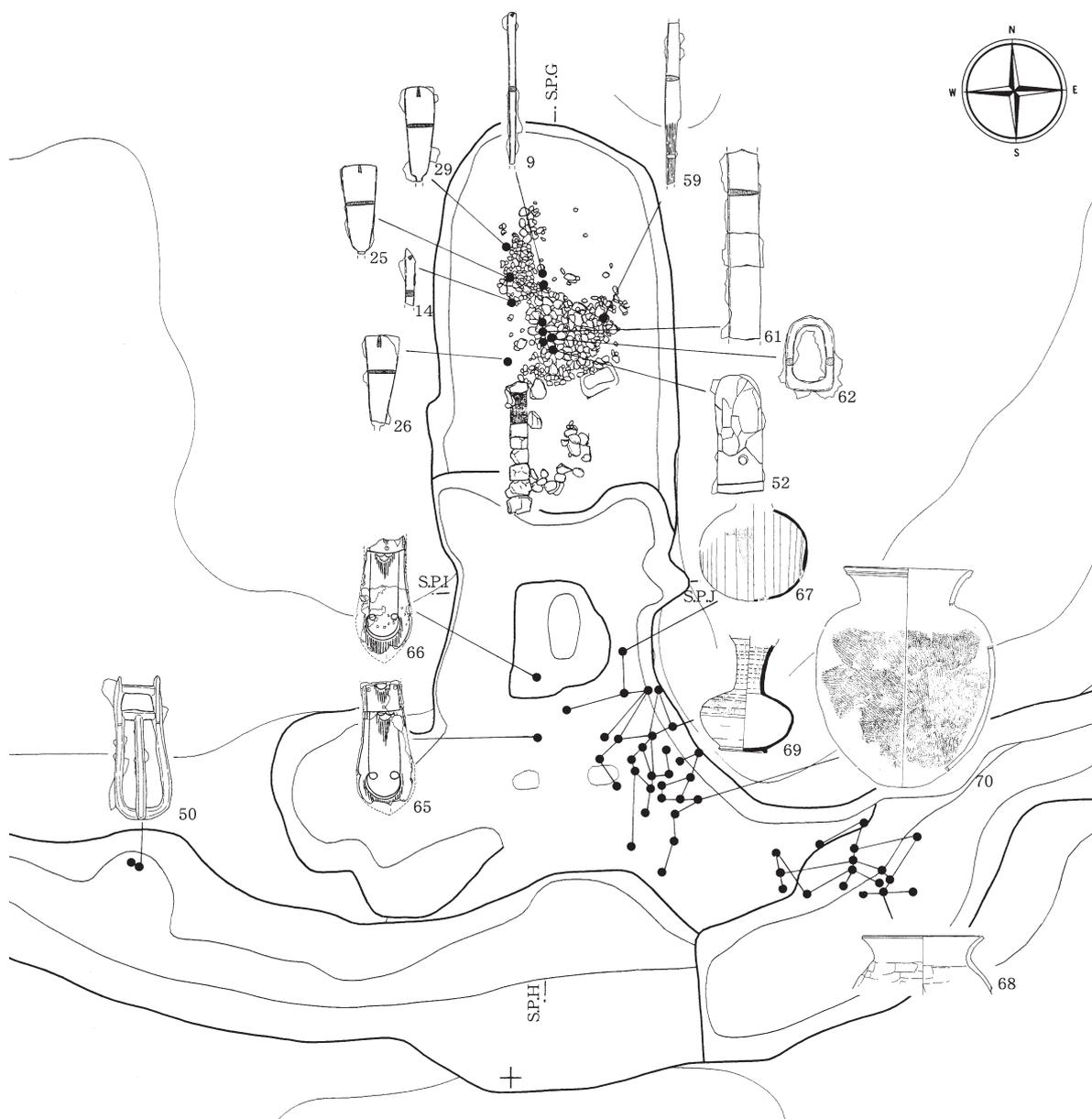


第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

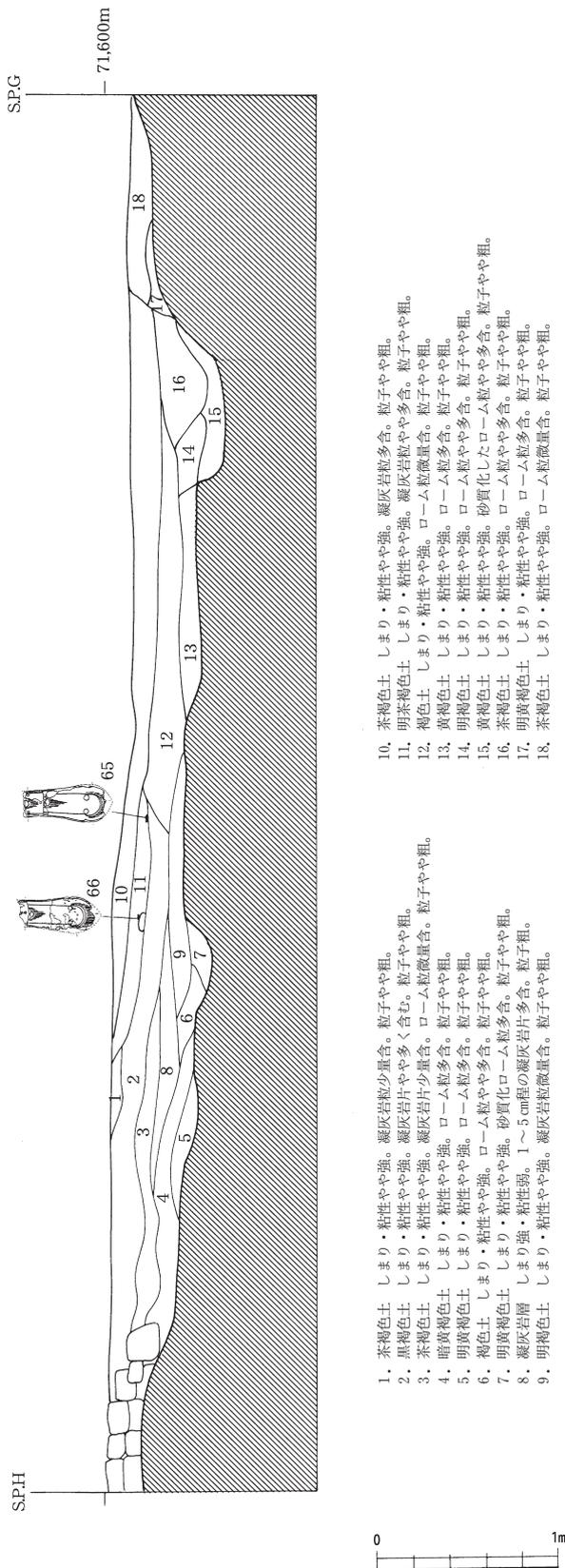
棘によって分かたれる。篋被部の断面形態は方形、茎部は円形を呈する。

13～19は、片刃の鎌。13～15・17・19は、鎌身部は端刃で、所謂カマス切先状を呈する。13～15は、頸部への移行は関をもたず、16～19は、頸部への移行部に片関を有する。頸部以下を欠損しており、茎部への関の有無は不明である。篋被部の断面形態は、方形を呈する。16・18は、端刃傾向にあり、切先部は刃部側が丸みを帯びた所謂ふくら切先状を呈する。

20～24は、鎌身部の平面形態が圭頭形を呈するものである。頸部への移行は関を有するが、頸部以下を欠損するため、茎部への移行部形態は不明である。篋被部の断面形態は方形を呈する。20は、最も遺存状態の良いもので、鎌身長4.8cm、鎌身部最大幅2.1cmを測る。鎌身断面は平と判断され、鎬は認められない。



第29図 第12号墳遺物分布図



- | | | | |
|----------|----------------------------------|-----------|--------------------------------|
| 1. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒少量含。粒子やや粗。 | 10. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒多含。粒子やや粗。 |
| 2. 黒褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩片やや多く含む。粒子やや粗。 | 11. 明茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 3. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩片少量含。ローム粒微量含。粒子やや粗。 | 12. 褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 |
| 4. 暗黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。 | 13. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 5. 明黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。 | 14. 明褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 6. 褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子やや粗。 | 15. 黄褐色土 | しまり・粘性やや強。砂質化したローム粒やや多含。粒子やや粗。 |
| 7. 明黄褐色土 | しまり・粘性やや強。砂質化ローム粒多含。粒子やや粗。 | 16. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。 |
| 8. 凝灰岩層 | しまり強・粘性弱。1~5cm程の凝灰岩片多含。粒子粗。 | 17. 明黄褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。 |
| 9. 明褐色土 | しまり・粘性やや強。凝灰岩粒微量含。粒子やや粗。 | 18. 茶褐色土 | しまり・粘性やや強。ローム粒微量含。粒子やや粗。 |

第30図 杏葉出土層位図

25~29は、鍬身部の平面形態が方頭形を呈するものである。頸部への移行は関を有するが、頸部以下を欠損するため、茎部への移行部形態は不明である。篋被部の断面形態は方形を呈する。25は、鍬身長6.1cm、鍬身部最大幅幅2.6cmを測る。鍬身部断面形態は平で、鑄は認められない。

30~33は、鍬身部の平面形態が柳葉形を呈するものである。腸袂逆刺を有し、断面形態は両丸となる。33は最も残りの良いもので、鍬身長2.8cm、最大幅1.0cmを測る。篋被部断面は方形を呈する。

34・35は、鍬身部切先を欠損するが、細根型の長頸鍬と推測される。35は、片関である。

36は、棒状鉄製品。折り曲げられており、両端を欠損する。

37~49は鍬身部を欠損する。41は茎部に木質が残存している。

[馬具] (第32~34・図版15・17) 50・51は鉄製鉸具。50は、長さ10.4cm、幅4.1cm、51は、長さ10.5cm、幅4.2cmを測る。両者とも、径0.7cm程の鉄棒を、頭部をやや膨らませてコの字形に曲げ、T字形の刺金具と帯につなぐための横棒を付けている。

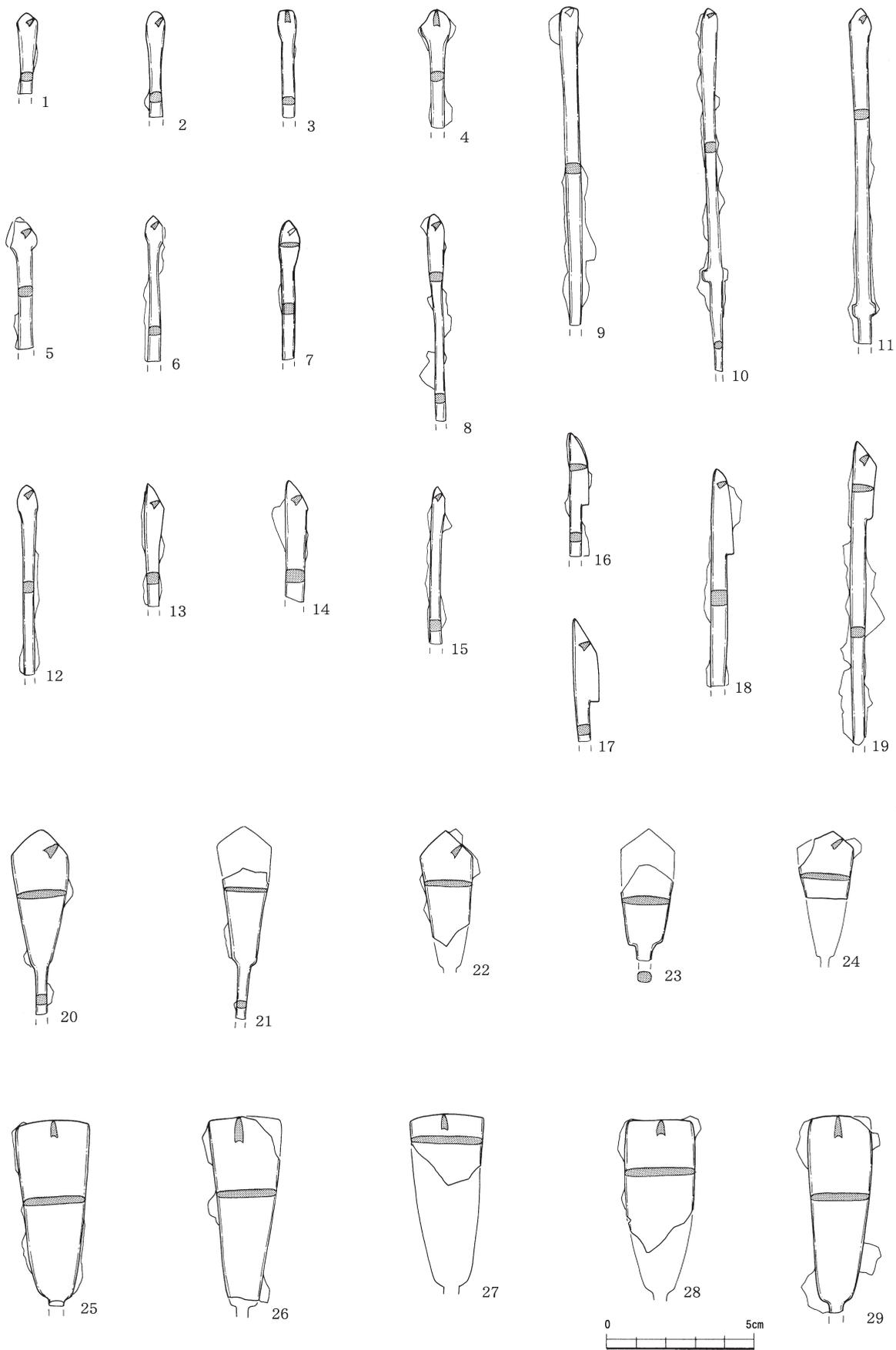
56・63は鉄製鉸具の輪金と推測される。63は、輪金は完存しているが、刺金を伴わない。長さ5.4cm、幅3.5cmを測る。断面は0.6cm程の円形を呈する。

64は、鉄製で貴金具と推定される。4.2cm×4.7cmの楕円形を呈し、断面0.9cmを測る。

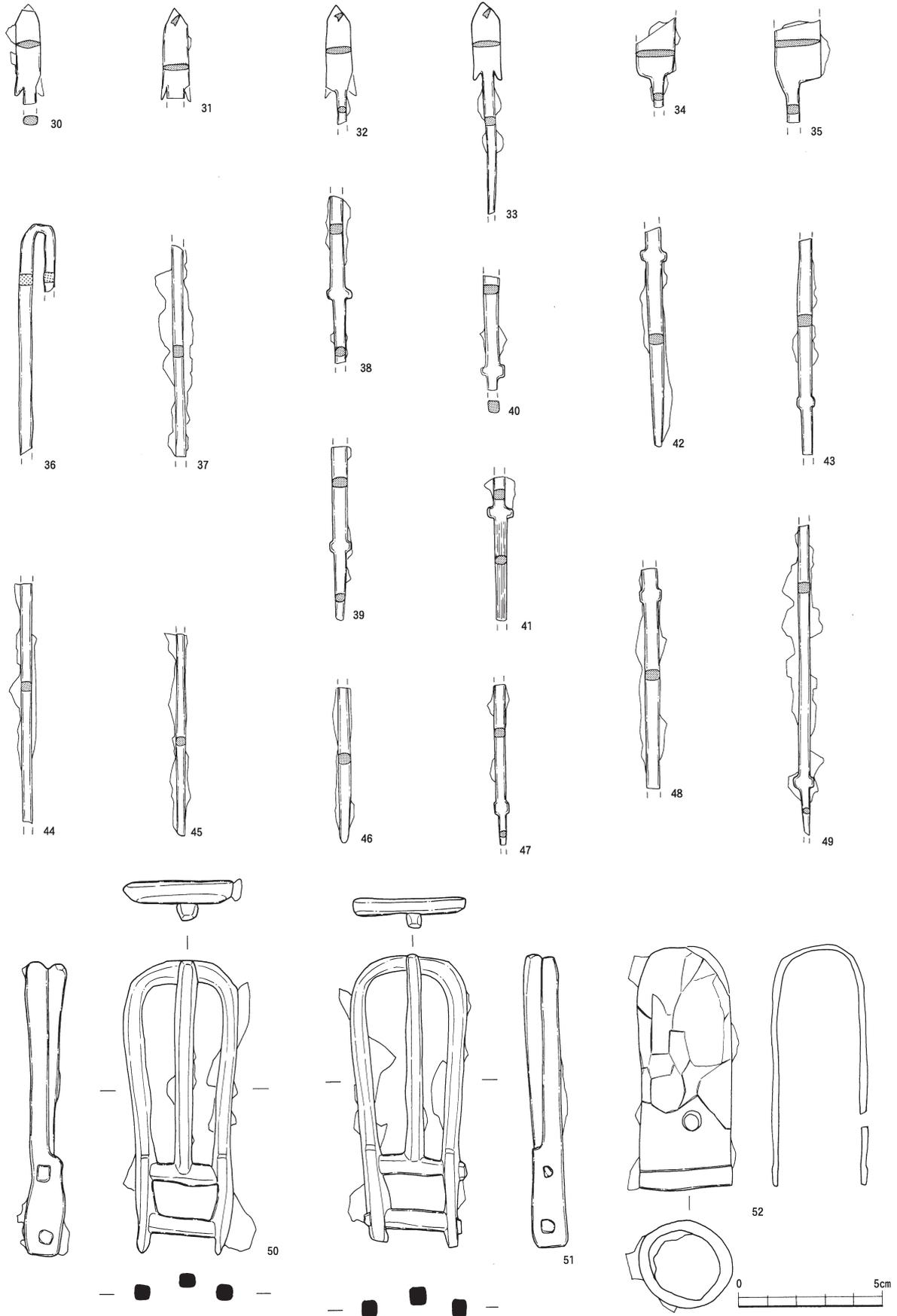
65・66は金銅製の杏葉。両者とも金銅製の一枚造りで、帯に装着する「基部」と、花卉状に広がる「垂下部」に分けられている。表面のみ鍍金が施され、形状・文様はほぼ同一のものである。また、鋌にも鍍金が施されている。

65は、比較的残存状況が良い。残存長8.1cm、基部長1.9cm、基部幅2.5cm、垂下部残存長6.2cm、垂下部幅3.6cmで、金銅板の厚さは1mmを測る。

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物



第31図 第12号墳出土遺物(1)

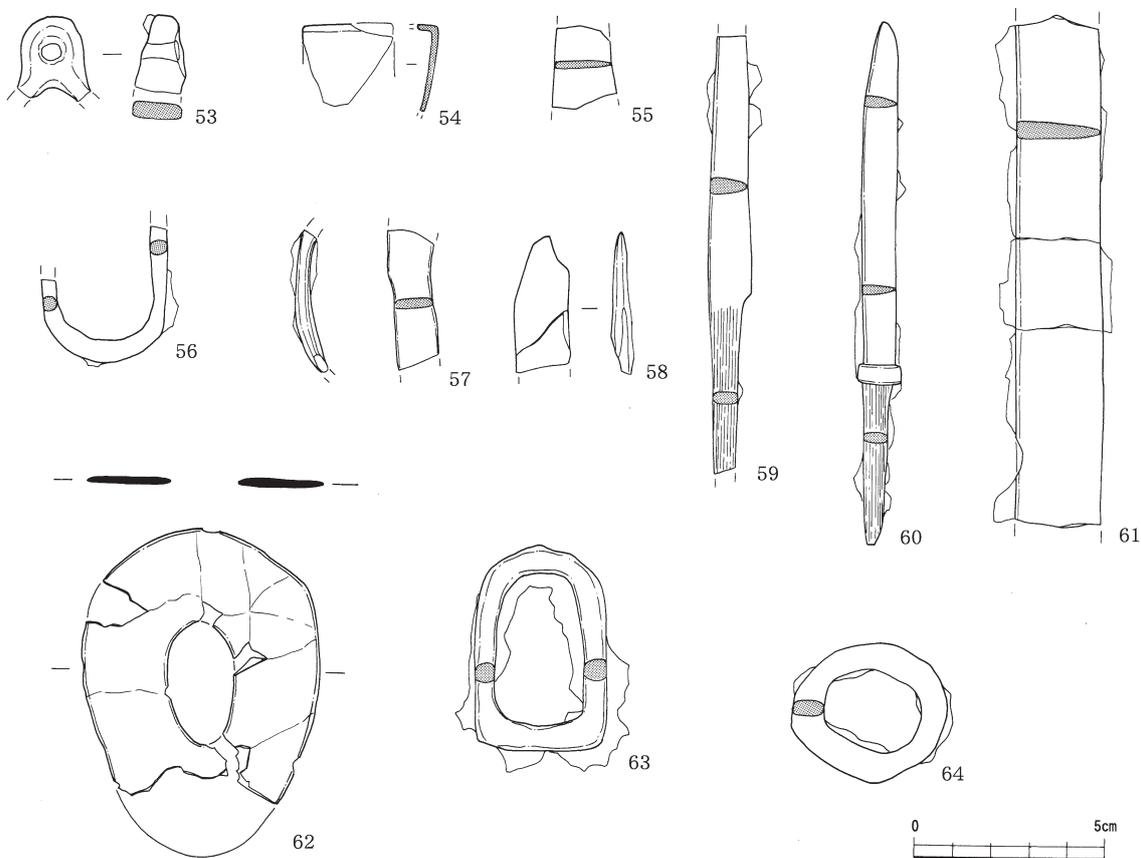


第32図 第12号墳出土遺物(2)

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

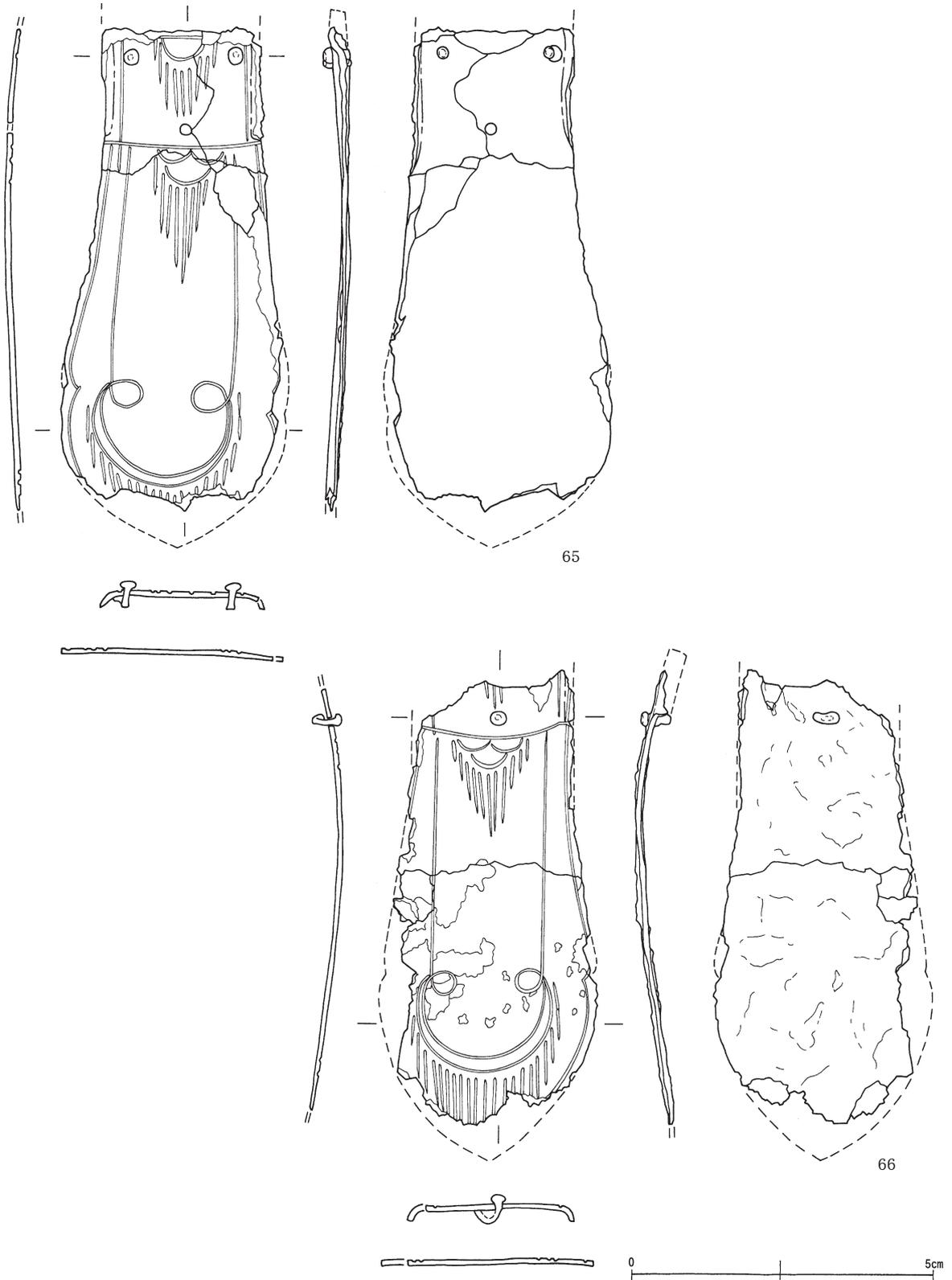
基部には鋌を挿入する穴が3箇所、逆三角形に配置されて穿たれており、うち2箇所には、鋌が残存している。鋌頭径0.25cm、鋌脚幅0.2cmを測り、鋌脚は0.4cm程残存し、欠損している。鋌穴は、径0.2cm程を測り、きれいな正円を呈している。基部の両側面は2mm程折り曲げられており、上端の両端は腐食のため明確ではないが、若干耳状に突出しているようである。毛彫り彫刻は、縁を線彫りし、下向きの半円弧文を一条彫刻した後、その下部に平行刻みを9条彫り込んでいる。垂下部の形状は、先端部を欠損しているものの、徐々に下方へ広がり、縁の線彫りが内側に入り込む付近で最大幅となり、瘤状の膨らみが存在していたと推測される。毛彫り彫刻は、縁にそって線彫りし、上部から下向きの2連半円弧文+1連半円弧文を1条線で彫刻した後、その下部に平行刻みを10~11条彫り込んでいる。半円弧文の両側からは2条の線が平行に垂下し、最大幅付近で円が描かれ、下部は2条の半円弧文で閉じられている。一筆書きのように彫刻されているが、垂下する蕨手文と「C字状文」が表現されているものと考えられる。そして、さらに下部には20条の平行刻みが彫り込まれている。

66は、残存長7.5cm、基部残存長0.8cm、基部幅2.5cm、垂下部残存長6.7cm、垂下部残存幅3.1cmで、金銅板の厚さは1mmを測る。基部の両側面は折り曲げられており、鋌穴は下部の1箇所のみ確認され上部が不明であるが、その配置は65同様逆三角形の配置をとるものと推測される。鋌脚は0.7cm程残存し、中程で折り曲げている。文様も65と同様の構成をとる。



第33図 第12号墳出土遺物(3)

〔鉄製刀装具〕（第33図・図版15・16）52は覆輪状を呈し、円頭柄頭と判断した。一箇所のみ径6mm程の懸通孔が貫通する。長さ8.7cm、幅3.4cm、厚み0.6cmを測り、断面は3.1cm×3.4cmのほぼ円形を呈する。53は、足金物の破片と推測される。吊手部のみ残存し、



第34図 第12号墳出土遺物(4)

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

環部は欠損しているが、単脚と推定される。54は、釦と推測される破片である。57は、倒卵形の鞘口金具あるいは責金具と想定される破片である。幅1.0cm、厚さ0.4cmを測る。62は鐔。無窓の平縁で、推定長9.0cm、幅6.2cmの倒卵形を呈する。厚み0.3cm程で、板状を呈している。

[刀子] (第33図・図版17) 59は、切先部を欠損する。頸部は断面長方形を呈し、木質が明瞭に残存している。残存長11.7cmを測る。60は、ほぼ完形。刀身部は切先に向かうに従ってその幅を減じ、切先部は、刃部側が丸みを帯びた所謂ふくら切先状を呈する。断面形状は楔形を呈し、刀身部分に釦が認められる。茎部は断面長方形を呈し、木質が明瞭に残存している。全長14.1cmを測る。

[大刀] (第33図・図版16) 61は大刀片。残存長13.5cmを測る。

[土器] (第35図・図版13・14) 67は、須恵器の横瓶で胴部のみ残存。楕円形の胴部を呈し、調整は、ロクロ成形後、回転ヘラケズリが行われている。胎土に砂粒・黒色粒を含み、一部自然釉がかかる。残存器高16.1cmを測る。器壁は薄く、湖西産と推定される。68は、土師器の甕。口縁部は外反し、口唇部は平坦に整えられ、断面角頭状を呈する。調整は、口縁部から頸部はヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが行われている。推定口径21.5cm、現存器高10.3cmを測る。69は、須恵器の長頸瓶。口唇部を欠く。頸部は口縁に向けて広がり、肩部に最大径をもつ。胴部の断面はやや楕円形を呈する。ロクロ成形後、胴部調整は回転ヘラケズリが行われている。胎土に砂粒を含み、一部自然釉がかかる。焼成は良好である。底径8.5cm、残存器高20.4cmを測る。猿投窯産と推定される。70は、須恵器の大甕。口縁部は四角く整えられ、下端に一条の沈線を巡らす。胴部上半に最大径をもつ。調整は、口縁ヨコナデ、胴部外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕が認められ、平行タタキが行われている。胎土に砂粒・白色粒・黒色粒を含み、焼成はやや悪い。口径30.0cm、現存器高48.3cmを測る。

時期 石室内からは、本古墳の時期の示標となる遺物の出土は認められない。前庭部より出土した須恵器長頸瓶より判断するなら、7世紀中葉～後葉となる。

第13号墳 (第36図～40図・図版6・15・16)

位置 調査区北端に位置し、東側に第12号墳、南西側に第14号墳が位置する。

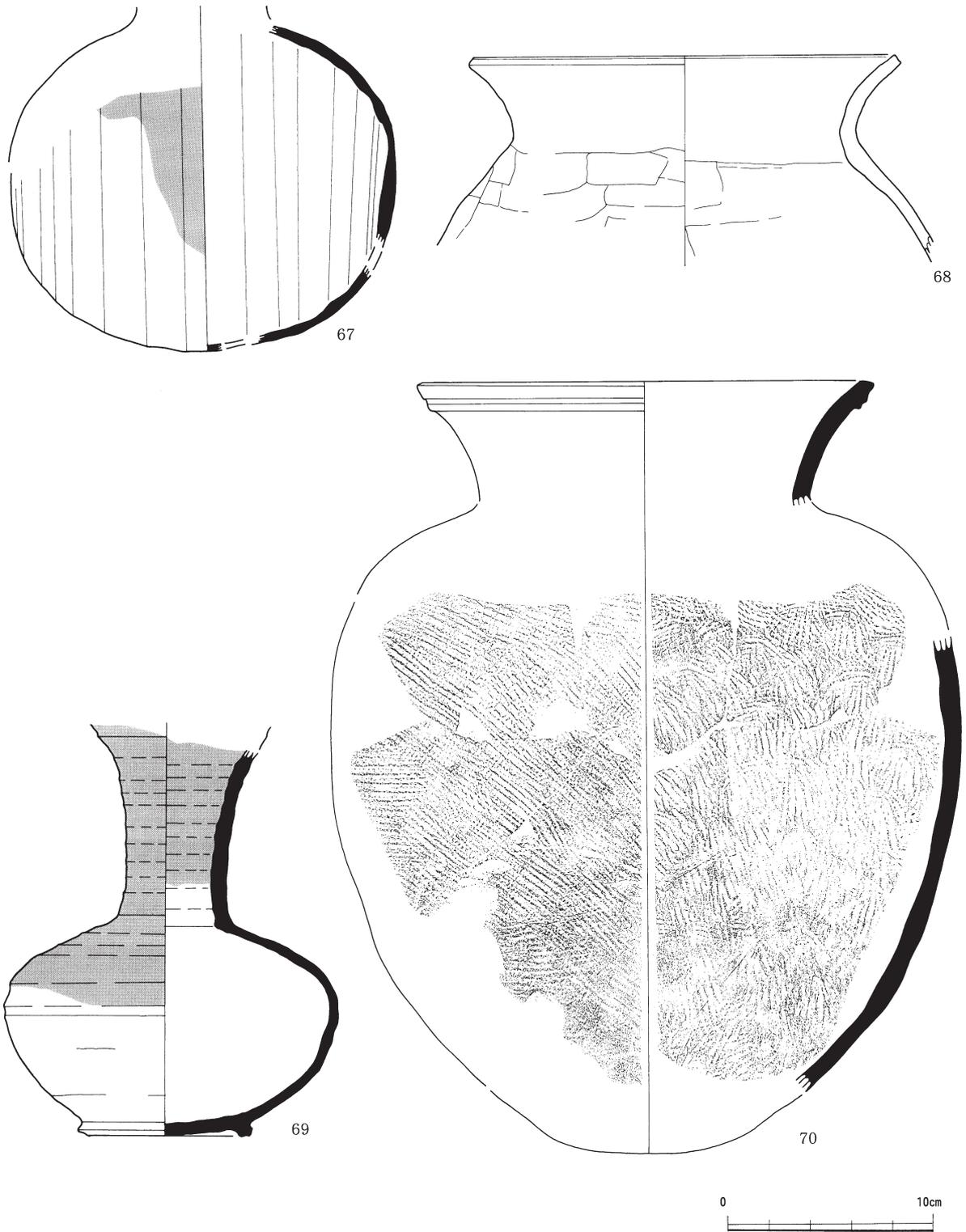
規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。

周溝は西側から北側にかけて確認され、東側は第12号墳の周溝が位置しており、重複を避けるように、掘込はその手前で止まっている。石室の南側の前庭部分には、長径3m程の楕円形の浅い掘込みが確認されている。周溝の幅は、4.6m～3.1m、深さ0.6m～0.2mを測り、形状は不定形である。

古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で12.9m、周溝外側で19.5mを測る。

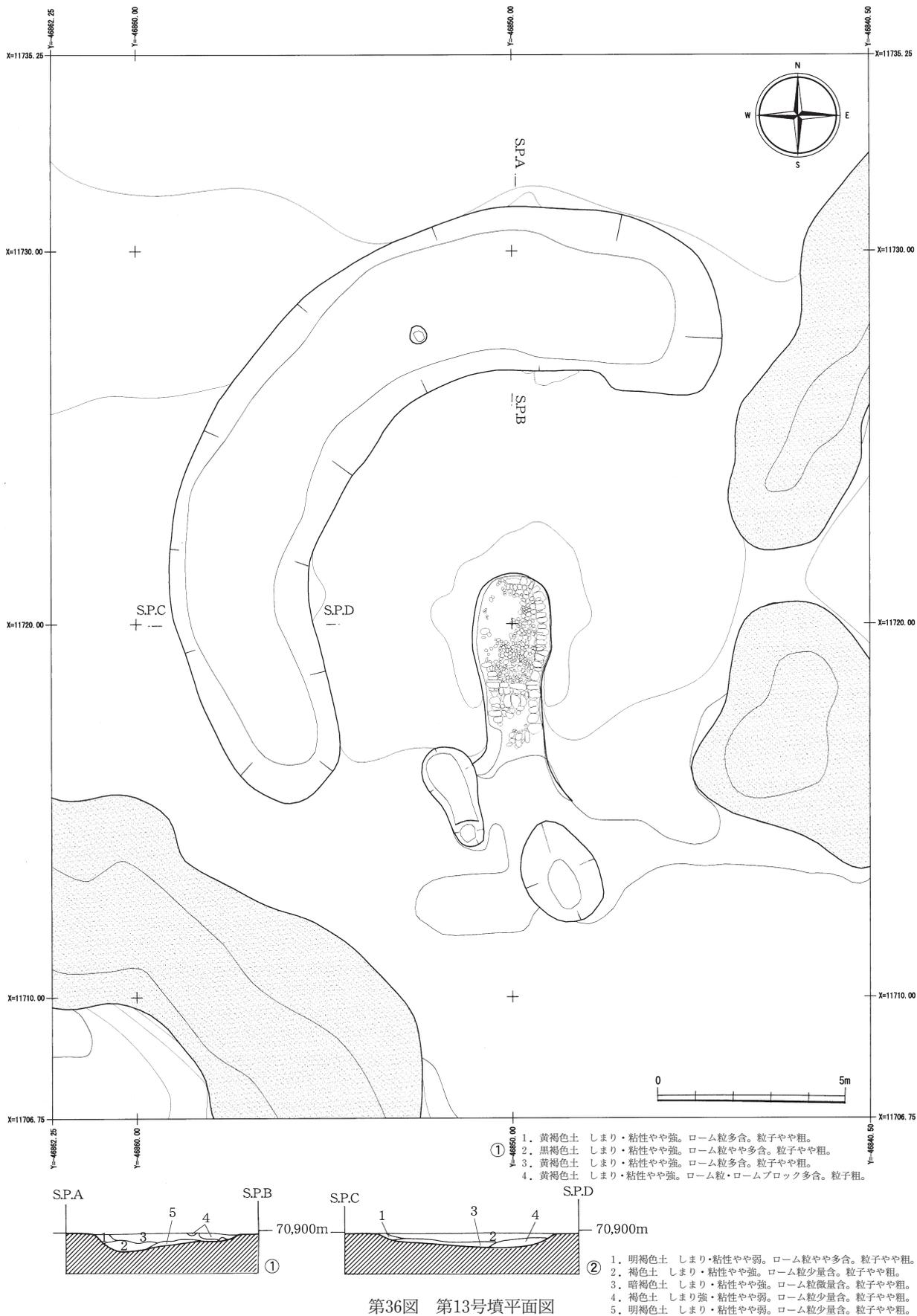
石室 石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。玄室の平面形は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、石室内に扁平な小口面がくるように河原礫を配して構築され

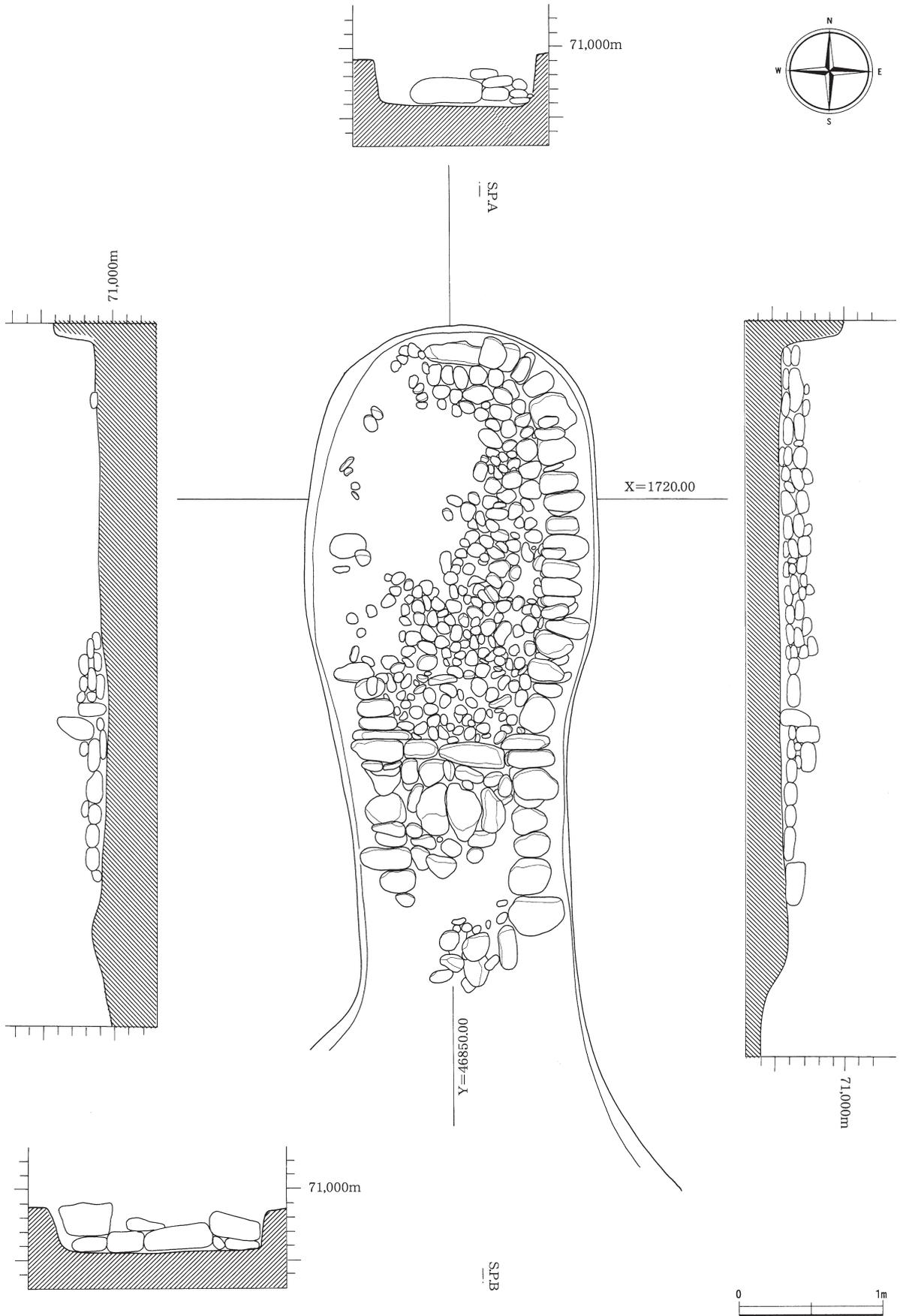
ている。ただし、奥壁のみ幅52cm程のやや大型の礫を、小口面でなく側面を向けて設置している。石材は、最大で根石部分から3段の石組を検出し、舗石面からの高さ24cmを測る側壁を検出している。玄室西側の側壁は、そのほとんどが攪乱により存在しない。



第35図 第12号墳出土遺物(5)

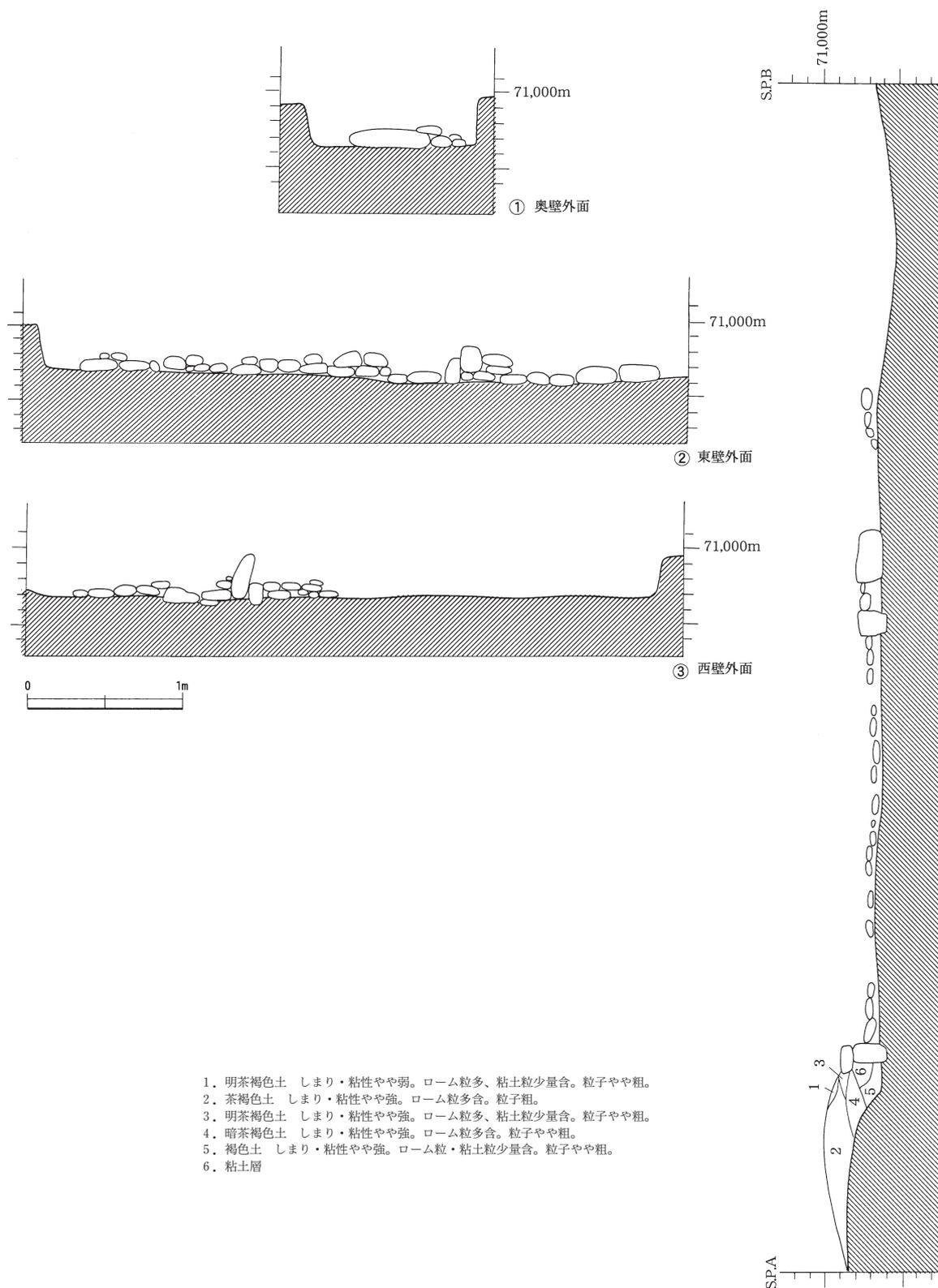
第2節 古墳時代の遺構と出土遺物





第37図 第13号墳石室平面・断面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

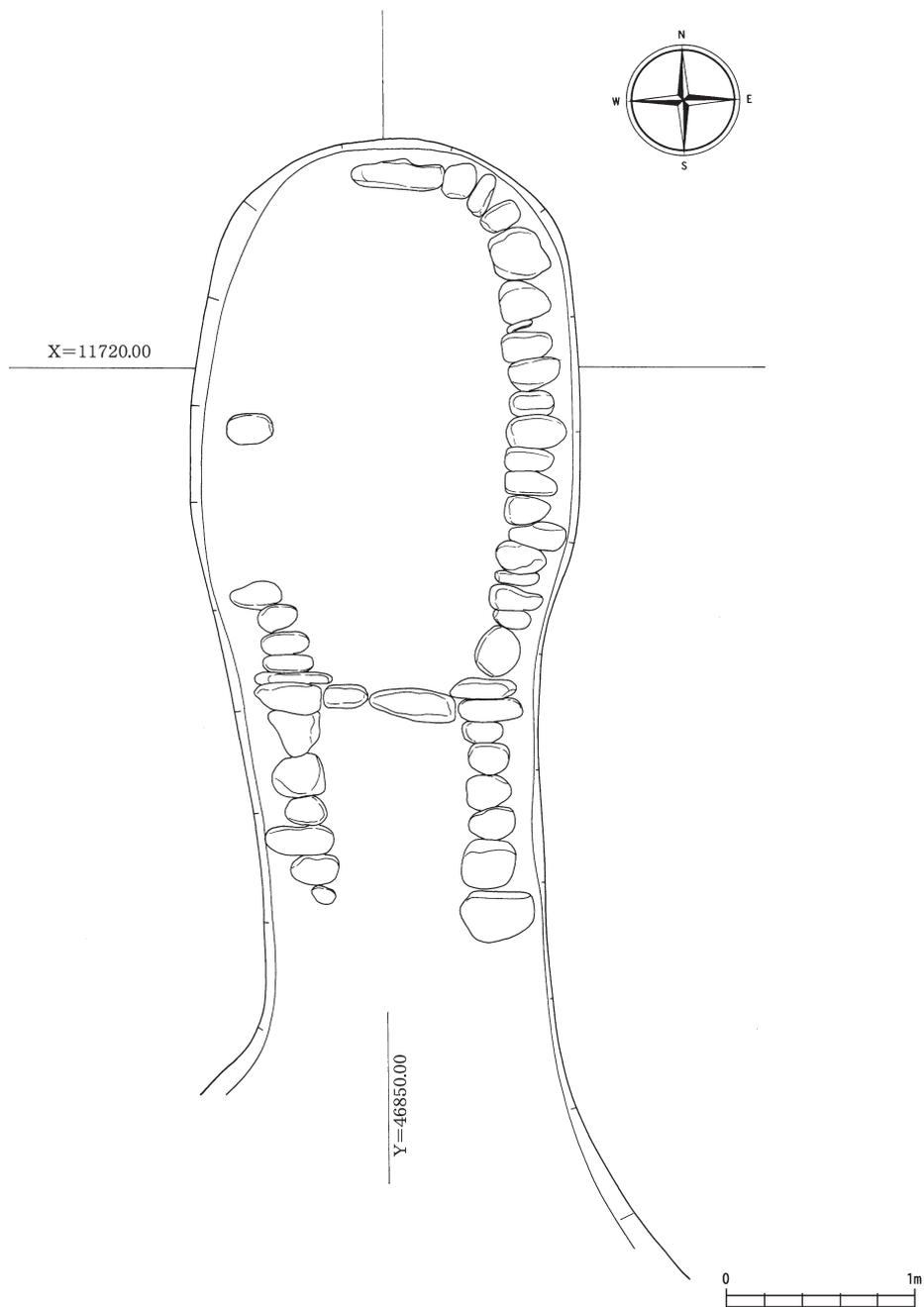


第38図 第13号墳石室断面図

推定される石室の規模は、石室全長は4.07m、玄室長2.61m、羨道長1.33mで、面積は、玄室で2.93㎡、羨道で0.95㎡、合計3.88㎡を測る。

玄室の床面は、壁体構築の後河原石を敷き詰めることで舗石面としているが、羨道部にはやや大型の凝灰岩截石を3個並べ、その両側を小型の河原礫で充填している。羨道部手前と、玄室北西隅は攪乱のため舗石が確認されない。玄室と羨道の境には、境界部に設置された大型の細長い河原礫を2個掘込んで設置することによって分かたれている。

石室は、緩やかに傾斜する斜面を掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方の平面形



第39図 第13号墳石室基底石平面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

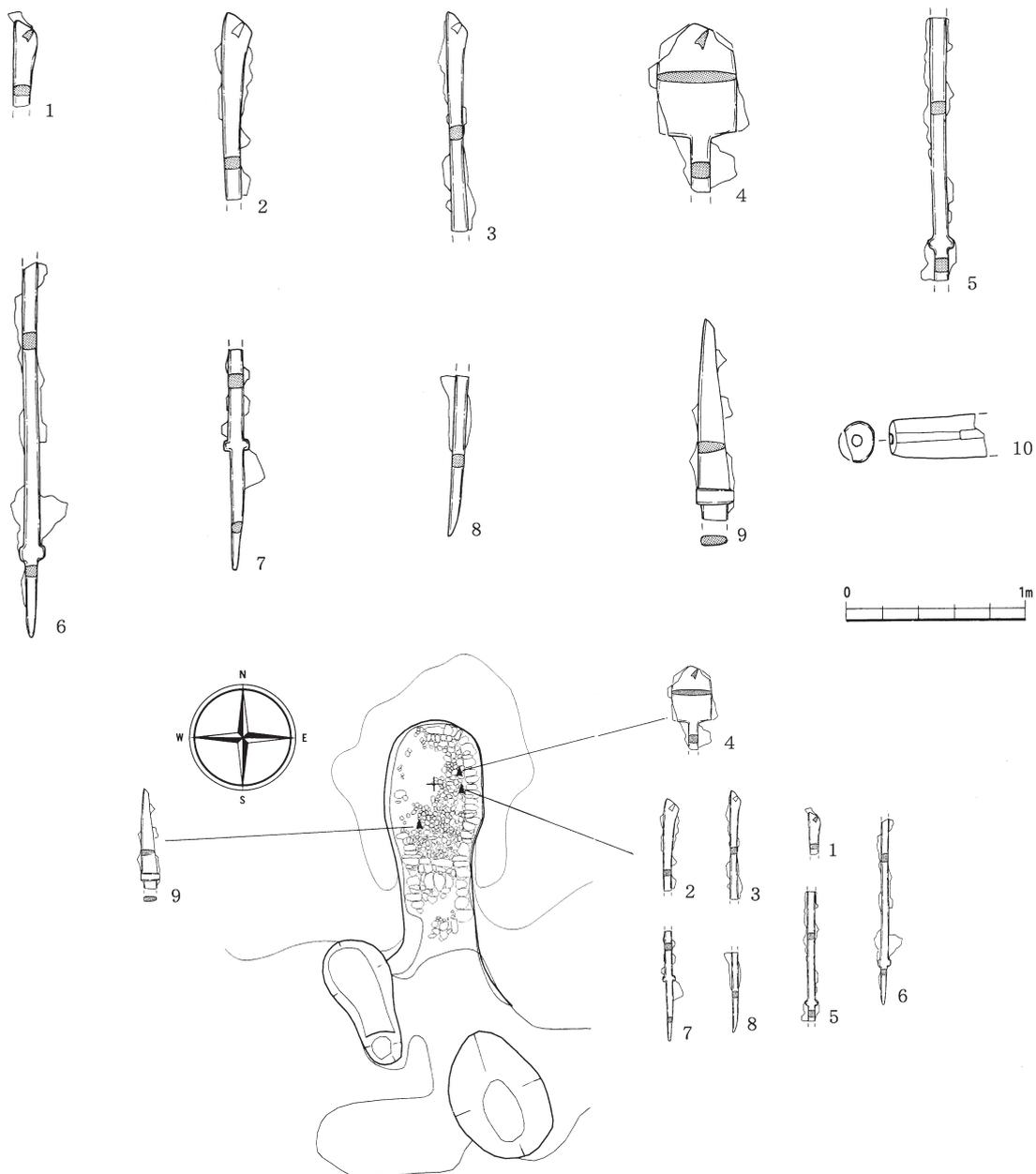
態は、石室と同様の胴張形を呈し、長軸で5.1m、短軸で2.1mを測る。石室壁体と掘方の法面との間隔は狭く、掘方は最少の範囲で行われている。掘方の断面形態は、南側に開放する塵取状を呈し、最も深い石室の北側で0.2m程を測る。

遺物出土状態

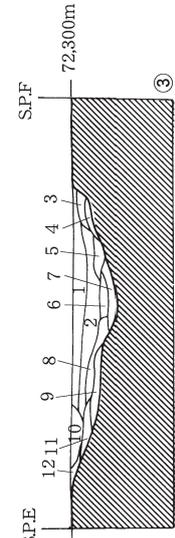
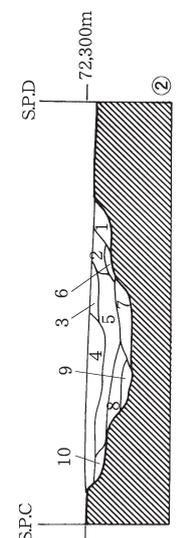
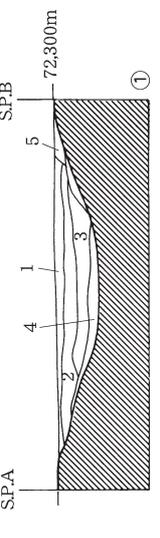
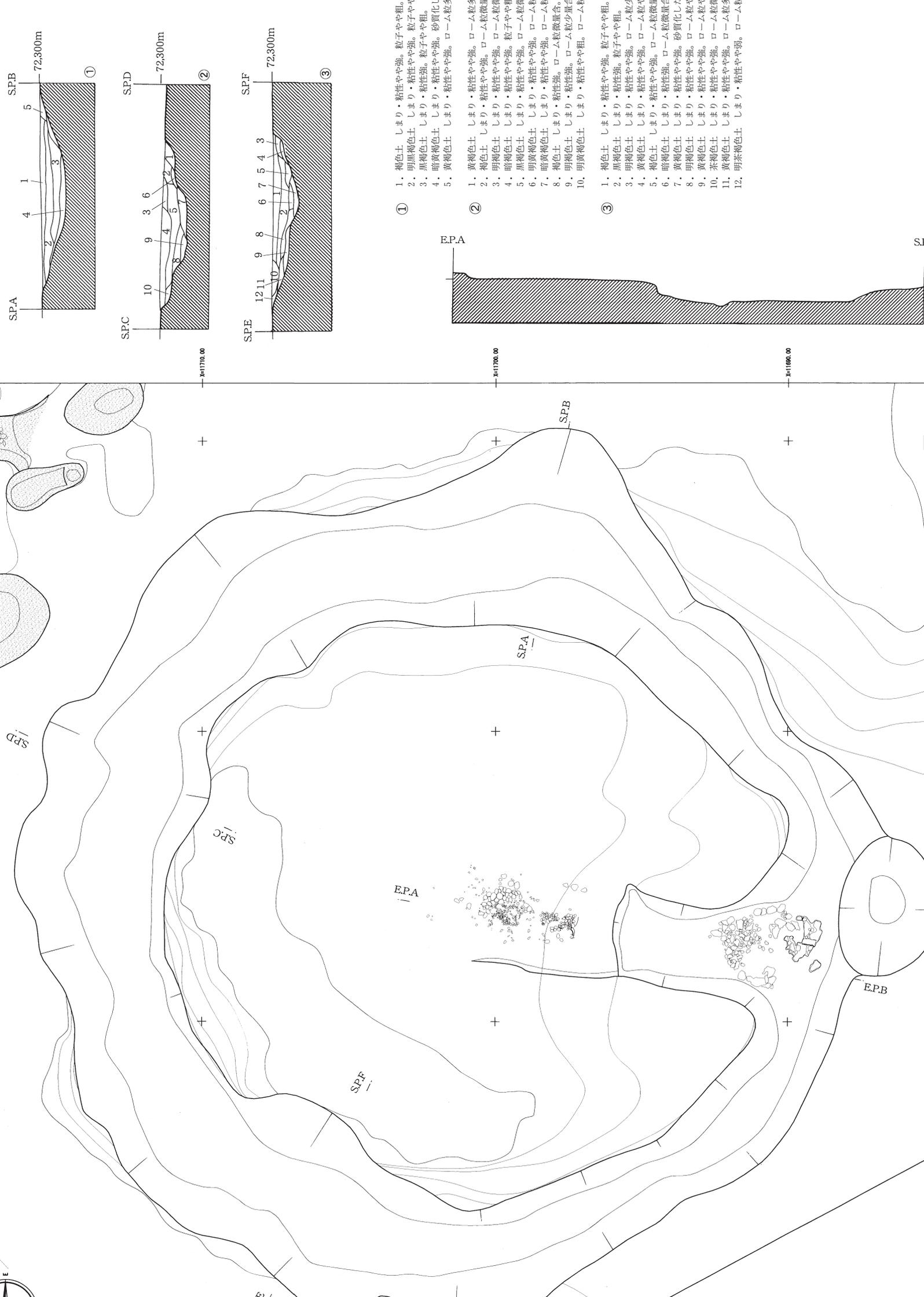
石室内は攪乱が一部認められ、検出された遺物は鉄鏃11点、刀子1点と少ない。石室北側3m程の地点で、管玉が1点出土している。細根式の鉄鏃は、錆で付着した状態で10点程纏って玄室の東側壁際から確認されている。広根式の鉄鏃は、その北側より1点出土している。刀子片は、玄室西側壁側より出土している。

出土遺物

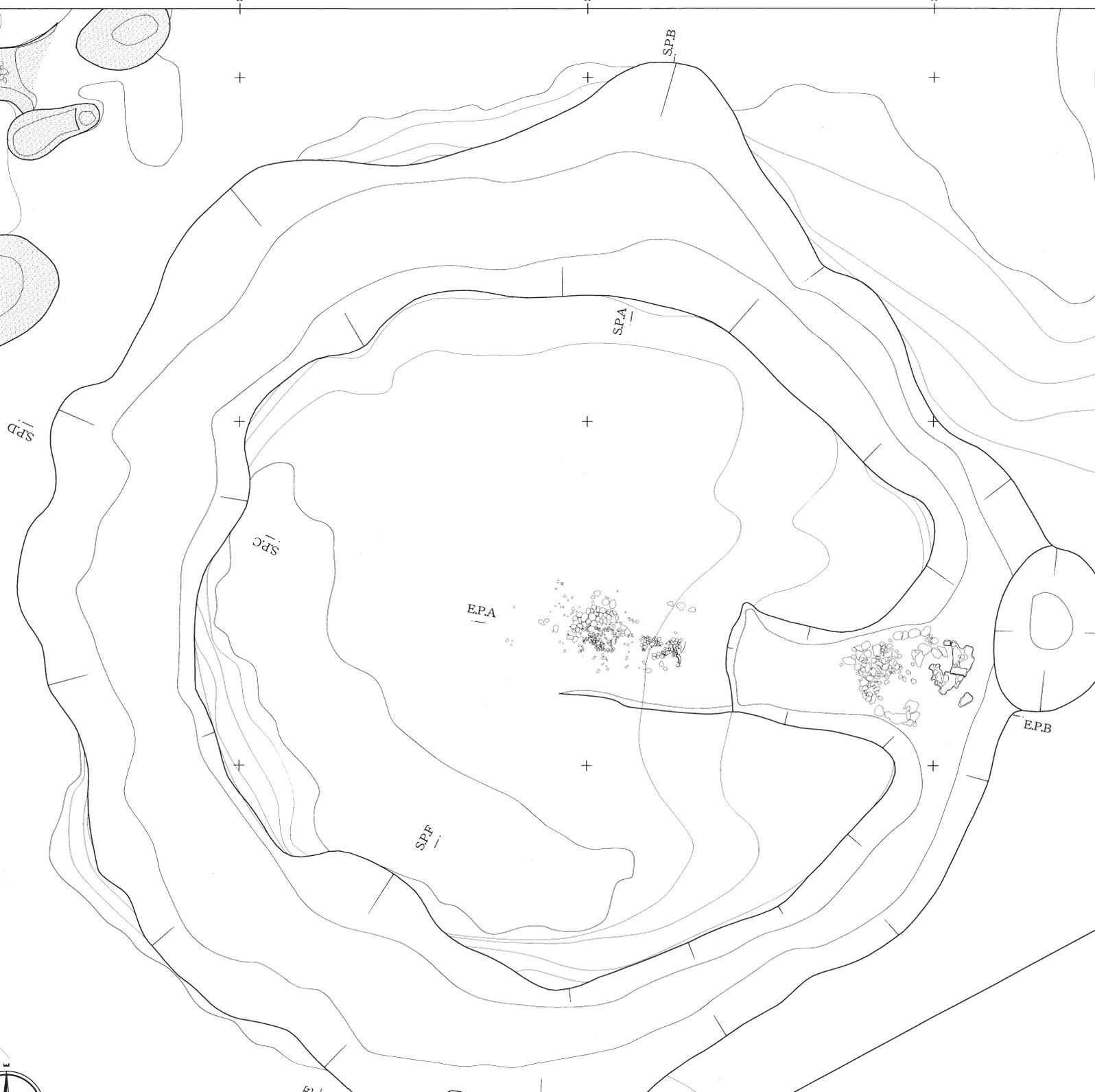
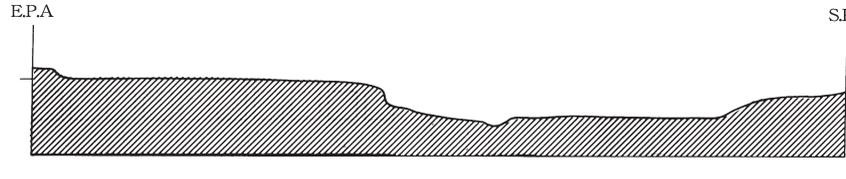
[鉄鏃] (第40図・図版16) 鉄鏃は破片も含めると11点出土しており、8点を図示している。



第40図 第13号墳出土遺物・遺物分布図

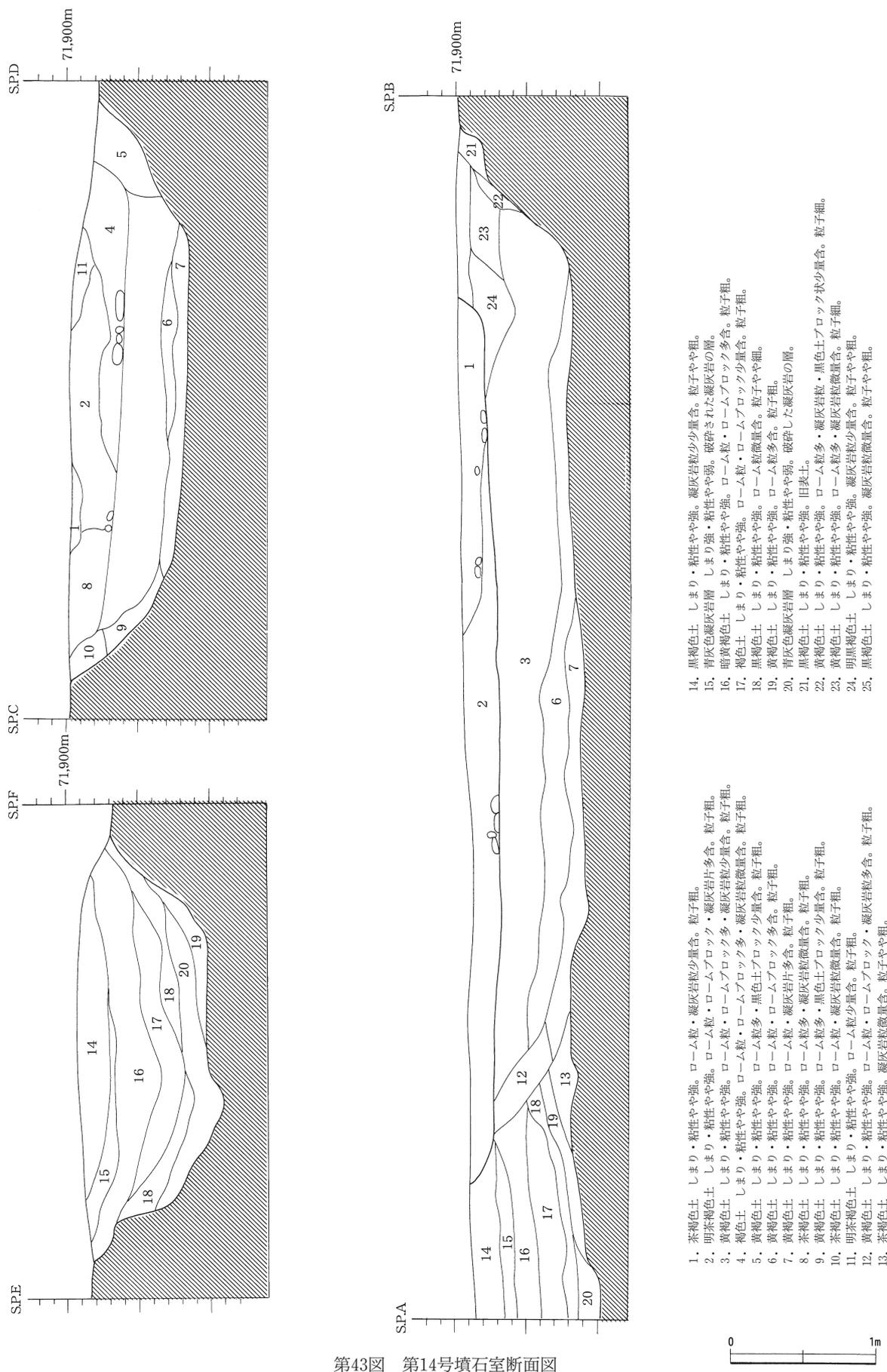


- ① 1. 褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
 2. 黒黒褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
 3. 黒褐色土 しまり・粘性強。粒子やや粗。
 4. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。砂質化し。
 5. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多。
- ② 1. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多。
 2. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量。
 3. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微。
 4. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
 5. 黒褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微。
 6. 明黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒。
 7. 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒。
 8. 褐色土 しまり・粘性強。ローム粒微量。
 9. 明褐色土 しまり・粘性強。ローム粒少量。
 10. 明黄褐色土 しまり・粘性やや粗。ローム粒。
- ③ 1. 褐色土 しまり・粘性やや強。粒子やや粗。
 2. 黒褐色土 しまり・粘性強。粒子やや粗。
 3. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒少量。
 4. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量。
 5. 褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒微量。
 6. 暗褐色土 しまり・粘性強。ローム粒微量。
 7. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。砂質化し。
 8. 明褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒。
 9. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒。
 10. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多。
 11. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。ローム粒多。
 12. 明茶褐色土 しまり・粘性やや弱。ローム粒。





第42図 第14号墳石室平面図



第43図 第14号墳石室断面図

1～3は、片刃の鎌。鎌身部は端刃のもので、所謂カマス切先状を呈する。頸部への移行は関をもたない。頸部以下を欠損しており、茎部への関の有無は不明である。頸部の断面形態は、方形を呈する。

4は、鎌身部の平面形態が五角形を呈し、頸部以下を欠損する。鎌身部長3.2cm、幅2.2cmを測る。頸部の断面形態は方形を呈する。

5～8は、頸部以上を欠損するが、長頸鎌と推測される。5～7は、篋被部と茎部が棘によって分かたれている。8の篋被形態は、欠損のため不明である。

[刀子] (第40図・図版16) 9は、両端を欠損する。

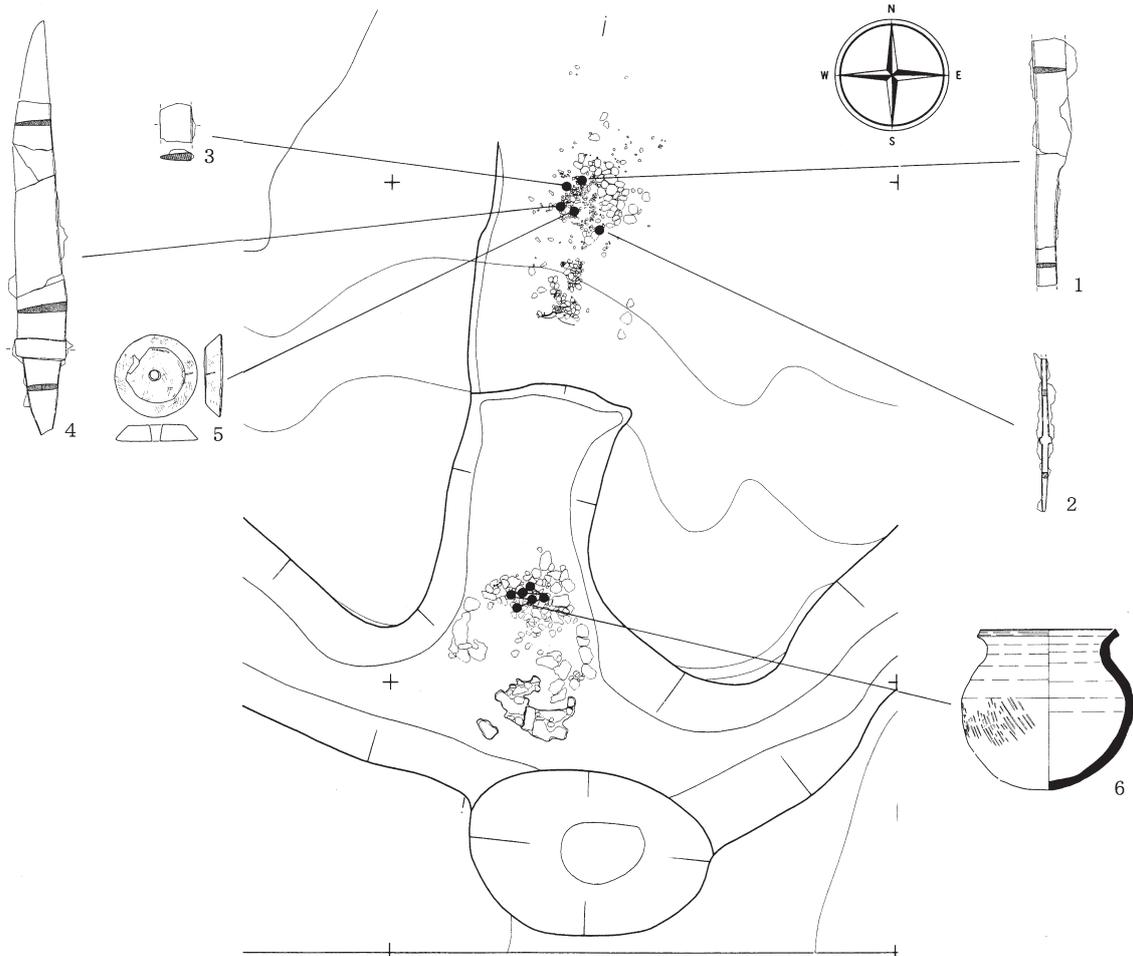
[管玉] (第40図10・図版15) 片側約1/3が欠損する、珪質泥岩製の管玉が1点出土している。残存軸長2.8cm、径1.1cmを測る。穿孔は両側より行われている。

時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。石室内から出土した鉄鎌より判断するなら概ね7世紀に比定される。

第14号墳 (第41図～45図・図版8・13・14・16)

位置 調査区西端に位置し、南側に第3・15号墳が、北東側に第13号墳が位置している。

規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。



第44図 第14号墳遺物分布図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

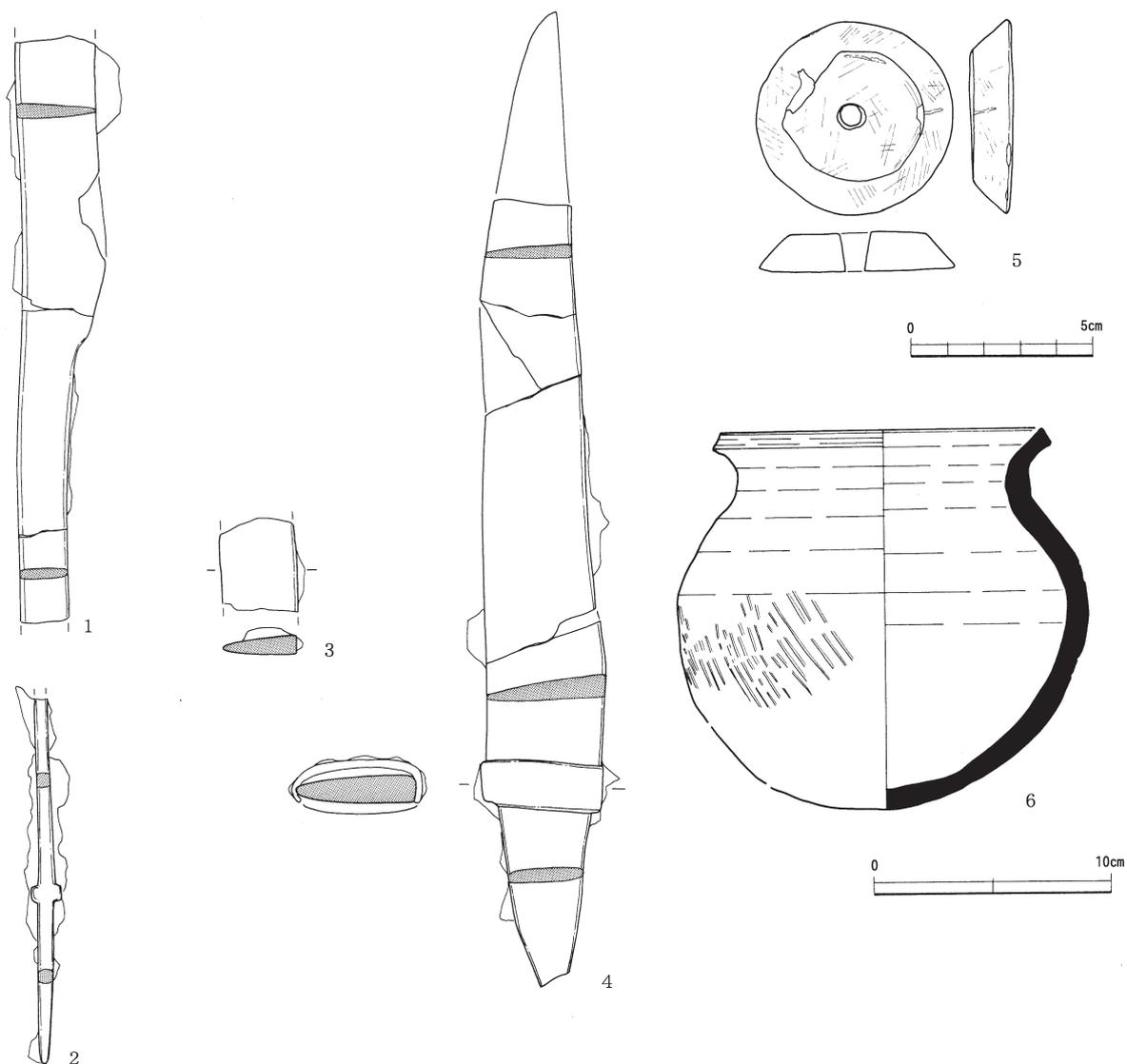
周溝は全周しており、幅7.2m～2.4m、深さ0.9m～0.6mを測る。不整円形を呈し、石室の前面やや東側の周溝部に、長径4.8m、短径3.4m、深さ0.4m程の楕円形を呈する掘込みが位置している。

石室前面の前庭部は、石室から0.45m程の段差をもって繋がり、周溝へと緩やかに傾斜している。周溝部に繋がる部分には、破碎された凝灰岩片が、長径3.3m程の楕円形の範囲で集中しており、須恵器甕の破片（第44図6）が出土している。

古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で22.2m、周溝外側で29.7mを測る。

石 室

石室は全面に渡って攪乱されており、石室石材は残っていない。凝灰岩の破片がほぼ全面に散布することから、凝灰岩の載石による横穴式石室であったことが想定されるが、その平面形状は不明である。推定玄室部分にはやや大型の河原礫が、推定羨道部付近にはやや小型の河原礫が敷かれており、舗石と判断される。



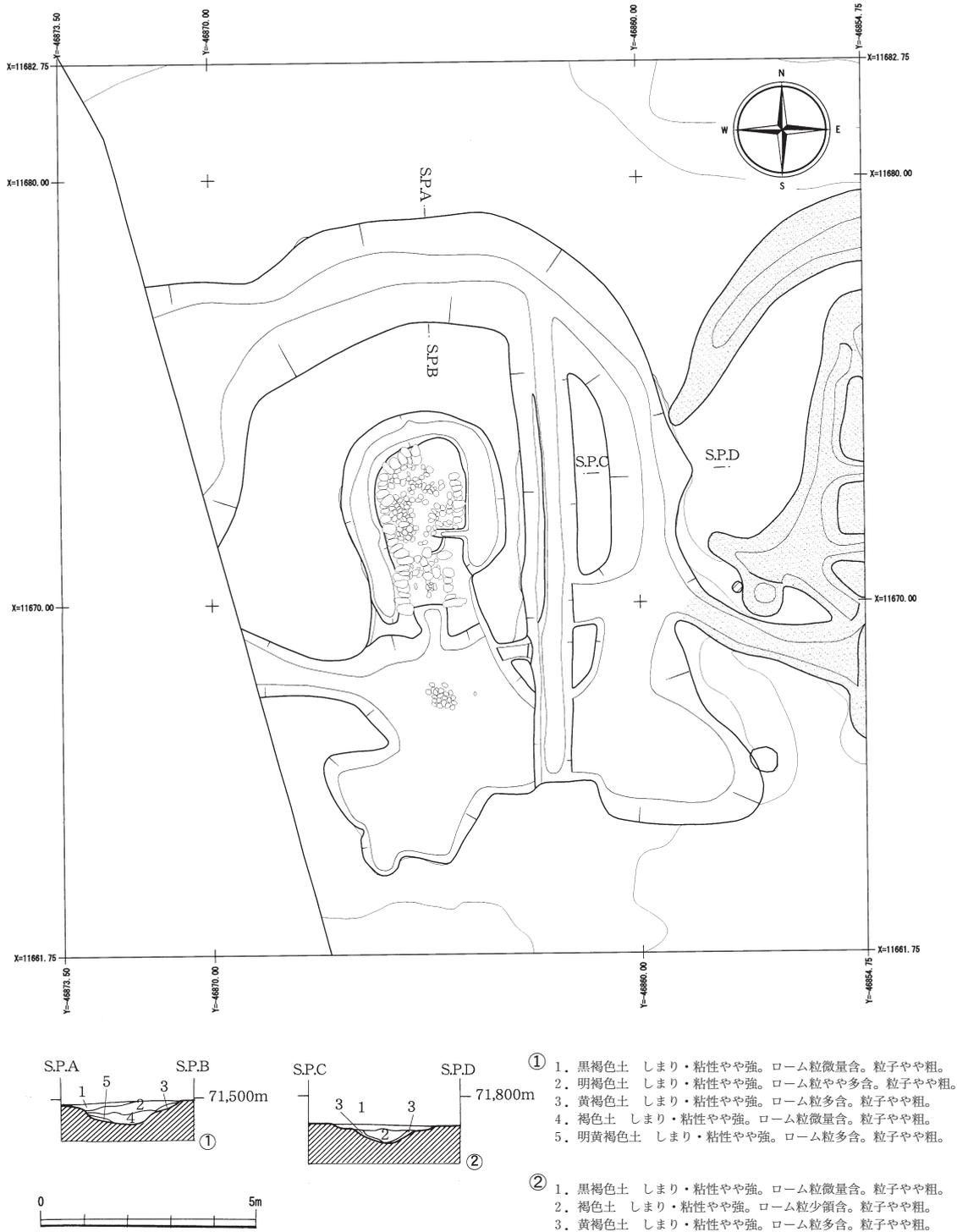
第45図 第14号墳出土遺物

石室は、旧地表面を掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方は、一度長軸8.8m、短軸4.2m、深さ0.88mの範囲で掘込んだ後、凝灰岩片混じりの土で固めながら平らに埋戻し、再度長軸4.6m、短軸3.6m、深さ0.2m程の範囲で掘込んでいる。

遺物出土状態

石室内は、ほとんどの範囲で攪乱を受けており、遺物の出土も少ない。

須恵器の甕が、周溝に取り付く前庭部付近に散布する凝灰岩片に混じって、破片で1



第46図 第15号墳平面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

個体分出土している。

出土遺物

〔土器〕(第45図・図版13) 6は、須恵器の甕。口縁下端に稜をもち、上端はつまみ上げられる。球胴状を呈し、底部は丸底となる。調整は、ロクロ成形後、胴部下半に平行タタキ、底部はヘラナデが行われている。口径13.0cm、器高16.0cmを測る。胎土に砂粒・白色粒を多量に含み、焼成は良好である。末野窯産と推定される。

〔鉄鏃〕(第45図・図版16) 鉄鏃は1点出土している。鏃身部を欠損しているが、細根の長頸鏃と推測される。篋被形態は棘篋被で、茎部長4.6cmを測る。篋被部の断面形態は方形、茎部断面は楕円形を呈する。

〔刀子〕(第45図・図版17) 1は両端を欠損する。2は刃部だけの破片である。

〔小刀〕(第45図・図版17) 17は切先部と刀身の一部を欠損する。同一個体として扱い、推定長27.5cmを測る。

〔紡錘車〕(第45図・図版14) 5は、滑石製の紡錘車である。上底長3.7cm、下底長5.4cm、厚み1.1cm、軸孔0.8cm、重量54.5gを測る。平滑ではあるが、使用による線条痕が顕著である。

時期

本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。周溝より出土した須恵器甕(第45図6)より判断するなら、7世紀末から8世紀初頭に比定される。

第15号墳 (第46図～49図・図版9)

位置

調査区南西端に位置し、東側の第3号墳の周溝を切って構築している。北側には、第14号墳が位置している。石室の東側南北方向に、幅0.9mの溝が本古墳を切っている。

規模

本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。

周溝は、西側の一部が調査区外に位置し未調査であるが、全周しているものと推測される。周溝の幅は、2.5m～2.2m、深さ0.6～0.4mを測り、石室南側で幅が不定形に広がっている。石室中軸線上の周溝底部には、河原礫が22点程纏って検出されている。

古墳の規模は、玄室内中軸線上の奥壁部から1.2mに推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で8.7m、周溝外側で13.2mを測る。

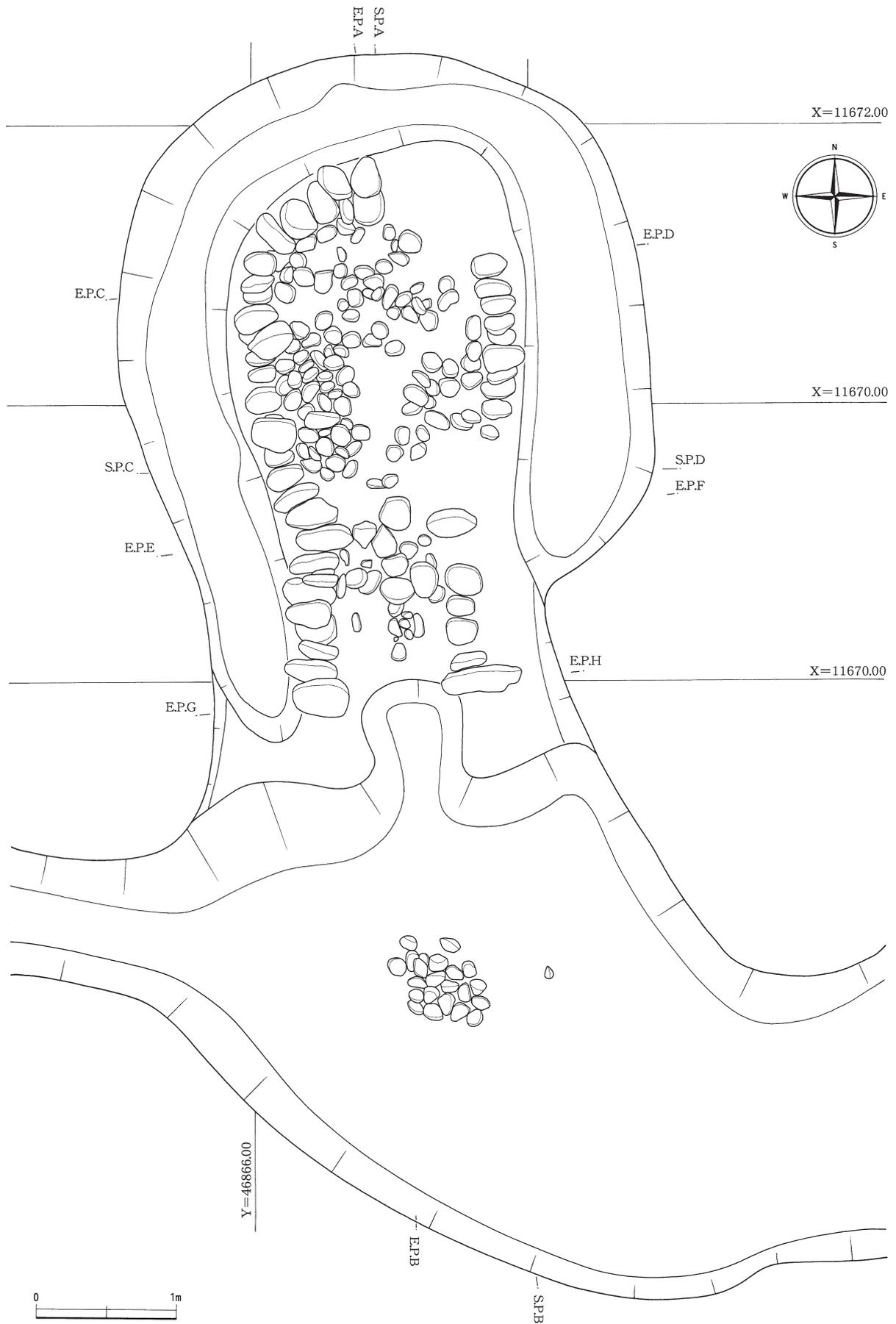
石室

石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。玄室の平面形は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、石室内に扁平な小口面がくるように河原礫を配して構築されている。玄室の北東隅および東側壁は攪乱を受けており石材は残っていない。

推定される石室の規模は、石室全長は3.52m、玄室長2.14m、羨道長1.20mで、面積は、玄室で2.78m²、羨道で0.91m²、合計3.69m²を測る。

玄室の床面は、壁体構築の後河原石を敷き詰めることで舗石面としており、羨道部にはやや大型の河原礫を並べ、その隙間に小型の河原礫を充填している。羨道部手前と、玄室の一部は、攪乱を受け舗石が確認されない。玄室と羨道の境には、梱石的な区画施設は存在しない。玄室側壁が最も狭まる位置に両側壁が残存しており、玄室と羨道の境と判断した。

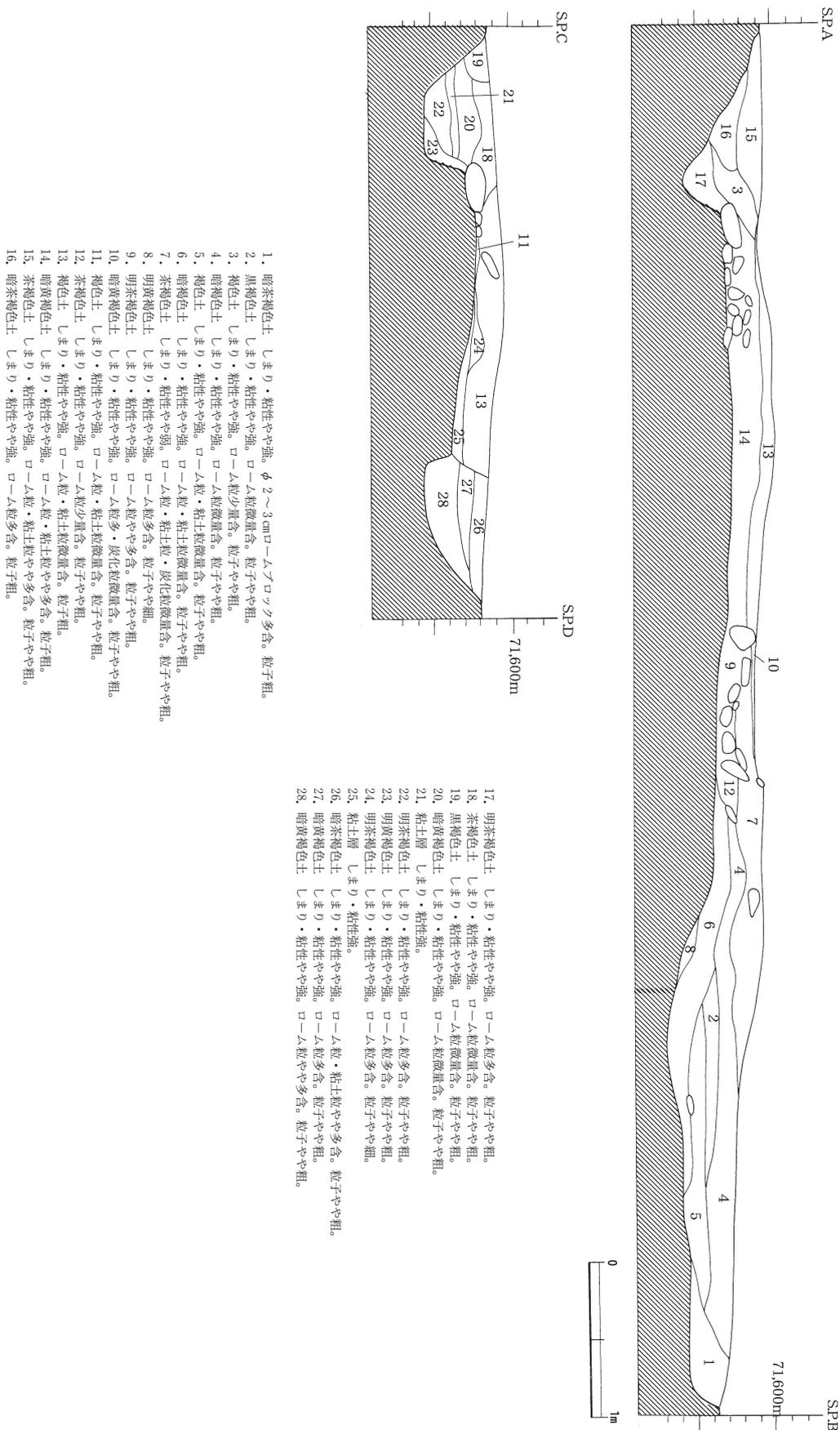
石室は、旧地表面を掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方は、まず石室の形状に



第47図 第15号墳石室平面図



第48図 第15号墳石室断面図



第49図 第15号墳石室土層平面図

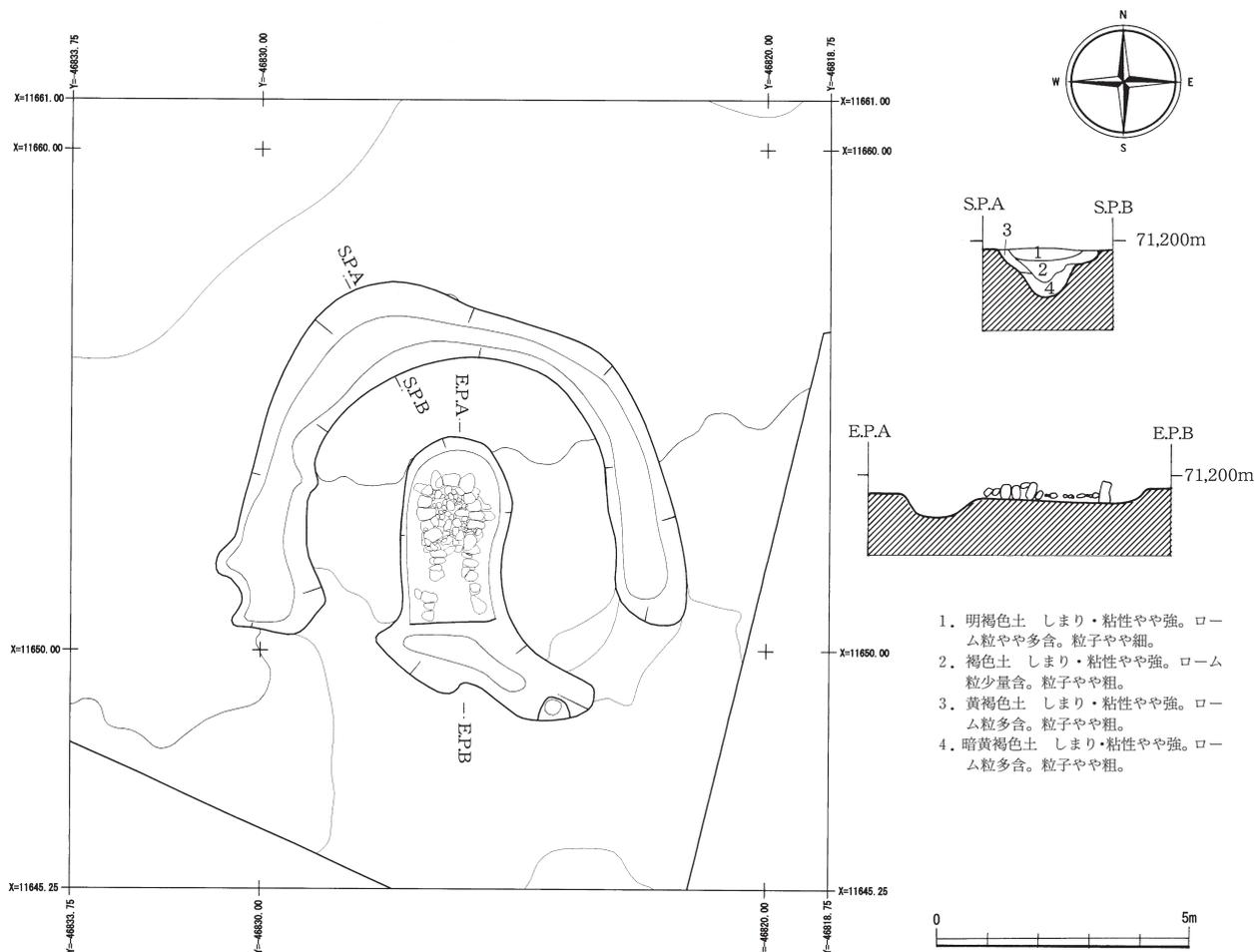
第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

沿う形で長軸4.8m、短軸3.7mの範囲で、平面U字状に深さ60cm程の溝を掘込み、内側の石室設置面は、旧表土面から20cmの掘込みとなっている。結果、石室の外側には周溝のように溝が巡り、石室石材の設置後埋め戻している。

遺物 周溝および石室内から本古墳に伴う遺物は出土していない。
時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。第3号墳に切られていること、埴輪が出土していないこと、石室が胴張形を呈することから推定して、概ね7世紀代に属するものと推定される。

第16号墳 (第50図～53図・図版10)

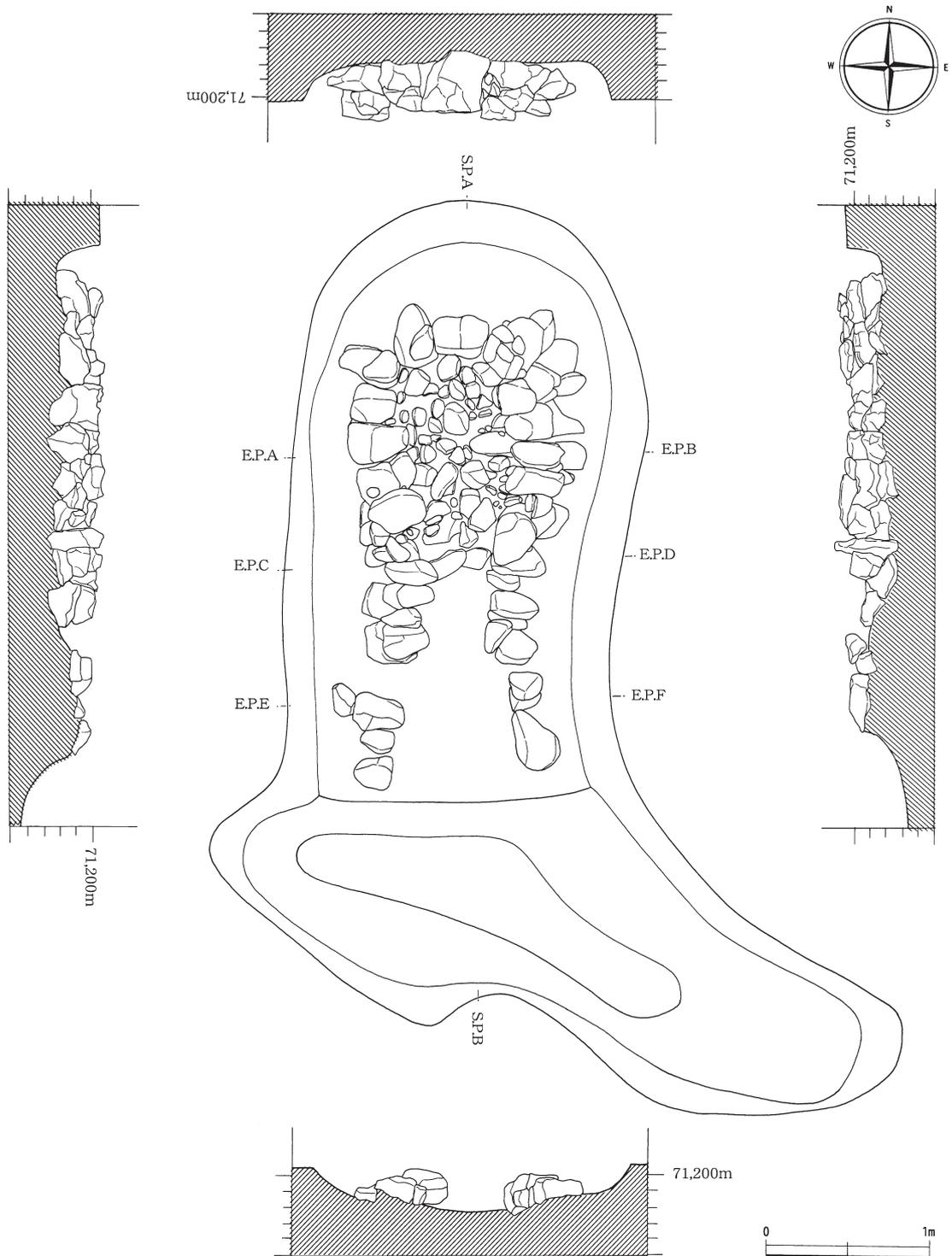
位置 調査区南東端に位置し、北側に第1号墳が位置している。
規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。
 周溝は、北側に確認され、石室の前面には前庭状の掘込みが確認されている。周溝は、幅2.1m～0.7m、深さ0.9m～0.4mを測る。
 古墳の規模は、玄室と羨道の境部付近に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で6.9m、周溝外側で8.7mを測る。
石室 石室は南面し、玄室部と羨道部によって構成される横穴式石室である。石室は、玄室



第50図 第16号墳平面図

の平面形は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈している。羨道の両側壁は概ね直線に伸びており、30cm程の凝灰岩の未加工石材のみを用いて構築されている。玄室と羨道部は、凝灰岩片を立てて玄門様とした立柱石によって分かれている。

推定される石室の規模は、石室全長は2.71m、玄室長1.30m、羨道部長1.27mで、面



第51図 第16号墳石室平面・外側立面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

積は、玄室で0.80㎡、羨道で0.71㎡、合計1.51㎡を測る。

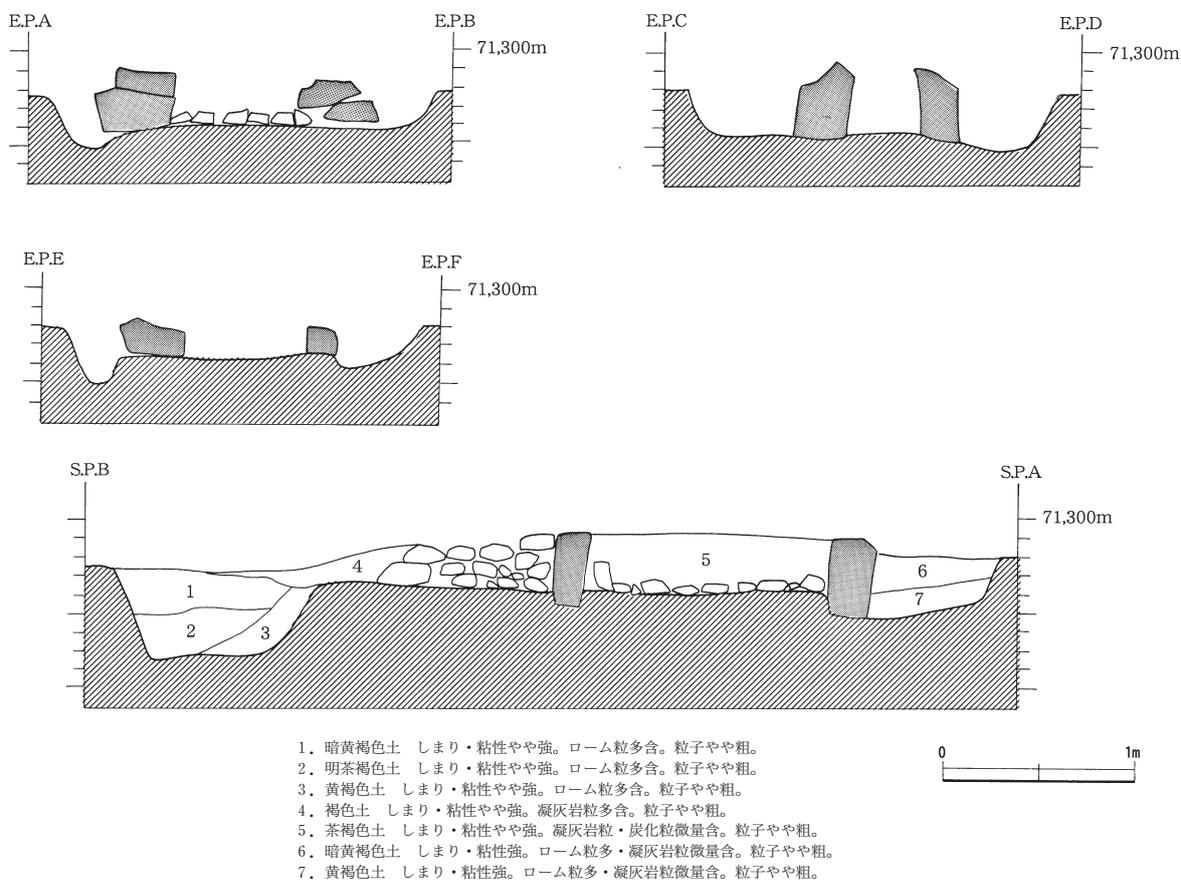
尚、玄室と羨道の各々で求められる平面主軸は6°程ズレが認められ(第53図)、結果的に石室全体の平面形態は玄門部で屈折するような印象を受ける。

壁体の構築は、河原礫と同様であり、石室内に扁平な小口面がくるように礫を配している。奥壁は、第13号墳と同様に、横方向に礫を向けて設置しており、奥壁としての意識があったものと判断される。

石材は、最大で根石部分から3段の石組を検出し、舗石面からの高さ約20cmを測る側壁を検出している。截石石材を用いていないため、3段程の構築が限界と判断され、被葬者の埋葬空間は非常に狭いものとなる。形状は横穴式石室であるが、その埋葬方法は果たして同様なものであったか、天井石の有無も含め、疑問である。羨道部は、根石部分の1段の石組を検出している。また閉塞施設として、羨道内に長径20cm前後の不揃いの凝灰岩を、雑然と詰め込んでいる。

玄室の床面は、不揃いな凝灰岩片を敷き詰めることによって舗石としている。截石でなく、破碎礫であるため、上面は平らでなく、むしろ稜がある尖った面が上面となっている。羨道部には舗石は確認されない。

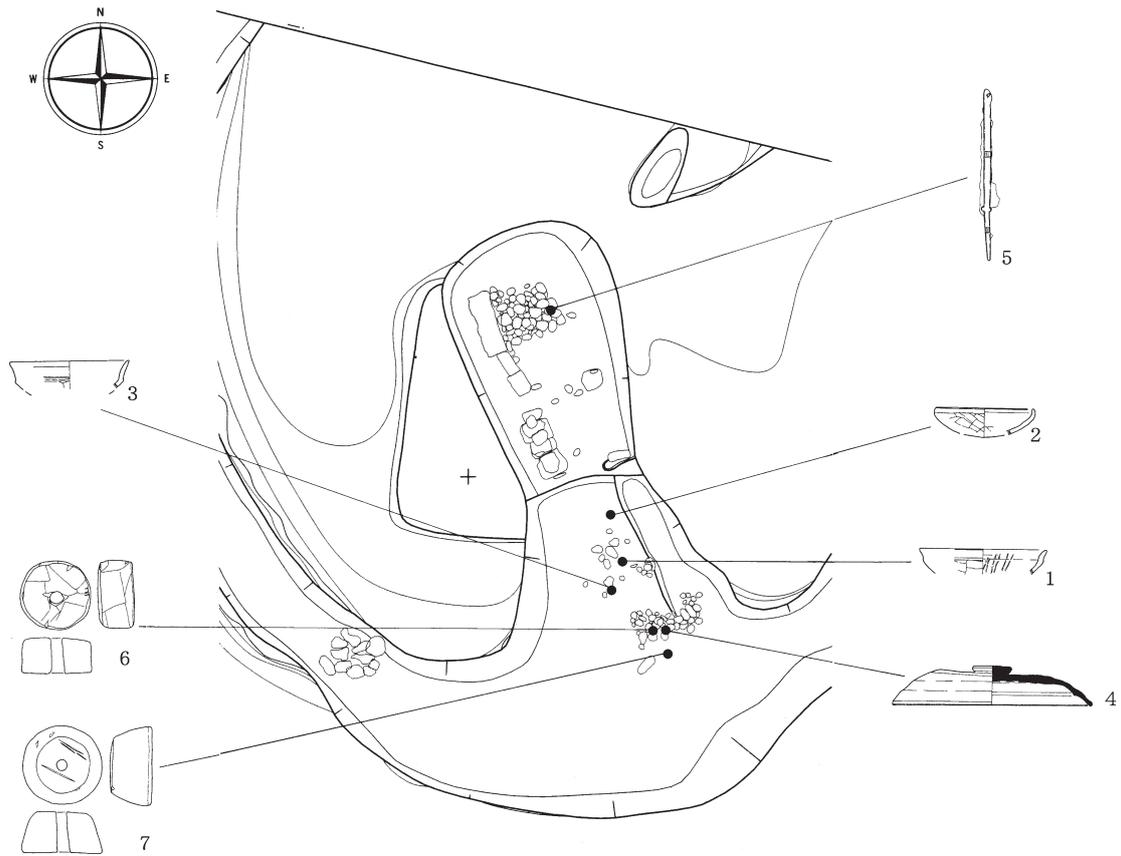
石室は、旧地表面を24cm程掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方の平面形態は、石室の平面形態とほぼ同じ胴張形を呈しており、長軸で3.52m、短軸で2.14mを測る。



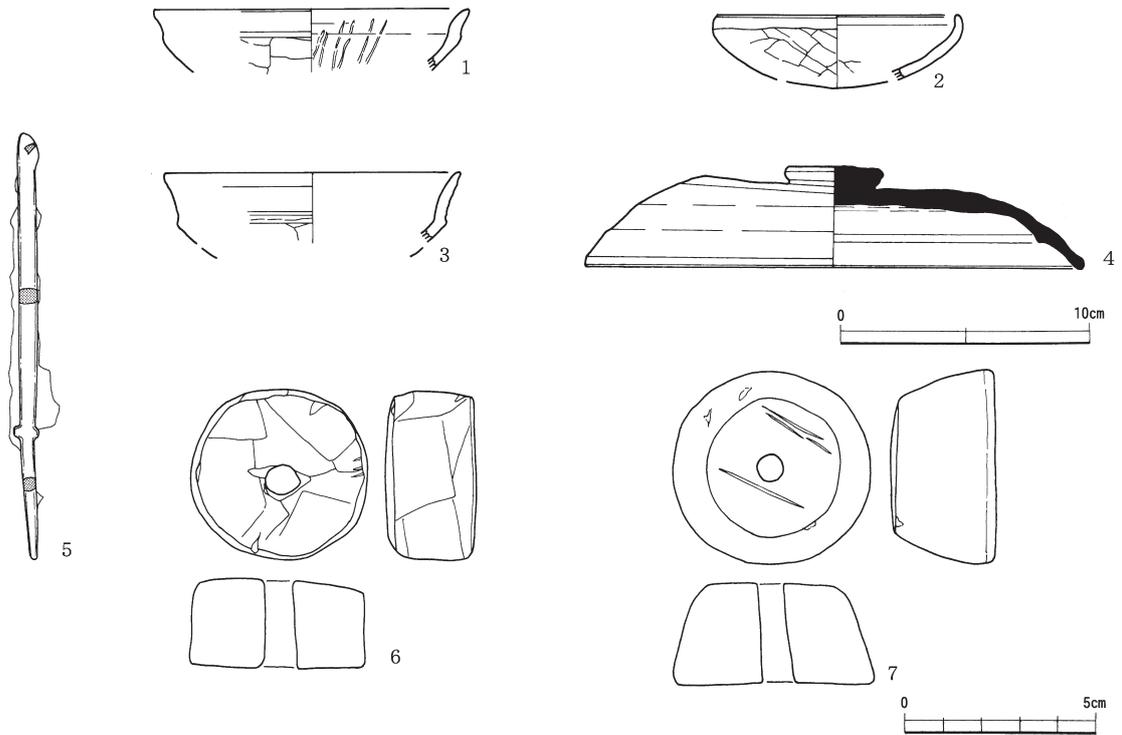
第52図 第16号墳石室土層断面・断面図

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

- 規模** 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。
- 周溝は、北側が調査区外となり未調査であるが全周するものと推測される。石室前面の前庭部は、石室から周溝へと30cm程の段差をもって緩やかに傾斜している。周溝部に繋がる部分には、破碎された凝灰岩片が、長径1.4m程の範囲で長方形に集中しており、土師器片（第58図1・2）が出土している。また、南西の周溝部底面には、長径40cm程の被熱した凝灰岩片が11点程集中する箇所が確認されている。
- 古墳の規模は、石室奥壁部に推定される古墳中心点を基準に計測した場合、周溝内側で長径16.8m、短径15.0m、周溝外側で長径23.4m、短径18.3mを測る。
- 石室** 石室は南面し、凝灰岩の加工石材のみを用いて、玄室部と羨道部を構成する横穴式石室である。石室は、石室奥壁と東側壁および羨道部東側の石材をほとんど抜き取られているが、石材設置痕によりその平面形を推定することが可能である。推定される玄室の平面形は、側壁が弧を描き奥壁に向かってカーブを強める胴張形を呈し、羨道の両側壁は概ね直線に伸びる。玄室と羨道部は、玄門部に設置された立柱石によって分かたれている。
- 推定される石室の規模は、石室全長は2.14m、玄室長1.19m、羨道部長0.75mで、面積は、玄室で3.46㎡、羨道で1.53㎡、合計4.99㎡を測る。
- 壁体は、基底石の第1段のみで、石室西側壁の3個、東玄門1個、羨道部西側壁4個が残存している。その他の石材は抜き取られているが、その痕跡により、玄室奥壁に3個、東側壁に3個、羨道部東側壁に4個の石材が存在していたことが想定される。
- 石室の床面は、壁体構築後、河原石を敷き詰めることで舗石面としているが、攪乱により北側部分にしか舗石は残存していない。玄室と羨道の境は、攪乱のため区分施設が設置されていたかは不明であり、同様に羨道部も、数点の河原礫が確認されるものの、舗石が存在していたのかについては不明である。
- 石室は、旧地表面を24cm程掘込んだ掘方の中に構築されている。掘方の平面形態は、石室の平面形態とほぼ同じ胴張形を呈しており、長軸で3.8m、短軸で2.0mを測る。
- 石室壁体と掘方の法面との間隔は、石室西側でやや広くなっており、約40cmを測る。掘方の断面形態は逆台形を呈している。
- 石材加工痕** 石室西壁石材下部には、幅6cm程の刃先の直線的な「粗作り」段階のチョウナ状工具による痕跡が部分的に認められる。そして、この痕跡を消すように、「仕上げ」として全体的に幅7cm程の刃先の丸い浅い匙面がほぼ全面に観察される。この「仕上げ」段階の加工痕跡は、各石材間で連続して観察されることから、石室が組み上がったからの作業であることが想定される。
- 遺物出土状態** 石室内はかなり攪乱を受けており、出土した遺物は、完形の片刃鎌1点のみである。石室前面の前庭付近の下層からは、土師器の破片が3個体出土している。また、石室前面の周溝底より、土製と石製の紡錘車が1点ずつと、完形の須恵器蓋がまとまって出土している。
- 出土遺物** [土器]（第59図・図版13・14）1～3は土師器の坏。1は、口縁と体部の境に陵をもつ。調整は、口縁ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヨコナデが行われている。体部内面



第58図 第17号墳遺物分布図



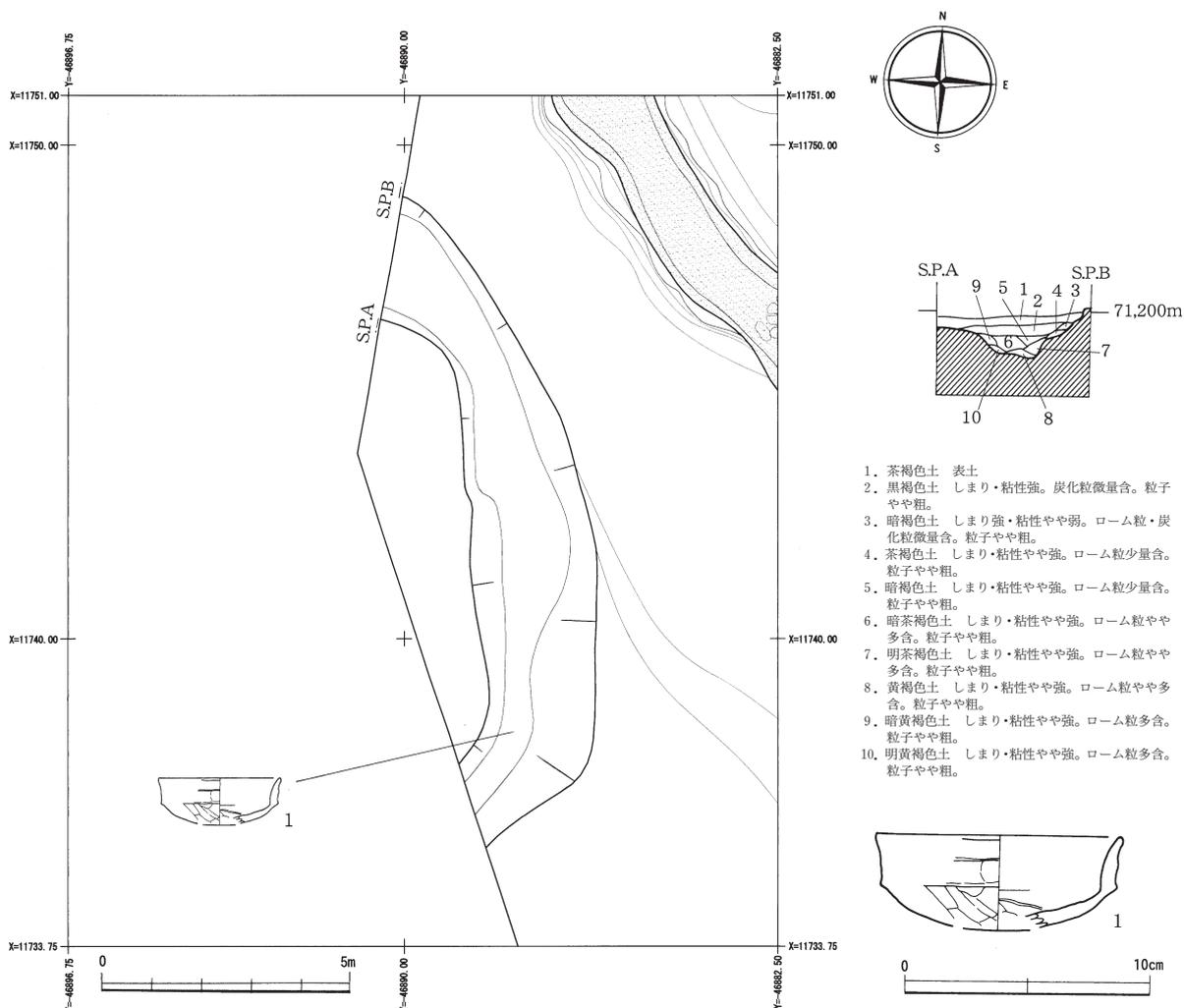
第59図 第17号墳出土遺物

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

には、2本1組の暗紋が施文されている。推定口径12.5cm、残存器高2.5cm。2は、口縁部が内湾する。調整は、口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが行われている。胎土に石英・雲母含む。推定口径9.6cm、残存器高2.9cmを測る。3は、口縁と体部の境に陵をもつ。調整は、口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリが行われている。胎土に、石英・雲母・砂粒を含む。推定口径11.7cm、残存器高2.8cmを測る。4は、ほぼ完形の須恵器蓋。つまみは扁平で、内面蓋体部と口縁の境に稜をもつ。調整は、内外面とも体部上部回転ヘラケズリで、下部にロクロ調整を施している。蓋径19.8cm、つまみ径3.9cmを測る。胎土に石英・白色粒・黒色粒を含み、末野窯産と推定される。

〔鉄鏃〕(第59図・図版16) 鉄鏃は、石室内より1点出土している。完形品。片刃の鏃で端刃傾向にあり、切先部は刃部側が丸みを帯びた所謂ふくら切先状を呈する。頸部への移行部は明瞭でなく、関を持たず、篋被部と茎部は、棘によって分かたれる。鏃身長0.9cm、幅0.6cm、篋被長7.0cm、茎部長3.4cmを測る。篋被部の断面形態は方形、茎部断面は円形を呈する。

〔紡錘車〕(第59図・図版14) 紡錘車は、周溝底部付近より2点出土している。6は、土



第60図 第18号墳

製。上底長・下底長4.6cm、厚み2.4cm、軸孔0.8cm、重量66.2gを測る。円板状を呈し、厚手のつくりである。7は、凝灰岩製。上底長3.6cm、下底長5.2cm、厚み2.7cm、重量102.2gを測る。厚手のつくりである。

時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。周溝および前庭部より出土した土器より判断すると、1・3が7世紀第3四半期、2・4が7世紀末から8世初頭に位置付けられ、2時期の遺物が確認される。前庭部および周溝部における墓前祭祀または追葬に関わる時期差と推定される。

第18号墳 (第60図)

位置 調査区北西端に位置し、東側に第17号墳が位置している。

規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状は不明である。また、主体部は、調査区外になり、未調査となっており、東側の周溝のみ検出されている。推定される古墳の規模は、周溝内側で14.4m、周溝外側で18.0m、深さ1.2mを測る。

石室 調査区外に存在するため未調査となっており、その規模内容は不明である。

遺物出土状態 周溝覆土中層より、土師器坏の破片が1点出土している。

出土遺物 [土器] (第60図) 1は、土師器の坏。口縁中間に段を持ち、体部との境には陵を有する。調整は、口縁ヨコナデ、体部外面ヘラケズリで、内面はヘラナデが行われている。体部内面には、線刻が認められる。推定口径9.8cm、残存器高3.9cmを測る。

時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。周溝より出土した遺物より判断するなら、概ね7世紀第3四半期に属するものと推定される。

第1号小石室 (第61図・図版9)

位置 第1号墳の西側に位置している。

規模 本古墳墳丘は既に削平されており、盛土の範囲及びその形状または、盛土の有無について不明である。周溝は確認されておらず、石室とその前面の長径62cm程の楕円形を呈する前庭状の掘込みのみによって構成される。

石室 石室は南面し、凝灰岩片の石材を用いて横穴式石室様の石室を構築している。玄室のみで、羨道は存在しない。平面形状は、長径0.7m、短径0.56m程の胴張形を呈し、壁体の構築は、河原礫と同様であり、石室内に扁平な小口面がくるように礫を配している。玄室面積は0.37m²を測る。

玄室の入り口には、小型の礫3個を並べており、窠石的な区画意識が働いているものと推測される。壁体は、長径12cm程の拳大の凝灰岩片を使用しており、基底石の第1段のみ確認している。截石を使用していないため、2段目の構築は困難であると判断され、よって天井石の存在も疑問視される。

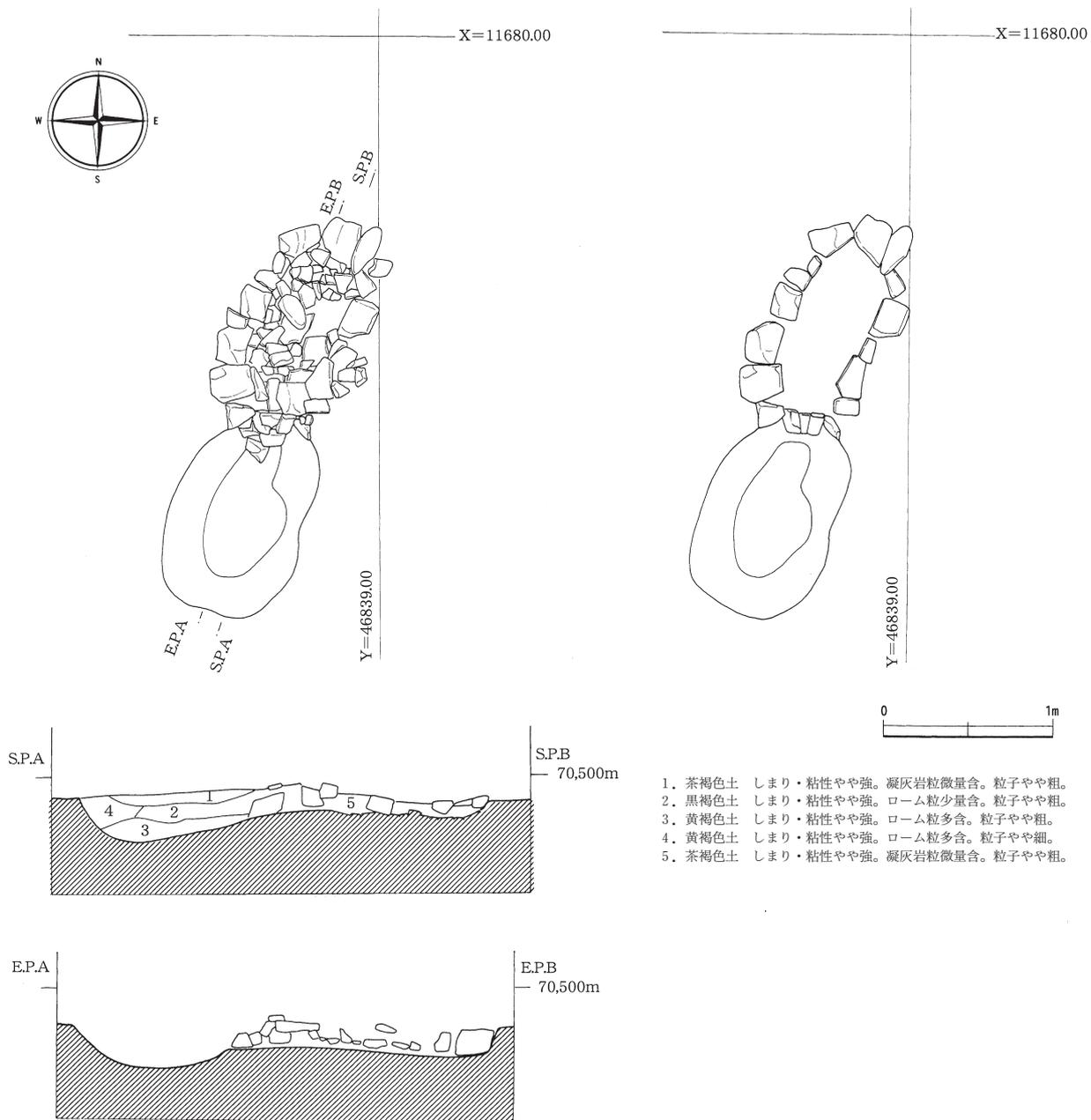
玄室の床面は、不揃いな凝灰岩片を敷き詰めることによって舗石としている。截石でなく、10cm前後の凝灰岩の破碎礫であるため、稜がある尖った面が上面となっている。

また、玄室の入口部には、長径15cm前後の不揃いの凝灰岩を雑然と詰め込んだ状態が確認され、閉塞施設の可能性が考えられる。

第2節 古墳時代の遺構と出土遺物

遺物 前庭状の掘込部および石室内から本古墳に伴う遺物は出土していない。
 時期 本古墳の帰属時期を直接示す遺物はない。埴輪が出土していないこと、凝灰岩使用の石室が胴張形を呈することなどから、概ね7世紀代に属するものと推定される。

(森田安彦)



第61図 第1号小石室平面・断面図

第3節 縄文時代の遺構と出土遺物

第1号集石 (第62図)

第14号墳北側に、7 m×4 mの範囲で礫の集中が認められた。用礫総数75点を数え全てに被熱・赤化が確認され、破損率も高い。掘込みは確認されず、縄文時代の集石と判断されるが、伴出遺物が無く、時期の決定根拠を欠く。

土器 (第63図・図版19)

1は、前期諸磯式土器。RL単節縄文を地文に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている。

2・3は、中期曾利式土器。2は、櫛歯状工具による条線を地文に、半截竹管による蛇行懸垂文が施文されている。

4～6は、中期加曾利E式土器。4は、単節RL縄文を地文に細い沈線が垂下している。5・6は、太い沈線区画内にRL単節縄文が充填されている。

7・8は、後期堀之内式土器。底部に木葉痕・網代痕を残す。

石器 (第64・65図・第2表・図版19)

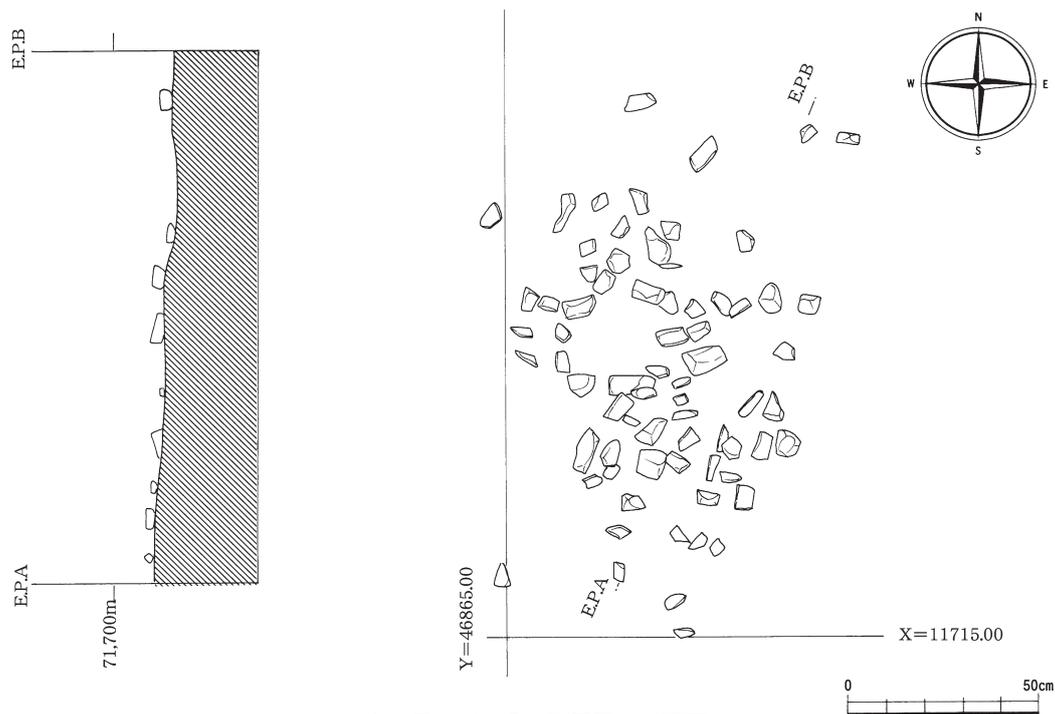
1～3は、チャート製の石鏃。1は、基部が突出する小型の凸基有茎鏃である。両面調整が施されている。2・3は、基部に抉りをもつ凹基無茎鏃。二等辺三角形を呈するが先端を欠く。両面全面調整が施されている。

4は、調整痕の認められる剥片。周辺を折りとり、一部に細かい調整がみられるが、刃部かは不明。

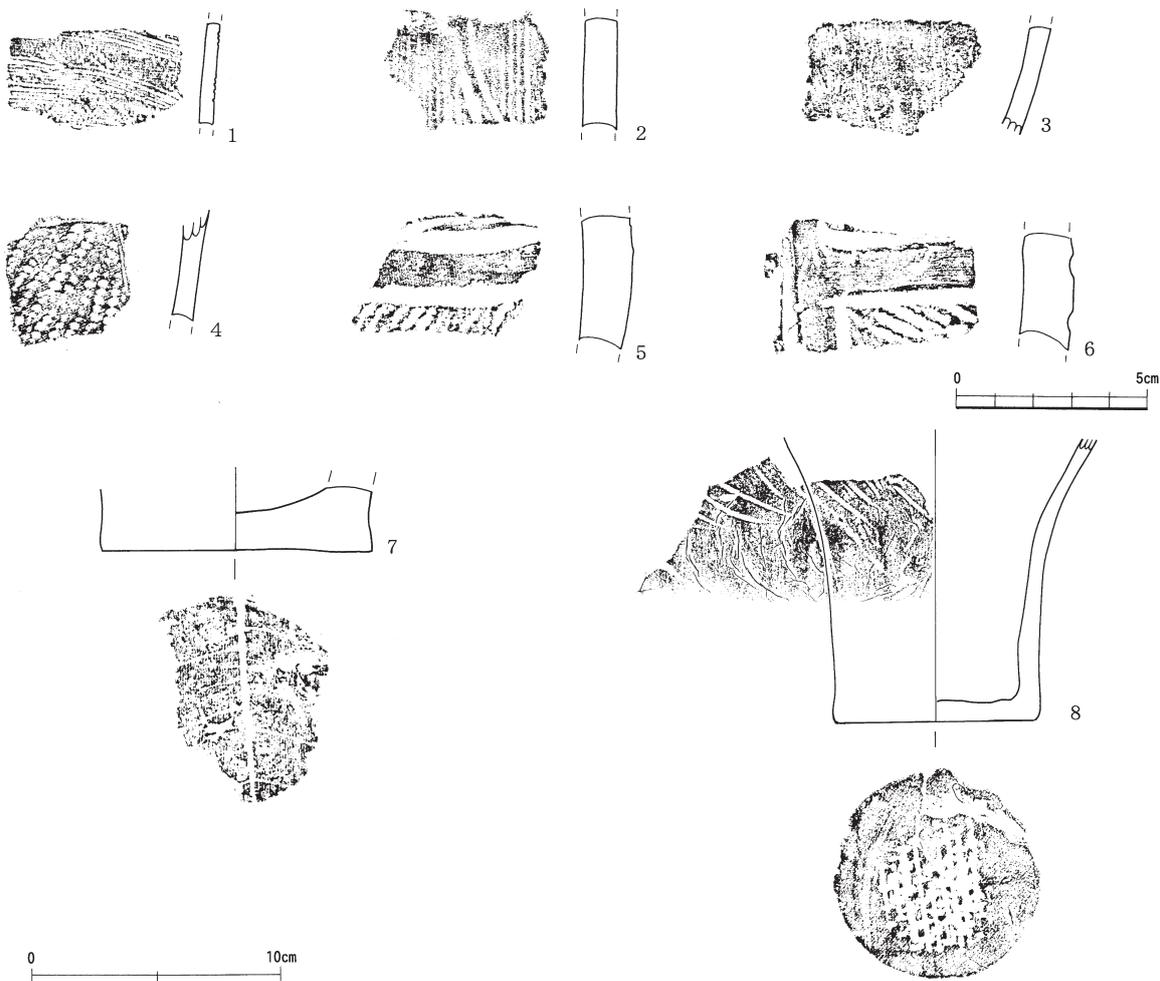
5～10は打製石斧。5は、やや小型の短冊形を呈し、片面に自然面を残す。側面は左右非対称で、一方に小さな抉りをもつ。6は、やや小型の分銅形であるが、中央部のくびれは弱い。片面に自然面を残す。風化度の異なる剥離面をいくつかもつが使用に伴う欠損の可能性も考えられる。7は、短冊形を呈する。側面部は左右非対称で、一方がわずかにえぐれている。8は、短冊形を呈する。両面に一部自然面を残す。周囲の剥離面の末端形状はフェザーエッジ(羽毛状)を呈するものが比較的多い。器体に対して斜めの方向からの加撃によるものである。また左右の側辺の一部は鋭利な形状ではなく潰れたような形になっているためハンマーの加撃方向は器体に対して垂直方向であったものとみられる。9は、刃部に向って幅広になる、鋏状の形態を呈する。背面に自然面を残し、腹面は二枚の主要な剥離面で形成される。周囲には、連続的な加工が施され、比較的薄く剥ぎ取る加工法が取られている。10は、分銅形を呈する。腹面の主要剥離面(自然面の可能性もあり)に着柄や使用による擦痕、磨耗痕が認められる。左右の抉入部の加工方法は明確ではないが、分銅形にしばしばみられるようなハンマーを鋭い縁辺に垂直にあてて加撃する行為は一部に認められるのみである。その結果ごつごつした様相を示す剥離面は部分的である。

11～16は、礫器。11は、刃部は片面からの連続剥離によってつくられる。礫面の残存部分がわずかであること、縦長の形状などを考慮すると、打製石斧であった可能性も強い。12は、石皿を打ち割り、一辺に刃部をもうけ再利用した可能性も考えられる。刃部

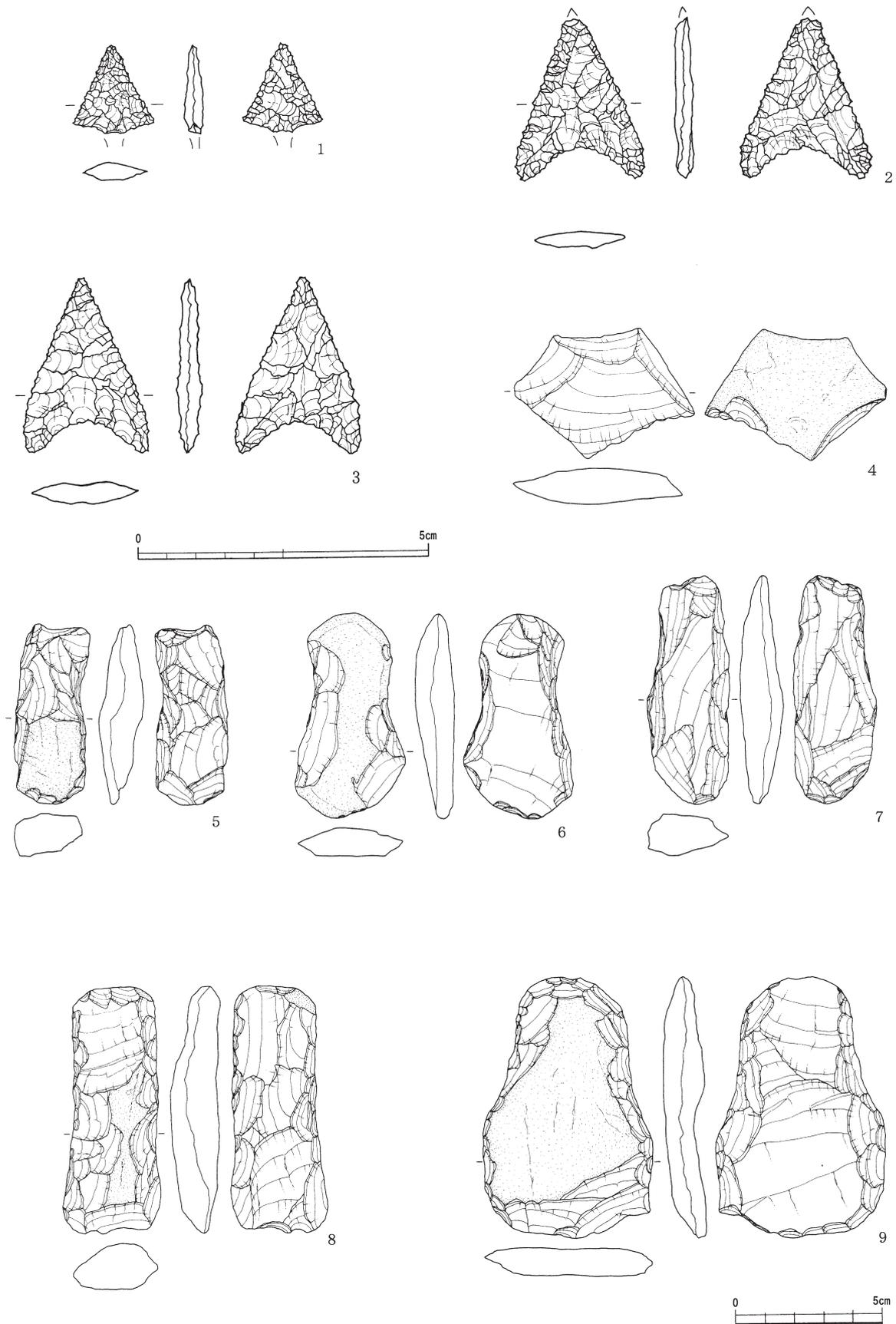
第3節 縄文時代の遺構と出土遺物



第62図 第1号集石平面・断面図

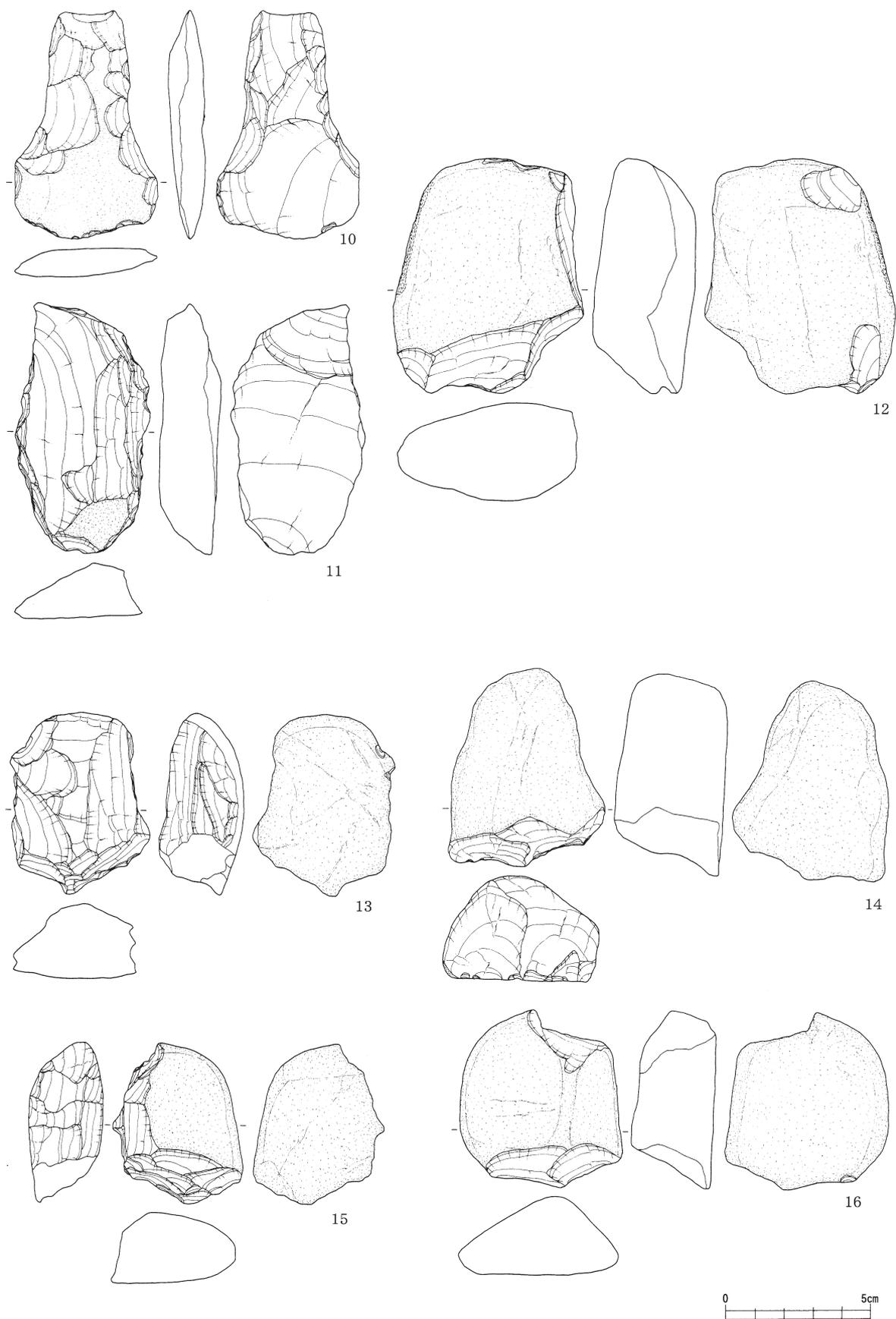


第63図 調査区内出土縄文土器



第64図 調査区内出土縄文時代石器(1)

第3節 縄文時代の遺構と出土遺物



第65図 調査区内出土縄文時代石器(2)

は片面からの連続剥離によって作られる。13～16は、刃部は片面からの連続剥離によってつくられる。14は、側縁の一部に弱い磨痕が認められる。

(森田安彦)

第2表 石器計測表

図版番号	出土地	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
64-1	13号墳周溝	石 鏃	チャート	(1.6)	1.4	0.3	0.5	
64-2	12号墳周溝	石 鏃	チャート	2.8	2.2	0.3	1.4	
64-3	13号墳周溝	石 鏃	チャート	3.0	2.1	0.4	1.7	
64-4	12号墳周溝	剝 片	泥 岩	6.4	8.8	1.9	112.5	
64-5	17号墳周溝	打製石斧	泥 岩	9.5	3.7	2.3	87.9	
64-6	15号墳	打製石斧	砂 岩	10.4	5.6	2.0	124.5	
64-7	5号墳	打製石斧	千 枚 岩	12.0	4.3	2.3	135.5	
64-8	1号墳周溝	打製石斧	砂 岩	12.9	5.1	2.6	181.0	
64-9	1号墳周溝	打製石斧	粘 板 岩	13.7	8.8	2.3	275.8	
65-10	1号墳周溝	打製石斧	砂 岩	12.1	7.6	2.0	157.0	
65-11	一括	礫 器	泥 岩	13.0	6.9	3.0	333.1	
66-12	15号墳	礫 器	粘 板 岩	12.5	10.1	5.2	829.0	
67-13	一括	礫 器	砂 岩	9.6	7.3	4.3	321.3	
68-14	15号墳	礫 器	泥 岩	10.4	8.0	5.7	570.2	
69-15	一括	礫 器	砂 岩	8.5	6.6	3.9	261.8	
69-16	一括	礫 器	砂 岩	(9.4)	8.4	4.3	396.6	

第IV章 分 析

第1節 第3号墳舗石の礫構成

舗石構成礫 今回の調査においては、最も石室内の遺存状態の良かった第3号古墳の舗石すべてを
持ち帰り、個々の礫の長軸・中軸・短軸・扁平率・粒径・重量・石質を計測分類してい
る。礫総数は、965個・敷設密度530/m²、総重量298.0kgを量る。

石質 (第68図) 石質は、砂岩が最も多く764点で全体の79.1%を占める。以下順に、チャート(71点：
7.4%)・閃緑岩(47点：4.9%)・片岩(41点：4.2%)・泥岩(21点：2.2%)・緑色岩(14：
1.5%) その他(7点：0.7%)となる。砂岩・チャート・閃緑岩・片岩で全体の95.6%
を占めている。

軸長 (第67図) 全体の平均長軸長は9.2cmで、7cm代に分布偏差のピークが認められ、5cm～12cmの数
値間に全体の76.3%が分布している。平均中軸長6.7cm、平均短軸長3.0cmを測る。

扁平率 (第3表) 全体の平均扁平率は0.751で、石質別に扁平度の高い順にみると、千枚岩0.62、片岩
0.66、斑レイ岩0.70、砂岩0.73、チャート・緑色岩0.74、片岩0.75、閃緑岩0.77、珪岩
0.82、玢岩0.98となる。

粒径 (第3表) 全体の平均粒径は6.3で、石質別に粒径の大きい順にみると、玢岩8.57、珪岩8.31、斑
レイ岩7.13、閃緑岩6.47、泥岩6.01、砂岩5.63、千枚岩5.56、チャート5.25、片岩5.16、
緑色岩4.89となる。

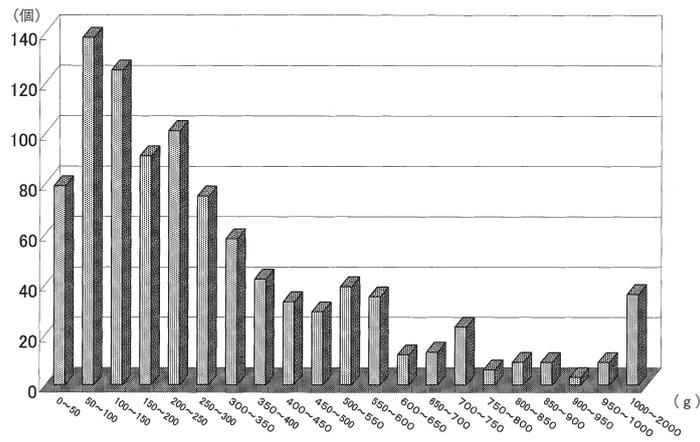
重量 (第66図) 全体の総重量は297.95kgで、平均重量308.8g。石質別の平均重量を重い順にみると、
珪岩・玢岩610.0g、斑レイ岩522.5g、閃緑岩516.5g、泥岩352.1g、砂岩314.0g、千
枚岩280.0g、チャート278.7g、片岩245.0g、緑色岩223.2gを量る。

礫の採取地 次に、これらの礫をどこから運んできたものか上記の結果をもとに検討してみたい。
本古墳群の眼前を流れる和田川上流域は流量が少なく、河原は発達せず礫質堆積物が
ほとんどみられないことから、礫の採取地としては対象から除外されよう。

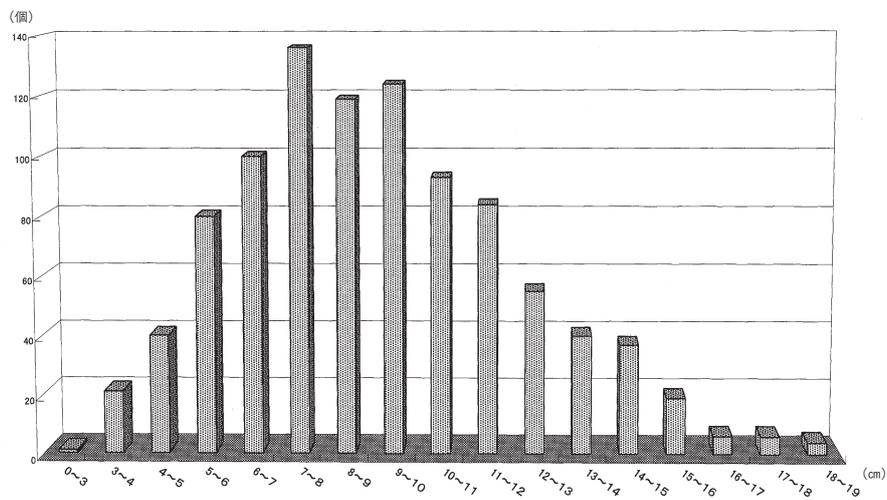
礫質堆積物の分析が進んでいる、現在の流路まで最短距離で3.2kmを測る荒川につい
て、『荒川』「荒川本流の堆積物」(武井：1987)における分析結果を参考に検討してみ
たい。^(註5)

粒径については、石室の舗石用という用途の決まったものの選択的採取であるため、
用途に適さない礫は採取されなかったはずであり、選択された礫をもとに厳密に採取地
を割り出すことは困難と思われる。ただし、『荒川』の礫質堆積物調査でも、長径3cm以
上の礫を調査対象としているため、参考までに荒川河原における平均粒径をみると、本
古墳群に最も近い地点(Loc.14)地点では6.7であり、(Loc.15)での値は7.0、(Loc.16)
地点では2.7、(Loc.13)地点での値は14.0である。第3号古墳の粒径平均値は、6.3であ
り、距離的に最短地である(Loc.14)の値が最も近い。

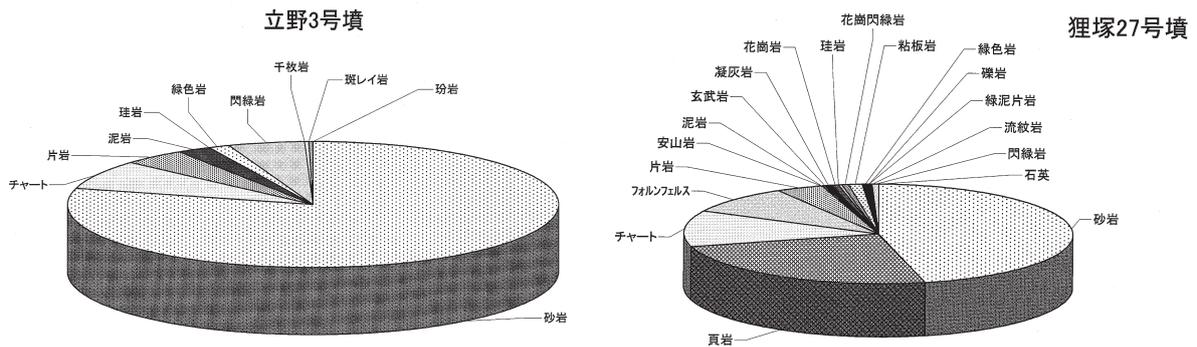
次に石質について見ると、荒川で主体をなす礫は、砂岩とチャートであり、下流域ほ



第66図 第3号墳石室内舗石重量計測図



第67図 第3号墳石室内舗石長軸計測図



第68図 石室内舗石石質構成図

第3表 第3号墳石室内舗石石質別計測表

立野3号墳	砂岩	頁岩	チャート	珧レイ岩	片岩	安山岩	泥岩	玄武岩	凝灰岩	花崗岩	珪岩	花崗閃緑岩	粘板岩	緑色岩	礫岩	緑泥片岩	流紋岩	閃緑岩	石英	千枚岩	珧レイ岩	玢岩	合計
個数	764	0	71	0	41	0	21	0	0	0	1	0	0	14	0	0	0	47	0	3	2	1	965
平均扁平率	0.73	0	0.74	0	0.66	0	0.75	0	0	0	0.82	0	0	0.74	0	0	0	0.77	0	0.62	0.70	0.98	—
平均粒形	5.63	0	5.25	0	5.16	0	6.01	0	0	0	8.31	0	0	4.89	0	0	0	6.47	0	5.56	7.13	8.57	—
平均重量(g)	314.0	0	278.7	0	245.0	0	352.1	0	0	0	610.0	0	0	223.2	0	0	0	516.5	0	280.0	522.5	610.0	—
狸塚27号墳	砂岩	頁岩	チャート	珧レイ岩	片岩	安山岩	泥岩	玄武岩	凝灰岩	花崗岩	珪岩	花崗閃緑岩	粘板岩	緑色岩	礫岩	緑泥片岩	流紋岩	閃緑岩	石英	千枚岩	珧レイ岩	玢岩	合計
個数	1,928	1,022	489	392	153	3	11	7	15	30	11	22	46	20	5	7	1	20	4	0	0	0	4,186

どその割合が増大する傾向が確認されている。本古墳石室舗石のように、砂岩構成比79.1%を超える地点は確認されていないが、(Loc.14) 地点で、砂岩の構成比58.2%、チャート構成比31.6%となっている。両礫の合計の構成比率は、本古墳が86.5%、(Loc.14) 地点が89.8%となり、ほぼ等しい値を示している。

したがって、礫の粒径・石質から判断すると、本古墳石室舗石の採取地は、荒川(Loc.14) 地点付近と判断され、距離的に見ても最短地となる。

比 較

次に、本遺跡から約1.2kmの距離にある、1997年に調査した塩古墳群狸塚27号墳の石室内舗石との比較をおこなってみる(第68図)。

石質については、砂岩が最も多いことは共通しているが、狸塚27号墳で2番目に出土比率を占めている頁岩(14.7%)が、今回の立野3号墳では検出されていないことが指摘される。荒川では、頁岩の構成比率は低く、第69図(Loc.11) 地点より上流でしか確認されておらず、その割合も2%以下である。塩古墳群狸塚27号墳の報告に際しては、その採取地を、荒川とするよりも、頁岩を供給する岩帯の存在する市野川上流にその採取地を求めた(江南町教育委員会：1999・83頁)。

また、両者の舗石の各計測属性を比較すると、

- ・平均粒径一本古墳6.3cm：狸塚27号墳4.3cm
- ・平均長軸長一本古墳9.2cm：狸塚27号墳6.6cm
- ・平均中軸長一本古墳6.7cm：狸塚27号墳4.8cm
- ・平均短軸長一本古墳3.0cm：狸塚27号墳2.4cm
- ・平均扁平率一本古墳0.751：狸塚27号墳0.728
- ・平均重量一本古墳308.8g：狸塚27号墳116.5g

となり、明らかに、後者のほうが小形の礫が採取されていることが判る。

以上のことから、両古墳の舗石採取地は、地点だけでなく流域まで異なっている可能性が指摘できる。

ま と め

両古墳とも、凝灰岩截石の石材を用いて石室を構築し、古墳の築造年代も、塩古墳群狸塚27号墳が7世紀第2四半期であるのに対し、本古墳は7世紀前葉とほぼ同時期であり、異なるのは、古墳の立地となる。塩古墳群が立地するのは、凝灰岩を産する比企丘陵であり、本古墳の立地するのが、比企丘陵と荒川沖積地の間に発達した洪積台地の江南台地である。

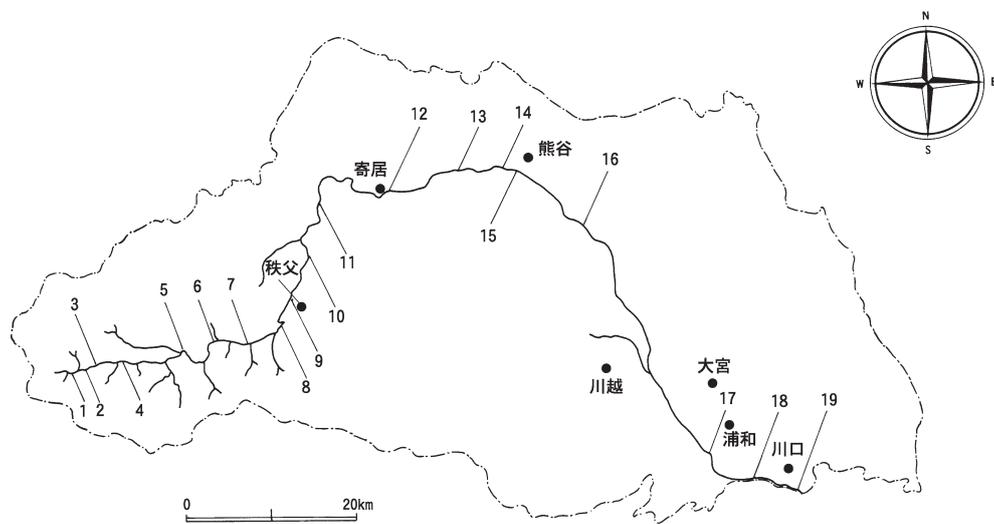
本古墳の舗石石材の採取地が、最短地である荒川河原より採取していることは、肯首できるものであるが、塩狸塚27号墳の舗石石材が、荒川よりも遠い市野川流域に求められる可能性があるということは、水利権・凝灰岩の採掘権のように、河原の礫の採取にも採取権、あるいは、被葬者の属する集団の管理する地域・工人が利用できる資源のテリトリーのようなものが存在している可能性が想定できる。

比企丘陵上にも僅かながら存在する河原石積古墳石室石材と舗石の礫構成と、江南台地上に客体的ながら存在する河原石積古墳石室石材と舗石の礫構成、荒川沖積地に主体的に存在する河原石積古墳石室石材と舗石の礫構成の分析・比較を進め、地域集団として古墳構築材という資源を、他集団との関係において、いかに確保し、維持していった

のか、今後の検討課題としたい。

(森田安彦)

- (註1) 中軸=長軸方向に直行する最大軸長。
- (註2) 厚みの最大部位径。
- (註3) 中軸値を長軸径で除した礫の円形度。
- (註4) 長軸値×中軸値×短軸値の3乗根。
- (註5) 荒川上流から中流域にかけて、16地点 (Loc.1~16:第69図) で礫を任意採取し、石質・球形度・粒径・長径等について分析を加えている。



第69図 礫採取位置図 (『荒川 自然』1987:武井より)

第2節 第12号墳出土金銅製杏葉の蛍光X線分析

(財)元興寺文化財研究所

1. 調査対象

杏葉 2点

2. 調査内容

杏葉2点の鍍金部の色味が異なるため、その部位を蛍光X線分析（以下、XRF）による元素分析を行い、両者を比較し材質に違いがあるかを調べた。

3. 使用機器及び測定条件

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ(株)製 SEA5230）を用いた。この装置は試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出し、元素を同定することができる。条件はモリブデン管球を使用、大気圧下、コリメータ1.8mm、管電圧45kVで分析を行なった。

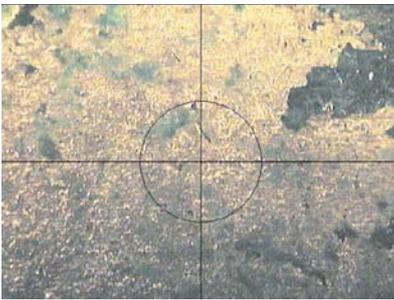
4. 結果

XRF分析では両者とも主成分として金（Au）、銅（Cu）を検出した（第70・71図）。また、微量成分として、鉄（Fe）、ヒ素（As）、銀（Ag）を検出した（図1、図2）。さらにこれらを比較するためそれぞれのスペクトルを第72図に表した。その結果、ほぼ同一のピークが検出され、これらの結果だけでは、色味の違いを明らかにすることはできなかった。

[測定条件]

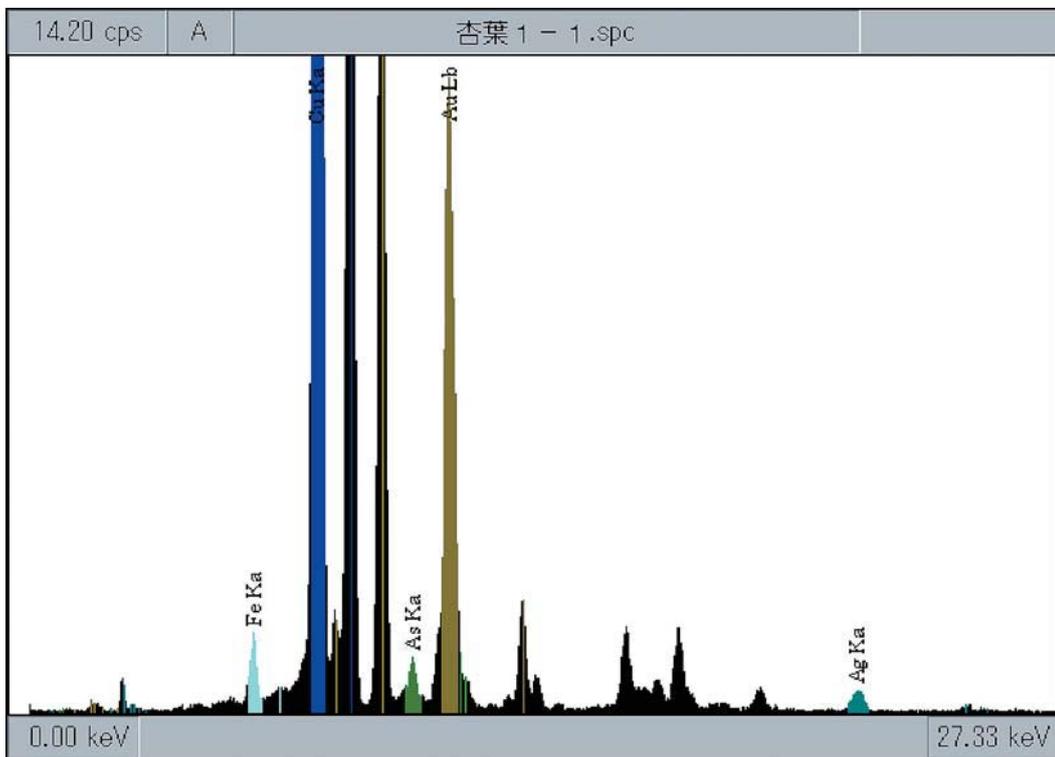
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	206
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	16
コメント	

[試料像]



視野： [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



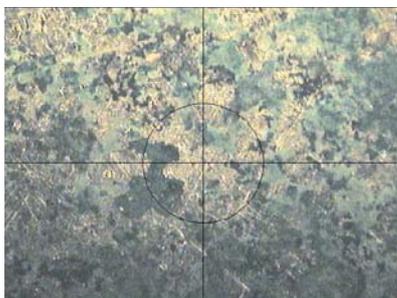
第70図 杏葉 (34-66) の金色部の XRF スペクトル

第2節 第12号墳出土金銅製杏葉の蛍光X線分析

[測定条件]

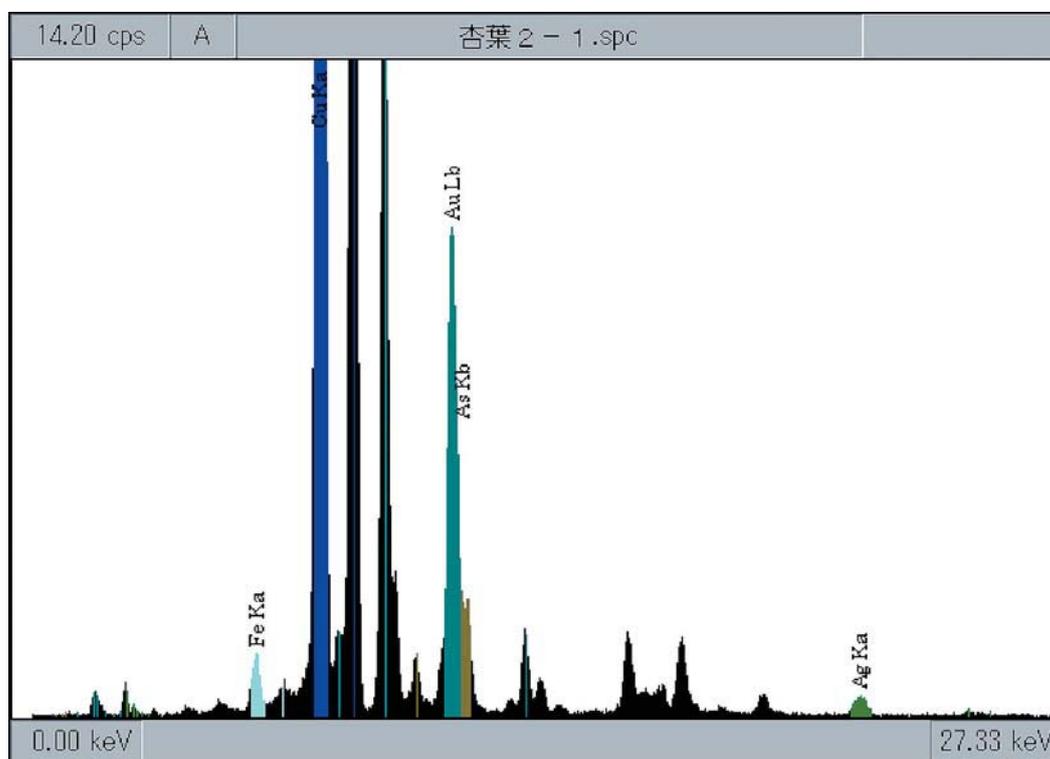
測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	206
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	16
コメント	

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]

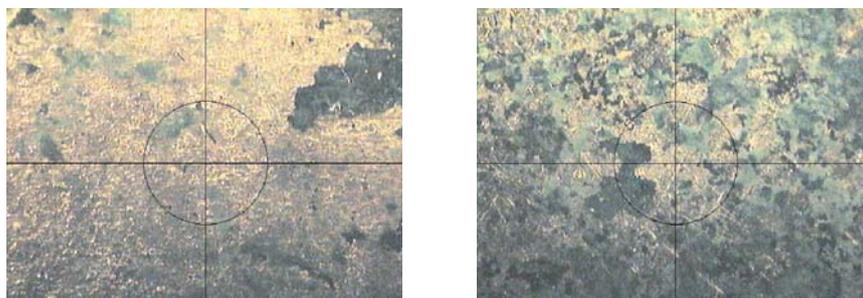


第71図 杏葉(34-65)の金色部のXRFスペクトル

[測定条件]

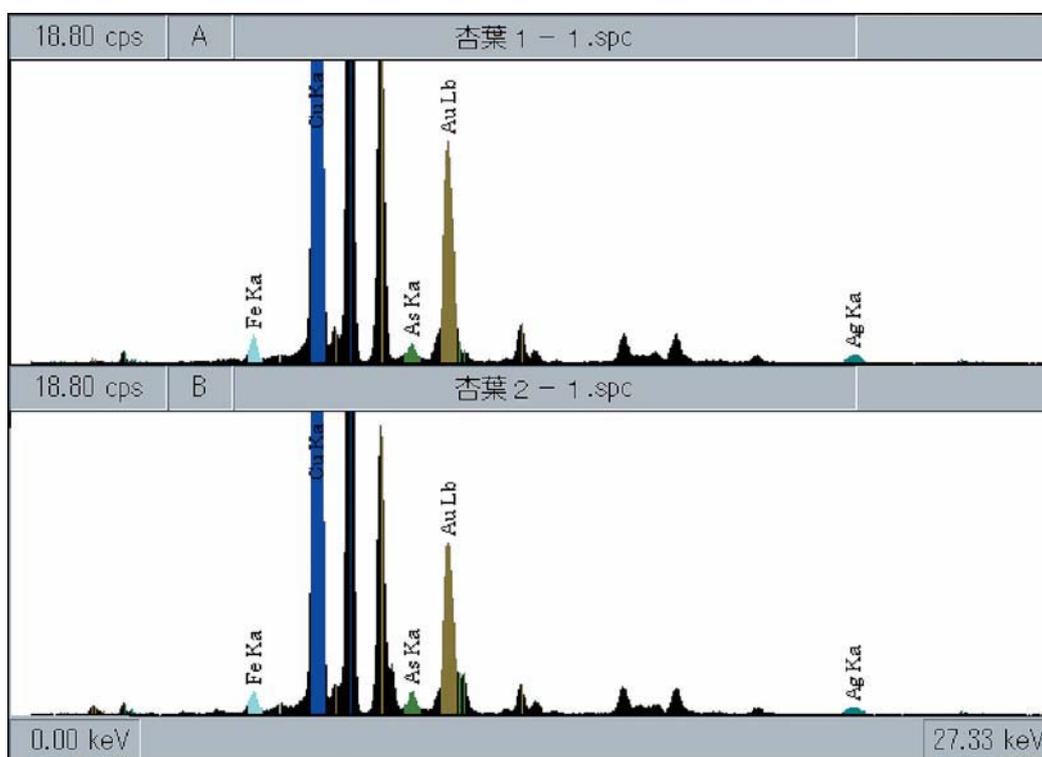
測定条件	A	B
測定装置	SEA5230	SEA5230
測定時間(秒)	300	300
有効時間(秒)	206	206
試料室雰囲気	大気	大気
コリメータ	φ1.8mm	φ1.8mm
励起電圧(kV)	45	45
管電流(μA)	16	16
コメント		

[試料像]



視野： [X Y] 6.60 4.95 (mm) [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



第72図 杏葉の金色部の XRF スペクトル (上段：34-66 下段：34-65)

第V章 調査の成果と課題

第1節 立野古墳群の構成

今回調査した古墳は10基を数える。終末期の古墳群ということ及び、主体部の遺存状態の悪さから、出土した遺物は多いとはいえない。しかし、金銅製毛彫杏葉や方頭・圭頭鏃を出土した第12号墳、紡錘車を出土した第14・17号墳、砥石を出土した第3号墳など、その被葬者の性格を推測できるような遺物も出土している。出土遺物の少なさから、古墳群内の構築順序を復元することは難しいが、石室の構築石材と古墳の規模およびその配置には、相関関係が認められる。

本節では、調査した10基の古墳の個々の属性を比較・検討し、現段階でのまとめと課題とする。

石室石材と 古墳の規模

第III章第1節で触れたように、本古墳群においては、古墳石室に使用される石材と古墳の規模には、次のような相関関係が認められる。

A—直径20mを超える大型円墳—I。石室は凝灰岩截石（第1・12・14号墳）

B—直径10m～15mの中型円墳—I。石室は凝灰岩截石（第3・17号墳）

〃 —II。石室は河原石（第11・13・15号墳）

C—直径10m以下の小型円墳—III。石室は凝灰岩片（第16・1号小石室）

古墳の規模をもとにA～Cの3分類すると、その規模に対応する石室石材は(I)(I・II)(III)となる。

本古墳群の立地する場所は、江南台地であり、石室石材の入手先としては、比企丘陵上で採掘される凝灰岩と、荒川で採取される河原礫は、距離的にはほぼ等距離で入手可能である。

それぞれの石材入手地に近い古墳の状況を見ると、荒川右岸の沖積地に100基以上分布する川本町鹿島古墳群は、その立地上石室に使用される石材は、荒川採取の河原礫であり、古墳の直径は20m以下である(埼玉県教育委員会：1972)。一方、江南台地に近い比企丘陵北端に位置する、塩狸塚27号墳は、直径23mの円墳で、石室石材は凝灰岩截石が使用されている。石室内の舗石は、石質・粒径の分析から、その採取地は、荒川河原とするよりは、比企丘陵上の水系に求められる可能性を指摘したことがある(江南町：1999)。塩西原古墳群には、直径10～20m代の凝灰岩截石石材使用の円墳(第6・7・11・22号墳)と、石室奥壁のみ凝灰岩の他は河原石が使用された第9号墳が確認されている(江南町：1995)。それぞれの石材入手可能地域においては、それぞれ産出する石材を利用するという、至極当然の結果が得られる。

本古墳群は、両石材が近距離で入手可能な地域にあり、地理的にはその折衷の様相を示すと判断される。しかし、その石材の採用にあたっては、先に見たように、築造される古墳の規模により、採用する石材の種類が異なっている。河原石を採取し積み上げる

石室と、凝灰岩を切り出し組上げる石室の構築手法では、当然その構築手法・工程は異なることから、それに関係する工人の別は置くとしても、本古墳構築集団内において異なる技術技能が要求されることとなり、それぞれの構築技術を習得した技術工人の存在が必要となる。

本古墳群においては、古墳規模から見る石材採用の優位性は、I→II→IIIとなる。その背景が、被葬者の集落内における優位性や出自に関わるものか、あるいは別の背景があるのか、比企丘陵・江南台地・荒川沖積地に立地する古墳群の属性の比較分析が、今後の課題である。

古墳の配置

第3図に、本古墳群の全測図を示したが、視覚的に2基が対となっている配置が認識できる。第12号墳（A-I）と第13号墳（B-II）、第3号墳（B-I）と第15号墳（B-II）、第17号墳（B-I）と第18号墳（B-?）、第1号墳（A-I）と第1号小石室（C-III）である。この他、調査区外の第11号墳（B-II）東側には、隣接して直径20m代の凝灰岩使用円墳が位置しており、第14号墳（A-I）の西側には、最近の試掘調査により直径10m代の円墳が存在することが確認されている。

現段階では、本古墳群の配置は、基本的にI・II-AとII-Bが対となる配置構成をとることが認識される。

各古墳の時期

本古墳群の構築順序を復元することは、構築時期の示標となるような良好な出土遺物に恵まれず、その分析手段を持たない。石室内副葬品の出土遺物の少なさは、墳丘削平等による遺存状態の悪さとともに、その副葬形態が、石室内の副葬から、前庭部における祭祀へと変化している可能性も指摘できよう。

周溝の形態・切合関係・出土遺物から判明する個々の古墳の時期および前後関係は次の通りである。

時 期	古 墳	根 拠
7世紀前葉	第3号墳→第15号墳 第1号墳	前庭部土師器甕・周溝切合 主体部鉄鏃
7世紀後葉	第18号墳 第12号墳→第13号墳・第11号墳	周溝部土師器坏 周溝切合・周溝部須恵器長頸瓶
7世紀末～8世紀初	第14号墳 第17号墳	前庭部須恵器甕 前庭部須恵器蓋
不明	第16・第1号小石室	遺物・周溝切合無

以上のことから、本古墳群は、7世紀前葉から8世紀初頭にかけての1世紀間に満たない期間に築造された古墳時代終末期の古墳群とみなす事ができる。

課 題

今回は、古墳群内の構成について大まかな比較・検討しか加えることができなかったが、現在、本調査区南側において、新たな開発事業が予定されている。第2号墳が調査対象となり、試掘調査の結果、この他3基ほどの古墳跡が事業予定地内に確認されている。今後、新たな知見が得られると思われ、本古墳群の特徴とした、古墳の規模と石材の関係・配置の規則性が周辺地域に敷衍可能なものか等、その折に改めて検討を加えたいと考える。

(森田安彦)

第2節 立野古墳群出土鉄鏃について

本古墳群からは、五角形鏃・方頭鏃・圭頭鏃・鑿箭鏃・片刃箭鏃・柳葉鏃が、出土している。第4表に、その計測値をまとめている。県内でも調査例の少ない、古墳時代終末期の当地域における様相を示すものである。

埼玉県では、1983年という比較的早い段階で、鉄鏃の古墳出土事例の集成・編年が試みられ、県内出土例の示標となっている(田中他：1983)。その後20年余りが経つが、基本的にその分類・編年体系の変更は必要無いと思われる。しかし、先の時点では触れられなかった、7世紀以降の特に集落跡出土資料はかなり蓄積されており、古墳時代から平安時代にかけての、さらには弥生時代から中世までも視野に入れた鉄鏃の北武蔵地域における系統立てた変遷の構築が可能な段階にあると考えられる。

本節では、その基礎資料として、管見に触れた、埼玉県における7世紀代以降平安時代末までの、古墳・集落出土事例を集成し、本古墳出土鉄鏃の位置付けを行うこととする。

鉄鏃研究史

古墳時代の鉄鏃の研究は、1939年後藤守一氏による「上古時代鉄鏃の年代研究」に始まる(後藤：1939)。後藤氏はこの中で、国内の鉄鏃を集成し、無茎と有茎の2種類に大別し、6種27項103目に形式分類し、年代を前・中・後期の3時期に区分している。

また、1941年には末永雅雄氏により「日本上代の武器」の中で、鉄鏃を五型式に分類(細根式・厚根式・平根式・尖根式・雁股式)している(永末：1941)。その後氏は鉄鏃を雁股・平根・尖根の3系統に再分類し(永末：1969)、さらにA～E列に新たな分類案を提示している(永末：1981)。

関東地方

両氏の研究は、その後の鉄鏃研究に多大な影響を与え、1980年代より、各地域毎で鉄鏃の分類・編年の研究が進められている。その代表的なものを以下に挙げる。

・埼玉県—1983年田中正夫・瀧瀬芳之氏は「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ—鉄鏃について—」において、埼玉県内古墳出土鉄鏃の集成・分類を行い、5世紀から7世紀にかけてV段階の変遷を示している。後藤氏の分類を客観的に再整理したものであり、以後、県内出土鉄鏃の分類・変遷の示標となっている(田中他：1983)。

・栃木県—1984年小森哲也氏は、「栃木県内古墳出土遺物考(Ⅰ)」の中で、栃木県内古墳出土の5世紀から7世紀にかけての鉄鏃を集成し、12型式に分類し、その変遷を示している(小森：1984)。

・千葉県—1986年白石久美子氏は、「東国後期古墳分析の一視点—鉄鏃から見た千葉市生実・椎名古墳群—」の中で、古墳群出土の鉄鏃の分析を通して五期区分の編年案を示し、被葬者の実態像に迫る試みを行っている(白井：1986)。1997年には、『多知波奈考古』第2号において「東国の鉄鏃」特集号が刊行されている(橘考古学会：1997)。

・神奈川県—1994年には、神奈川県立埋蔵文化財センターの古墳時代研究プロジェクトチームにより、神奈川県内72遺跡156墳墓出土鉄鏃の集成が行われ、分類・検討が加えられている(神奈川県立埋蔵文化財センター：1994)。

第4表 鉄鏃計測表

(単位: cm)

番号	図版番号	出土遺構	鏃 身 部				頸 部			備 考	
			形 態	逆刺・関	長	幅	形態	篋被形態	篋被部長		茎部長
1	10-1	SK01-008	細根・鑿箭	関無	—	(0.9)	長頸	不明	(6.6)	—	頸部欠損
2	10-2	SK01-008	平根・五角形	関有	3.5	2.5	不明	不明	(4.4)	—	茎部欠損
3	10-3	SK01-005	平根・五角形	関有	(3.0)	2.5	不明	棘篋被	3.2	(0.6)	茎部欠損
4	10-4	SK01-009	平根・五角形	関有	3.8	2.5	長頸	不明	(5.6)	—	茎部欠損
5	10-5	SK01-006	平根・五角形	関有	3.1	2.5	長頸	不明	(7.4)	—	茎部欠損
6	10-6	SK01-011	平根・五角形	関有	3.5	2.7	長頸	棘篋被	3.0	4.3	完形
7	10-7	SK01-002	平根・五角形	関有	3.5	2.5	不明	不明	(0.4)	—	頸部欠損
8	31-1	SK12	細根・鑿箭	関無	0.9	0.7	長頸	不明	(2.0)	—	頸部欠損
9	31-2	SK12	細根・鑿箭	関有	1.2	0.6	長頸	不明	(2.5)	—	頸部欠損
10	31-3	SK12	細根・鑿箭	関有	1.1	0.7	長頸	不明	(2.6)	—	頸部欠損
11	31-4	SK12	細根・鑿箭	関有	1.2	(1.1)	不明	不明	(3.0)	—	頸部欠損
12	31-5	SK12-111	細根・鑿箭	関有	(1.1)	(1.0)	長頸	不明	(3.2)	—	頸部欠損
13	31-6	SK12	細根・鑿箭	関有	1.1	(0.6)	不明	不明	(3.9)	—	頸部欠損
14	31-7	SK12-014	細根・鑿箭	関有	1.6	0.7	長頸	不明	(3.4)	—	頸部欠損
15	31-8	SK12-125	細根・鑿箭	関無	1.2	0.6	長頸	不明	(5.9)	—	頸部欠損
16	31-9	SK12-6	細根・鑿箭	関無	1.0	0.6	長頸	不明	(9.9)	—	頸部欠損
17	31-10	SK12-004	細根・鑿箭	関無	1.0	0.6	長頸	棘篋被	8.2	(3.2)	茎部欠損
18	31-11	SK12	細根・鑿箭	関有	0.9	0.7	長頸	棘篋被	9.4	(1.2)	茎部欠損
19	31-12	SK12	細根・鑿箭	関有	1.2	0.8	不明	不明	(5.3)	—	頸部欠損
20	31-13	SK12-127	細根・片刃箭	関有	2.2	0.7	長頸	不明	(1.9)	—	頸部欠損
21	31-14	SK12-009	細根・鑿箭	関無	1.0	0.8	長頸	不明	(3.2)	—	頸部欠損
22	31-15	SK12	細根・片刃箭	関無	0.7	0.4	長頸	不明	(4.7)	—	頸部欠損
23	31-16	SK12	細根・片刃箭	関有	2.5	0.6	長頸	不明	(1.8)	—	頸部欠損
24	31-17	SK12	細根・片刃箭	関有	2.8	0.8	長頸	不明	(1.4)	—	頸部欠損
25	31-18	SK12	細根・片刃箭	関有	2.9	0.7	長頸	不明	(4.5)	—	頸部欠損
26	31-19	SK12	細根・片刃箭	関有	2.6	0.8	長頸	不明	(7.8)	—	頸部欠損
27	31-20	SK12-012	平根・圭頭	関有	4.8	2.1	不明	不明	-1.7	—	頸部欠損
28	31-21	SK12-119	平根・圭頭	関有	(3.5)	(1.6)	不明	不明	(1.7)	—	頸部欠損
29	31-22	SK12-082	平根・圭頭	不明	(4.1)	1.8	不明	不明	—	—	頸部欠損
30	31-23	SK12	平根・圭頭	関有	(1.7)	(2.8)	不明	不明	(0.5)	—	頸部欠損
31	31-24	SK12-012	平根・圭頭	不明	(2.3)	(1.8)	不明	不明	—	—	頸部欠損
32	31-25	SK12-003	平根・方頭	関有	6.1	2.6	不明	不明	—	—	頸部欠損
33	31-26	SK12-136	平根・方頭	不明	(6.3)	(2.4)	不明	不明	—	—	頸部欠損
34	31-27	SK12	平根・方頭	不明	(2.5)	2.5	不明	不明	—	—	頸部欠損
35	31-28	SK12-109	平根・方頭	不明	(4.6)	2.4	不明	不明	—	—	頸部欠損
36	31-29	SK12-120	平根・方頭	関有	6.2	2.1	不明	不明	—	—	頸部欠損
37	32-30	SK12	細根・柳葉	逆刺有	(3.0)	(0.8)	不明	不明	(0.6)	—	頸部欠損
38	32-31	SK12-130	細根・柳葉	逆刺有	3.2	(0.9)	不明	不明	(0.4)	—	頸部欠損
39	32-32	SK12	細根・柳葉	逆刺有	(2.9)	0.8	長頸	不明	(1.3)	—	頸部欠損
40	32-33	SK12	細根・柳葉	逆刺有	2.8	1.0	長頸	不明	(5.1)	—	茎部欠損
41	32-34	SK12	不明	関有	(1.9)	1.3	不明	不明	(1.1)	—	頸部欠損
42	32-35	SK12	不明	関有	(2.1)	1.6	不明	不明	(1.4)	—	頸部欠損
43	32-36	SK12	不明	不明	—	—	不明	不明	(8.2)	—	鏃身・頸部欠損
44	32-36	SK12	不明	不明	—	—	不明	不明	(2.3)	—	鏃身・頸部欠損
45	32-37	SK12	不明	不明	—	—	不明	不明	(7.6)	—	鏃身部・頸部欠損
46	32-38	SK12-108	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(3.4)	(2.5)	鏃身・頸部欠損
47	32-39	SK12	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(3.5)	(2.6)	鏃身・頸部欠損
48	32-40	SK12	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(3.4)	(0.7)	鏃身部・頸部欠損
49	32-41	SK12-148	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(1.3)	(3.7)	鏃身・茎部欠損
50	32-42	SK12	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(0.9)	6.8	鏃身・篋被部欠損
51	32-43	SK12-146	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(5.7)	(1.7)	鏃身・頸部欠損
52	32-44	SK12-111	不明	不明	—	—	長頸	不明	—	(8.4)	鏃身部欠損
53	32-45	SK12-126	不明	不明	—	—	不明	不明	—	(7.1)	鏃身・篋被部欠損
54	32-46	SK12	不明	不明	—	—	長頸	不明	—	(5.5)	鏃身部・頸部欠損
55	32-47	SK12	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(4.3)	(1.3)	鏃身・頸部欠損
56	32-48	SK12	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(6.7)	(1.0)	鏃身・頸部欠損
57	32-49	SK12-017	不明	不明	—	—	長頸	棘篋被	(9.0)	(1.8)	鏃身部・頸部欠損
58	40-1	SK13-004	細根・鑿箭	関無	1.2	0.7	長頸	不明	(1.2)	—	頸部欠損
59	40-2	SK13-004	細根・鑿箭	関無	1.2	0.8	長頸	不明	(4.1)	—	頸部欠損
60	40-3	SK13-004	細根・鑿箭	関無	1.3	0.7	長頸	不明	(5.0)	—	頸部欠損
61	40-4	SK13-004	広根・五角形	関有	3.2	2.2	不明	不明	(1.6)	—	頸部欠損
62	40-5	SK13-004	不明	不明	—	—	長頸	棘篋被	(6.3)	1.1	鏃身部・頸部欠損
63	40-6	SK13-004	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(8.2)	2.4	鏃身部・頸部欠損
64	40-7	SK13-004	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(2.8)	3.5	鏃身部・頸部欠損
65	40-8	SK13-004	不明	不明	—	—	不明	不明	—	(4.6)	鏃身部・頸部欠損
66	45-1	SK14-006	不明	不明	—	—	不明	棘篋被	(5.4)	4.6	鏃身・篋被部欠損
67	59-1	SK17-010	細根・鑿箭	関有	0.9	0.6	不明	棘篋被	7.0	3.4	完形

・多摩川流域—2001年には、折原学氏が「多摩川下流域横穴墓出土の鉄鏃についての考察」において、多摩川下流域における横穴墓出土鉄鏃を集成し、右岸と左岸域における差異を指摘している（折原：2001）。

集落跡

一方、集落における鉄鏃の出土状況から当時の社会構造の解明を試みる視点を示したものとして、多摩川流域における7世紀代の集落出土鉄鏃の編年と性格付けを行った、1982年池上悟氏による「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」がある（池上：1982）。その後の関東地方に関連した論考に、以下のものを挙げる。

・1989年—平野修氏は「奈良・平安時代集落出土の鉄鏃をめぐる若干の問題—山梨県を中心として—」の中で、山梨県内の集落跡出土鉄鏃の集成・分類を行ない、鉄鏃所有をめぐる問題について考察を加えている（平野：1989）。

・1990年—津野仁氏は、「古代・中世の鉄鏃」の中で、東国における古代から中世にかけての集落跡出土鉄鏃を集成・分析し、V段階の変遷を示している（津野：1990）。

・1991年—飯塚武司氏は、「鉄鏃」の中で、6世紀から11世紀代にかけての多摩川流域における古墳・集落出土の鉄鏃を集成して、系統的な変化を示している（飯塚：1991）。

・1992年—関義則氏は、氷川神社遺跡の報告書中において、平安時代の雁股鏃の分類・分析を行っている（関：1992）。

・2002年—佐藤達雄氏は「古墳時代集落における鉄器」の中で、静岡県内集落跡出土の鉄器の集成を行っており、鉄鏃を含めた集落内における鉄器の在り方について検討を加えている（佐藤：2002）。

研究の現状

鉄鏃の研究は、「形式分類」に始まり、「編年」「生産」「流通」とその所有形態としての「社会構造」の把握に至るまで非常に多岐に渡っており、形式学的には、全体像の把握から、細分化された地域性の把握、そして再び全体像の構築へと研究は深化しているとみることができる。

方頭・圭頭鉄鏃

本古墳群第12号墳からは、方頭鏃5、圭頭鏃5が出土している。

両形式は、各々古墳時代全期間を通じて存在する鏃であるが、方頭鏃は、西日本特に北九州地方において濃密な分布を示すもので、杉山秀宏氏により高句麗・新羅系の鉄鏃であることが指摘されている（杉山：1988）。氏はこの中で、TK43併行期以降（第八様式）における広根鏃の地域様式として、北九州地方を中心に分布する、方頭鏃・圭頭鏃に代表されるE様式とし、遠江・駿河・甲斐を中心に関東地方は五角形鏃に代表されるB様式と設定している。本様式期における副葬品の鉄鏃組成は、基本的に、広根系の鏃が少数副葬され、それと数本～数十本の長頸鏃がセットをなすことを指摘している。

管見に触れた東国における方頭・圭頭鏃を第5表に挙げた。

方頭鏃は、本遺跡以外では、埼玉県内で古墳出土例が2基2点、集落跡出土例が1遺跡9点となっている。東国における初出は、千葉県富津市内裏塚古墳（千葉県：2003）で、5世紀中葉前半に位置付けられている。この出現期は、北九州地方とほぼ同時期を示しており、東国において、1点ではあるがほぼ同時期に出土しているという事実は注目される。その後古墳時代中期においてはほとんど出土せず、6世紀末葉から各地に出現する群集墳や横穴墓群において再び出現している。8世紀後半の神奈川県久地西前田

第5表 関東地方における方頭・圭頭鉄鏝出土遺跡一覧

	都県名	市町村名	遺 跡 名	内 容	時 期	文 献	
1	神奈川県	川崎市	久地西前田2号横穴墓	方頭1	8世紀後半	1998年調査団「久地西前田横穴墓群—第2次調査—」久地西前田横穴墓発掘調査団	
2		秦野市	桜土手古墳群6号墳	圭頭1	7世紀後半	1989年『秦野桜土手古墳群の調査』吉田章一郎	
3			桜土手古墳群37号墳	圭頭1	7世紀後半		
4		伊勢原市	さんせ塚古墳	方頭1	7世紀後半	1979年『神奈川県史20』資料編 考古資料 神奈川県	
5			上板東古墳群1号墳	圭頭1	5世紀後半	1987年『比々多遺跡群』滝澤 亮	
6		相模原市	向原遺跡第39号住居跡	方頭	10世紀	1983年『向原遺跡』神奈川県教育委員会・神奈川県立埋蔵文化財センター	
7	静岡県	静岡市	瀬名遺跡	圭頭1	5世紀	1994年『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』(静岡岡県埋蔵文化財研究所)	
8		清水市	長崎遺跡	圭頭1	古墳時代前期	1995年『長崎遺跡（遺物・考察編）』(静岡岡県埋蔵文化財研究所)	
9		伊豆長岡町	大北34号横穴墓	方頭1	7世紀後半	1981年『大北横穴群』伊豆長岡町教育委員会	
10		藤枝市	瀬戸3号墳	方頭1		1969年『瀬戸古墳群Ⅰ』西駿考古学研究会	
11			釣瓶落1号墳	方頭1		1983年『若王子・釣瓶落古墳群』藤枝市教育委員会	
12		菊川町	篠ヶ谷SA4号	方頭1			
13			西宮浦N1号	圭頭1			
14			浜松市	半田山B古墳群4号	方頭1・圭頭1		1988年『半田山古墳群（IV中支群）』浜松市教育委員会
15		磐田市	権現山2号墳	方頭1		1983年『横穴式粘土室の基礎的研究』『考古学雑誌』第68-4号	
16		掛川市	各和金塚古墳	圭頭2		1981年『各和金塚古墳測量調査報告書』掛川市教育委員会	
17			宇洞ヶ谷横穴	圭頭1	7世紀後半	1971年『掛川市宇洞ヶ谷横穴墓発掘調査報告書』静岡県教育委員会	
18		小山町	横山遺跡	方頭1	7世紀中～8世紀前	1984年『横山遺跡』小山町教育委員会	
19		引佐町	馬場平古墳	圭頭1	古墳時代中期	1983年『馬場平古墳発掘調査報告書』引佐町の古墳文化Ⅲ 引佐町教育委員会	
20	栃木県	足利市	足利公園古墳	方頭1		1939年 後藤守一 『上古時代鉄鏝の年代研究』『人類学雑誌』54巻4号	
21		小山市	飯塚古墳群	方頭1		1981年『小山市史』資料編・原始古代 小山市	
22	群馬県	吉岡村	大久保A遺跡Ⅱ区第105号住居跡	方頭	10世紀	1986年『大久保A遺跡Ⅱ区』吉岡村教育委員会・群馬県教育委員会	
23		子持村	白井遺跡第56号住居跡	方頭1	8世紀前半	1996年『白井遺跡群—集落編Ⅱ—』群馬県教育委員会・(群馬県埋蔵文化財調査事業団)	
24	埼玉県	江南町	立野古墳群12号墳	方頭5/圭頭5	7世紀後半	2005年 本書	
25		東松山市	附川古墳群附川1号墳	方頭1	6世紀末葉～7世紀初頭	1961年『南中学校校庭内古墳の発掘』東松山市文化財調査報告第1集 東松山市教育委員会	
26		熊谷市	三ヶ尻林4号墳	方頭1	6世紀後半～7世紀初	1983年『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書VI 三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	
27			蓮田市	椿山遺跡第9号住居跡	方頭1	9世紀後半	1989年『椿山遺跡—第3・4次調査—』蓮田市文化財調査報告書第13集 蓮田市教育委員会
28				椿山遺跡第19号住居跡	方頭2	9世紀末～10世紀初	
29				椿山遺跡第24号住居跡	方頭1	9世紀末～10世紀初	
30				椿山遺跡第31号住居跡	方頭1	9世紀末～10世紀初	
31				椿山遺跡第35号住居跡	方頭2	9世紀末～10世紀初	
32		椿山遺跡第52号住居跡	方頭2	10世紀後半			
33		千葉県	富津市	内裏塚古墳	方頭1	5世紀中葉前半	2003年『内裏塚古墳』『千葉県の歴史』資料編 考古2 千葉県
34	九条塚古墳			方頭1	6世紀前半	2003年『九条塚古墳』『千葉県の歴史』資料編 考古2 千葉県	
35	光町		小川台古墳1号墳	圭頭1	5世紀	1975年『下総小川台古墳群』芝山にはい博物館	
36	市原市		荒久遺跡住居	方頭2	平安時代	2002年『上総市原台の奈良・平安時代鉄鏝』『土筆』第7号 田中新史	
37			荒久遺跡	方頭1	平安時代		
38	成田市		宗吾西鷲山遺跡第124a号住居跡	方頭1	7世紀	1986年『宗吾西鷲山遺跡』成田市教育委員会	
39	千葉市		椎名崎3号墳	方頭2	7世紀中	1975年『千葉南部ニュータウン1』千葉県都市公社	
40			ムコアラク2号墳	圭頭	7世紀後	1982年『千葉南部ニュータウン8』千葉県文化財センター	
41	佐倉市		大作28号墳	方頭5	7世紀	1990年『佐倉市大作遺跡』千葉県文化財センター	
42			栗野1遺跡古墳049	方頭1	7世紀	1991年『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』	
43	東京都		調布市	上石原第5.6地点 S105	圭頭1	7世紀後半	1987年『調布市上石原遺跡』調布市教育委員会
44			日野市	平山1号墓	方頭1	8世紀後半	1985年『日野市史 史料集 考古資料編』日野市史編さん委員会
45		青梅市	裏宿遺跡1号住居	方頭1	9世紀	1985年『裏宿遺跡』青梅市遺跡調査会	
46		練馬区	貫井二丁目遺跡Ⅱ-6号住	方頭1	9世紀	1985年『貫井二丁目遺跡』練馬区遺跡調査会	
47		府中市	武蔵国府関連遺跡	方頭1	10世紀中葉	1984年『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅵ』府中市教育委員会	
48		多摩市	多摩ニュータウン遺跡	方頭1	8世紀末		
49			多摩ニュータウンNo.5遺跡	方頭1	9世紀	1987年『多摩ニュータウンNo.5遺跡』『多摩ニュータウン遺跡—昭和60年度—』第2分冊 (財)東京都埋蔵文化財センター	

第2節 立野古墳群出土鉄鏃について

2号横穴墓出土例（久地西前田横穴墓発掘調査団：1998）が、墳墓に副葬された下限であり、10世紀後半の埼玉県椿山遺跡52号住居例（蓮田市教育委員会：1989）が、集落跡より出土した下限となっている。

このような出土状況は、圧倒的な出土量の差は存在するものの、北部九州地方を中心とする地域の動向と連動しており、畿内地域には基本的にみられない形式が、東国においても同様の傾向を示す背景の解明は今後の課題である。

圭頭鏃は、県内では初の確認例となっている。圭頭鏃は方頭鏃同様、北部九州地方を中心に濃密な分布を示すことが杉山秀宏氏により指摘されており（杉山：1988）、畿内を挟んで東国にも少量ではあるが分布域が認められている。東国においては、千葉県小川台古墳1号墳（芝山はにわ博物館：1975）・神奈川県上板東古墳1号墳（滝澤：1987）・静岡県瀬名遺跡例（財団法人静岡県埋蔵文化財研究所：1994）が初出と思われ、5世紀代に位置付けられる。下限は、神奈川県桜土手古墳6・37号墳（吉田：1989）・静岡県宇洞ヶ谷横穴（静岡県教育委員会：1971）・東京都上石原SI5出土例（調布市教育委員会：1987）の7世紀後半であり、以後の集落跡からも、管見では確認されない。

県内の鉄鏃

埼玉県においては、先に触れたように古墳時代の鉄鏃の集成・分類・編年は、1980年代に既に行われていることから、ここでは、7世紀以降平安時代末までの、管見に触れた県内資料を集成し、そのおおまかな変遷を概観してみたい。第6表に県内の集落跡出土鉄鏃の集成表を示した。第73図にその変遷を示したが、あくまでも概観であり、鉄鏃の細かい形態分類や形式設定に基づいた系統の変遷を示したものでない。今後さらなる分析が必要となるものである。

方頭鏃

県内における方頭鏃の初出は、熊谷市三ヶ尻林4号墳（4；財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1983）・東松山市附川1号墳（1；東松山市教育委員会：1961）例となる。6世紀末から7世紀初頭に位置付けられるもので、形態的に、関の有無によって分類が可能である。関のあるものは、本遺跡12号墳例（2）から、時代が下がって10世紀前後に位置付けられている蓮田市椿山遺跡24号住居例（3）につながる。

圭頭鏃

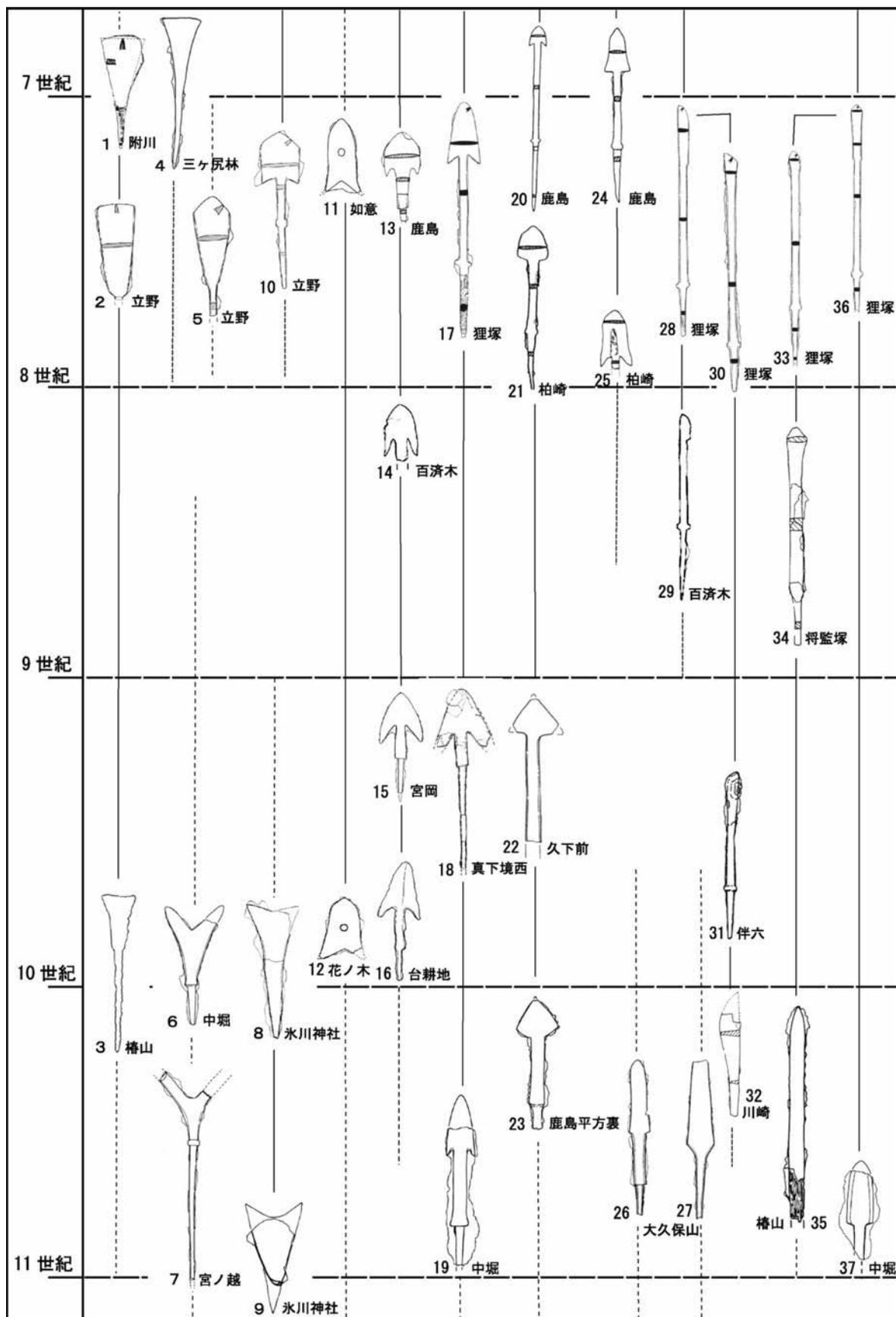
県内では、本古墳12号墳例（5）のみで、その系統は今のところ県内では追えない。

雁股鏃

雁股鏃は、古墳時代中期から近世まで使用される特徴的な鏃である。県内では、上里町中堀遺跡SJ220（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1997）から、9世紀第四半期に属する短頸雁股鏃が出土しており、区画溝11からも同形のものが出土している（6）。二股袂が深く、関があるもので、畿内においては6世紀頃に出現するタイプのものであるが、県内では管見に触れない。同形の長頸雁股鏃が、狭山市宮ノ越遺跡第6号住居跡（埼玉県遺跡調査会：1982）から出土しており（7）、10世紀中葉に位置付けられている。さいたま市氷川神社遺跡H19・20（大宮市遺跡調査会：1993）からは、10世紀前後に位置付けられる二股袂の浅い、関の無いタイプのもものが出土している（8）。11世紀前後に位置づけられる同遺跡H43出土例（9）につながる。このタイプが出現するのは、9世紀以降との指摘が関義則氏によりなされている（関：1993）。

五角形鏃

川本町鹿島古墳群1号墳（埼玉県教育委員会：1972）からは、短頸の五角形鏃4点と長三角形鏃2点・三角形鏃3点が出土しており、鹿島古墳群9号墳からは、短頸の五角



第73図 鉄鍬変遷図

第2節 立野古墳群出土鉄鏃について

第6表 埼玉県内集落跡出土鉄鏃一覧

市町村名	遺跡名	内容	時期	文献	備考
1 江南町	天神遺跡第2号住居跡	三角形	9世紀半	未報告	
2 深谷市	上敷免遺跡第149号住居跡			1993年「上敷免遺跡-V-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
3	新屋敷東第119号住居跡				先端部欠損
4	新屋敷東第23号住居跡	鑿箭式			
5	新屋敷東第29号住居跡			1992年「新屋敷東・本郷前東 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財は履調査報告書-III-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	両端欠損
6	新屋敷東第67号住居跡	鑿箭式			
7	新屋敷東第72号住居跡				両端欠損
8	新屋敷東第82号住居跡				両端欠損
9	新屋敷東第119号住居跡				両端欠損
10 川本町	平方裏遺跡第18号住居跡	三角形	10世紀前半	1995年「鹿島平方裏遺跡発掘調査報告書」川本町遺跡調査会報告書第3集 川本町遺跡調査会	
11	如意南遺跡第6.7号住居跡	三角形	9世紀後半	2004年「如意南遺跡II」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第294集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
12	如意遺跡第280号住居跡	不明	平安時代		
13	如意遺跡第258号住居跡	鑿箭式			
14	如意遺跡第264号住居跡	不明			
15	如意遺跡第475号住居跡	柳葉形1			
16	如意遺跡第481号住居跡	不明			
17	如意遺跡第500号住居跡	三角形			
18	如意遺跡第508号住居跡	鑿箭式			
19	如意遺跡第530・531号住居跡	不明		2003年「如意遺跡IV」埼玉県埋蔵文化財調査事業団第285集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
20	如意遺跡第444号住居跡	鑿箭式			
21	如意遺跡第447号住居跡	三角形	7世紀前半		
22	如意第456号住居跡	不明			
23	如意第473号住居跡	三角			
24	如意第357号住居跡	不明			
25	如意遺跡第348号住居跡	三角	7世紀初		
26	百済木遺跡B区3号住居跡	鑿箭式	7世紀末～8世紀初頭		
27	百済木遺跡G区1号住居跡	三角・不明	7世紀末～8世紀初頭	2003年「百済木遺跡」川本町遺跡調査会報告書第8集 川本町遺跡調査会	両端欠損
28	百済木遺跡2号地下式坑		中世		
29	百済木遺跡1号井戸		中世		
30 熊谷市	在家遺跡第1号住居跡	不明1	9世紀前半	1998年「在家遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第220集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
31 花園町	台耕地遺跡第43号住居跡	三角形・長三角形	9世紀第3四半期	1984年「開越自動車道関係 埋蔵文化財発掘調査報告書XIX 台耕地(II)」朝崎玉県埋蔵文化財調査埼玉県埋蔵文化財調査事業団	
32 毛呂山町	まま上遺跡第3号住居跡	不明1	9世紀前葉～中葉	1995年「まま上遺跡 第2次調査・第3次調査」毛呂山町埋蔵文化財調査報告第10集 毛呂山町教育委員会	
33	伴六遺跡第3号住居跡	三角形	9世紀第3四半期		
34	伴六遺跡第5号住居跡	片刃箭式	9世紀第3四半期	1982年「毛呂山団地関係 埋蔵文化財発掘調査報告書 伴六」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第11集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
35	伴六遺跡第7号住居跡	不明1	9世紀第4四半期		
35 児玉町	将監塚・古井戸遺跡H-41住居	鑿箭式3点	8世紀第2四半期～中葉	1986年「将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編I 児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書-III-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	馬具(鉸具・轡)・武具(挂甲)・小札伴出
36	臼樹原遺跡H-116号住居跡	鑿箭式1		1991年「臼樹原・榎下遺跡III 奈良・平安時代編2」臼樹原・榎下遺跡調査報告書第3集 臼樹原・榎下遺跡調査会	
37 美里町	猪俣北古墳群第21号住居跡		6世紀中	1998年「猪俣北古墳群 引地遺跡・滝ノ沢遺跡」美里町遺跡発掘調査報告書第9集 美里町教育委員会	刀子?
38	猪俣北古墳群第77号住居跡				刀子?
39 上里町	中堀遺跡 SJ35	長三角形	9世紀第4四半期		
40	中堀遺跡 SJ104	長三角形	10世紀第4四半期		
41	中堀遺跡 SJ199	長三角形	9世紀第4四半期		
42	中堀遺跡 SJ220	雁股式	9世紀第4四半期	1997年「中堀遺跡 御陣場川堤調節池関係埋蔵文化財調査報告」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
43	中堀遺跡 SJ234	長三角形1・不明1	10世紀第1四半期		
44	中堀遺跡 SK211	長三角形			
45	中堀遺跡 SK373		10世紀第3四半期		
46	中堀遺跡区画溝11	雁股式			
47	田通遺跡 A-21号住居跡	不明1		1997年「田通遺跡」上里町教育委員会	
48 神川町	真下境西遺跡H-5号住居跡	三角形1	9世紀前半	1995年「真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡-I」神川町教育委員会文化財調査報告第12集 神川町教育委員会	
49	中原遺跡H-31号住居跡	三角形1・片刃箭1		1999年「中原・金裏・久保宿・観音院南・光現寺・北原遺跡・大蔵塚」神川町教育委員会文化財調査報告第18集 神川町教育委員会	
50 本庄市	南大通り線内遺跡第24号住居跡	鑿箭式? 1	6世紀後半	1998年「埼玉県本庄市南大通り線内遺跡発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第2分冊 本庄市教育委員会	ヤリガンナ?
51	今井川越田遺跡第203号住居跡	不明1	6世紀後半～7世紀前半	1996年「今井川越田遺跡II」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集 朝崎玉県埋蔵文化財調査事業団	
52	久下前遺跡第7号住居跡	三角形1	9世紀後半	2002年「久下前遺跡第3地点発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告第25集 本庄市教育委員会	
53	大久保山遺跡第85号住居跡	三角形			
54	大久保山遺跡第88号住居跡	柳葉	10世紀	1996年「大久保山II」早稲田大学本庄校地文化財調査報告4 早稲田大学本庄校地文化財調査室	
55	大久保山遺跡第109号住居跡	柳葉形1	10世紀		

第V章 調査の成果と課題

市町村名	遺 跡 名	内 容	時 期	文 献	備 考
56 行田市	築道下遺跡 SJ425	不明	7世紀第4四半期	2000年『築道下遺跡Ⅲ 行田市南部工業団地造成地築道下遺跡Ⅲ文化財発掘調査報告書Ⅳ-1』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	鎌身部欠損
57	根切遺跡20号住居跡	不明		1993年『市内遺跡発掘調査報告 根切遺跡(C-1遺跡) 一第4次調査一』	先端部欠損
58	根切遺跡44号住居跡	不明			先端部欠損
59	水川神社遺跡第H-3	三角形1・片刃箭1・不明1			
60	水川神社遺跡第H-4	雁股式	9世紀後葉～10世紀前半		
61	水川神社遺跡第H-6.7	三角形	9世紀後葉～10世紀前半	1993年『水川神社東遺跡 水川神社遺跡 B-17号遺跡』大宮市遺跡調査報告第42集 大宮市遺跡調査会	
62	水川神社遺跡第H-10	不明1	9世紀中葉		
63	水川神社遺跡第H-14	不明1			
64	水川神社遺跡第H-19.20	雁股式4	11世紀前半		
65	水川神社遺跡第H-24	不明2	11世紀前半		
66	水川神社遺跡第H-43	雁股式1・不明2	11世紀前半		
67	椿山遺跡第3号生産跡	長三角形	10世紀前半	1989年『椿山遺跡一第3・4次調査一』蓮田市文化財調査報告書第13集 蓮田市教育委員会	先端部欠損
68	椿山遺跡第9号生産跡	方頭式	9世紀後半		
69	椿山遺跡第19号住居跡	方頭2・長三角形1・不明2	9世紀末～10世紀初		
70	椿山遺跡第20号住居跡	雁股式・長三角形	9世紀末～10世紀初		
71	椿山遺跡第22号住居跡	雁股式・不明	10世紀前半		
72 蓮田市	椿山遺跡第24号住居跡	方頭式	9世紀末～10世紀初		
73	椿山遺跡第30号住居跡	不明	9世紀後半		先端部欠損
74	椿山遺跡第31号住居跡	方頭式	9世紀末～10世紀初		
75	椿山遺跡第35号住居跡	方頭式2	9世紀末～10世紀初		2点
76	椿山遺跡第48号住居跡	鑿箭式	10世紀前半		
77	椿山遺跡第52号住居跡	方頭式2	10世紀後半		2点
78	中野遺跡第9号住居跡	柳葉式7・三角形2	5世紀後半～6世紀前半	1993年『志木市遺跡群V』志木市の文化財第20集 志木市教育委員会	
79	中野遺跡第12号住居跡	不明1	国分式期		
80 志木市	田子山遺跡第8号住居跡	不明2	国分式期	1992年『中道遺跡第12地点 中道遺跡壘13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会	
81	田子山遺跡第50号住居跡	雁股式1・不明1		1997年『志木市遺跡群Ⅶ』色紙の文化財第25集 志木市教育委員会	
82	田子山遺跡第18号住居跡	不明1	8世紀後半～9世紀前半	2000年『埼玉県志木市埋蔵文化財調査報告書1』志木市の文化財第29集 志木市教育委員会	
83	田子山遺跡第64号住居跡	不明1	9世紀前葉～中葉	2003年『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第35集 志木市教育委員会	
84 和光市	花ノ木遺跡第7号住居跡	無到鎌	9世紀後半	1994年『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	
85 北本市	宮岡遺跡第3号住居跡	三角形	9世紀初	1998年『丸山遺跡 富岡遺跡第2次調査』北本市埋蔵文化財調査報告書第7集 北本市教育委員会	
86 坂戸市	勝呂庵寺第4号住居跡	三角形	9世紀前半	1981年『勝呂庵寺』坂戸市教育委員会	
87	山田遺跡	三角形	9世紀	1973年『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会 埼玉県遺跡調査報告書第18集	
88 上福岡市	川崎遺跡第6号住居跡	片刃箭式	10世紀前半	1978年『川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡発掘調査報告書』上福岡市教育委員会	
89 所沢市	東の上遺跡	三角形	9世紀初	1976年『東の上遺跡』所沢市教育委員会	
90	宮ノ越遺跡第4号住居跡	不明	9世紀後半		
91	宮ノ越遺跡第6号住居跡	雁股式	10世紀中葉	1982年『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会 埼玉県遺跡調査報告書第44集	
92	宮ノ越遺跡第26号住居跡	三角?	10世紀第1四半期		
93 狭山市	今宿遺跡第13号住居跡	三角形1			
94	今宿遺跡第29号住居跡	三角形1		1987年『狭山市埋蔵文化財調査報告書5 今宿遺跡』狭山市文化財報告12 狭山市教育委員会	
95	今宿遺跡第34号住居跡	三角形1			
96	揚雄木遺跡第56号住居跡	雁股式1		1986年『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 揚雄木遺跡』狭山市文化財報告11 狭山市教育委員会	
97	揚雄木遺跡第82号住居跡	雁股式1			

形鏃1点と長三角形鏃2点が出土している。細根系の長頸鏃は伴出していないが、7世紀初頭から7世紀前半に比定されている。

美里町猪俣北1号墳（美里町教育委員会：1998）からは、短頸五角形鏃3点と長三角形鏃1点と長頸鏃の片刃箭鏃3点が出土しており、7世紀前半に比定されている。いずれも、杉山氏の指摘するTK43併行期以降のB様式の設定を傍証するものである。

また、五角形鏃以外の広根系鉄鏃のセット関係を示す好例として、江南町狸塚27号墳例（江南町教育委員会：1999）が挙げられる。新旧2群に分類される鉄鏃が出土しており、短頸の三角鏃1点と長頸の長三角鏃1点(17)に鏃身関のある鑿箭式鉄鏃2点(36)・片刃箭式鉄鏃8点(28)と、長頸の三角鏃2点に鏃身関をもたない鑿箭式鉄鏃2点(33)・片刃箭式鉄鏃3点(30)の組み合わせに分類している。前者が7世紀前半、後者が7世紀中葉に比定されており、広根系鉄鏃とのセット関係において、細根系鉄鏃の形態差による時期差を示している。

本古墳群第1号墳から 短頸の五角形鏃5点(10)が出土している。伴出している細根系の長頸鏃は鏃身関のない片刃箭式鉄鏃（第11図1）であり、江南町狸塚古墳例を参考にするなら、新しい様相を示していると判断される。

無茎鏃

7世紀前半に属する川本町如意遺跡497号住居（（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：2003）から出土している、鏃身部中央に単孔が穿たれる無茎三角鏃(11)は、関東以北において主に分布する形式である。弥生時代から認められる形式で、9世紀後半の和光市花ノ木遺跡7号住居例(12；（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1994)につながるものである。

長三角鏃

古墳時代から平安時代にかけて、普遍的に存在する鏃である。7世紀前半に位置付けられる江南町狸塚27号墳例(17)から、9世紀前半の神川町真下境西遺跡H5号住居例(18；神川町教育委員会：1995)、10世紀第四半期の上里町中堀遺跡SJ104例(19；（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1997)につながる。

三角鏃

長三角鏃同様、古墳時代から平安時代にかけて、普遍的に存在する鏃である。6世紀後半から7世紀初頭に位置付けられる川本町鹿島古墳12号墳出土例(20)から、7世紀後半の東松山市柏崎6号墳例(21；東松山市教育委員会：1968)、9世紀後半の本庄市久下前遺跡7号住居例(22；本庄市教育委員会：2002)、10世紀前半の川本町平方裏遺跡18号住居例(23；川本町遺跡調査会：1995)につながる。

短頸のものは、7世紀前半に位置付けられる川本町鹿島25号墳例(13)から、8世紀初頭の川本町百済木遺跡G区1号住居例(14；川本町遺跡調査会：2003)、9世紀初頭の北本市宮岡遺跡3号住居例(15；北本市教育委員会：1998)、9世紀第3四半期の花園町台耕地遺跡第43号住居跡例(16；（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団：19894)へとつながる。

柳葉鏃

6世紀後半から7世紀初頭に位置付けられる川本町鹿島6号墳例(24)から、7世紀後半の東松山市柏崎5号墳例(25)へとつながる。この他、鹿島6号墳例と同時期のものに熊谷市万吉下原5号墳（埼玉県教育委員会：1991）・川本町見目1号墳（塩野：1981）・江南町塩西原6号墳例（江南町：1995）があり、この形式のものは、8世紀以降の出土例は、管見に触れない。

鎌身関をもち篋被部の長い形式が、10世紀代に比定される本庄市大久保山遺跡第109号住居跡より出土している(26；早稲田大学本庄校地文化財調査室：1996)。また、鎌身部の長大化したものが、同大久保山遺跡第88号住居跡より出土している(27)。あるいは鑿根式と分類されるものと思われる。ともに中世へと続く形式である。

片刃箭鎌

古墳時代後期から平安時代前半にかけて出現する普遍的な鎌である。7世紀前半に比定される、鎌身関のあるものが、江南町狸塚27号墳から出土している(28)。8世紀初頭の川本町百済木遺跡B区3号住居例(29)につながる。鎌身関の無いものが、狸塚27号墳から出土しており(30)、9世紀第3四半期の毛呂山町伴六遺跡第5号住居跡例(31；(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1982)、10世紀前半の上福岡市川崎遺跡第6号住居跡例(32；上福岡市教育委員会：1978)につながる。

鑿箭鎌

古墳時代後期から平安時代にかけて、普遍的にみられる鎌である。鎌身部関のあるものが、7世紀前半に比定される江南町狸塚27号墳から出土している(36)。時代は下がるが、10世紀第4四半期の上里町中堀遺跡SK160例(37)につながるものと推測される。鎌身関のあるものが、7世紀中葉に比定される江南町狸塚27号墳例(33)があり、8世紀中葉の児玉町将監塚H-41例(34；(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1986)、10世紀前半の蓮田市椿山遺跡48号住例(35)につながる。

中世

この他、川本町百済木遺跡A区1号井戸・A区2号地下式坑から、2点の鉄鎌が出土している。A区2号地下式坑からは、応永二十年銘(1411年)の板碑が伴出している。中世の遺構からの出土例は少なく、平安時代の鉄鎌との関連を探る上で貴重な出土例であり、類例の増加を期待したい。

今後の課題

立野古墳群からは、五角形鎌・片刃箭鎌・鑿箭鎌など、地域的・時期的な特徴を示す形式が出土している一方、本地域では客体的な存在である方頭鎌・圭頭鎌出土しており、その入手経路を含めた副葬に至る背景の解明は今後の課題となる。

7世紀代までは、墳墓への副葬から、その資料は比較的充実しているが、古墳が築造されなくなる8世紀以降は、集落跡からの出土に頼らざるを得ず、その出土量は激減する。一見、8世紀を境に鉄鎌の画期がありそうであるが、出土状況の変化を考慮しなければならない。資料的な制約のある8世紀以降であるが、方頭鎌・無茎鎌・長三角鎌・三角鎌・鑿箭鎌などは、7世紀からの系譜を明らかに受け継いでおり、8世紀代までは、基本的に古墳時代の鉄鎌組成を受け継いでいると見られる。9世紀代に入ると雁股鎌がその組成に定着し、古墳時代からの形式が徐々に姿を消す。9世紀が、鉄鎌の変遷における一つの画期と認識され、10世紀代には、方頭・雁股・三角形・柳葉・鑿根式といった中世へとつながる組成へと変化していくことがうかがえよう。

また、墳墓と集落出土例では、その社会的背景が異なるため、武器としての矢の構造的変化を、単に形態的特長から同系列で扱うには注意が必要である。建築儀礼や年中行事などの集落内祭祀の視点も、集落出土鉄鎌を扱う際には必要であり、「(集落内)出土鉄鎌の大半は回収を意図しない祭祀に使用された」(村松：1995)とする村松恵司氏の指摘は重要である。今後、そういった視点を持ちながら、中世へと続くこの時期、東国全体の資料を見渡し、その分類・系統付けを行う必要があると思われる。(森田安彦)

第3節 毛彫施文の金銅製棘付花卉形杏葉の編年的位置付けについて

本古墳群第12号墳からは、毛彫施文による金銅製棘付花卉形杏葉が2点出土した。出土例は多く無いものの、古代東国において主体的に分布する古墳時代終末期の馬具であるが、埼玉県内では意外と初の検出例となった。そこで、本節においては、管見に触れた国内資料の集成を行い、本遺跡例の系統的な位置付けについて若干の検討を試みることにする。

研究史

杏葉は、馬装の一つとして古くより研究の対象として取り上げられてきており、その内容も非常に多岐に渡っている。既に多くの先学によって体系的な研究がなされており、その研究史も纏められているので、ここでは、毛彫の施された金銅製馬具の研究に絞って、その研究史を概観してみたい。

杏葉は、まず後藤守一氏により、心葉形・扁葉形・扁円剣尾形・鐘形・変形の5種類に形態分類されており、以後の研究の出発点となっている。「花卉形杏葉」は変形杏葉として分類・認識されているが、毛彫の施された杏葉はこの時点では認識されていない(後藤：1941)。

毛彫の施されている馬具を毛彫馬具として認識し、その馬装の組み合わせを、長方形透鏡板・棘付花卉形杏葉・飾金具・座金具・鉞尾金具を指摘したのは、坂本美夫氏の「毛彫馬具の予察」が最初と思われる(坂本：1979)。この中で坂本氏は、7遺跡・14例を集成し、毛彫文様から形態分類と編年を行っており、蕨手文・忍冬文系の文様・円弧文・放射状線文からなるA群と、蕨手文・円弧文・放射状線文が見られないモザイク的文様のB群に分類し、A群(7世紀前葉)→B群(8世紀前葉)へ4段階の変遷を指摘している。

田中新史氏は「東国終末期古墳出土の馬具」の中で、金銅製毛彫杏葉11遺跡・24例を集成し、毛彫の文様の簡略化の方向性から古墳時代終末期の馬具をⅢ期区分している。そして、「ハート形透かしの周辺に見られる弧に沿わせた一方向平行多条直線文構成の毛彫」を「道上型毛彫」と名付け、特に仏教関係遺品の製作年代との関連で検討している。Ⅰ期を7世紀前半、Ⅲ期を670年後半頃に求めている。また、毛彫馬具の分布の偏在性から蘇我氏や蝦夷政策の関連を指摘している(田中：1980)。

その後同氏は、『西本6号遺跡発掘調査報告書2』中の「道上型馬具の出現と展開」(田中：1997)において、道上型馬具および関連飾金具約70点を集成し、その上限を610年前後に、下限を650年頃の約半世紀間に設定し、Ⅳ期区分している。

穴沢啄光・馬目順一両氏は、中国河南省安陽県孝民屯晋墓154号墳出土の金銅製毛彫文杏葉の類例として、奈良県石光山8号墳の花弁形杏葉を挙げ、7世紀以降の終末期古墳や横穴墓から出土する小型毛彫文杏葉も、花弁形杏葉の一連の型式であることを指摘している(穴沢・馬目：1984)。

田中広明氏は、「律令時代の身分表徴(Ⅰ)」において、銜帯を総合的に分類編年する中で、毛彫馬具の鉞尾と銜帯具が毛彫馬具の系譜上にあることを指摘し、田中新史氏編年の第Ⅱ期を2細分し、銜帯具に至る変遷を示している(田中：1990)。

岡安光彦氏は、「東北地方の群集墳造営年代をめぐる諸問題」の中で、蓮弁形杏葉として棘付花卉形杏葉を、文様の簡略化の度合いに注目し、7世紀始めから7世紀第3四半期まで5段階に編年している（岡安：1990）。

高野政昭氏は、「天理参考館所蔵の棘付花卉形杏葉について」において、天理参考館所蔵の杏葉を紹介する中で、毛彫の文様が施されたA類を棘付花卉形杏葉に連なるもの、蹴彫の文様が施されたB類を花卉形杏葉との共通点から、A類に先行する可能性を示唆している（高野：1992）。

小野山節氏は、「古墳時代の馬具」において、花卉形杏葉の祖型を、先の穴沢・馬目氏同様に、中国河南省安陽県孝民屯晋墓154号墳出土の垂飾にあるとし、棘付花卉形杏葉についても、上辺部の造りや文様から花卉形杏葉と同じく孝民屯晋墓154号墳出土の垂飾につながると指摘している（小野山：1992）。

内山敏行氏は、「古墳時代の轡と杏葉の変遷」の中で、鉄地金銅張り・金銅製の轡・杏葉を含めた編年を行い、毛彫馬具を古墳時代終末期4期の変遷を示している。また、毛彫馬具が出現する背景に、「鉄地金銅張製品の生産停止にともなう金属工人集団の再編成は、前方後円墳の消滅に続く一連の社会変動」を想定している（内山：1996）。

富永里菜氏は、「馬具の革金具」において、馬具と銜帯具を革金という共通性から検討する中で、毛彫馬具について4段階の変遷を設定している（富永：2002）。

濱岡大輔氏は、『上5号墳』報告書中の「花卉形杏葉について」において、鉄地金銅張りの「花卉形杏葉」と金銅製毛彫が施された「棘付花卉形杏葉」を一系統のものとして認識し、5世紀末から8世紀初頭にかけてVIII段階の変遷を示している（濱岡：2003）。

最近では、佐藤信孝氏が「群馬県高崎市若田B号墳出土馬具の再検討」の中で、若田B号墳の新出資料を紹介し、馬装の復元を試みている（佐藤：2004）。

杏葉の変遷

毛彫馬具の類例は、その消長が1世紀前後であるにも関わらず、その文様変化が急であり、その型式変化が、少ない出土事例からでは追えない状況であったが、近年類例が増加した結果、ある程度文様の型式学的変遷が追える段階に入ってきたと判断される。毛彫が施された馬具には、辻金具・帯飾金具・鉈尾等が存在しており、毛彫馬具として本来は総合的な検討が必要であるが、一方、それぞれの物理的な形態差から、それぞれ採用される文様が異なることも事実である。よって本稿では、とりあえず本遺跡で出土している杏葉に限ってその文様の変遷を検討してみたい。

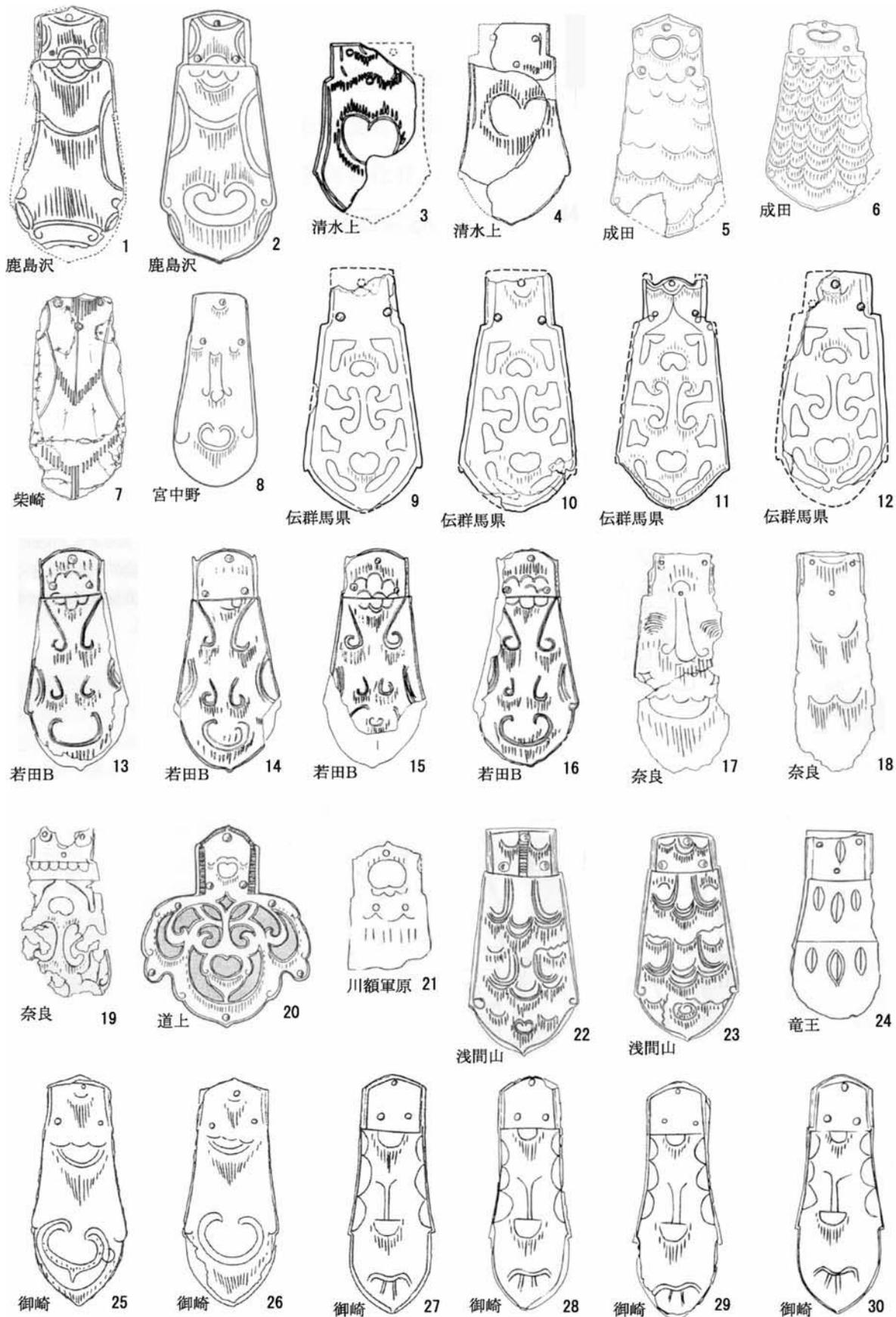
出土資料年代

管見に触れたものは、第7表に示したとおり、本遺跡出土品2点を加えて20遺跡57点を数える。そのほとんどが古墳の副葬品として出土しており、その性格上、遺物の帰属時期は初葬から終葬までの時期幅を持つことから、その年代的位置付けを確定することが困難な状況にある。

比較的年代を推定可能な状態を示している資料を抽出すると

- ・東一本柳古墳（第75図32～35）石室形態やその副葬品から概ね7世紀前半代
- ・上向嶋古墳（第75図36～39）伴出須恵器から概ね7世紀前葉～中葉
- ・浅間山古墳（第74図22～23）副葬品から7世紀第2四半期
- ・立野古墳12号墳（第34図65・66）伴出した長頸瓶より7世紀後葉

第3節 毛彫施文の金銅製棘付花卉形杏葉の編年的位置付けについて



第74図 毛彫杏葉集成(1)

- ・成田3号墳（第74図5.6）伴出した湖西産長頸瓶より7世紀末葉～8世紀初頭
 - ・御崎古墳（第74図25～30）伴出須恵器より7世紀末～8世紀初頭
 - ・柴崎64号住居跡（第74図7）伴出した須恵器より8世紀後半。ただし、住居跡出土であり、他の古墳出土品と同一組上で検討するのには問題を含む。
 - ・竜王2号墳（第74図24）伴出した須恵器より7世紀中頃～8世紀前半
- となる。出土例に限られており、さらにその帰属時期が判明する例は非常に稀である現状がうかがえる。

尚今回は、個々の古墳の帰属時期の検討は行わず、概ねその報告書に従っており、その詳細については、個々の報告書を参照頂きたい。

毛彫杏葉の変遷

上記出土例を参考に、その文様から型式学的に組列化したものが、第76図である。

I期

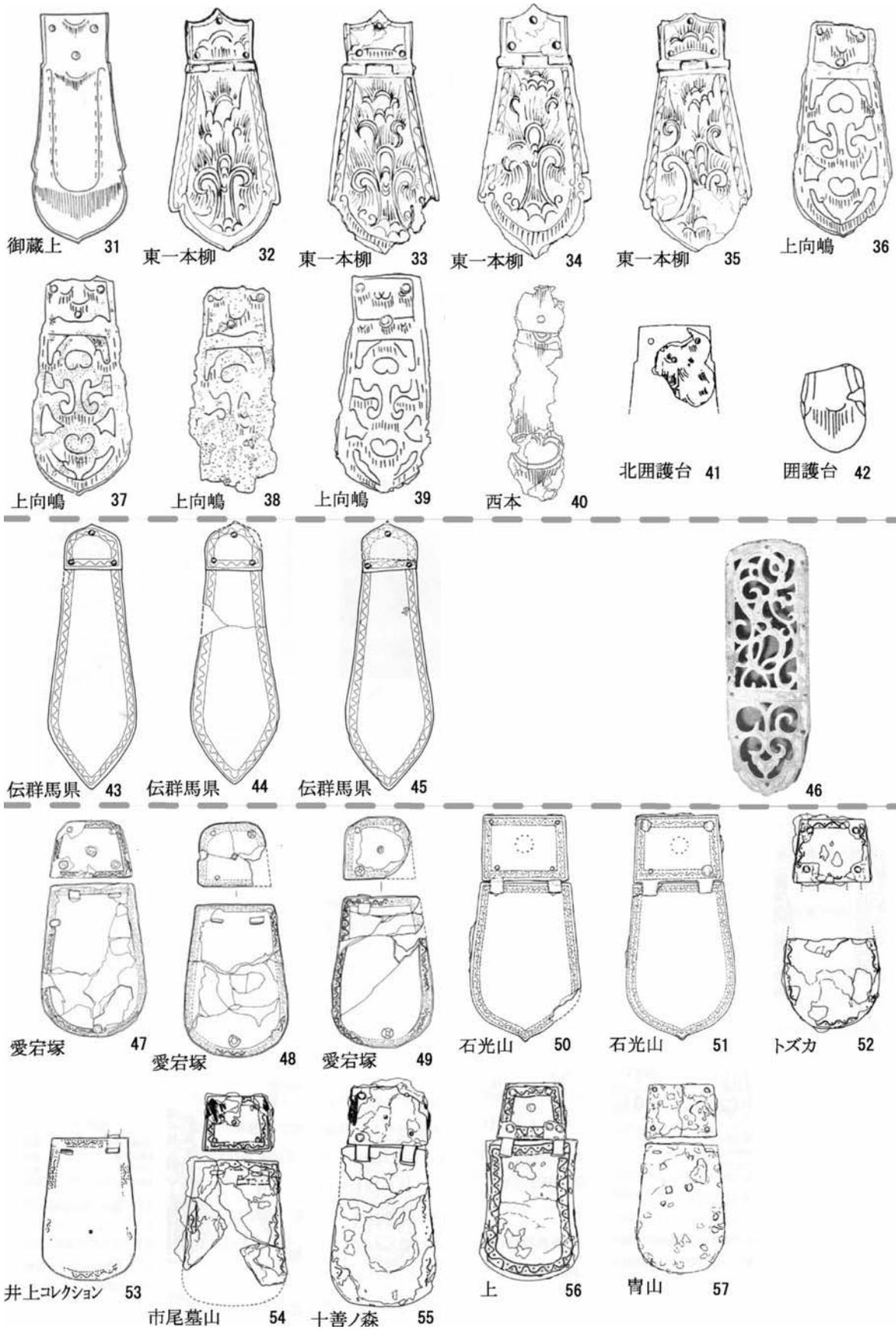
毛彫の彫金手法が杏葉に初めて採用される段階である。次期に成立する、毛彫りの施された棘付花卉形杏葉は、本期には今のところ見られず、鉄地に金銅板を貼り付ける他形式の杏葉に認められている。但し、道上古墳からは、鉄地金銅張りの杏葉の他、辻金具4・方形金具9・有窓卵形金具17等の毛彫施文の金銅製飾金具が出土しており、本期において、毛彫馬具による馬装が確立していることを示している。

毛彫の施された第76図2は、道上古墳出土の心葉形杏葉で、忍冬唐草文系の透彫を駆使している。中央のハート形透文周辺に弧に沿わせて一方向平行多条直線の毛彫りを施しており、田中新史氏によって、「道上型毛彫」と命名されている（田中：1980）。毛彫は施されていないが、第76図3のしめど塚古墳出土例は、形状が縦に伸びており、心葉形とするよりは、棘付花卉形の形状に近い。心葉形杏葉の最終形態を示しているものと思われる。第76図4は、法隆寺伝世の7世紀代の金工品中最古の1群に属する、灌頂飾金具である。外縁に連珠文透を配し、中に縦位に3単位の文様を透彫し、各単位間を連結する位置に珠文を配している。「道上型毛彫」が施されており、第76図2の道上古墳出土杏葉と同時期のものと判断される。第76図5は、伝群馬県出土とされる鉄地金銅張りの杏葉（八幡：1930）で、毛彫は施されていないものの、4の文様の系譜上に属するもので、外縁の連珠文透が省略されている。田中新史（田中：1980）・高野政昭（高野：1992）両氏の指摘があるように、次期とした棘付花卉形杏葉に直接繋がるものである。第76図1は、天理参考館所蔵の資料（高野：1992）で、伝上野国古墳出土とされている金銅製の花卉形杏葉である。基部に同形の金銅板2枚を用い、垂下部本体と力革を挟んで鉸留めする構造をとっている。文様は、鑿を斜めに連続して打ち込む蹴彫の手法により、2本の周縁に沿った平行線間に波状文を充填している。高野政昭氏は、留金具の形状および棘状の突起が無いことから7世紀後半の年代を想定している。しかし、施文手法が同一であり、文様が列点文の省略のみで類似する点から、第75図47～57に挙げた鉄地金銅張りの花卉形杏葉の形状が、しめど塚例同様長形化したものと判断し、本段階に置いた。鉄地金銅張りの花卉形杏葉が近畿地方の古墳に分布することから、その周縁地における最終形態を示しているのかもしれない。波状文は、施文手法を毛彫りに替え、次期東一本柳古墳出土例に受け継がれたものと推測される。

II期

金銅製棘付花卉形杏葉が、毛彫施文手法の採用により成立する段階である。垂下部の

第3節 毛彫施文の金銅製棘付花卉形杏葉の編年的位置付けについて



第75図 毛彫杏葉集成(2)

第3節 毛彫施文の金銅製棘付花卉形杏葉の編年の位置付けについて

都道府県名	市町内名	遺跡名	杏				葉				文様	遺構	出土遺物	時期	文献
			全長	基部長	基部幅	垂下部長	厚み	形	形	基部形					
千葉県	栄町	浅間山古墳	8.4cm	1.8cm	2.5cm	6.6cm	4.0cm		方形	逆三角形	無		前方後円墳 全長78	銅盾12・社金具5	1998年 千葉県史講座1 シンポジウム「龍角寺古墳群からみた古代の東国」財団千葉史料研究財団
			8.2cm	1.6cm	2.6cm	6.6cm	4.1cm		方形	逆三角形	無		前方後円墳 全長78	銅盾12・社金具5	
														住居	
山梨県	中巨摩郡竜王町	竜王2号墳	7.4cm	2.1cm	2.6cm	5.3cm	3.6cm		方形	逆三角形	無	木の葉文	円墳	銅盾9・帯飾金具19・社金具2	1990年 「成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」遺物編① 成田市教育委員会 1979年 「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」埋蔵文化財調査報告書② 山梨県教育委員会 1979年 「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」埋蔵文化財調査報告書② 山梨県教育委員会 日本道路公団 東京第二建設局
			9.2cm	2.2cm	2.5cm	7.0cm	3.3cm		山形	逆三角形	無				
			9.1cm	2.1cm	2.4cm	7.0cm	(2.9cm)		山形	逆三角形	無				
長野県	東八代郡八代町	御崎古墳	(9.6cm)	2.2cm	2.3cm	7.4cm	(3.1cm)		山形	逆三角形	無				1983年 「山梨の遺跡」山梨日報新聞社・1984年「山梨の考古資料集」緑科版・68頁、69頁「日本の古代遺跡」14 山梨」日本考古学 保育社
			9.5cm	2.2cm	2.6cm	7.3cm	3.2cm		山形	逆三角形	無				
			8.8cm	2.0cm	2.6cm	6.8cm	3.4cm		山形	逆三角形	無				
神奈川県	横須賀市	小高谷・E3区	(8.8cm)	2.2cm	2.6cm	(6.6cm)	3.3cm		山形	逆三角形	無				1994年 横須賀市教育委員会「小高谷遺跡」
			(3.27cm)				(3.54cm)	0.17mm		方形	逆三角形	有			
静岡県	御蔵上3号横穴								方形	逆三角形					1930年 「静岡県史」静岡県
									方形	逆三角形					
										方形	逆三角形				
長野県	佐久市	東一本柳古墳	10.0cm	2.2cm	2.8cm	7.8cm	4.6cm		山形	逆三角形					1972年 佐久市教育委員会「佐久市岩田東一本柳古墳緊急発掘調査報告書」
			10.0cm	2.2cm	2.7cm	7.8cm	4.7cm	0.1mm	金銅製毛彫棘付花卉形杏葉	山形	逆三角形				
			10.6cm	2.1cm	2.8cm	7.9cm	4.6cm	0.1mm	金銅製毛彫棘付花卉形杏葉	山形	逆三角形				
愛知県	豊橋市	上向島2号墳	10.0cm	1.9cm	2.6cm	8.1cm	4.7cm		山形	逆三角形					1976年 愛知県豊橋市「パレット事業五巻地区埋蔵文化財調査団「二本松古墳群」
			8.2cm	1.8cm	2.6cm	6.4cm	3.9cm		山形	逆三角形	無				
			8.5cm	2.3cm	2.7cm	6.2cm	3.8cm		山形	逆三角形	無				
広島県	東広島市	西本6号遺跡	(8.1cm)	2.6cm	2.6cm	(5.6cm)	(3.4cm)		方形	逆三角形	無				1997年 「西本6号遺跡発掘調査報告書」財団法人東広島市立考古学資料館「西本6号遺跡発掘調査報告書」1冊
			8.4cm	2.1cm	2.7cm	6.3cm	(3.6cm)		方形	逆三角形	無				
			(8.2cm)	(1.7cm)	(1.9cm)	(6.5cm)	(2.2cm)	0.13mm		逆三角形	無				

文様は、上中下段の3段の文様構成を採る。I期の透彫表現を毛彫表現に置換したものが本期に属する。第76図4・5から変遷するA系統（唐草文系）と、B系統（パルメット文系）の2系統が認められる。

A系統上にある天理参考館所蔵伝群馬県出土資料（第76図7）・上向嶋2号墳出土資料（第76図8）は、垂下部中段の文様が簡略化されているが、明らかに第76図5の透彫文を毛彫で表現したものであり、型式学的にもスムーズに変遷している。

第76図6は、三葉パルメット文が施文されている東一本柳出土例である。基部と垂下部の連結に幡番構造を採用している。垂下部両側縁の平行線間に施文された波状文は、先に触れたように第76図1の蹴彫施文からの系譜を想定した。下段のパルメット文は、第76図2～5の垂下部中央の二葉状の透彫が上下反転した可能性もある。また、杏葉ではないが、天理参考館所蔵資料中に、朝鮮三国時代とされる出土地不詳の毛彫の施された金銅製透彫帯金具（第75図46）があり、先端に三葉のパルメット文が透彫で表現されている（東京天理教館：1964）。パルメット文の透彫表現は、心葉形杏葉の中に見られるものであり、6世紀～7世紀にかけての、我国仏教関連の金工製品（正倉院所蔵法隆寺系幢幡鉸具（木村：1993）等）に見られるモチーフでもある。先学の指摘するように、鞍作部（馬具）と仏師あるいは仏工（仏像・荘厳具）との関係を示すものである（野間：1937、小林：1958、田中：1979、小野山：1976・1983等）。

本期に属するものは、愛知県上向嶋2号墳（第75図36～39）、群馬県奈良古墳群（第74図19）・天理参考館所蔵伝群馬県出土資料（第74図9～12）、長野県東一本柳古墳（第75図32～36）出土資料などである。

III期 垂下部の文様は、II期同様3段構成を採るが、文様の簡略化が進む段階である。II期同様A・B両系統の杏葉が存在する。

第76図9の浅間山古墳出土例は、垂下部の文様が抽象化されているが、逆位の三葉パルメット文と判断される。B系統上にあり、最下部に施文されていた三葉パルメット文が、逆位になって上中段に施文されたもので、両側縁に認められた蛇行沈線文が僅かに残っている。第76図10の若田B号墳出土例も、文様はさらに簡略化されるが、外向きの蕨手状文は、浅間山古墳例のパルメット文がさらに簡略化した表現であると認めることができる。最下段の文様は、ハート形文からC字状文に変化している。

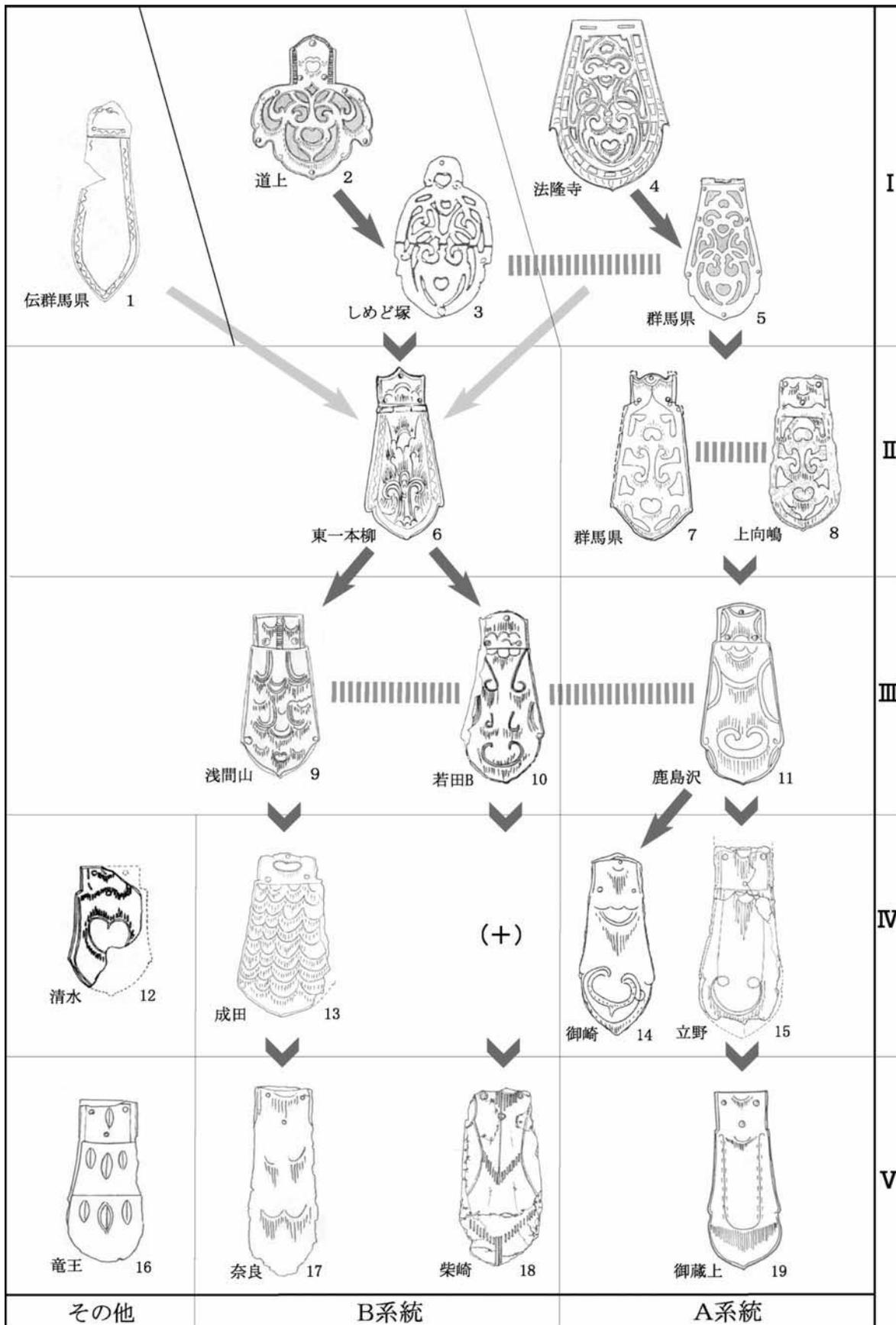
第76図11鹿島沢古墳出土資料は、垂下部上中段に2重弧文、最下部にC字状文を施文している。上中段の文様は2重弧文となり、著しい簡略化傾向が認められるが、B系統に属するものと判断した。垂下部中段の両側縁に外向きに施文される2重弧文が、若田B古墳例と共通しており、同時期と判断した。

本期に属するものは、青森県鹿島沢古墳群（第74図1・2）、群馬県若田B号墳（第74図13～16）・奈良古墳群（第74図17）、茨城県宮中野99-1号墳（第74図8）、千葉県浅間山古墳（第74図22・23）出土資料などである。

IV期 前期まで続いた垂下部の3段の文様構成が崩れる段階である。III期同様A・B2系統を認識することは可能であるが、既にその面影は無い。

第76図13成田3号墳出土例は、垂下部全体に9条の波状文を施文している。パルメッ

第3節 毛彫施文の金銅製棘付花卉形杏葉の編年的位置付けについて



第76図 毛彫杏葉変遷図

ト文の葉の部分のみ残り、多段に施文されたものと判断される。基部にはハート形の透彫が施されている。

第76図14御崎古墳と第76図15本古墳出土例は、11の垂下部中段の文様が省略され、2段構成となったものと判断される。型式学的にも非常にスムーズな変化である。14は垂下部下段に列点状に充填されたC字文を、15は、垂下部上端からの垂下線で一筆書き様に施文することによって、C字状文を表現している。

第76図12清水横穴墓出土例は、小形化している。垂下部中央に大きくハート形文を施文している。系統は不明であるが、垂下部の3段文様構成が消えていることから、ハート形文が施文される最終段階として、本期に置いた。

本期に属するものは、本遺跡の他、山梨県御崎古墳(第74図25～30)、福島県清水1号横穴(第74図3・4)、茨城県成田3号墳(第74図5・6)・群馬県川額軍原14号墳(第74図23)、広島県西本6号遺跡(第75図40)出土資料などである。

V期 毛彫の施された杏葉の最終段階である。IV期からの変遷で、2系統を認識できるが、本来の文様要素を認識することが出来ない程簡略・抽象化されている。

第76図17奈良古墳出土例は、垂下部に2連弧文を2段に施文している。第74図13成田古墳の文様がさらに簡略化されたものと判断され、B系統に置いた。第76図18柴崎遺跡出土例は、垂下部両側縁に外向きの弧文を施文したもので、中央部には平行線文のみ2段に施文されている。III期若田B古墳例の垂下部中央の3段の文様が省略されたものと判断され、IV期を挟んだB系統の本期に位置付けた。

第76図19御蔵上古墳出土例は、垂下部上端より大きく垂下するU字状線とその両脇に加えられる列点状文によって文様が構成される。本遺跡例(第76図15)の、基部と垂下部の区画線と垂下部下段のC字状文が省略されたものと判断される。型式学的にもスムーズな変化と認識され、A系統最終段階として位置づけた。

第76図16竜王古墳出土例は、木葉文又は蓮弁文と呼称される文様が、基部に1段、垂下部に2段施文されている。系統は不明であるが、田中新史氏によって、大阪金剛寺観音菩薩立像台座蓮弁文(松原他：1979)との関連が指摘されている(田中：1980)。

本期に属するものは、静岡県御蔵上3号横穴(第75図31)、茨城県柴崎遺跡第64号住居跡(第74図7)、山梨県竜王2号墳(第74図24)、群馬県奈良古墳群(第74図18)出土資料などである。

まとめ

以上のことから、各期の年代は、伴出遺物等から推定して、概ねI期が7世紀初頭、II期が7世紀前葉、III期が7世紀中葉、IV期が7世紀後葉、V期が7世紀終末から8世紀初頭の1世紀前後を現状で想定している。

金銅製毛彫杏葉は、5段階の変遷が認められ、本古墳出土例は、A系統第IV期に属するものと判断され、鹿島沢古墳例と御蔵上古墳出土例を繋ぐ系統上に位置づけられよう。

今回、紙数と時間の関係上、個々の杏葉の出土した古墳の帰属時期の根拠を示せず、また、杏葉以外の毛彫馬具についての検討も行えなかった。今後、毛彫杏葉出土の背景を含め、毛彫馬具として総合的な検討が課題である。機会あれば稿を改め、再度検討を加えたいと考える。

(森田安彦)

第4節 石室下に掘込地業をもつ古墳について

掘込地業

今回の立野古墳群の発掘調査では墳丘を削平された古墳のみであったので、周溝・石室主体部等の下部構造だけが遺存していた。この下部構造のなかで古墳石室の築造に際し地山（自然堆積面）と構築面をいかに処理しているかという基礎地業について、「掘込地業」で行っていることが明らかになった。掘込地業は構築物の支持を得るための地盤改良で基礎地業の一方法である。一般に建物等にみられる構築面の状況は①地山をそのまま生かす。②地山を掘込み墳底から版築を行う等である。①の場合でも地ならし程度の薄層がみえる。②では建物に併せた基壇を構築している地業や部分的に行う坪地業が行われる。本節では、立野古墳群で確認された石室下部の構造は基礎地業でも「掘込地業」ととらえ、同時期に同様な工法を持つ古墳との比較とその意義を考えるものである。鶴ヶ丘1号古墳を調査された小久保徹氏は石室構築に限定した工法として、「掘り込み版築地業」を提示している。なお、「掘込地業」については古代中国で盛んに使われ日本でも構築物の建築時に多用された工法で、具体的には構築物に即した穴を掘り、石を混ぜるなどして土をつき固める版築工法を行うことを繰り返しながら地層を積み上げ、構築物の基礎を丈夫にする地盤改良方法をいう。すでに七世紀代では宮都・古代寺院・終末期の古墳・官衙などに多用され、石室下部や建物基壇などに確認される^(註1)。

版築

これらの遺跡に見られる版築は、中国などでは城壁などの壁を作るために多用され、一般に土・石・灰・にがり・魚油などを混ぜ型枠や堰板（枠板）の内にその土を入れ、およそ半分の厚さになるまで叩き締めて土を固める。一層は5cm程であり、型枠や堰板（枠板）を上によらずし、作業を繰り返して高さを重ねていく。このように版築は堰板などを使用し、叩き締められた互層状の盛土が数cm単位で積み上げられた構造となる。土質によっては縞状の層構造が明らかみえるが、単に異なる土砂を互層上に盛土する例は厳密には版築とはいえないものの、固く締まる層では判別は難しく、縞状に上記のように固められた層を版築と呼んでいるのが現状である。ここでいう掘込地業は掘込と版築がともに用いられる場合をいうことにする^(註2)。

初期の版築例を崇峻天皇元年（588）に建造された飛鳥寺の発掘でみると、塔跡では一辺36.5尺四方（約10.8m）を掘込み、深さ約6.5尺（約1.9m）、高さ2尺（0.6m）の高さが基壇として残っていた。版築の厚さは2.5m以上に達すると推定される。版築土は固く締めり2～3寸（6～9cm）ほどの縞状をしている。版築による突き棒の痕跡が残っており、直径約3寸（約9cm）の円形をしていた。

舒明天皇11年（639）に創建をはじめた百濟大寺は奈良県桜井市吉備池廃寺とされ、金堂跡・塔跡をはじめ巨大な建物基壇がみつまっている。金堂基壇は掘込地業をしており、東西36m・南北30m以内で、深さ1.1mを測り、墳底から現状で2.7mの版築を行い基壇を築成していた。版築層の層厚は2～15cmであるが、5cm程度の部分が多い。

壁画をもつ終末期古墳として有名な奈良県明日香村のキトラ古墳の調査では、墳丘の構築方法の解明につながる発見があった。キトラ古墳は丘陵尾根の南斜面中腹部に立地

し、段切り造成したテラス状部分に石槨を築き、二段築成の円丘を版築で構築していた。墳丘の直径は下段で13.8m、上段で9.4m、高さ3.3mを測る。上段墳丘裾部分で堰板の痕跡と杭穴が見つかり、版築に際し厚さ4～5cmの板を立て径10cmの杭で固定していたことが判明している。上段墳丘北側部分の調査では板状痕跡と杭跡が検出され、墳丘西側でも同様に板のつなぎ部分まで確認しており、堰板は上段墳丘を多角形に囲むラインとなり墳丘の規格計画線に一致すると想定された。版築土は2～5cmの細層で硬く締められ、整った縞状構造をみることができる。墳丘築造過程の復元では基礎地業の段階で暗渠排水溝を設け、版築を行いながら整地層をつくり石槨石材を据える。石槨まわりの版築は入念で槨内への漏水を防ぐために粘質土を使用している。また、暗渠排水溝付近では透水性の良い茶褐色土を用いているという。墳丘の盛土は砂質土と粘質土に大別され、交互に盛土される。石槨天井上からは粘質土を中心に版築がなされ墳丘上段を構築する。キトラ古墳は壁画を持つという特殊性もあり、石槨内への漏水を防ぐため必要な工法だったのであろう。近畿地方の終末期古墳では版築で築かれたとみられる古墳が多いが、キトラ古墳のように堰板の痕跡が残り、明瞭な版築工法の痕跡を残す例は少ないようだ。前記のように近畿地方では版築工法は政権中枢部に普及していた工法とされ、寺院・宮都・天皇・豪族の墳墓の造営にみられた^(註3)。地方でも同時期に官衙・豪族の墳墓の造営に際し先進工法として導入されていた^(註4)。同時代の関東地方に目を転じ立野古墳群の近隣の古墳を見ると、石室下部に掘込地業をもつ古墳の存在がいくつか知られている。

穴八幡古墳

穴八幡山古墳(小川町)は小川盆地の西側丘陵尾根南斜面に立地する。一辺28.2m、高さ5.6mの方墳である。尾根側に二重周溝が配される。緑泥石片岩の板石を組んで複室構造の横穴式石室を構築している。羨道部の調査で地業が確認されており、規模は不明だが石室下部を範囲とし、深さ1.2m近まで版築していると推定される。同地には穴八幡古墳のほか古墳は所在せず、単独で出現し以後も築造されない。早くから開口していたため石室からの出土遺物はほとんどなく、周溝出土の須恵器から七世後半の築造とされる。国造・評(郡)領などの有力者の墳墓と推定されている^(註5)。

鶴ヶ丘古墳

鶴ヶ丘1号古墳(川越市)石室は自然石乱石積の両袖型胴張型横穴式石室である。石室下面には掘込地業が認められ、旧表土面から深さ0.9m掘込み、東西3.4m、南北5.9m、の長方形を呈する。墳丘規模は不明だが、三方に途切れる溝を周溝と考えると東西25m、南北28mの方墳となる。

鶴ヶ丘稲荷神社古墳(川越市)は鶴ヶ丘1号古墳とは200m程離れて所在する、ほぼ同時期の築造とされる。墳丘の残存状況は良くないが墳丘裾に方形の石列が認められ、墳丘の規模は東西20.5m、南北21mとなる。四周の溝を周溝とすると東西40m南北53mの方形墳と推定されるが疑問も残る。石室は凝灰岩を使用した羽子板型の複室構造をとる横穴式石室である。地業の範囲は旧表土面から掘込んでおり、長軸7.9m、幅6.6m、深さ0.81～0.92mを測る。ローム層に達する墳底からローム土および凝灰岩片を含む埋土を主に丁寧な版築が旧表土面までなされ石室構築面としている。立野1号古墳と同じ凝灰岩石材を使用していることも注意される。古墳築造の年代は出土須恵器から七世紀後

半代と推定されている。鶴ヶ丘の2古墳は、同地方の有力氏族物部直氏の関与が想定されている。

樋ノ下古墳群

樋ノ下古墳群は寄居町寄居に所在した終末期の群集墳で、密集状態の円墳群が18基発掘調査されている。すべての古墳が削平されており、周溝と石室下部構造だけがかろうじて確認された。七世紀後半代という限られた時期で古墳築造がなされており、律令期では男衾郡と荒川を界して榛沢郡域に属していたとされる。遺存していた石室から、河原石積の胴張型横穴式石室と、石室下部構造が明らかになっている。これは石室構築面の堅穴と呼んでいるもので、古墳構築面から石室を取巻く一回り大きい範囲を地山まで掘り込み、その基底部はシルト層を充填した整地面とし、半地下構造のまま石室を構築するものである。掘込面をすべて埋めるまでの埋土の充填をしていないが、よく締まったその土層は版築状といえ、掘込地業と認識されるだろう。掘込地業では十分な支持力を得るため十分な層厚をとるが、地山面が強固で支持力が充分と判断されれば浅く、地山が岩盤などであれば整地だけで充分であろう。なお、本古墳の中の12号古墳は八角形古墳である可能性がある^(註6)。群集墳では近隣の鹿島古墳群が知られるが、掘込地業をもつ古墳は知られていない。

立野古墳群

立野古墳群では1号古墳・12号古墳・14号古墳・17号古墳の四古墳に掘込地業の構造がみとめられる。以下略記すると1号古墳の掘方は長軸5.6m、幅3.7m、深さ0.3mを測る。この掘方の中央部に石室を構築しているのだが、地業はこの掘方部分に行われている。確認された土層は地山ローム土を基底部とし茶褐色土に石室用材と思われる凝灰岩片を交えた硬化層となっている。部分的に敲き締めによる縞状の地質構造が認められる。12号古墳では掘方の長軸6.0m、幅3.4m、深さ0.4mを測る。掘方基底部ローム層下部のハードローム中にありローム土と凝灰岩片を交えた茶褐色土で、硬くしまっている。大略3層に分層されるが一部縞状の地質構造がみられる。14号古墳では掘方の長軸8.8m、幅4.2m、深さ0.88mを測る。掘方基底部ローム層下部のハードローム中にありローム土と凝灰岩片を交えた茶褐色土を叩き締めながら埋め戻している。地業を終えた後、石室礫床部分は0.2m程掘り込んで造られている。大略3層に分層される3層はローム塊伴うなどやや層が厚い。前室想定部分から羨道推定部分にかけても第12層を不自然に挟むが、一体の埋め戻しを想定している。締まりよく一部に縞状の地質構造がみられる。17号古墳では掘方の長軸3.8m、幅2.0m、深さ0.2mを測る。石室部分はかなりかく乱を受けているため北側部分にしか遺存部分がなく、よく締まったローム土と凝灰岩片を交えた茶褐色土が確認される。立野古墳群の場合掘込地業は羨道部側を開放しているため鶴ヶ丘2古墳のような方形掘方にはならない。このように掘込地業を意図しながらも実施段階での差は何によるのか。前記の古墳では石室より一回り大きい掘方を設定し、掘方の基底部より凝灰岩片などを混じえたローム土を主体に締め固めながら埋め戻している。この埋土の構造はいわゆる版築状ではあるが、整った縞状構造をなした版築ではない。しかし、0.8mに達する掘込地業をしている古墳を見ると、石室構築に際し地盤改良として掘込地業を行っているかと理解したい。さらに石室前面から周溝へ掘方を連続させることは、墓前での祭祀挙行へ移行することなどが背景として予想される。

石室の掘方

横穴石室を構築する場合、石室より一回り大きく地山を掘込むことはよく行われ、立野古墳群ばかりでなく、塩古墳群西原12・18号古墳・新田26号墳や古里古墳群など周辺の古墳でもみられる。これは石室石材の沈下を防ぐために表土を取り去り、地盤強固な層を得ることや、水準面を得ることなどを目的としていたと考えられる。江南台地上では表土を除いた後、地山を掘り込む場合は、0.3m以上掘込んでなお版築状の下部構造を行う古墳は少ない。掘込んだ地山面に礫を直接敷き詰め石室礫床としている古墳が通例である。立野古墳群の12・14号古墳などにみられるような深い掘込地業を他の古墳で採用していないことは、手抜きではなく掘込地業を行わなくとも地盤の支持力を得られたものと思われる。同時期の鹿島古墳群のように河川礫の堆積した場所や、斜面地に築かれ地山岩盤の露出した場所では石室自体の規模も関係してくるが十分な支持力が得られると想定され、掘込地業を行う必要は認められず、大部分の石室は実施していない。このような想定が可能であれば、掘込地業という工程に労力を費やすことは通例より強固な支持力を得る目的があったと思われ、石室の規模を大きくするなど石材を多用する個別の設計意図が想定される。立野古墳群の場合は石室規模を考えると玄室天上を高くするなどの設計意図があったのであろうか。いずれにしても八角形墳・上円下方墳は墳丘盛土まで版築構造で行われ、従前の古墳墳丘をつくる盛土構造とは設計思想が異なる。立野古墳群の場合は墳丘が残っていないが鶴ヶ丘稲荷神社古墳の墳丘盛土は版築ではなく、従前の盛土構造である。立野古墳群では墳丘の残る古墳があり、今後解明の余地がある。終末期古墳には限られた地域に限られた工法と多角形墳などの設計意図がみられ、出土遺物にも反映している。同時期に同様な工法で同形態の古墳が築かれ同種の遺物が副葬されていると推定されることは、同族あるいは同一の集団に属していた人々の関与を想定させる。

築造者

立野古墳群を中心に石室下の掘込地業をみてきたが、これは終末期古墳の築造に採られた一工法で入間川水系の川越・東松山・小川・江南の当該古墳は共通の歴史的背景をもつと想定している。また、石室下に掘込地業をもつ古墳は現在のところ埼玉県内に5遺跡5例を数えることができる。いずれも七世紀代後半以降におくことができ、円墳・方墳・八角形墳・六角形墳として築造され、渡来人の伝承が残る地域に多くみられた。この検討の中で立野1号墳は八角形古墳であった可能性を挙げる^(註7)。関東地方の中では東京・栃木・神奈川等と同じ様相をみることができる^(註8)。これらは伝統的基盤を持つ国造等の氏族や初期の国・郡の官人などが被葬者に想定されるが、当地域では壬生部を率いて入植した渡来系氏族吉志氏もその一員と考えることができる。このことについては、本書「第一章第二節 歴史的環境」の頁でも扱ったが、在地豪族物部直氏の関与を得て渡来系氏族壬生吉志氏が推古朝に当地方に入植して以降、町域に見られる古墳築造の動向や出土遺物に彼等の来歴を示すものがあるとした^(註9)。立野12号墳より出土した金銅製毛彫杏葉や西原1号古墳出土の方頭大刀や八幡山古墳からも出土した銅鏡などは中央政権下の工房で作られ、先の有力豪族や渡来系氏族などの国・郡の官人たちの所持するところとなったのであろう。また、立野古墳群12号墳では方頭大刀・馬具など実用武器としての比重が高い遺物が副葬されていたことも注意される^(註10)。

なお、当地方においては男衾評（郡）の建評（郡）時の官衙と推定される遺跡は未確認であり、この方面の研究が進むことによって男衾郡と郡領氏族との関わりがさらに解明されていくものと考えられる。

（新井 端）

補 注

- 1) 小久保徹氏は鶴ヶ丘1号墳古墳・鶴ヶ丘稲荷神社古墳例から「掘込み版築地業」を通例の地業としての石室掘方と区別する。その定義は、四辺を掘り込み、厚い版築土層を特徴とするもので掘込地業に版築の名称を加え、石室構築に限定した基礎地業の名称としている。立野古墳の場合には四辺の一方が羨道部へつながり、周溝まで連続してしまう例があり、この定義に合わない。筆者は地方での終末期古墳築造のあり方は多様であるとの認識をもっているので小久保氏の言う「掘込み版築地業」と従来確認されていた「通例の地業としての石室掘方」及び立野古墳例に見える三辺からなる掘込みと版築を行う基礎地業を含めて「掘込地業」と呼ぶ。これは類例がまだ少ないこと報告者間で厳密な認識がされているとは言い難いことなどから、便宜的に云うものであるが、石室構築にかかる基礎地業の類型として再整理すべきと考える。
- 2) 報告者によっては、このような単に異なる土砂を互層上に盛土する例をもって「版築」または「版築状」と説明している場合が知られるが、これらは「互層状盛土」とでも云うべきである。とくに終末期古墳として方墳・八角形・上円下方墳等を考えるときには厳密に区別すべきであろう。青木敬氏は「古墳築造の研究」のなかで版築を評して版築技法が古墳に採用されることは土木工学的にはほとんど意味がないとされた。そして、古墳築造技術以外の技術導入によって古墳築造の意義が希薄化し終焉に向かう画期を示しているとした。版築が古墳築造に施行される事実は、寺院造営技術として培われてきた先進技術と工法が檀越である有力豪族の古墳に援用する意識が醸成されていたのであり、筆者としては締りの悪い土を水平に盛土した版築状盛土の古墳までを云うつもりはないが、掘込地業とその版築の様子をみると、漫然と重ねたのではなく、基礎地業として石室石材の不動沈下を防止し、石室自体の崩壊防止や石室内への漏水を抑えるなど設計意図をもって、時間と労力を費やし版築を築いたと評価したい。これは、小久保氏が指摘するように「……鶴ヶ丘2古墳のような地業は土木工学的にも不必要であり、また、今までの伝統的な技法とは全く異なるものである……」とすると、古墳築造の伝統的な技法をもたない新来の人々、あるいは寺院等の造営に係る新技術を転用する立場にいた人々の関与が想定されるだろう。
- 3) 終末期古墳とは前方後円墳消滅以降、造りつづけられた古墳や古墳群で、火葬の風が広まり火葬墓が現れるまでの間に築造されたとされる。最後の前方後円墳とされる榎原市見瀬丸山古墳（欽明天皇陵）は六世紀後半とされ、六世紀末には飛鳥寺など寺院の建立が始まる。春日山古墳（用明天皇陵）、山田高塚古墳（推古天皇陵）、石舞台古墳（蘇我馬子墓）等の大型方墳を支配者層が造営し、次に舒明天皇陵、天武・持統天皇陵牽牛塚古墳、東明神古墳等の八角形古墳が造られ、並行するように清水柳北1号墳・石のカタ古墳・府中熊野神社古墳等の上円下方墳が数は少ないが各地で築造された。西日本では七世紀中ごろで群集墳は築造を停止するとされ、関東地方では七世紀末から八世紀初頭まで築造が続けられた。円墳を主体とするが、熊谷市籠原所在の籠原裏古墳群では多角形墳が現れており、上円下方墳とされる熊谷市広瀬所在の宮塚古墳も終末期の古墳と推定され、荒川の氾濫によって形成した低地と自然堤防上の開拓を進めていった集団の墳墓と考えられるだろう。なお、立野古墳群中の小石室の存在は、古墳最終末期の段階でみえる火葬骨を納める小石室と変らない。蔵骨器は検出されていないが、壬生吉志の墓制の中に終末期の多角墳、火葬墓、寺院の造営とその存在と変遷を窺わせる貴重な遺構といえる。
- 4) 行田市八幡山古墳は、上宮王家の舎人であり、後に武蔵国造になったとされる物部直兄麻呂の墳墓と推定されている。直径約74mの円墳で墳丘の高さ11mを超えるとされている。銅鏡・夾紵棺・大刀金具等が出土しており、夾紵棺は皇族級の高位身分の者が使ったとされる棺で銅鏡は仏教的な遺物であることから先の想定がなされている。石室の構築に当たっては旧表土上から2.5mの版築をおこなうとされるが、そうであるならば基壇築成と同様に強大な石室の加重に対して行われた地業といえる。地山が黒色有機質土であるため、一層強固な基盤を必要としたのであろう。長大な横穴式石室は三室構造で羨道を含め、全長16.7m、玄室幅4.8mで床面は緑泥片岩の板石と凝灰質砂岩石を敷き詰めている。
- 5) 穴八幡古墳は斜面に立地するため、発掘調査で確認された南北断面を見ると、地山は西南下がりの斜面で切土、盛土で斜面を平坦化させることはなかったとされる。実測図から読取れた数値では、墳丘北裾地点の地山標高は約121m、羨道部前面

第4節 石室下に掘込地業をもつ古墳について

での石室床面は約120m、同場所での地山面の標高は約119m、当初の地山面は約120.4m付近であろうか。構築過程の説明によると「……基礎工事として石室の構築箇所全体を一旦大きく掘込み（掘方）、中に黄褐色土と黒色土を交互に突きかためて地業するいわゆる「版築」を行う……」としているが、山切りを行わず盛土をすすると、石室床面の位置がかなり高くなっており、石室部分の掘込地業は地山をわずかに掘り込むか、地山直上から版築を行い基壇状の石室構築面を築いているように見える。あるいは一定の盛土の後に掘込地業を行っているのだろうか。版築とされる玄室・副室下位の層位部分についても、鶴ヶ丘稲荷神社古墳でみられたように上半部をていねいに作られているようにはみえず、墳丘の盛土状であり、説明も足りない。「……飛鳥・白鳳の古代寺院建築の基礎地業と同様な版築地業が行われていた……」とは現時点ではいいがたいのでないかと思う。なお、掘込事業を持ち、石室床面を地山面まで基壇上に盛り上げた古墳には、7c前半代に造営された東松山市桜山古墳群がある。桜山10号墳では一次掘方を地業した後、二次掘方を掘り込み根石を据え石室を構築する。桜山古墳群中には切石組、河原積の横穴式石室がある。

- 6) 樋ノ下古墳群の調査で指摘された石室構築面を形成する堅穴の掘込とは、石室部分より一回り大きい範囲を地山まで掘込、その基底はシルト層を充填した整地面とし、石室を構築するものである。このような石室部分に掘方を持つ古墳は、江南町域古墳では六世紀後半の塩古墳群西原18号古墳からみられるので、地域的にも時期的に限定されるものではなく同時代の横穴式石室の構築法としては通有の構築法であったと考えている。そして、これは掘込地業と考えている。墳形については、すべて円墳と報告されているが周溝が途切れ、墳形の円形が整っていない古墳も認められる。これらは密集状態の中での古墳築造という事情があったためであると思われるが、規模と墳形において注意される古墳がある。それは12号古墳である。北側が区域外になるが、墳丘と石室開口部の南側周溝が途切れる平面形態で確認された。周溝の内外の各辺と墳丘裾が直線状を呈しており、ほぼ八辺に区分されていたとみることができ、本来八角形墳を築いたと推定される。八角形墳の内折する円の直径（対角の距離）は19.3mを測り、本群中の古墳では最大となる。また、二重周溝を考慮すれば他の中位群の古墳面積の約四倍を占めている。外側の周溝は整った逆台形をしており、内側の周溝と形態が異なることから、拡張して新たに掘鑿したものかもしれない。復元される墳丘は一辺7.6～8.2m程であろう。八角形墳と被葬者の集団は先進性の高い豪族や渡来系氏族と推定され、馬騎の内廐寺、末野窠跡群の運営に関与した集団の人々であったろう。副葬品はすべて失われているが七世紀第2～3四半期の築造と推定されている。
- 7) 多角墳の中で鳥取県の梶山古墳が、八角形墳としては変形の八角形墳で七世紀初頭に出現している。大王家の陵墓として正八角形墳が舒明天皇陵として現れるのはその後であるとされる。群集墳中での報告例も増えており、籠原裏古墳群より3基の多角形墳が確認されたと報告されている。いずれの古墳も葺石が確認されることから八角形と推定されているが、墳形の確認にはやや疑問ものこる。報告中では葺石の大半は崩壊しており、稜角の脊梁や裾石に目通（見切石）を確認することが困難な状況である。しかし、1号墳は墳丘と周溝が同形態をしていることから、八角形である可能性は高いと思われる。石室下の掘込地業は確認されていない。周溝の形態については周溝掘鑿の単位を示すとの意見もあるが、他の群内古墳の周溝は全く墳形を意識していない状況である。このように周溝が不定形である終末期の古墳は通有で、樋ノ下古墳群でも立野古墳でも周溝を整えようとする意識は希薄である。さらに進んでいけば、削平され葺石が認められなくとも周溝形態を整え、墳丘形態と周溝形態が多角形を示す古墳は当初から多角形古墳として築かれた可能性を考えてよいと思う。本報告で扱った立野1号古墳（八角形）、樋ノ下12号古墳（八角形）、西原1号古墳（方墳）などが多角形古墳であった可能性が高い。
- 8) 栃木県下では、一辺58mの方墳である多功大塚山古墳（上三川町）、直径63mの円墳である桃花原古墳（壬生町）、天王塚古墳（栃木市）、藤井34号墳（壬生町）などの古墳が葺石積の横穴式石室を構築し石室下に版築をもつと報告されている。府中熊野神社古墳（府中市）は一辺32mの方形段上に径16mの円丘を載せる上円下方墳で、版築で墳丘が構築されている。神奈川県川崎市馬絹古墳は丘陵南斜面に立地し、直径33mの円墳と周溝は斜面側を取巻き石室開口部の南側で途切れる。石室は地山を掘込み構築され、葺石組で三室構造の横穴式石室を築く。墳丘は版築で築かれ葺石が葺かれていた。出土遺物は失われているが、七世紀後半代の築造とされる。
- 9) 渡来人の居住した集落の特徴は、近畿圏では大壁建物やオンドルを備えた建物跡が発掘され、本国より直接持ち込まれた遺物や居住地で造られた遺物があり、土器では韓式土器などがみられる。しかし、このような例は直接の渡来地のことであり武蔵国のように経由地が多い場合では先のような遺跡や遺物はほとんど見られない。また、高麗郡・新座郡のように渡来系の人々によって建郡された郡域の集落跡との差も認められない、江南町域でも他郡にあっても居住形態は在地民との混住状態であったのだろう。渡来系とされた胴張を持つ横穴式石室の出現についても現状では結びつけることが難しい。胴張形態そのものは渡来系とは云えないが、比企男衾の山野に造られた、この石室形態を持つ古墳は渡来系の人々も築造していた

と考えている。そして副葬品には、仏教的な遺物、実用的な武器を備えていたのであろう。

- 10) 立野12号古墳から大刀の柄頭と刀装具の一つである短脚足金具が出土している。これは方頭大刀を構成する柄頭と佩用金具と推定される。埼玉・群馬県を主とする関東地方では方頭大刀の出土が多く、その編年的研究を参照すると、立野12号墳の短脚金具は七世紀初頭の方頭大刀の出現とともに七世紀第3四半期までみられる。方頭大刀は推古朝の政策と関連するとされ、蘇我氏主導で行われた地方政策のもと関東では対蝦夷政策をにらんだ軍事力の編成を背景に、武装が装備されていくとされる。また蘇我氏の拠点とされる地方豪族の古墳にも副葬されていた。後者では岡山県定西塚古墳から短脚足金具を備えた方頭大刀と方頭鏃等が出土している。埼玉県内では方頭大刀とその刀装具は八幡山古墳、鹿島1号古墳(川本町)、籠原裏1号古墳、西戸9号古墳(毛呂山町)、塚本山9号古墳(美里町)西原1号古墳等で報告されている。

引用・参考文献

- 愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976年 『愛知県豊橋市二本松古墳群』
- 青木 敬 2003 『古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性—』六一書房
- 明日香村教育委員会 1999 『キトラ古墳学術調査報告書』明日香村文化財調査報告 第3集
- 伊豆長岡町教育委員会 1981年 『大北横穴群』
- 遺跡遺物研究会 1910年 『日本遺跡遺物図譜』II
- いわき市史編さん委員会 1976年 『いわき市史 第8巻』原始・古代・中世史料
- 岩田明広 他 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第135集 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 譲 他 1985 『鶴ヶ丘(E区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第45集 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 茨城県 財団法人茨城県教育財団 1998年 『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書I』茨城県教育財団文化財調査報告第130集
- 穴沢咏光・馬目順一 1984年 「安陽孝民屯晋墓の提起する問題 (I)」『月間考古学ジャーナル』No227 ニュー・サイエンス社
- 穴沢咏光・馬目順一 1984年 「安陽孝民屯晋墓の提起する問題 (II)」『月間考古学ジャーナル』No228 ニュー・サイエンス社
- 飯塚武司 1991年 「鉄鏃—その時代性と地域性」『研究論集X』東京都埋蔵文化財センター
- 茨城県 1998年 『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書I』炭焼遺跡 札幌古墳群 三和貝塚 成田古墳群 茨城県教育財団調査報告書第130集
- 茨城県教育委員会 1970年 『茨城県鹿島郡鹿島町宮中野古墳群調査報告』
- 茨城県鹿島町教育委員会 1982年 『宮野中古墳群』
- 内山敏行 1996年 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『96特別展 黄金に魅せられた倭人たち』島根県八雲立つ風土記の丘
- 馬目順一 1985年 「いわき市清水1号横穴の遺物」『いわき地方史研究』第22号 いわき地方史研究会
- 江坂輝弥 1971年 「青森県八戸市鹿島沢古墳新発見の遺物」『考古学ジャーナル』58 ニュー・サイエンス社
- 青梅市遺跡調査会 1985年 『裏宿遺跡』
- 大谷 徹 他 1995年 『桜山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第162集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大宮市遺跡調査会 1993年 『氷川神社東遺跡 氷川神社遺跡 B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集
- 大宮市遺跡調査会 1993年 『市内遺跡発掘調査報告 根切遺跡(C-1遺跡)一第4次調査一』
- 尾上元規 1993年 「古墳時代鉄鏃の地域性—長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』第40巻第1号
- 小川町 1999 「穴八幡古墳」『小川町の歴史 資料編1 考古』
- 岡山大学考古学研究室 2001 『定東塚・定西塚古墳』
- 岡安光彦 1990年 「東北地方の群集墳造営年代をめぐる諸問題」『日本考古学協会第55回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 小野山節 1976年 「馬具の製作と工人の動き」『古代史発掘6』講談社
- 小野山節 1983年 「花形杏葉と光背」『MUSEUM』383号 東京国立博物館
- 小野山節 1992年 「古墳時代の馬具」『日本馬具大観』1 日本中央競馬会
- 小山市 1981年 『小山市史』資料編・原始古代
- 小山町教育委員会 1984年 『横山遺跡』
- 掛川市教育委員会 1981年 『各和金塚古墳測量調査報告書』
- 勝浦令子 2004 「建郡と碑—多胡郡—」『文字と古代日本1 —支配と文字—』吉川弘文館
- 金井塚良一 1975年 『吉見百穴横穴墓群の研究』校倉書房
- 金井塚良一 1979年 「渡来系氏族壬生吉志氏の北武蔵移住」『埼玉県史研究』第3号
- 金井塚良一 1980年 『古代東国史の研究』埼玉新聞社
- 金井塚良一 他 1983年 『岩比田』岩比田遺跡調査会
- 神奈川県 1979年 『神奈川県史20』資料編 考古資料

- 神奈川県教育委員会・神奈川県立埋蔵文化財センター 1983年 『向原遺跡』
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994年 「神奈川県における墳墓出土の鉄鏃について」『神奈川の考古学の諸問題』かながわの考古学第4集
- 神川町遺跡調査会 1993年 『二ノ宮19号墳』神川町遺跡調査会報告第4集
- 神川町教育委員会 1995年 『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡―I―』神川町教育委員会文化財調査報告第12集
- 神川町教育委員会 1997年 城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷・二ノ宮支群 神川町教育委員会文化財調査報告書第16集
- 神川町教育委員会 1999年 『中原・金糞・久保宿・観音院南・光現寺・北原遺跡、大蔵塚』神川町教育委員会文化財調査報告第18集
- 上里町教育委員会 1997年 『田通遺跡』
- 上福岡市教育委員会 1978年 『川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡発掘調査報告書』郷土史料第21集
- 川本町遺跡調査会 1995年 『鹿島平方裏遺跡発掘調査報告書』川本町遺跡調査会報告書第3集
- 川本町遺跡調査会 2003年 『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第8集
- 木村法光 1993年 「幢幡鉸具について―特に法隆寺系金具について」『正倉院年報』第十五誌
- 北本市教育委員会 1998年 『丸山遺跡 富岡遺跡第2次調査』北本市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 久地西前田横穴墓発掘調査団 1998年 『久地西前田横穴墓群―第2次調査―』
- 群馬県教育委員会・財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『白井遺跡群―集落編II―』本文編 財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第202集
- 群馬県史編さん委員会 1981年 「若田B号古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- 江南町教育委員会 1999年 『塩古墳群狸塚27号墳発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財調査報告書第12集 埼玉県江南町教育委員会
- 小久保 徹 他 1976 『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集 埼玉県教育委員会
- 小久保 徹 他 1981 『桜山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第2集 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小久保 徹 2000 「終末期の方墳について―鶴ヶ丘古墳群をめぐって―」埼玉県立さきたま資料館 調査研究報告 第13集
- 小林 剛 1957年 「司馬鞍首止利佛師」『美術史』第29号 美術史学会
- 児玉町教育委員会 1980年 『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第1集
- 児玉町教育委員会 2003年 『長沖古墳群IV』児玉町文化財調査報告書第37集
- 後藤守一 1939年 「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号
- 後藤守一 1942年 「上古代の杏葉に就て」『日本古代文化研究』河出書房
- 古墳時代研究会 1975年 『古墳時代研究II―千葉県市原市六孫王原古墳の調査―』
- 小森哲也 1984年 「栃木県内古墳時代出土遺物孝(1)―鉄鏃の変遷―」『栃木県考古学会誌』第8集
- 臼樹原・檜下遺跡調査会 1991年 『臼樹原・檜下遺跡III 奈良・平安時代編2』臼樹原・檜下遺跡調査会報告第3集
- 埼玉県遺跡調査会 1973年 『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第18集
- 埼玉県遺跡調査会 1982年 『宮ノ越』埼玉県遺跡調査会報告第44集
- 埼玉県教育委員会 1972年 『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集
- 埼玉県教育委員会 1974年 『附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集
- 埼玉県教育委員会 1974年 『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集
- 埼玉県教育委員会 1991年 『万吉下原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第18集
- 財)茨城県教育財団 1991年 『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書II』柴崎遺跡II区 中塚遺跡(上) 茨城県教育財団文化財調査報告第63集
- 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982年 『毛呂山団地関係 埋蔵文化財発掘調査報告 伴六』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第11集 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983年 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書VI 三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
- 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984年 『関越自動車道関係 埋蔵文化財発掘調査報告書―XIX―台耕地(II)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集 財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986年 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ 児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅲ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996年 『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997年 『中堀遺跡 御陣場川堤調節池関係埋蔵文化財調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998年 『在家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第220集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992年 『新屋敷東・本郷前東 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅲ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993年 『上敷免遺跡—Ⅴ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994年 『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第134集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000年 『築道下遺跡Ⅲ 行田市南部工業団地造成地業関係埋蔵文化財発掘調査報告—Ⅳ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2003年 『如意遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第285集
- 財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004年 『如意南遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第294集
- 財) 静岡県埋蔵文化財研究所 1994年 『瀬名遺跡Ⅲ(遺物編Ⅰ)』
- 財) 静岡県埋蔵文化財研究所 1995年 『長崎遺跡(遺物・考察編)』
- 財) 千葉県史料研究財団 1998年 『龍角寺古墳群からみた古代の東国』千葉県史講座1 シンポジウム
- 財) 東京都埋蔵文化財センター 1987年 「多摩ニュータウンNo.5 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和60年度—』第2分冊
- 財) 東広島市教育文化振興事業団 1997年 『西本6号遺跡発掘調査報告書2』文化財センター調査報告書第11冊
- 坂戸市教育委員会 1981年 『勝呂廃寺』
- 坂本和俊 1995 「七興山古墳出現の背景—埴輪・屯倉・金属生産の視点から—」『群馬考古学手帳』5
- 坂本美夫 1979年 「毛彫馬具の予察—特に御崎古墳出土品を中心として—」『甲斐考古』16—2
- 佐久市教育委員会 1972年 『佐久市中込深堀遺跡発掘調査概報 佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告』
- 佐藤信孝 2004年 「群馬県高崎市若田B号墳出土馬具の再検討」『専修考古学』第10号 専修大学考古学会
- 狭山市教育委員会 1986年 『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 揚爐木遺跡』狭山市文化財報告11
- 狭山市教育委員会 1987年 『狭山市埋蔵文化財調査報告書5 今宿遺跡』狭山市文化財報告12
- 塩野 博 1981年 「見目古墳群とその出土遺物」『埼玉考古第19号』埼玉考古学会
- 鹿田雄三 1985 「群集墳研究の現状をめぐって—後期小古墳の成立とその背景についての新しい分析—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』2
- 鹿田雄三 1995 「前庭をとまなう古墳の編年—赤木山南麓における後期群集墳の動向—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』12
- 志木市教育委員会 1992年 『中道遺跡第12地点 中道遺跡臺13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集
- 志木市教育委員会 1993年 『志木市遺跡群Ⅴ』志木市の文化財第20集
- 志木市教育委員会 1997年 『志木市遺跡群Ⅷ』色紙の文化財第25集
- 志木市教育委員会 2000年 『埼玉県志木市埋蔵文化財調査報告書1』志木市の文化財第29集
- 志木市教育委員会 2003年 『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集
- 寺社下博 1997 「地方の多角墳」『生産の考古学』
- 静岡県 1930年 『静岡県史』第1巻
- 静岡県教育委員会 1971年 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墓発掘調査報告書』
- 芝山はにわ博物館 1975年 『下総小川台古墳群』
- 白井久美子 1998年 「浅間山古墳の概要」『竜角寺古墳群からみた古代の東国』千葉県史講座1 シンポジウム 財団法人千葉県史料研究財団
- 杉崎茂樹 1992 「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集

杉山秀宏 1988年 「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八
 西駿考古学研究会 1969年 『瀬戸古墳群 I』
 関 義則 1986年 「古墳時代後期の鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号
 関 義則 1993年 「雁股鏃について」『氷川神社東遺跡 氷川神社遺跡 B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集 大宮市遺跡調査会
 大学合同考古学シンポジウム実行委員会 『古墳から寺院へー関東の7世紀を考えるー 予稿集』第5回大学合同考古学シンポジウム
 高崎市観音塚考古資料館 1994年 『第7回企画展・馬具「古墳時代に馬がいた」図録』
 高野政昭 1992年 「天理参考館所蔵の棘付花弁形杏葉について」『天理参考館報』第6号 天理参考館
 滝澤 亮 1987年 『比々多遺跡群』
 田中新史 1980年 「東国終末期古墳出土の馬具一年代と系譜の検討ー」『古代探叢ー滝口宏先生古希記念考古学論集ー』早稲田大学出版部
 田中新史 1997年 「道上型毛彫馬具の出現と展開」『西本6号遺跡発掘調査報告書2』財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター調査報告書第11冊
 田中新史 2002年 「上総市原台の奈良・平安時代鉄鏃」『土筆』第7号
 田中広明 1990年 「律令時代の身分表徴（I）ー帯飾具の生産と変遷ー」『土曜考古』15 土曜考古学研究会
 田中嗣人 1979年 「止利仏師考」『元興寺文化財研究所年報』創立10周年記念論文集
 田中正男 他 1983年 「埼玉県における古墳出土遺物の研究 Iー鉄鏃について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要83』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 武井暁朔 他 1987年 「荒川本流の堆積物」『荒川 自然』埼玉県
 千葉県 2003年 『千葉県の歴史』資料編 考古2 県史シリーズ10
 調布市教育委員会 1987年 『調布市上石原遺跡』
 東京天理教館 1964年 『古代の装身具ー中国・朝鮮・日本ー』天理ギャラリー・第10回展
 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2003 『古代官衙遺跡 I 遺構編』
 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 2000年 『群集墳の時代』第14回企画展
 富永里菜 2002年 「馬具の革金具」『銙帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
 奈良文化財研究所 2002年 『銙帯をめぐる諸問題』
 成田市教育委員会 1986年 『宗吾西鷲山遺跡』
 成田市教育委員会 1990年 『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書ー遺物編ー』
 沼田市史編纂委員会 1995 「沼田市史」資料編1 原始・古代・中世
 練馬区遺跡調査会 1985年 『貫井二丁目遺跡』
 野間清六 1937年 「止利仏師に関する考察」『夢殿』第十七冊
 濱岡大輔 2003年 「花弁形杏葉について」『上5号墳』奈良県文化財調査報告書第92集 奈良県立橿原考古学研究所
 浜田晋介 1996 「古代橘樹郡の古墳の基礎的研究」『加瀬台古墳郡の研究 Iー加瀬台8号墳の発掘調査報告書ー』川崎市市民ミュージアム
 蓮田市教育委員会 1989年 『椿山遺跡ー第3・4次調査ー』 蓮田市文化財調査報告書第13集
 浜松市教育委員会 1988年 『半田山古墳群（IV中支群）』
 東松山市教育委員会 1961年 『南中学校校庭内古墳の発掘』東松山市文化財調査報告第1集
 東松山市教育委員会 1964年 『冑塚古墳』東松山市文化財調査報告第3集
 東松山市教育委員会 1968年 『柏崎古墳群』
 東松山市教育委員会 1970年 『諏訪山古墳群』東松山市文化財調査報告第4集
 東松山市埋蔵文化財調査会 1976年 『西原古墳群』
 引佐町教育委員会 1983年『馬場平古墳発掘調査報告書』引佐町の古墳文化III
 藤枝市教育委員会 1983年 『若王子・釣瓶落古墳群』
 日野市史編さん委員会 1985年『日野市史 史料集 考古資料編』

- 府中市教育委員会 1984年『武蔵国府関連遺跡調査報告VI』
- 本庄市教育委員会 1998年 『埼玉県本庄市南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第2分冊
- 本庄市教育委員会 2002年 『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第25集
- 松原三郎・田辺三郎 1979 『小金銅仏：飛鳥から鎌倉まで』東京美術
- 美里町教育委員会 1998年 『猪俣北古墳群 引地遺跡・滝ノ沢遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第9集
- 美里町教育委員会 2001年 『諏訪林古墳・池下遺跡』美里町遺跡調査報告書第12集
- 宮井英一・内山敏行 1998年 「後期古墳と終末期古墳の馬具」『前方後円墳の終焉』埋蔵文化財研究会
- 村松恵司 1995年 「鉄鍬と建築儀礼」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学会
- 森田 悌 1992年 「壬生吉志の入植」『古代東国と大和政権』新人物往来社
- 森田 悌 他 2005年 「江南町史 通史編 上巻」江南町
- 森 和敏 1984年 『山梨の考古資料集』森 和敏
- 毛呂山町教育委員会 1995年 『まま上遺跡 第2次調査・第3次調査』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第10集
- 山梨県教育委員会 1979年 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』—北巨摩郡二葉町地内2—中巨摩郡竜王町地内
-
- 山梨日日新聞社 1983年 『山梨の遺跡』
- 八幡一郎 1930年 「馬具」『日本考古図録大成』第5号 日東書院
- 山本寿々雄 1984年 『日本の古代遺跡14 山梨』保育社
- 横須賀市教育委員会 1994年 『小荷谷遺跡』
- 吉岡村教育委員会・群馬県教育委員会 1986年 『大久保A遺跡 II区』
- 吉田章一郎 1989年 『秦野桜土手古墳群の調査』
- 早稲田大学本庄校地文化財調査室 1996年 『大久保山II』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4

写真図版



立野古墳群航空写真（2003年1月10日撮影）

図版2



▲第1号墳航空写真



▲第1号墳石室



▲第1号墳石室（南より）



◀第1号墳石室（西より）



◀ 第3号墳石室
(南より)



◀ 第3号墳石室
(南東より)



▲ 第3号墳石室 (南より)



▲ 第3号墳遺物出土状況

図版4



◀ 第3.15号墳
(南西より)



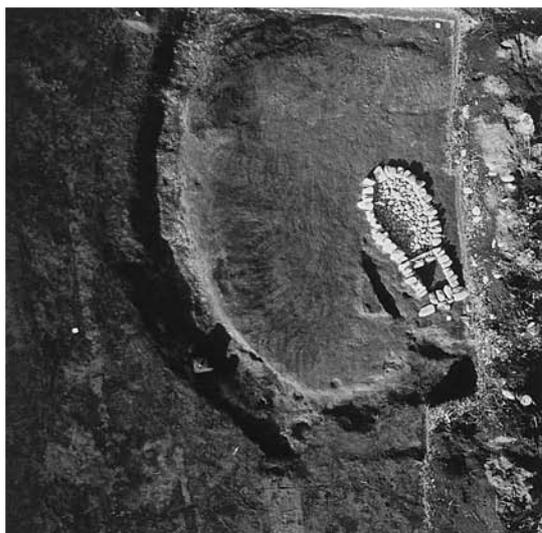
◀ 第3号墳石室
(東より)



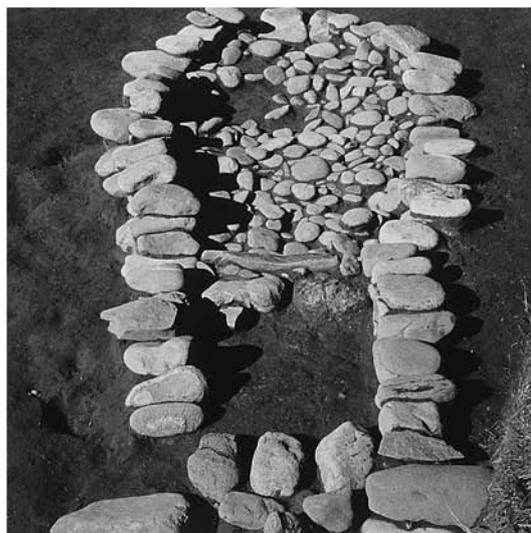
◀ 第3号墳石室
(西より)



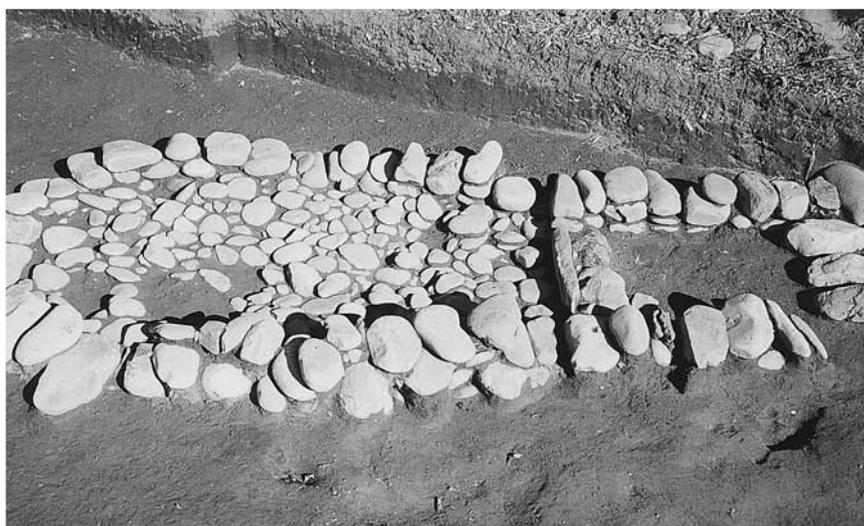
◀ 第3号墳石室
(南より)



▲第11号墳航空写真



▲第11号墳石室（南より）



◀第11号墳石室（西より）



◀第11号墳調査風景

図版6



◀第12.13号墳航空写真



◀第13号墳石室



◀第13号墳石室（南より）



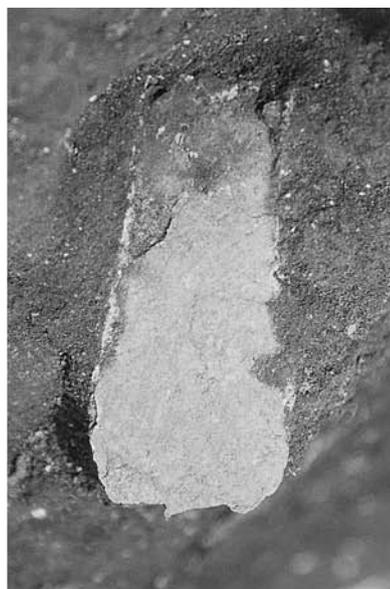
▲第12号墳鉸具出土狀況



▲第12号墳毛彫杏葉出土狀況



▲第12号墳円筒柄頭出土狀況



▲第12号墳毛彫杏葉出土狀況



▲第12号墳毛彫杏葉出土狀況



▲第3.14.15号墳航空写真



▲第12号墳石室



▲第14号墳遺物出土状況



◀第14号墳石室



◀第3.15号墳航空写真



◀第15号墳石室



◀第1号小石室

図版10



◀第16号墳航空写真



▲第16号墳石室（東より）



▲第16号墳石室（東より）



▲第17号墳航空写真



▲第17号墳石室



▲第17号墳遺物出土状況



▲第17号墳遺物出土状況

図版12



▲調査区全景（南より）



▲第17号墳作業風景



▲第11号墳作業風景

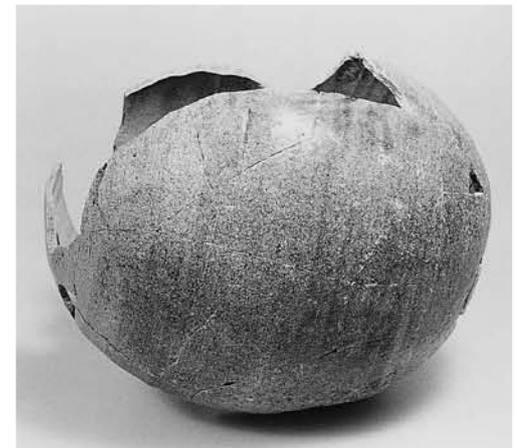


▲第12号墳35-69



▲第17号墳59-4

▲第11号墳25-1



▲第14号墳45-6

▲第12号墳35-67

图版14



▲第3号墳21-2



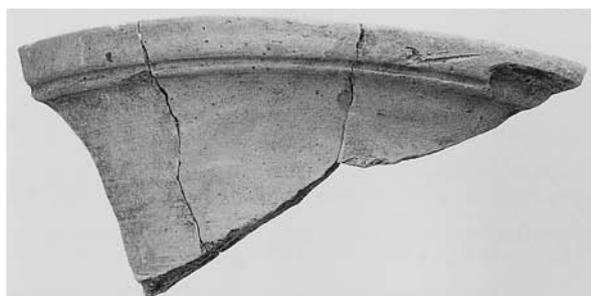
▲第14号墳45-5

▲第17号墳59-6

▲第17号墳59-7



▲第17号墳59-3 ▲第17号墳59-1 ▲第17号墳59-2



▲第12号墳35-68



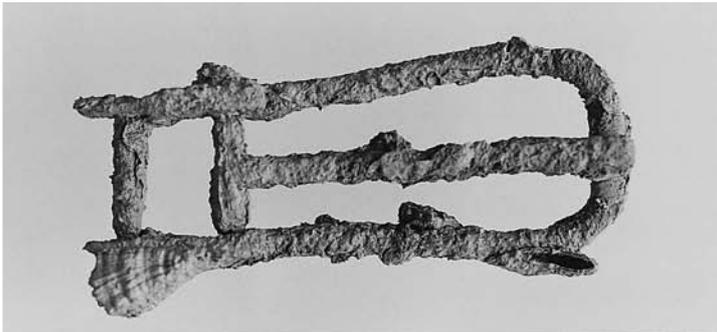
▲第12号墳35-70



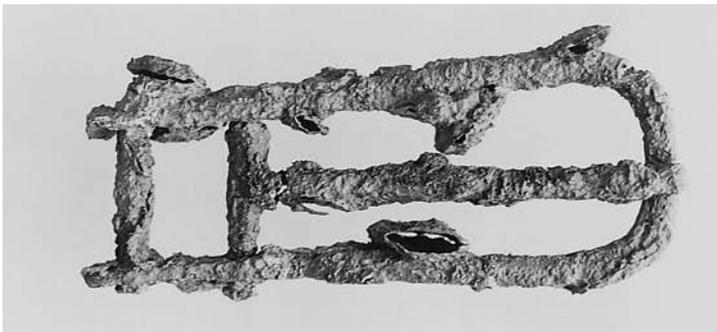
▲第3号墳21-1



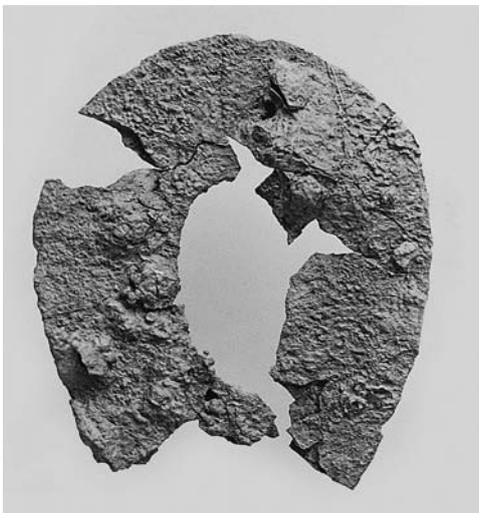
▲第12号墳35-52



▲第12号墳32-50



▲第12号墳32-51



◀第12号墳33-62

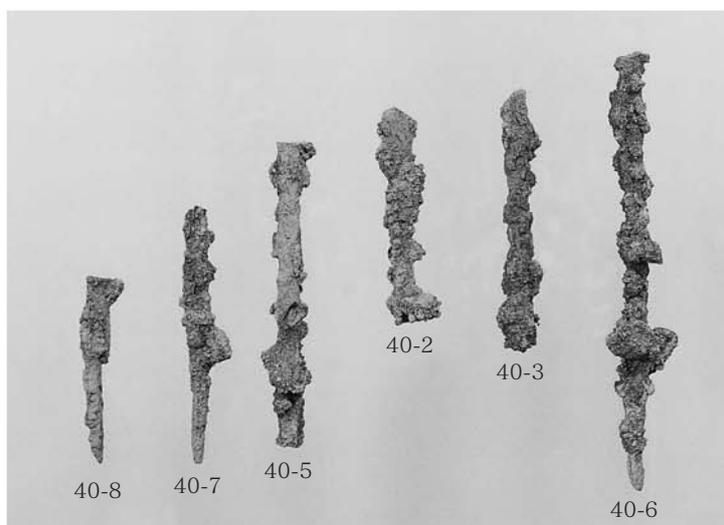


▲第12号墳33-53



▲第13号墳40-10

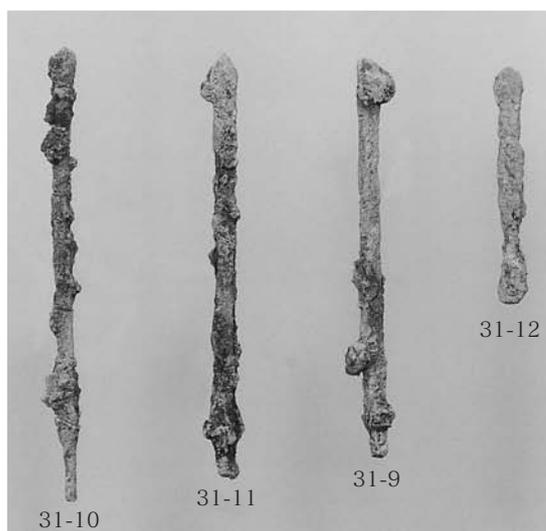
图版16



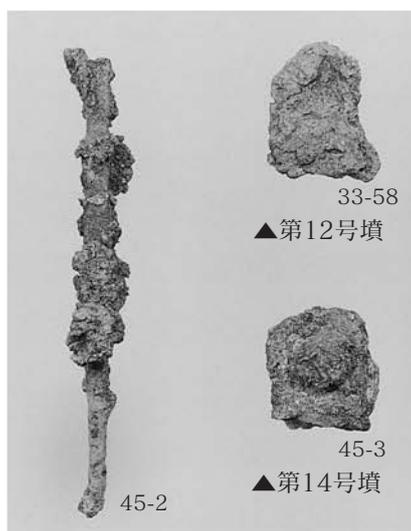
▲第13号墳



▲第17号墳



▲第12号墳



▲第12号墳

▲第14号墳

▲第14号墳



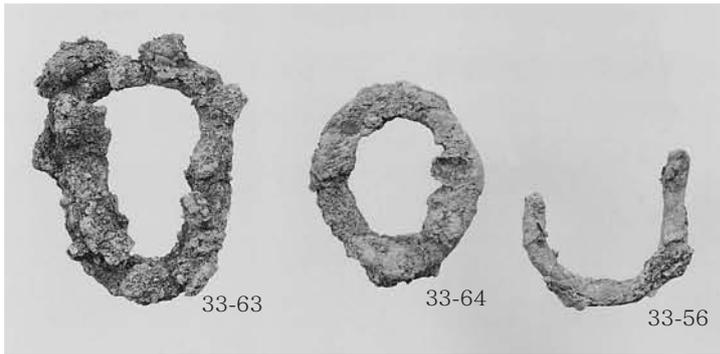
▲第12号墳



▲第13号墳



▲第13号墳



◀第12号墳



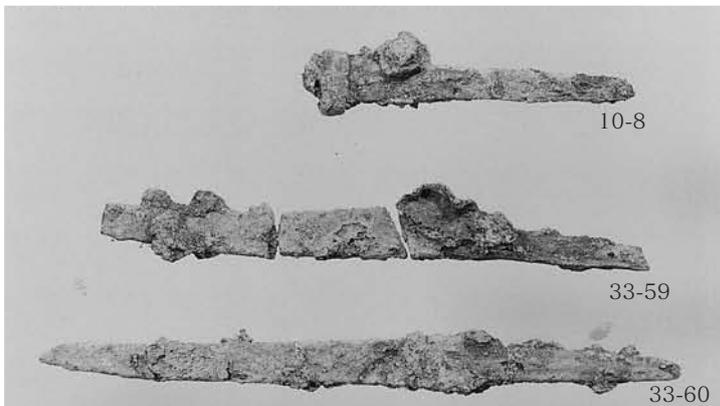
◀第1号墳



◀第14号墳



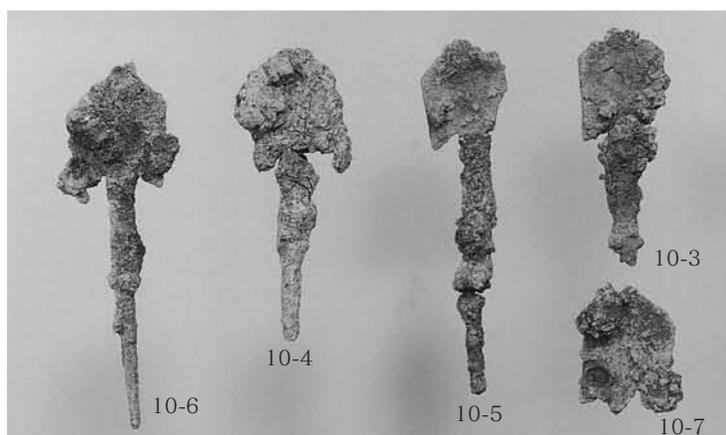
◀第14号墳



◀第1号墳

◀第12号墳

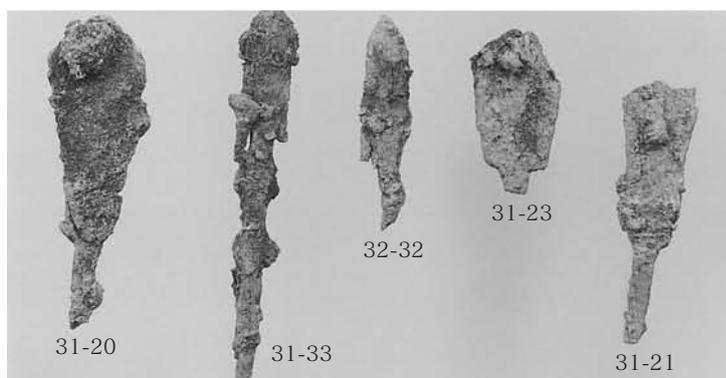
图版18



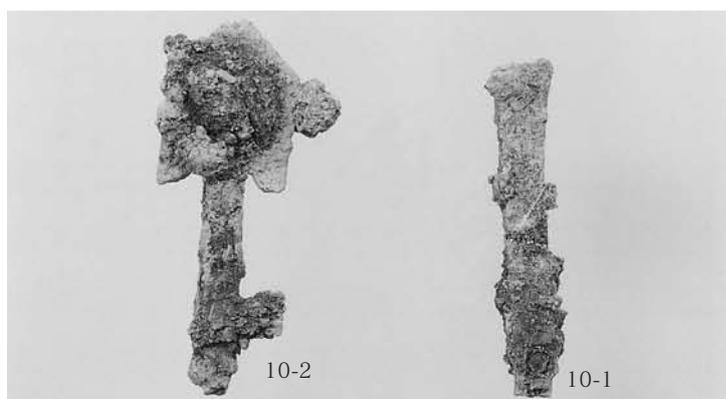
◀第1号墳



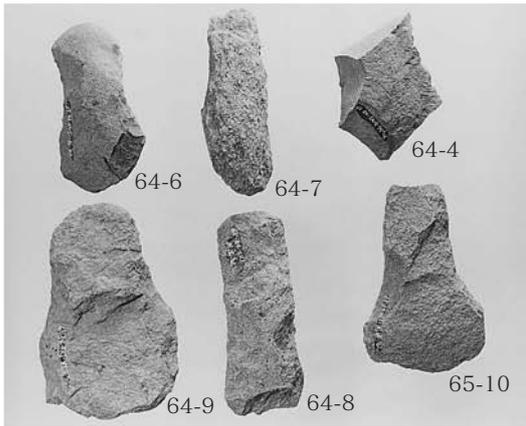
◀第12号墳



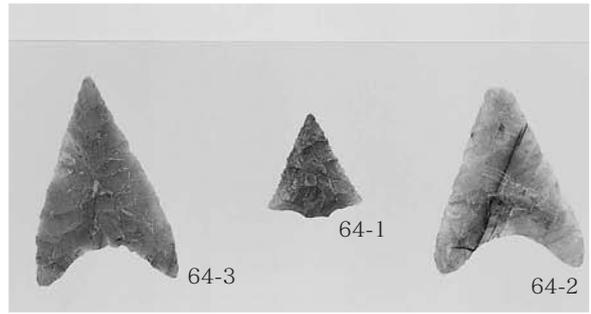
◀第12号墳



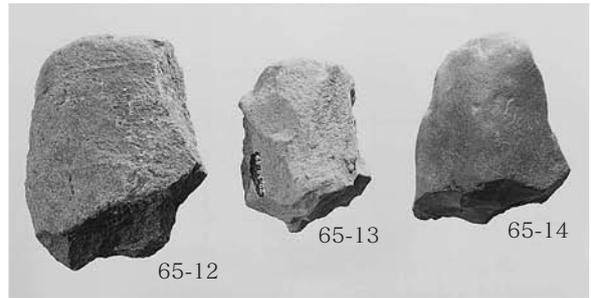
◀第1号墳



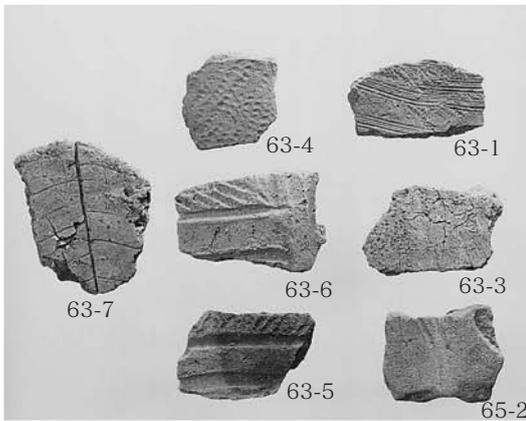
▲縄文石器



▲縄文石器



▲縄文石器



▲縄文土器



▲縄文石器



▲縄文土器

報告書抄録

フリガナ	タテノコフングンハックツチョウサハウコクシヨ							
書名	立野古墳群発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ	江南町埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第14集							
編著者	森田安彦 新井 端							
編集機関	江南町遺跡調査会・江南町教育委員会							
所在地	〒360-0192 埼玉県大里郡江南町中央1-1							
発行年月日	2005（平成17）年3月22日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")			
たてのいせき 立野遺跡	さいたまけんおおさとぐんこうなん 埼玉県大里郡江南 まちおおあざいたい 町大字板井	11065	054	36°6'27" (世界測地系)	139°91'83" (世界測地系)	20021001 5 20030110	6,400	公園造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立野遺跡	古墳	縄文 古墳	集石1 古墳10 小石室1	縄文土器・石器 古墳土師器・須恵器・ 鉄鏃・大刀・刀子・ 杏葉・紡錘車・砥石	第12号墳より金銅 製杏葉出土

要 約	<p>今回の調査面積は、約8,100㎡で、調査区内からは古墳時代終末期の古墳10基と、小石室1基、縄文時代の集石1基が確認されている。</p> <p>古墳群は、その規模から、①直径20mを超える大型円墳、②直径10m～15mの中型円墳、③直径10m以下の小型円墳の三つに分類され、石室に使用された石材が異なることが確認される。</p> <p>墳丘は全て削平されており、出土遺物は全体的に少ないが、第12号墳石室からは、方頭・圭頭式を含む鉄鏃片が多量に出土しており、太刀・刀子片、足金物等が出土している。また、羨道部覆土中より須恵器の長頸瓶・横瓶・甕が、馬具関連では、羨道部覆土中より金銅製毛彫杏葉が2点、石室内及び周溝内より鉸具2点が出土している。金銅製毛彫杏葉は、県内で初見であり、注目される。</p>
-----	--

江南町埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集

立野古墳群発掘調査報告書

平成17年3月22日 印刷

平成17年3月22日 発行

発 行 埼玉県大里郡江南町教育委員会

〒360-0192

埼玉県大里郡江南町中央1-1

TEL048-536-1521

印 刷 朝日印刷工業株式会社